季刊 艦船模型スペシャル94 2024年11月15日発行(年4回2、5、8、11月の15日発行)通巻94号

MODEL Art

艦船模型スペシャル

VESSEL MODEL SPECIAL

NO.94
2024
WINTER



特集

甲板上に紡ぐ物語

艦船模型を演出する搭載物の魅力に迫る

アメリカ海軍航空母艦「ホーネット」
(トランペッター 1/350)

海上自衛隊護衛艦「かが」第一次改修後
(ハセガワ 1/700 改造)

イギリス海軍航空母艦「アーガス」
(AJM モデルズ 1/700)

アメリカ海軍航空母艦ボーグ級
(タミヤ 1/700)

日本海軍航空母艦「冲鷹」
(アオシマ 1/700)

日本海軍給兵艦「樫野」
(ピットロード 1/700)

日本海軍水上機母艦「秋津洲」
(アオシマ 1/700)

海上自衛隊護衛艦「こんごう」
(ハセガワ 1/700)

54 口径 127 ㎜単装速射砲
(フジミ 1/70)

連載

世界の客船：
キュナード・ライン客船「アキタニア」

艦船模型ソリッドモデル入門：
「エンプレス・オブ・ブリテン」

日本海軍艦船図鑑：
内筒砲から外筒砲へ

ラベールアーカイブス：
フランス海軍防空巡洋艦「コルベール」

NEW KIT REVIEW

(ポントスモデル 1/700)
日本海軍戦艦「大和」就役時

(アオシマ 1/700)
日本海軍駆逐艦「陽炎」「秋月」「冬月」

艦船模型スペシャル

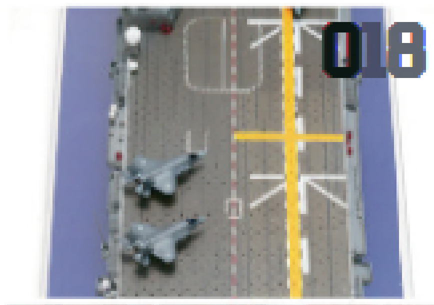
VESSEL MODEL SPECIAL

2024 WINTER NO.94

CONTENTS

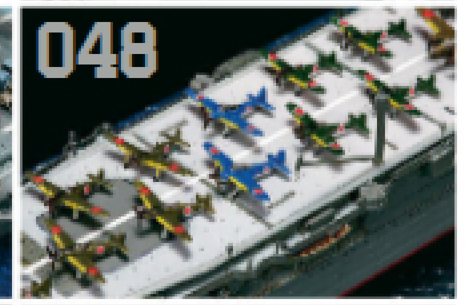
特集：甲板上に紡ぐ物語 — 艦船模型を演出する搭載物の魅力に迫る

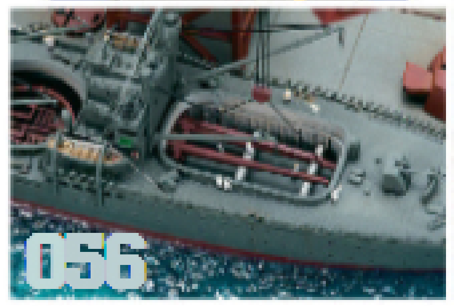






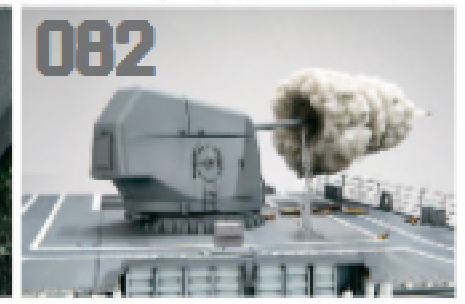






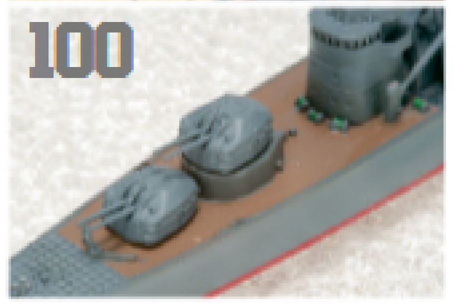






NEW KIT REVIEW





連載

情報

特集

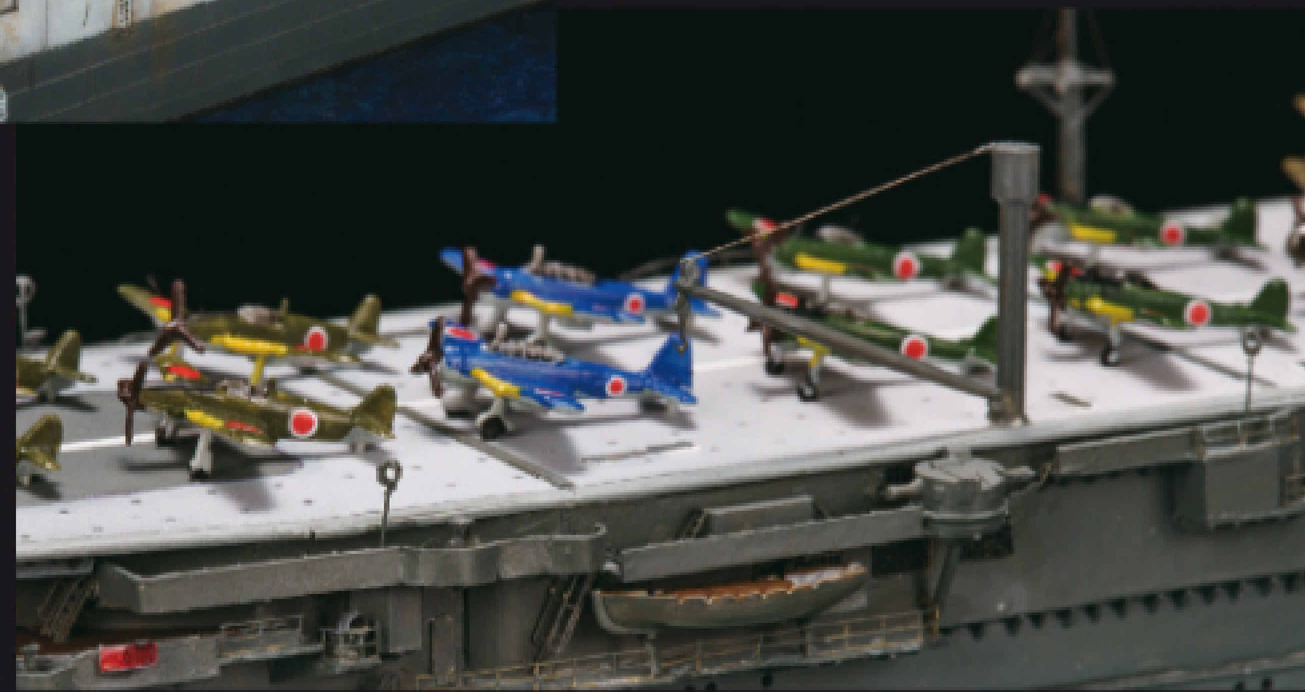
甲板上に紡ぐ物語

― 艦船模型を演出する搭載物の魅力に迫る ―

航空母艦だったら航空機、輸送船だったら荷物というように艦船の甲板上には色々なものが載せられています。
また乗組員や乗客などの人物も多く乗りこんでいます。
それらの搭載物や人物は艦船模型に彩りを与え、物語りを演出してくれることでしょう。
今回の特集では甲板上の搭載物にスポットを当て、その魅力に迫ってみます。



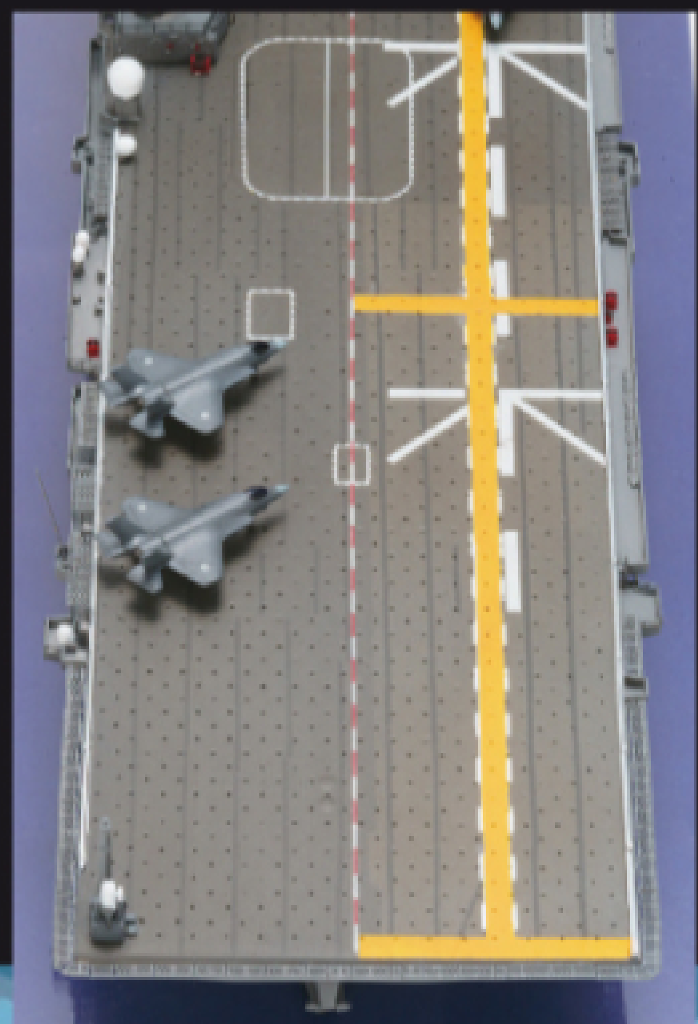
















B-25 爆撃機 16 機を搭載して日本本土空襲を果たす

■アメリカ海軍航空母艦 CV-8「ホーネット」

1942 年 4 月 18 日、ジミー・ドーリットル中佐が指揮官を務める B-25 爆撃機 16 機が空母 CV-8「ホーネット」の飛行甲板から発艦した。東京、横須賀、横浜、川崎、名古屋、神戸、新潟等の都市を焼夷弾や通常爆弾で爆撃、本土を初めて空襲された日本に衝撃を与えた。B-25 は作戦用に改修されたもので、長距離飛行用に燃料タンクが増設されている。陸軍航空隊の爆撃機による空母からの発艦は異例であり、任務完了後は中国大陸に着陸する計画だった。作例はトランペッター 1/350 キットを製作。ドーリットル隊の B-25 を搭載した場面とした。



トランペッター 1/350
アメリカ海軍航空母艦 CV-8「ホーネット」
製作・文：秋山敏郎
TRUMPETER1/350 scale Plasticmodel kit
U.S.NAVY AIRCRAFT CARRIER CV-8 "HORNET"
Modeled by Yoshiro AKIYAMA

ヨークタウン級空母の 3 番艦として計画された CV-8「ホーネット」は 1941 年 10 月に竣工し、翌年 10 月に戦没するという非常に短命に終わった艦でしたが、その短い一生の中でとてつもない大仕事とインパクトを残しました。それがかの有名なドーリットル空襲です。私の勝手な思い込みなのですが、CV-5「ヨークタウン」には "美麗" "スマート"、CV-6「エンタープライズ」には "威厳" "タフネス"、そして「ホーネット」には "型破り" "ムードメーカー" という印象が有ります。日本艦ではまず考えられないようなあの大波のような迷彩、大きな陸軍双発爆撃機を満載したアンバランスな姿等、奇想天外なルックスはまさに三男坊という自由奔放なイメージとも重なり大変魅力が溢れます。

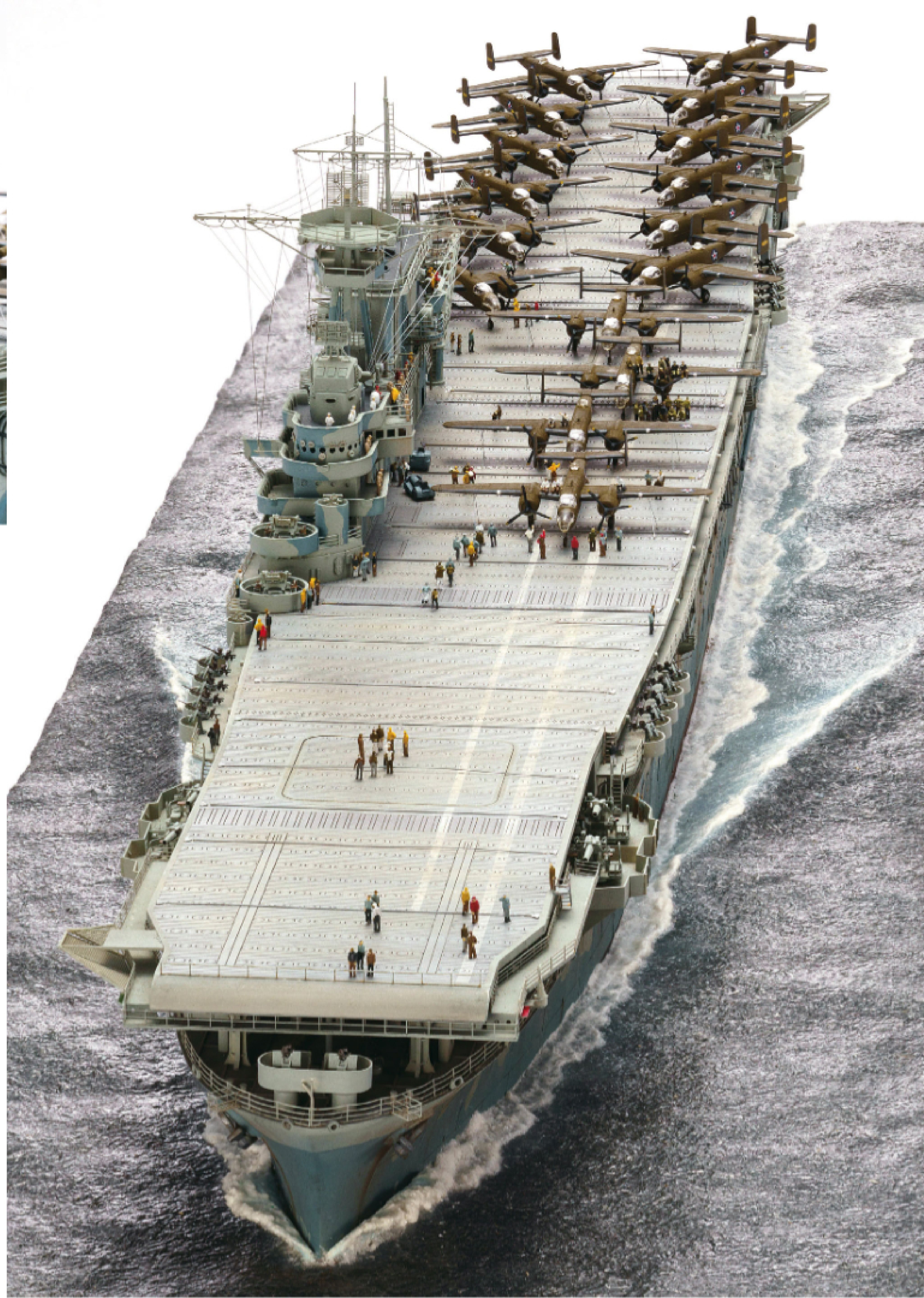
今回はその「ホーネット」一世一代の大勝負、1942 年 4 月のドーリットル空襲を 1/350 洋上ジオラマで再現してみようと思います。

キットについて

使用するのはトランペッター 1/350 キットです。箱絵はまさに日本に向けて B-25 が発艦する歴史的な瞬間を捉えたもので、ますます製作意欲が高まってきます。箱の隅に「美国 CV-8 大黄蜂号航空母艦」と書かれているのに気付いて一瞬「？？？」となりましたが、HORNET は英語で「スズメバチ」の意であることを思い出してつい笑ってしまいました。「大黄蜂号」とはまさしく言い得て妙と深く納得してしまいました。

さてキットです。まず船体ですが、これはかなりアッサリした印象です。舷窓以外のモールドは一切無くツルツルですので、このままでは 1/350 スケールとしては間延びしてしまいます。艦首及び艦尾甲板も同様で、最低限度の表現しかされていません。しかしこれは考えようによっては、削り取る部分も皆無ですので、ディテールアップにはむしろ好都合かもしれませんし、手の入れがいが有るキットともいえます。

精密感向上ためにエデュアルドの 1/350『米空母 CV-8 ホーネット用エッチングパーツ』(53005) を用意しておきました。



U.S.NAVY AIRCRAFT CARRIER

USS HORNET CV-8



●空母「ホーネット」の製作ポイント

艦橋内部



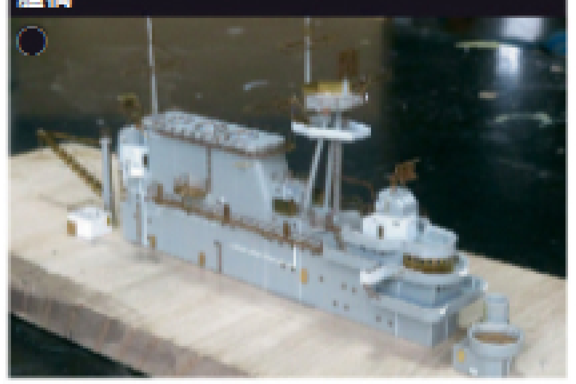
艦橋のディテールアップ



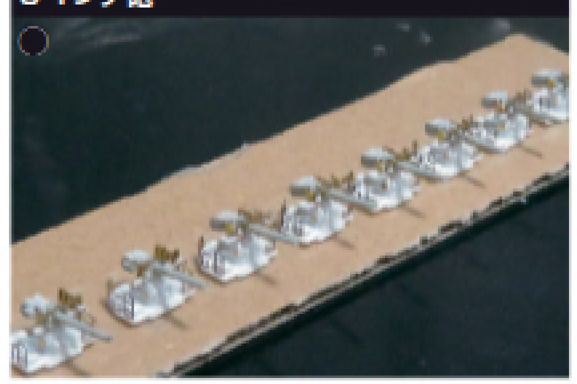
艦橋後部のラッタル



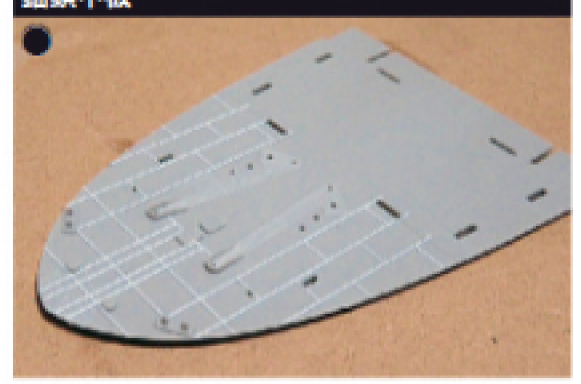
艦橋



5インチ砲



錨鎖甲板



①艦橋パーツは箱組み式だが接着面が弱いので、内部にプラ板で組んだ骨組みを仕込んで強度を稼いだ。
②ディテールアップにはエデュアルドのエッチングパーツを使用。キットと合わない箇所が多いので削り込み等で対処する。張り出しの裏側にはプラ材で構造材のディテールを追加した。
③艦橋後部のラッタルもエッチングパーツでディテールアップ。
④組みあがった艦橋。キットのモールドは削り落とし、ほとんどエッチングパーツのディテールに置き換えている。
⑤5インチ砲は実物と印象が異なるので砲身のみキットパーツを使用。プラ板とエッチングパーツで自作したものを使用した。
⑥表現の弱い錨鎖のモールドを削り落とし、極細プラ板で甲板の継ぎ目を再現した。

船　体

それでは船体の工作です。船体はフルハルと洋上タイプのどちらかを選べるようになっています。今回は洋上ジオラマで仕上げるため洋上モデル仕様の喫水板でも良いのですが、海面をうねらせて船底の一部が見えるようにしたいので、フルハルで組んでいくことにします。最終的にはウレタンフォームをくり抜いて船底を埋め込む予定です。

ただ、やはりここで気になるのはツルツルの船体です。とりあえず外板継ぎ目の表現だけは入れておきたいものです。一般的にはマスキングテープを貼った上からサーフェイサーを吹いて塗膜の段差で表現する方法が知られていますが、私はどうもこの方法が不得手ですので別の方法で表現します。

まず0.1㎜厚のプラペーパーを細長く切り出して、5㎝幅でカットします。これに素早く接着剤を塗って、ガイドラインを引いた船体に直接貼り付けていきます。ほんのわずかに隙間を開けながら、どんどん横方向に貼り付けていけば、簡易的ではありますが外板継ぎ目の完成です。

この時、接着剤の量には注意します。多すぎると溶剤でプラペーパーが溶け始めてシワになることがあります。ほど良い感覚を掴むには、少し練習が必要かもしれません。とりあえずこれだけで随分見た目の印象が違って見えますので、どんな方法であれ外板継ぎ目の表現はやっておいた方が良いでしょう。

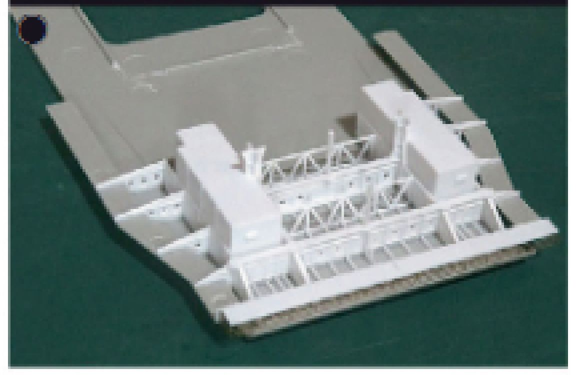
格納庫

次に格納庫の床パーツの取り付けです。この床板には丁寧に縦横のスジ彫り、さらにその四隅には留め具のような表現までモールドされています。これは明らかに格納庫内が見えることを想定した配慮だと思って喜んでいたのですが…。飛行甲板を被せると格納庫内は両側面の開口部からしか見ることはできないのですが、その肝心の格納庫壁パーツは全てのシャッターが閉じた状態で成型されているのです。

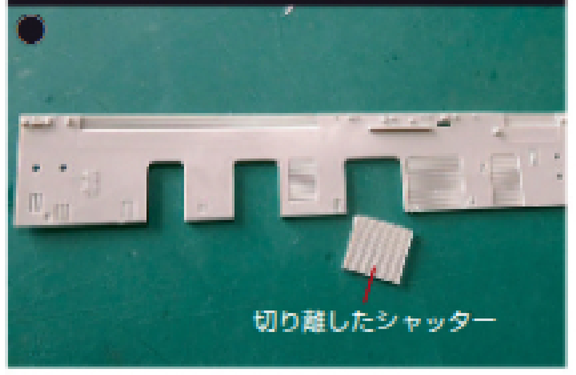
これをそのまま説明書通りに組むと格納庫内は全く見えなくなってしまいます。ではあ

●空母「ホーネット」の製作ポイント

飛行甲板の裏側



格納庫シャッター



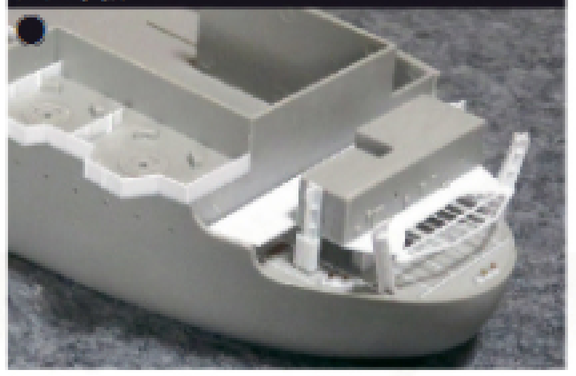
格納庫内部



エレベーター付近



艦尾甲板



船体の外板表現



①飛行甲板裏側はキットでは簡素な造りなので、構造材をはじめプラ材で細かく作り直した。
②航空機格納庫のシャッターは閉状態でモールドされているので、該当箇所を切り離して開状態にした。
③格納庫内部は「ホーネット」をはじめアメリカ海軍空母の写真を参考にそれらしく再現した。ここの張り出しは艦橋の下層階にあたる部分。キットは床板のみが用意されている。
④こちらはエレベーター付近。プラ板を現物合わせで組んで内壁や構造材を再現している。
⑤艦尾甲板。キットパーツが大まかな造りの箇所はプラ材で作り直している。
⑥船体の外板表現はプラペーパーの短冊を貼り込むことで立体的な表現とした。機銃座のブルワークは厚みが気になるのでプラ板で作り直している。

の床のスジ彫り表現は何のためでしょうか？しばらく考え込んだのですが、これはもう「床の表現はしておきましたから、格納庫内を見せたい場合はシャッターを切り取ってくださいね」というメーカー側からのメッセージと解釈しました。

私は空母模型の魅力のひとつが格納庫の再現だと考えています。日本空母は密閉式ですのでエレベーターの開口部からわずかに覗き見る程度ですが、開放式の米空母では格納庫を見せる大チャンスです。

余談ですが、開放式格納庫は被弾によって格納庫内で爆発が有った際に爆風を逃がす効果が大きく、ダメージコントロールの点からも有効とされています。

さらに飛行甲板の板張りについても、多くの日本空母が縦張りなのに対し、米空母は横張りです。これも横方向の方が短いため、応急資材による補修が容易で、驚くほど短時間でとりあえず艦載機の発進が可能になります。いわゆるダメコンに関して、米海軍は非常に優れていると感じます。加えて兵士たちの消火作業は、絶対に船を諦めない気概にあふれるものだったそうです。

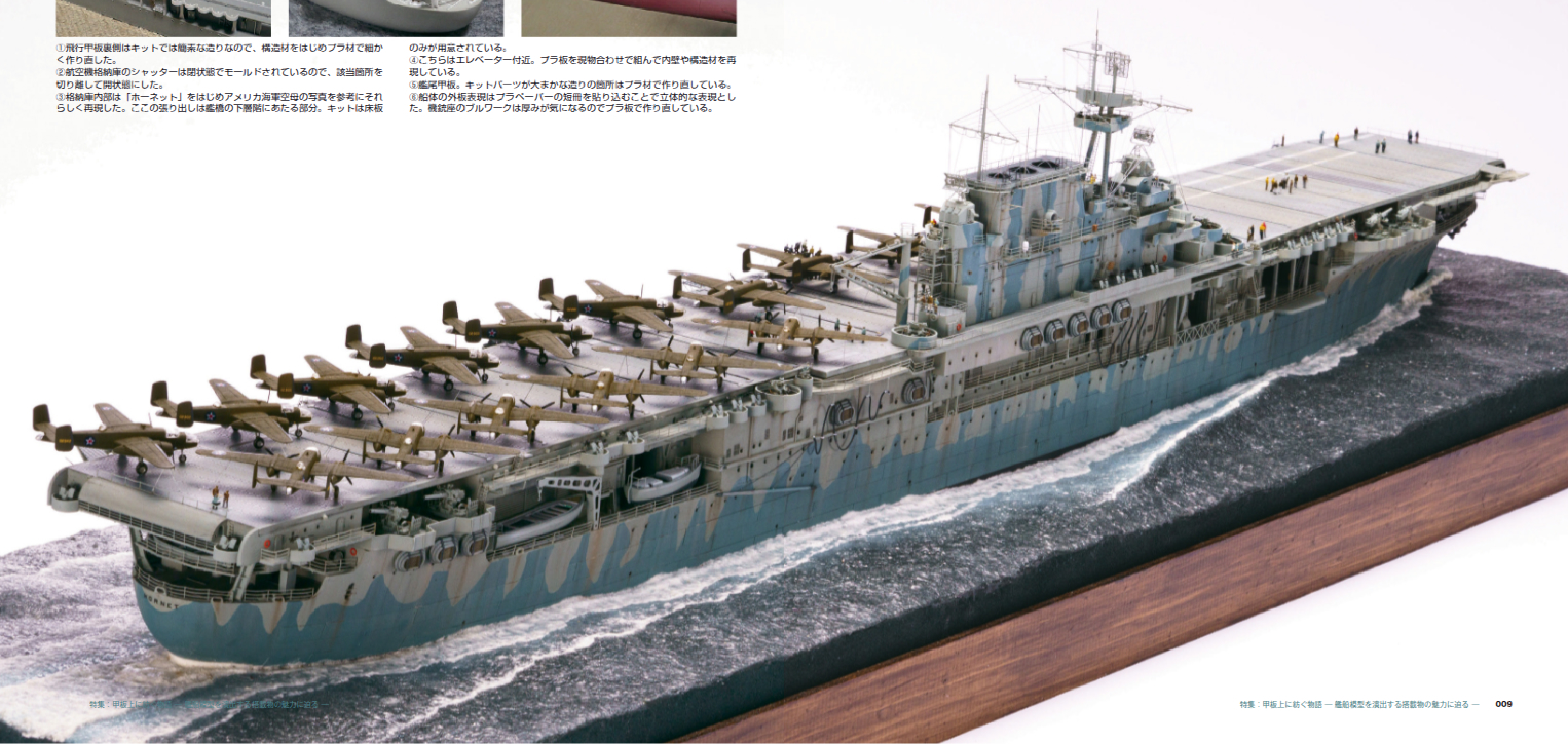
少し話が逸れましたが、やはりシャッターは切り取ることにしました。ですがこのキットはプラが肉厚で、しかも非常に硬いので、普通のカッターでは文字通り刃が立ちません。こういう時に有効なのが、超音波カッターです。ウソのように軽く切れますので、とても楽なのですが、油断すると切り過ぎてしまいますので注意が必要です。

格納庫内の設備については一切キットには含まれませんので、自作する必要があります。幸い「ホーネット」以外にも多くの米海軍空母の格納庫内部の鮮明な写真が残されているので、それらを参考にプラ板で再現していきます。

舷　側

両舷側の構造については日本空母ほど複雑ではなく、印象としては非常にスッキリした感じです。ここは基本的にキットの指示通りに組み立てていきますが、ライフラフトが大きすぎるのと形状が真っ平なのが気になりました。大・中・小３つの救命筏を重ねているのですから、それなりに高さが無いと不自然です。そこでキットパーツは諦めて、バンカースタジオの 3D プリントパーツ 1/350『WW2 アメリカ海軍ライフラフト（初期）』（WS35037）に交換しました。自重で少し垂れ下がっている感じがとてもリアルで、これは交換する価値が大きいですね。

また、船体にはフェアリーダーは全く有り







ませんので、プラ板で自作したものを数か所取り付けています。「ホーネット」の場合は横長の環状型ですので、ドリルで開けた穴をナイフで左右に少しずつ広げていって周囲をカットすれば出来上がります。小さなパーツで面倒ですが、これは必要だと思います。

飛行甲板

飛行甲板は１枚板ではなく、３分割されています。どうしても分割箇所が気になりますが、先述したように米空母の場合は板は横張りなのであまり目立たないのが救いです。飛行機係止用の留め具のモールドが少し大きいのと厚みも気になりますが、許容範囲なのでそのままキットパーツを使います。

問題は裏面です。艦首側と艦尾側の裏面には井桁状に何本かのモールドが入っているだけですので、これは全て削り取りました。エデュアルドのエッチングセットにもこの部分は含まれませんので、資料を参考に全てプラ板で飛行甲板裏の構造材を再現しました。ここは空母模型の肝となるので、今回の製作で最も納得度の高い部分となりました。

艦　橋

艦橋については、全体の形状そのものは特徴を捉えていると思います。ですが窓と庇が大きくズレていたり、表面の荒れが目立つ箇所が有りますので、思い切って全てのモールドを削り落としてサンドペーパーで徹底的に表面を整えました。

ブルワークの裏側等の細部は全て省略されていたりしますが、エデュアルドのエッチングパーツはその足りない部分をほとんど網羅してくれていて助かりました。ちなみにこのエッチングセットの大半は、艦橋まわりのパーツで占められています。

艦橋には Mk.37 射撃指揮装置が２基搭載されますが、その基部のパーツを組むと大きな隙間ができますのでプラ板で自作しました。その他、三脚マストのトップにある見張所等もプラ板から新規で作り直しています。薄いプラ板を使うとスッキリとシャープな仕上がりになるのですが、エッチングパーツはそもそもキットの寸法に合わせて作られていますので、自作部分に取り付けようとすると微妙に寸足らずになったりして思わぬ苦労を味わいました。これは想定外でしたので少々焦りましたが、何とか調整できました。

ここまでで船体・格納庫・飛行甲板・艦橋という大きな要素は全て組み上がりました。

迷彩塗装

「ホーネット」はメジャー 12 迷彩が施されていました。ヘイズグレー、オーシャングレー、ネイビーブルーが使われたとされています。実艦としてはそうなのでしょうが、模型として見た時に自分の好みとは少々違う気がしたので、今回は思い切って自分好みの配色にしてみました。海底に沈む「ホーネット」のカラー映像も参考にしています。船体は GSI クレオス Mr. カラー C324 ライトグレー、迷彩部分は C367 ブルーグレーを基本として、それぞれに少量の C363 ミディアムシーグレーを混ぜて調色しました。

問題はその塗装方法です。筆塗りではムラが気になりますし、やはり幅の広いマスキングテープをカッターで切っていくしかないのかと考えましたが、果たしてあの複雑な曲線をカッターで奇麗に切れるのか不安でした。そんな時、本誌ライターの渡辺真郎氏から「マスクゾルを使えば良いですよ~」とアドバイスをいただきました。全く使ったことのないマテリアルでしたので考えたことも無かったのですが、何か目の前が開けたような気がしてすぐにグッドスマイルカンパニーのマスクゾルを用意しました。





▼舷側のシャッターは閉まった状態で一体成型されている。キットはせっかく格納庫内部の床板が再現されているので、作例ではシャッターを開口し、内部も作り込んだ。格納庫内部にも艦載機や人員を配置している。







▲艦橋前部の 1.1 インチ四連装機関砲はベテランモデルの別売パーツに交換。舷側の機銃座にはプラ板でブルワークを追加した。

それでは実際の塗装を説明します。このような複雑な迷彩塗装をするとなると、ついエンピツ等で下描きをしたくなりますが、やめておいたほうが良いでしょう。意外と塗装後にも透けて見えますし、消しゴムで消そうとしても消せません。それではどうするか？まずは塗装解説図を凝視して覚えることです。そして記憶に有るうちにマスクゾルを筆に取って直接船体に描き入れていきます。描いたらまた次のパターンを覚えてゾルを塗る、この繰り返しで船体の片面の迷彩を一気に描き入れました。少々の間違いは気にせず一気に筆を走らせた方が好結果が出るようです。

もし大きなミスの場合はやり直しとなるのですが、このマスクゾルはとても伸びが良くて塗りやすい反面、いったん乾いてしまうととても塗膜が強く、下手に剥がすとせっかく上手く塗った部分もお構いなしに一気に剥がれてしまいますので要注意です。これはかなり精神的ダメージも大きいです。

上手く塗り終えたらマスクゾルの上から船体色を吹きます。そして乾燥後いよいよゾルを剥がします。大きく深呼吸して恐る恐る剥がしていくのですが、期待と不安が入り混じった何とも言えない緊張感です。そして結果は…大成功でした。ほぼ修正する箇所も無くイメージに近い仕上がりとなりました。マスキングテープではこう上手くはいかなかったかもしれません。

艦橋も同様の作業で無事に迷彩塗装が完了しました。飛行甲板は下地に C22 ダークアースを粗く吹いた後、木目の方向に沿って C363 ミディアムシーグレーを吹いていきます。下地の色を所々残すように吹くと効果的です。最後に GSI クレオス Mr. ウェザリングカラーの WC02 グランドブラウンでウォッシングします。白線は B-25 が艦橋を避けて滑走するため、かなり左舷側に寄って引かれています。この作戦のために引き直したとのことです。

B-25

それでは今回のもうひとつの主役である B-25 についてです。実はキットに付属するのはたったの 2 機です。ドーリットル隊は

16機で構成されますので、14機も不足するわけです。さすがにこれには困りました。模型仲間からは「すでに14機は発艦してしまったということにしては?」との珍助言を頂きまして、一瞬「なるほど」と思ってしまいましたが、すぐ我に返りました。最高の瞬間を切り取るのがジオラマの命ですから、ここはやはり16機揃えないと始まりません。そこで同メーカーの別売セットを取り寄せて何とか必要機数を揃えることができました。

完成した16機のB-25を飛行甲板に所狭しと並べて感じたのは、いかにこの作戦が奇想天外だったかということです。主翼は飛行甲板から大きくはみ出し、滑走は艦橋スレスレに行わなければいけません。特に先頭の機はほんのわずかしか滑走距離がありません。重い爆弾を満載して陸軍パイロットがここから飛び立つのは恐怖だったと思います。模型を作りながら強くそう感じました。

本作戦時の「ホーネット」はB-25以外にも通常艦載機を搭載していました。そこで格納庫内にF4FやSBD、TBFを舷側の開口部からよく見えるように並べました。また米空母は限られたスペースを有効利用するため、格納庫の天井から主翼を取り外した艦載機を吊り下げて搭載機数を確保していました。これを再現するために別売でF4Fを10機用意して吊り下げてみました。しかしこれは相当下から覗き込まないと確認できないのが少し残念です。

フィギュア

さて最後は洋上ジオラマに命を吹き込むフィギュアの配置です。このスケールの米海軍デッキクルーフィギュアは入手困難で困りましたが、ギリギリ日本海軍フィギュアで代用できそうなサイズですのでイオンモデルの1/350「日本海軍乗組員 待機中」(J350-001)を使いました。少しでも米兵に近づけるため靴底のほんの少し下をカットしてわずかでも足の長さを稼ぐ涙ぐましい努力をしています。

フィギュアの塗装については数色に色分けされたジャケットでオペレーションが分かれていますので、赤や黄色等いくつかに塗り分けてみました。さらに士官は白にわずかにダークアースを混ぜて調色して艦橋まわりに並べました。また海軍兵とは趣を異にする陸軍パイロットたちは茶系をメインにしてみました。

1機のB-25の前にドーリットル中佐が立ち、周囲に集めた部下の搭乗員たちに作戦内容や行き先を告げて意気上がる映画『パールハーバー』(2001年公開)のワンシーンを再現しました。以上で長かった作業は完了です。太く短い一生だったかもしれませんが、アメリカ空母史を語る上で絶対に外せない名優「ホーネット」。CV-8の看板は何年経っても色褪せることは無いでしょう。



▲ホースパイプは開口し、錨はシャンクの角度を調整して取り付けた。艦首には錨見台を追加。迷彩塗装はマスキングゾルでの塗り分けを行い、やや明るめの色調にアレンジしている。



▲「我々は東京に向かう」出撃前にB-25の前に集まるドーリットル隊の面々。映画『パール・ハーバー』でのワンシーンにインスピレーションを受けて人員を配置した(劇中では機体尾部付近に集まっている)。



▲少しでも滑走距離を稼ぐため、飛行甲板後部に連なるように駐機しているB-25群。ライフラフトはバンカースタジオの3Dプリントパーツを使用した。



初めて日本本土空襲を成功させた
米海軍空母CV-8「ホーネット」

B-25爆撃機16機を発艦させよ！

ドーリットル隊による空襲は、一種のプロパガンダとして計画された。B-25B、16機は東京を含む主要都市への空襲を奇襲の形で成功させた。その結果、日本軍の焦りを生み、アメリカ国民はそのニュースに熱狂した。この作戦が成功した要因は空母と陸軍爆撃機の組み合わせを戦略爆撃に使用した発案の妙だった。

解説：河野嘉之　写真：U.S.NAVY



▲「ホーネット」のフライトデッキ上に露天係止されたB-25B。幅約26.21mの飛行甲板に対するB-25の全幅20.64mの割合がよく分かる。B-25の離陸重量は15.88tほどあるが、これは標準的な艦載機の3倍以上。露天係止のまま太平洋を横断するため、B-25各機はフライトデッキにしっかりとタイダウンされている。近くを航行しているのは駆逐艦DD-433「グウィン」。写真中央左下には1.1インチ4連装砲が見えている。

パールハーバーの仕返し

太平洋戦争開戦後の緒戦において、日本軍は南西太平洋で快進撃を続け、米軍は思わぬ苦戦を続けていた。パールハーバー攻撃の直後から、日本海軍の潜水艦はアメリカ西海岸の沿岸で通商破壊作戦を行い、約6万5千トンもの戦果を挙げていた。そして、「伊17」がカリフォルニア州のエルウッド石油製油所を攻撃した。これらの身近な攻撃に対し、アメリカ国民の政府に対する不満は高まっていた。

ルーズベルト大統領は、この国民の不満を逸らし、米軍の士気を高める何かが必要だと考えた。実際に大きな戦果を挙げなくとも、プロパガンダとしてセンセーショナルな出来事が必要だった。アメリカはパールハーバーがやられた。それに対する報復として、せめて日本本土、できれば首都東京を爆撃できないかと考えた。

当時、アメリカの領土、または日本の警戒線の外側から日本を直接爆撃できる長距離爆撃機は、まだ実用化されておらず、当然、海軍の空母と艦載機による攻撃が考えられた。しかし、SBDドーントレスやTBDデバステーター等の艦載攻撃機の航続距離はせいぜい1,100～1,800㎞程度だった。片道攻撃としても、航続距離から考えて、そんな近距離まで空母を日本の沿岸に近づけることはできないと考えられた。

そこで、航続距離の長い陸軍の爆撃機を空母に搭載することが考えられた。当時、運用されていた中で、B-17やB-24等の四発爆撃機は見るまでもなく使用できなかった。サイズ的になんとか最新鋭の空母「ホーネット」に搭載できるのは航続距離3,000㎞のノースアメリカンB-25か航続距離4,000㎞のマーチンB-26があったが、B-26は離陸距離が長かったため、B-25に決定した。

ただし、B-25は空母から発艦することはできても、その巨体で空母へ着艦することは到底できず、日本を爆撃した後、当時友好国であった中華民国本土まで飛び、そこで機体を放棄して脱出するというヒットアンドアウェイ戦術だった。

この爆撃作戦の指揮官は戦前のエアレース等で国民的英雄だったジェイムズ・H・ドーリットル中佐が選ばれ、各地のB-25部隊から選抜された乗組員たちによって、1942年2月から訓練が開始された。この作戦に参加する乗員たちは"ドーリットル・レイダーズ"と自称した。

爆撃作戦に使用するB-25Bは24機が抽出され、すでに1月22日から改修作業に入っていた。胴体下部の砲塔とノルデン照準器、無線機類が外され、後部銃座には記録用カメラを搭載し、代わりに木製のダミーの銃身を取り付けるという念の入れようだった。最も重要な燃料については、胴体内の燃料タンクを増設し、爆弾倉内、通信士席脇、撤去された胴体下部砲塔跡等にも燃料タンクを新設して、航続距離を伸ばした。搭載する爆弾は500ポンド爆弾2発とM54収束焼夷弾2発の合計4発だった。



▼荒天、向かい風の中、B-25はフライトデッキの長さを使い切ることなく途中で離陸した。これらのB-25Bは、機首グラスノーズに搭載されている7.62㎜機銃は取り外され、燃料増加等各部に改造を施した特別な機体だった。荒波を進む「ホーネット」は有名なメジャー12のシミ迷彩（シーブルー5-S、オーシャングレー5-O、ヘイズグレー5-H）に塗られている。

「ホーネット」の出航

東海岸のヴァージニア州ノーフォーク海軍基地で、B-25Bが「ホーネット」からの発艦テストに成功した。「ホーネット」の飛行甲板の幅は約26.21mで、B-25の全幅は20.64mだった。艦中央には巨大なアイランドがあるが、滑走線を左に寄せれば、充分クリアできるサイズだった。

その後、西海岸に回航された「ホーネット」は、1942年4月1日にサンフランシスコ、アラメダ海軍基地でB-25B、16機を積み込み、翌2日にサンフランシスコを出航した。空母CV-8「ホーネット」は、重巡CA-44「ヴィンセンス」、軽巡CL-43「ナッシュビル」、駆逐艦DD-433「グウィン」、DD-435「グレイソン」、DD-434「メレディス」、DD-436「モンセン」、給油艦AO-22「シマロン」等とTF.18を編成していた。そして、4月13日にはミッドウェー北方で空母CV-6「エンタープライズ」、重巡CA-26「ノーザンプトン」、重巡CA-25「ソルトレークシティ」、駆逐艦DD-363「バルチ」、DD-397「ベンハム」、DD-385「ファニング」、DD-398「エレット」、給油艦AO-25から成るTF.16と合流した。ウィリアム・F・ハルゼー中将が全体の指揮を執っていた。

当初は4月18日午後に日本から約930㎞の地点で発艦して日本本土へ夜間爆撃を行う計画だったが、18日早朝に日本海軍北方部隊の特務監視艇「第二十三日東丸」（漁船改造90トン）に発見されてしまった。その結果、日本沿岸から1,200㎞の地点で発艦を開始し、昼間強行爆撃に切り替えざるを得なくなってしまった。



▼1942年4月18日午前7時25分、日本沿岸から1,200㎞の地点で、第1番機としてドーリットル中佐の乗機が発艦し、残り15機がそれに続いた。「ホーネット」の甲板にはB-25の大きな主翼とアイランドのクリアランスを確保するため、大きく左寄りに滑走基準線が引かれていた。

予定より約7時間も早い午前7時25分、強風の中、第1番機としてドーリットル中佐の乗機が発艦し、後の15機がそれに続いた。最後の機体が発艦したのは午前9時16分だった。「ホーネット」の甲板にはB-25の大きな主翼とアイランドのクリアランスを確保するため、大きく左寄りに滑走基準線が引かれていた。なお、この作戦に参加した「エンタープライズ」はもちろんのこと、B-25を搭載した「ホーネット」にも通常作戦時と同じF4F、SBD、TBD等の艦載機が76機、搭載されていた。

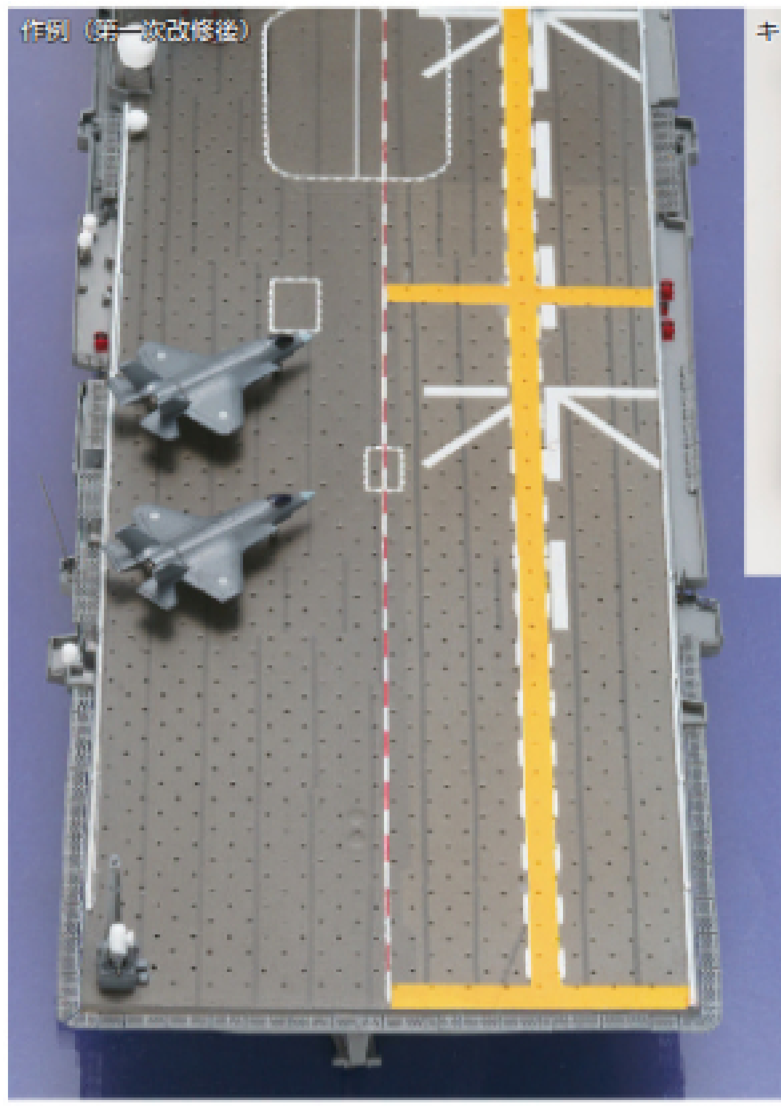
日本本土初空襲

日本本土を目指したB-25は13機が京浜方面、2機が中京方面、1機が神戸へ高度約200～750mの低空で侵入し、500ポンド爆弾と焼夷弾を投下。爆撃後、B-25はそのまま日本本土上空を駆け抜けて、中華民国本土へ到達し（1機はウラジオストック）、4機が不時着。11機が機体を放棄して乗員はパラシュートで脱出した。

この本土初空襲に対する日本軍の反応は混乱を極めた。監視体制や連絡体制の不備から敵機侵入の報告が遅れ、迎撃に上がった日本陸軍の97戦も多くの機体が会敵できず、B-25を見つけた機体も速度差によって振り切られてしまった。また、高射砲も数が少ない上に練度が低く、全く対応できなかった。本土に敵爆撃機が侵入することなど思いもよらなかったため、一部ではB-25を友軍機と誤認するケースもあった。

日本側の被害は死者88名、重軽傷者460名以上、被害家屋は約400戸と言われ、アメリカ側の乗員は3名が死亡、8人が捕虜（うち3名が処刑）とされている。結果として、なす術もなく首都等主要都市を爆撃された事実は日本軍の焦りを生み、逆にアメリカ国民はそのニュースに熱狂した。この作戦が成功した要因は空母と陸軍爆撃機の組み合わせを初めて戦略爆撃に使用した発案の妙であり、意表を突いた画期的ともいえる作戦だった。そして、両軍および両国民に与えた政治的、心理的効果は非常に大きかったといえよう。







◀▲アメリカ海軍の強襲揚陸艦「ワスプ」を彷彿とさせる先端がスクエアな形状となった艦首飛行甲板。改修前のキット（写真上）は先端がすぼまっているので、プラ板で拡張した。

F-35 運用を見据えて空母へと改修された姿を再現

■海上自衛隊護衛艦「かが」第 1 次改修後

いずも型護衛艦の２番艦として 2017 年３月に就役した「DDH-184 かが」は F-35B ライトニングⅡ戦闘機を搭載するための改修工事を受けて空母化された。改修工事はジャパン マリンユナイテッド呉事業所において行われ、2023 年 11 月に工事完了となった。作例はハセガワ 1/700 キットを製作。実艦に見られる改修ポイントに手を加えて第 1 次改修後の姿を再現すると共に、飛行甲板上には F-35B を搭載した。



ハセガワ 1/700 改造
海上自衛隊護衛艦 DDH-184「かが」第 1 次改修後
製作・文：ナヲツグ
HASEGAWA1/700 scale Plastic model kit Convert
J.M.S.D.F. DDH-184 "KAGA"
Modeled by Naotsugu

はじめに

今回は第一次改修後の「かが」を製作する機会をいただきました。実は以前に『艦船模型スペシャル』No.77 にて同じ護衛艦「かが」(ピットロード 1/700) を製作しており、個人的に４年越しのリバイバル。あの頃より製作技術も知識も多少なりとも付いたと思うので、その分も加味されていれば良いなと思っています。

さて艦首を大幅に変更してより航空機運用能力が高まった改修後の「かが」ですが、正直キット化は厳しいだろうと思っていました。今回自身の手で製作する機会をいただき、できる限りの力をつぎ込んでみました。

ベースキットはハセガワ 1/700 で、ディテールアップパーツは同社純正の『1/700 護衛艦かがディテールアップエッチングパーツ』をメインに使用しています。

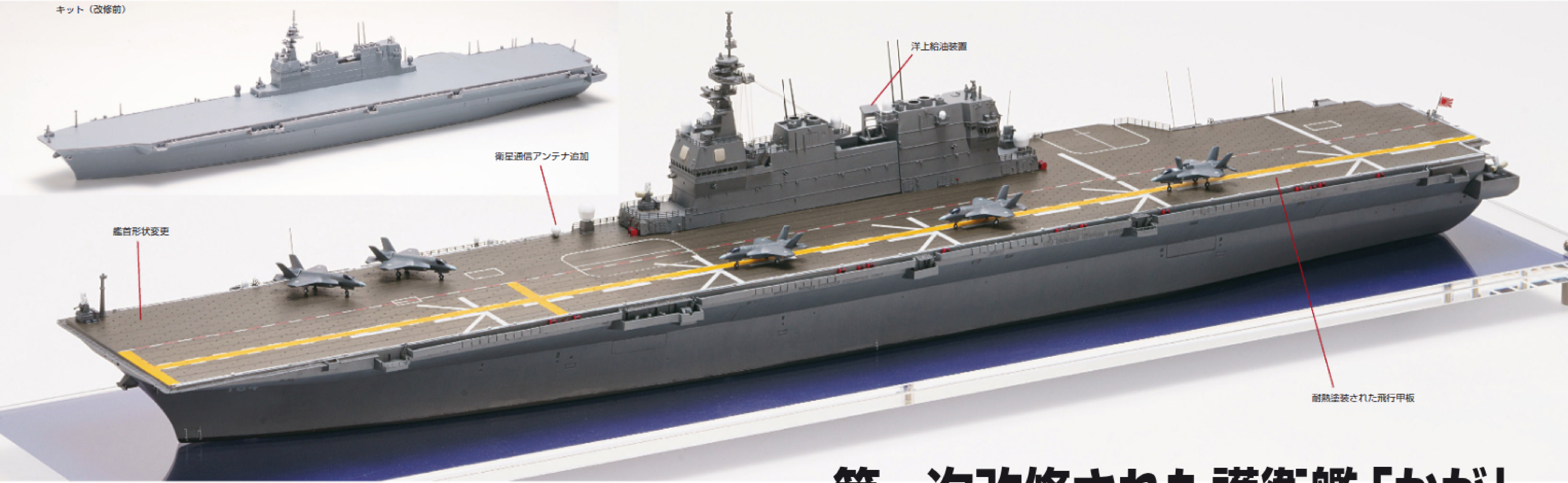
製作のポイント

何といっても一番の改修点は艦首形状の変更です。お話をいただいた当初は「パテ盛りでいけるか？」なんて思っていましたが、直線や曲面の辻褄合わせがめちゃくちゃ大変になりそうなので早々に断念。しかし実艦写真を見ながら色々検証していくうちに「プラ板の箱組みでいけるんじゃないか？」と思い



▲艦橋後部には光学着艦装置（OLS）が装備された。台座も含めて自作している。





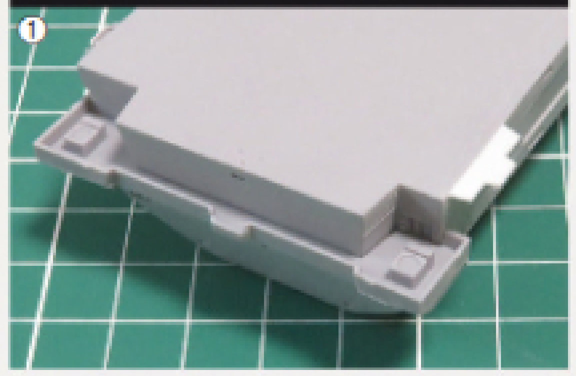
第一次改修された護衛艦「かが」



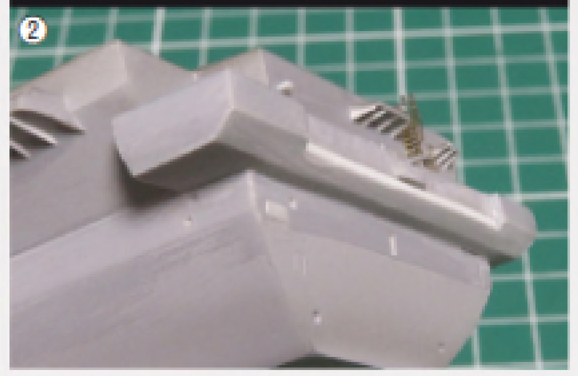
J.M.S.D.F. DEFFENSE SHIP
DDH-184 KAGA



艦尾



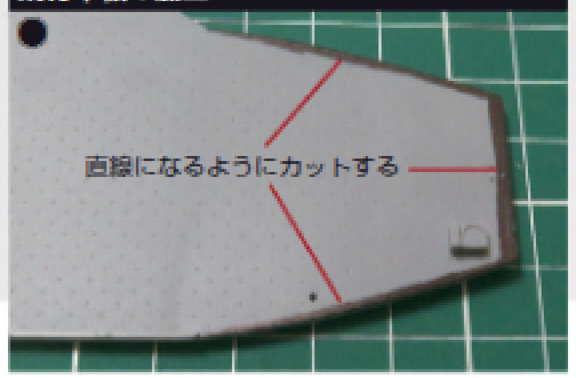
艦尾



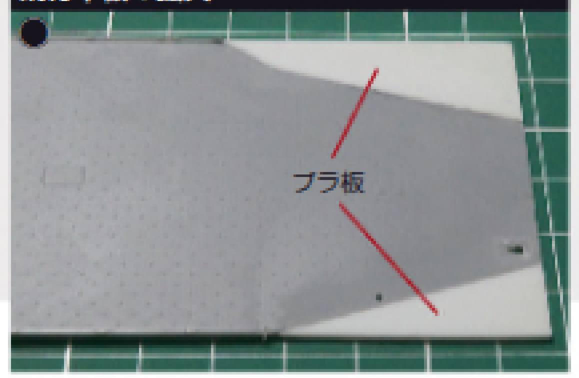
▲右舷後方スポンソンはプラ板で薄く作り直し、艦尾のキャットウォークは形状変更した。スポンソンの裏側にはプラ板で補強桁も再現している。

●護衛艦「かが」第一次改修後の製作ポイント

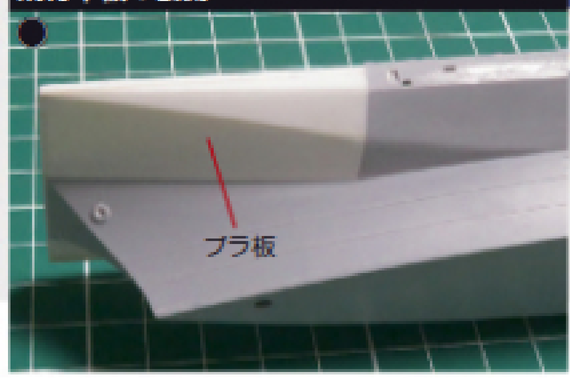
飛行甲板の加工



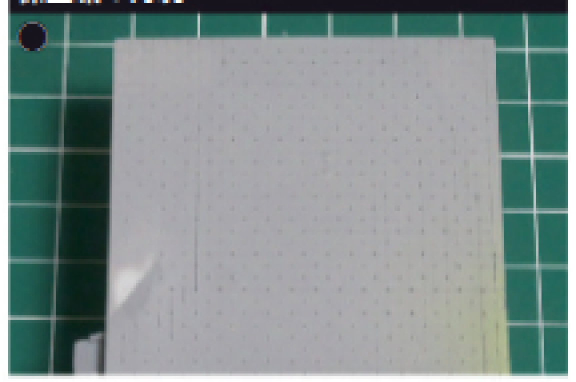
飛行甲板の拡大



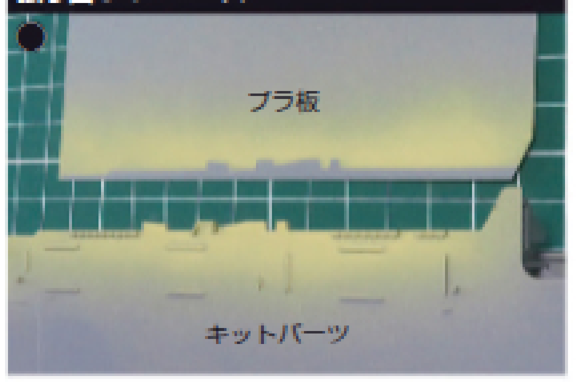
飛行甲板の裏側



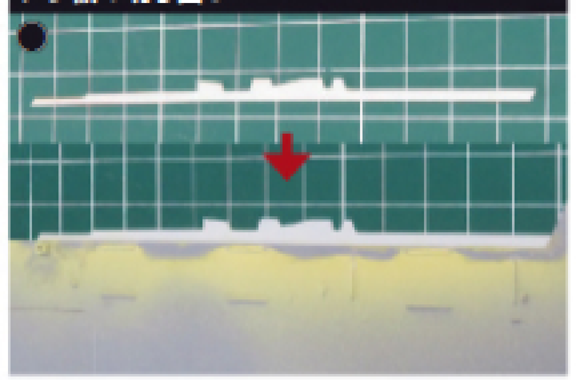
係止環の再現



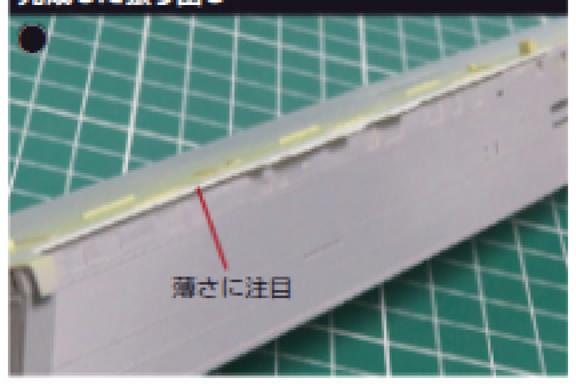
張り出しのトレース



プラ板の切り出し



完成した張り出し



①艦首飛行甲板をプラ板で拡張するが、キットは微妙にカーブ状になっているため一旦直線的になるようにカットする（黒く塗りつぶした部分）。
② 1㎜厚のプラ板で飛行甲板の拡張された部分を作る。①で予め真っすぐにカットしておいたので、単純な形状で済んだ。
③艦首飛行甲板の裏側。船体とラインがつながる部分は0.5㎜厚のプラ板で製作している。
④飛行甲板の拡張した部分も係止環を再現する。0.3㎜径のドリルで開口した。併せてキットの凹モールドも同じようにドリルでさぐり、モールドに統一感を持たせている。
⑤張り出しを薄くしたいのでプラ板に置き換えた。まずは形状をトレースするため、キットのパーツにプラ板をあてがい、塗料を吹き付けることでシルエットを写し取る。
⑥形状を写し取ったプラ板を丁寧に切り出し（写真上）、該当箇所をカットして接着する（写真下）。こうすることでシルエットを変えずに縁を任意の薄さにすることができる。
⑦薄いプラ板に置き換えた張り出しを側面から見たところ。薄く仕上げることでスケール感が高まる。

立ち、なんとなしに組み合わせてみるとこれが良い感じに。側面は３面（下、斜め、側面）を0.5㎜厚のプラ板にて各々形状を切り出し、組み合わせて装着しました。

甲板にあたる部分は、航空機を固定する係止環のモールドを加工したかったのと多少の強度も欲しかったので、1㎜厚プラ板を使用しています。甲板パーツ先端の拡張部分ですが、曲面に合わせてプラ板を接着するのは難儀なので、ヤスリで切削して直線にし、そこに形状を合わせて切り出したプラ板を接着して改修後の形状に整えています。

そのままだとプラ板とキットパーツの継ぎ目がどうしても残ってしまうので、その箇所に切削用瞬間接着剤を補填して研削、継ぎ目の曲面を作り出しています。

甲板について

プラ板で新造した艦首甲板部分に0.3㎜径のドリルで係止環を再現しました。その部分だけ加工すると本来の係止環モールドと辻褄が合わなくなるので、甲板全体の凹モールドを全て同じように加工しました。なかなかの量で、全て加工し終えるまでドリル刃を２本も折ってしまいました。

航空灯火の内蔵されている甲板縁の白い凸部については、キットのモールドは多少大きく感じたので一旦全て削り、0.3㎜角のプラ棒等で新たに設置し直しています。

また艦橋右舷側については、当初キットそのままで行こうと組み上げたのですが、後からどうしても厚みが気になってしまい、新造したものに差し替えています。手法としては、大きめに切り出したプラ板を当該箇所にあてがいつつ塗料を吹き付け、残った形状を切り出して加工箇所に接着するという流れです。

船体について

船体自体は特に大幅な改修等はせず、基本はキットベースにて製作しています。キャットウォークやスポンソンの下部にモールドされている三角板ですが、シャープにしたかったので全て削り落として0.25㎜厚のプラ板にて再構築しました。これが船体に微妙な曲面がかかっているので、地味に大変でした。艦の中程は大体同じ形状で揃えれば良いのですが、艦首近くになると１枚１枚形状を見て合わせながら製作していきました。

また一部スポンソンは改修後に追加されたものや形状変更が見られるので、そちらは全て新たに製作しています。新たに新造した部分は、①艦首右舷前方、②右舷後方、③左舷前方の一部、④艦尾キャットウォークの下部になります。こちらは主に0.3㎜厚のプラ板で製作しています。

艦橋について

構造は基本そのままなのですが、表面のモールドはある程度やり直したかったので、一部を残して削り落としました。艦橋裏の足場部分は薄く加工しています。

艦橋全体に走っている溶接痕のモールドは細く伸ばしたランナーを使用しています。細





▲「いずも」とは異なるマストトップは「かが」専用パーツが用意されている。フラットを薄く削り、エッチングパーツの手摺りを追加している。

艦載機はロッキード・マーティンF-35BライトニングⅡで統一





▲▶F-35Bはキット付属パーツ。キットには4機しか付属しない（通常時×2、垂直離着時×2）ので、もうひとつのキットから調達して増やした。リフトファンを用いた垂直離着陸ができるのが特徴で、キットも機体上下のドアを開いて排気ノズルを下側に向けた状態を再現可能。飛行甲板の左舷後方は耐熱塗装が施されており、色味も異なって見える。

い径の真鍮線等を使用すれば均一に綺麗に見えるかもしれないのですが、実物が太さに多少のバラつきがあるように見えるので、あえて不揃いな伸ばしランナーを使用しました。同じ素材同士の方が相性良いですからね。

全体的にある凸状の構造物はプラ材を使用、各所大きさを微妙に変えて均一にならないよう配慮しつつ設置しています。水密扉やラッタルは模型工房ボラードのエッチングパーツを使用しています。

マストについて

こちらも構造的にはキットベースですが、厚みが気になったので、薄くできる箇所は全て加工しています。目安的に厚みは半分程度にしました。こういう箇所はヤスっていると厚みが偏ってしまうので、バランスを見ながら慎重に追い込んでいきました。

実物には支柱が付いているのですが、キットでは簡略化されているので、0.3㎜角棒にて設置しました。

兵装・装備について

高性能20㎜機関砲（CIWS）×２基とSeaRAM近SAMシステム×２基については、ミネルバモデルクラフトの3Dプリントパーツを使用。いやはやこの装備品の精度がとんでもないです。置くだけで一気に精度と情報量が上がりますね。

艦載機（F-35B）について

どうせ改修後の「かが」を作るなら艦載機はF-35オンリーにするか！と思い立ち、全機統一してみました。キットに同梱されているのは４機なので、手持ちの積みから何機か引っ張り出してきました。

ディテールアップに関しては、以前作例で同じく「かが」を製作した時に使用したアーティストホビーの『DDV192空母いぶきエッチングパーツ』よりF-35用のパーツを拝借しました。まさかここで眠っていた余り部品が活きることになるとは！

塗装について

船体についてはGSIクレオスMr.カラーC607灰色2704（N5）を使用。実艦の甲板には舗装痕が見えたりするので、できる限り表現したく、塗装してはマスキングを何色か繰り返しています。

まず最初に艦尾後方にあるF-35Bの垂直着艦時に発生するジェット気流に対応するべく耐熱コーティングされた箇所をC363ミディアムシーグレーBS637を塗装。次にC609滑り止め塗装部色を塗装、この色が甲板部の舗装痕、最も暗い色になります。

その後資料を見比べつつ線状にマスキング、艦首から艦尾にかけて一直線ではなく色々な線が走っているので注意しましょう。ちなみにマスキングの太さはなるべく均一になるようにはしていますが、厳密には合わせていません。実物を見る限り線の太さにバラつきがあると感じたので、あえて少し変化させています。

２色目にC608暗灰色2705（N4）と

C609 滑り止め塗装部色を 1 対 1 で混ぜ合わせたものを全体に塗装、そのままラインのマスキングを剥がさず、甲板左舷前方に明るめのグレーをマスキングして塗装しています。乾燥したら全てのマスキングを一旦剥がし、この時点で Mr. カラー GX の GX109 GX クリアブラウンや GX101GX クリアブラックを軽く吹き、ウェザリングも兼ねて全体的な色味を調整しています。

甲板の発着艦標識について

目を引く特徴的な黄色いトラムラインと中央部に走る紅白のセーフ･パーキングライン。これら改修後に追記されたラインは当然キットにはデカールが付属していないので、マスキング塗装で対応しました。紅白線は同じ幅のテープを切り出し、均等になるよう注意します。黄色線はまず 3㎜幅を確保、ベースの白を塗装して両幅 0.5㎜ずつ白点線をマスキングで確保した後、Mr. カラー C58 黄橙色で塗装。残りの着艦標識や白線はデカールを使用しました。

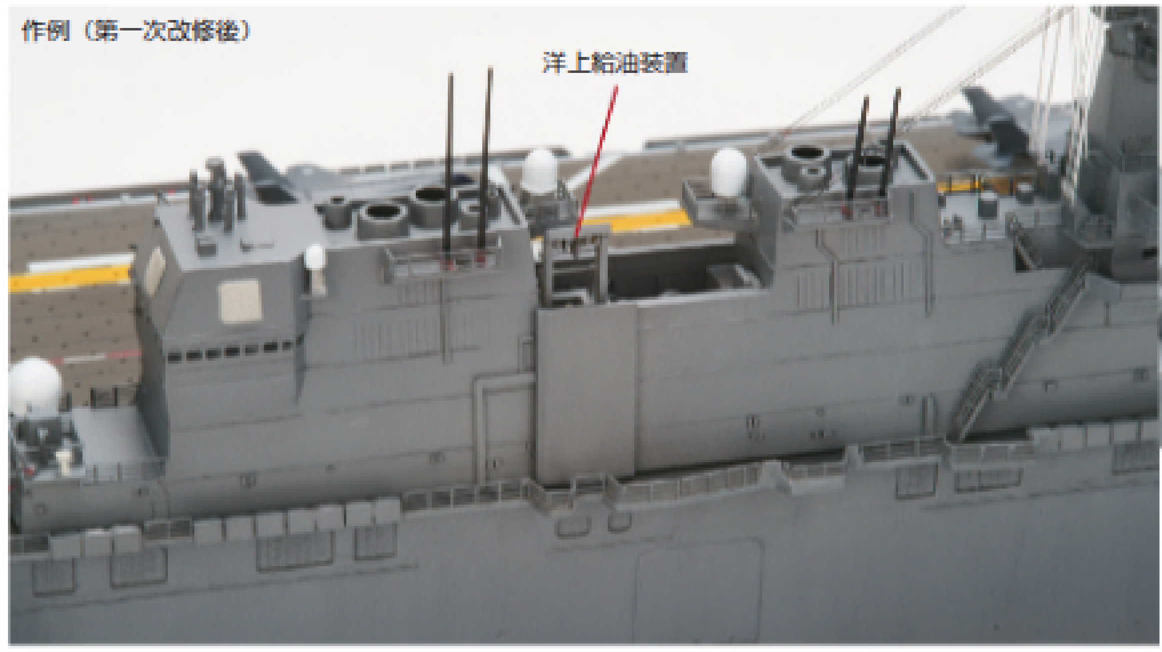
最後に

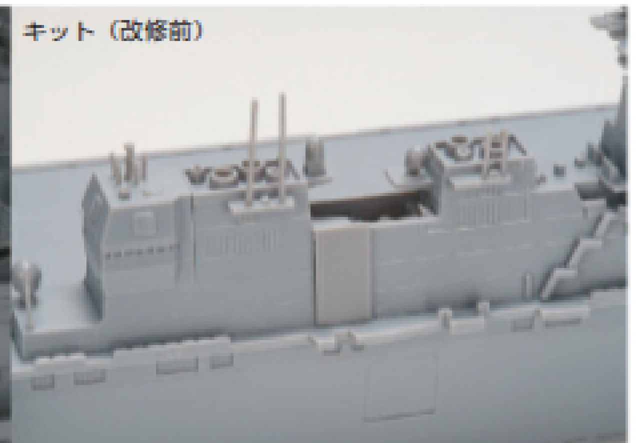
とても製作しやすいキットでした。艦艇の大きさの割に形状が複雑ではないので、サクサク組める印象。エッチングパーツ用の説明書もキットに封入されていて、ストレスなく製作できました。エッチングパーツもそこまで多くないですし、モノは大きいですが割と初級者でもいけるような？なんて思いながら製作していました。

個人的に改修後の「かが」のキット化はないだろうと思い、今回自分の技術を駆使して具現化しよう！と意気込んでいましたが…製作中にピットロードよりキット化のアナウンスが！模型界隈でよくある「無いものを製作していたらキット化される」というのをまさか自身で経験することになろうとは思いもしませんでした。「DDH-183 いずも」も近々第二次改修に入るようですし、この形状のいずも型が当たり前になる日もそう遠くなさそうですね。

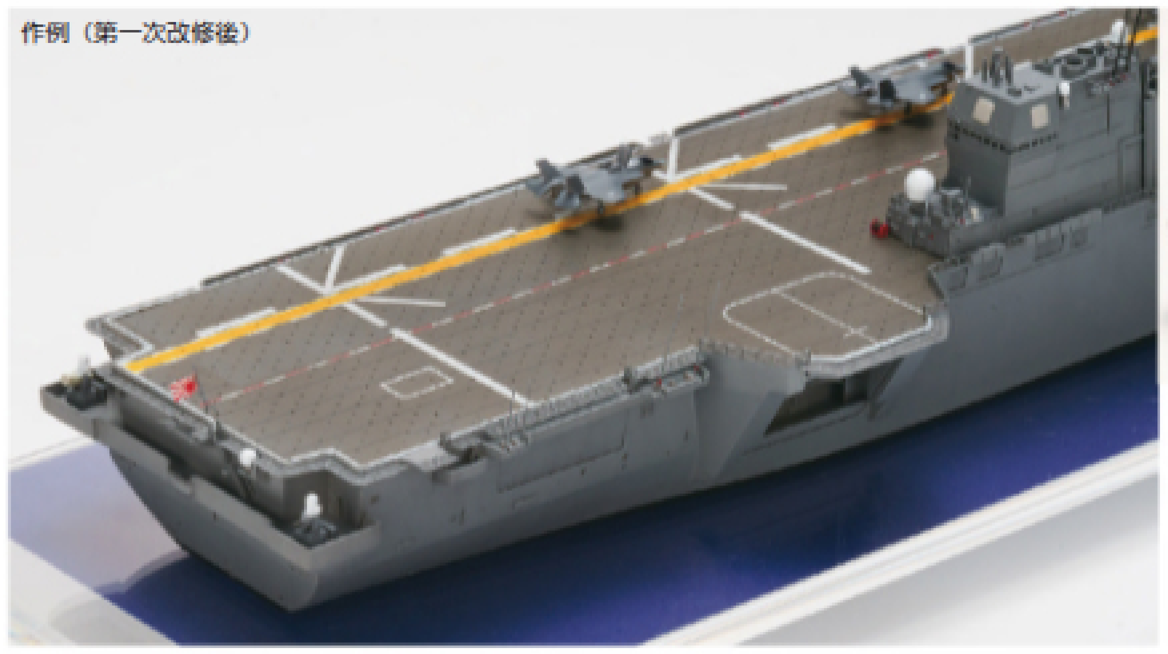


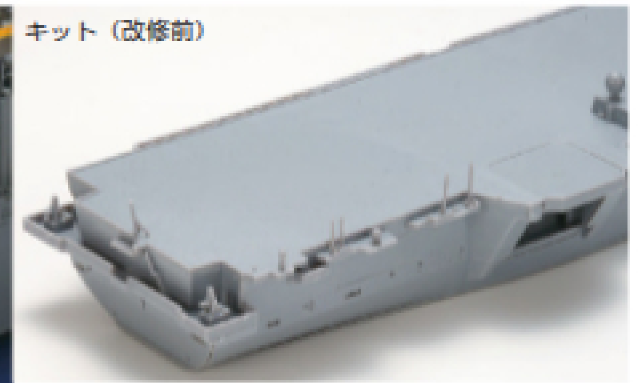






◀▲洋上給油装置はキットはエッチングパーツで再現できるが、作例はプラ材で自作している。各部のモールドは削り落とし、伸ばしランナーやプラ材に交換している。ホイップアンテナはファインモールドの真鍮製ディテールアップパーツを使用した。





◀▲ CIWS はミネルバモデルクラフトの 3D プリントパーツに交換した。改修後の飛行甲板のマーキングはデカールだけでは足りないのでマスキング塗装も併用しつつ対応した。


瀬戸内海江田島沖を航行する護衛艦「かが」DDH-184



DDH-184 KAGA

STOVL 機の運用に向けて
第 1 次改修工事が完了した護衛艦「かが」

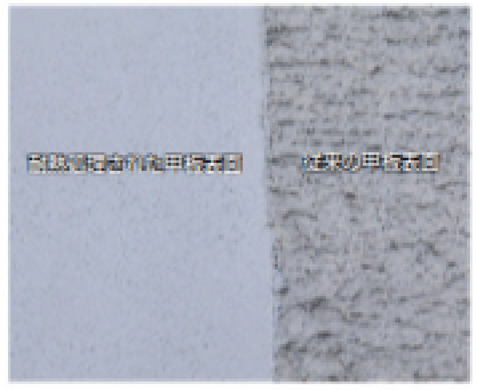


呉基地を拠点とする第 4 護衛隊に配備されている護衛艦「かが」DDH-184 は 2022 年 3 月より F-35B を運用可能にするための改修工事を行い、事実上の空母化された（2024 年 3 月 29 日完了）。艦首形状を台形から米海軍強襲揚陸艦のような長方形に改め、飛行甲板の一部には耐熱塗装を施している。形状変更に併せて飛行甲板上の標識類も変更された。なお 2027 年度には第 2 次改修が予定されている。

空撮写真の撮影時期 2024 年 2 月 16 日（撮影：神 敬也）
そのほかの撮影時期 2024 年 4 月 8 日（報道公開時・撮影：瀬田友秀）



▲アイランド後部には新たに光学着艦装置（OLS）が装備された。



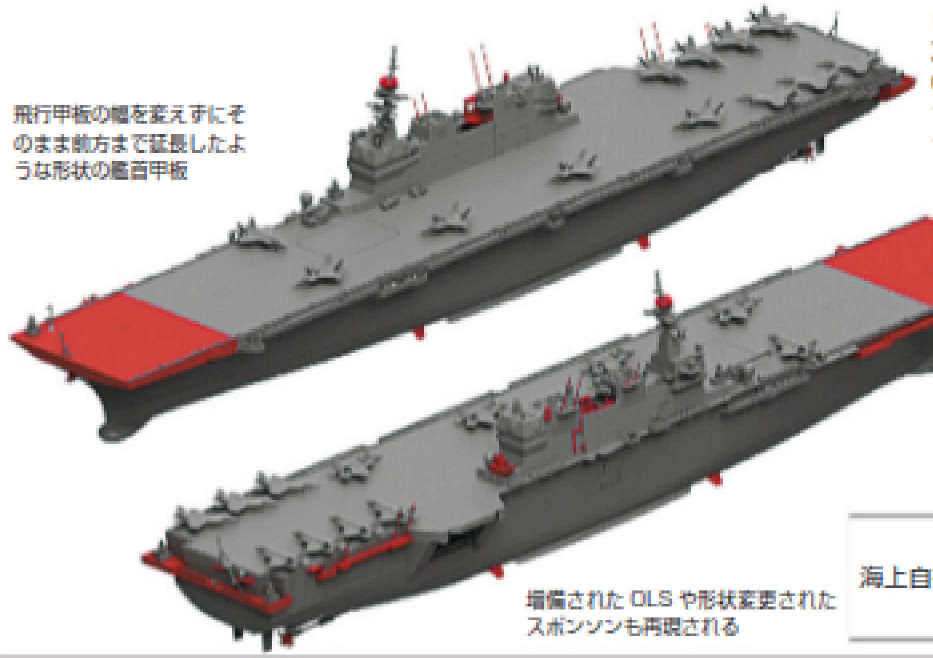
▶長方形に改修された艦首飛行甲板の前端と下部の様子がよく分かるアングル。エッジの立った直線的なラインで構成されている。

◀飛行甲板の４番・５番スポットには F-35B が離着陸できるように耐熱塗装が施されている。左側の平滑に見えるほうが耐熱処理された箇所。





ピットロードから第 1 次改修工事後の 1/700「かが」発売決定



ピットロードから 1/700 護衛艦「かが」のバリエーションとして第 1 次改修後の姿がモデル化される。左の画像はモデリングデータを使用した CG で、赤い部分が改修された新規パーツとなる。キットは洋上モデルとフルハルモデルが選択可能。艦載機として駐機状態の F-35B が 8 機、リフトファンの扉を開放し、排気ノズルを下方に向け動翼を可動位置にした短距離離陸状態の F-35B が 4 機のほか、SH-60K 哨戒ヘリ 3 機（ローター展開時× 1、格納時× 2）、MCH-101 掃海・輸送ヘリコプター× 1 機が付属する。さらにはクレーン車、牽引車、救難作業車、清掃車、高所作業車等の甲板作業車も付属するので甲板上を賑やかにすることができそうだ。



ピットロード 1/700（品番 J108）
海上自衛隊 護衛艦 DDH-184 かが 2024（STOVL 戦闘機搭載 第 1 次改装時）
12 月発売予定（税込み価格 7,480 円）



飛行甲板をベースに見立て コミカルな情景モデルに仕上げる

■イギリス海軍航空母艦「アーガス I49」

飛行甲板上に構造物がない全通甲板を持つイギリス海軍初（世界初）の航空母艦「アーガス」。元々は1914年にイタリア客船「コンテ・ロッソ」として起工したが、イギリスに買い取られて空母として建造されることになった。第一次大戦中の1918年9月に就役した。着艦装置は鋼索を縦に張ったもので、制動は困難を極め事故も多発した。作例はAJMモデルの1/700レジン製キットを製作。エンジンの誤作動によって艦載機が暴走しパニック状態に陥った船員たちを表現した。



AJMモデルズ 1/700
イギリス海軍航空母艦「アーガス I49」1918
製作・文：大谷 貢
AJM MODELS1/700 scale Resin kit
BRITISH NAVY AIRCRAFT CARRIER HMS "Argus I49" 1918
Modeled by Mitsugu OHTANI

世界初の実用的な航空母艦

「アーガス」は、建造中のイタリアの貨客船「コンテ・ロッソ」をイギリスが買い取って航空母艦として改造し、1918年に誕生しました。

それまでの航空母艦は、既存艦を改造して無理矢理飛行甲板を設けていたため、着艦時に煙突や艦橋に衝突する事故が多く、安全で実用的な運用に難がありました。それを踏まえて「アーガス」は当初から天面全体を飛行甲板として使用できるよう設計されました。世界初となる全通甲板を持つ、実用的な航空母艦の誕生です。「アーガス」の登場は、日本初の空母「鳳翔」の開発にも大きな影響を及ぼしたといわれています。

竣工当時は現代アートのように派手なダズル迷彩が施され、「アーガス」といえばこの姿が思い浮かぶ方も多いと思います。黎明期の空母ながら、1944年12月の退役まで一線で活躍していた「ご長寿空母」です。

「アーガス」1918のレジンキット

今回製作したキットは、ポーランドのAJMモデルズから発売されている1/700レジン製キットです。艦載機はすべてソッピースの航空機で、キャメル、パップ、クックー、1½ストラッターの4種4機ずつ、計16機も付いてきます。なお、私の過去作「ヴィンディクティヴ」（『艦スペ』No.76掲載作例）もAJMモデルズ製です。

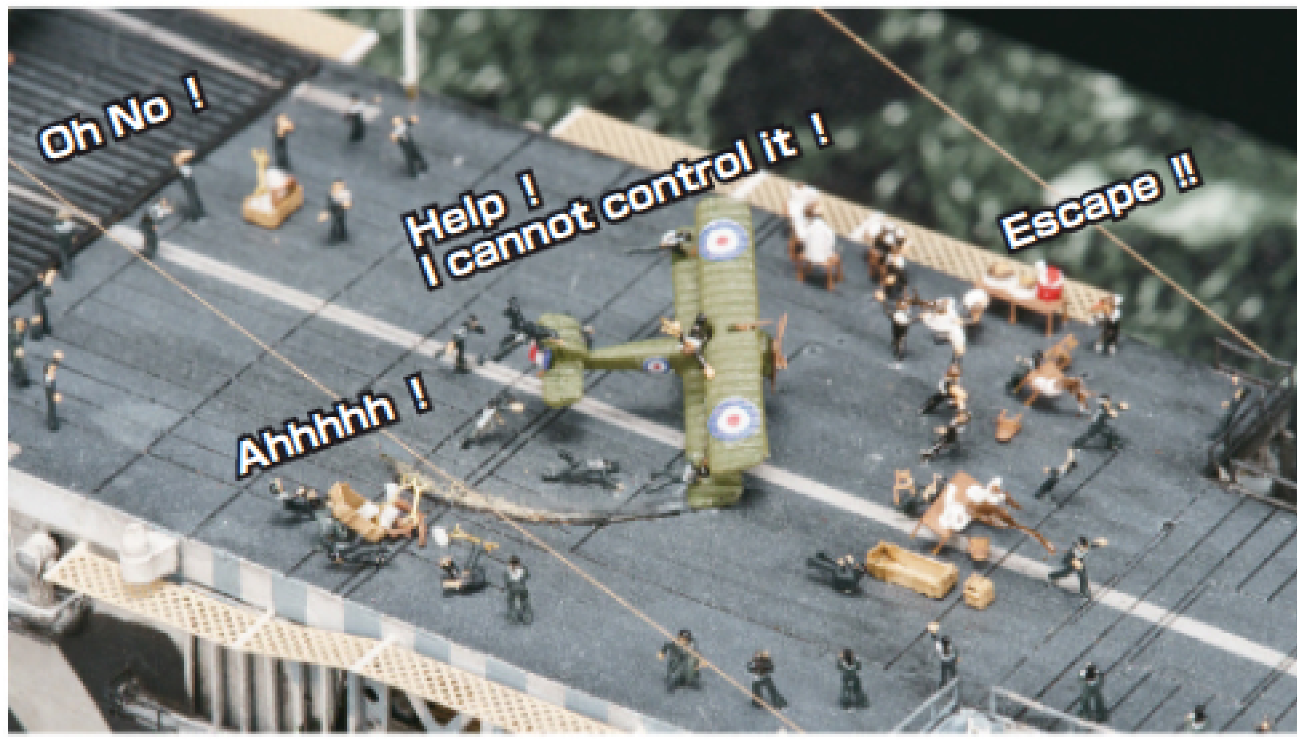
甲板上で繰り広げられるドタバタ寸劇

製作にあたり、当初はあまりに危険すぎる着艦シーンを再現しようと検討しました。着艦寸前の航空機に直接飛び掛かって停止させるという、まるで映画のようですが本当に行われていた着艦方法です。

竣工当初は、鋼索縦張式着艦制動装置と既倒式縦棒型制動装置を着艦用に運用していましたが上手くいかず、苦肉の策としての着艦方法が、甲板両舷の転落防止柵と人力による静止でした。これを痛々しさを排し、どこかカートゥーン風のコミカルな演出にできないかと考えていました。

しかし、全16機もの複葉機が甲板にズラリと並ぶ姿も捨てがたいです。ただし、甲板の後ろ半分以上が艦載機で埋まった状態で、前半分の甲板に着艦なんて普通はあり得ません。最終的に、並んだ艦載機のうち先頭の1機がエンジンの整備中に突如暴走して制御不能になり、止めようと機体にしがみついた船員たちが振り回される様子で代替することにしました。

加えて、「アーガス」と同時進行で造っていた1/700戦艦「クイーンエリザベス」のティータイムのシーン用に準備していた小道具（ティーカップやティーポット等）も流用することにしました。結果、暴走した艦載機がティータイム中の船員たちに突っ込んでいき、一同パニックに。ドンガラガッシャン、椅子やテーブルがひっくり返り、カップやポットが吹っ飛び、優雅なティータイムも吹っ飛び、船員たちは一目散に逃げ出す…というドタバタな場面ができ上がったのです。艦首付近では別の演出もあるのですが、長すぎるので別項にて紹介します。



▲暴走するソッピース・キャメルと振り落とされる整備員たち。向かう先にはティータイム中だった船員たちがパニック状態で逃げ出すシーンとしている。オーバースケール承知でこぼれた紅茶まで表現した。

船体本体

レジン製キット製作にあたり、まずは大きなゲート（湯口）を慎重に切除します。飛行甲板は全体がゲートで包まれているため、慎重に切り出します。

船体はボリューミーな四角い塊で成形され、ずっしり重いです。サーフェイサーの塗膜厚により外板継目を再現し、全部で300箇所を軽く超える舷窓1つ1つに眉毛状の庇を取り付けました。

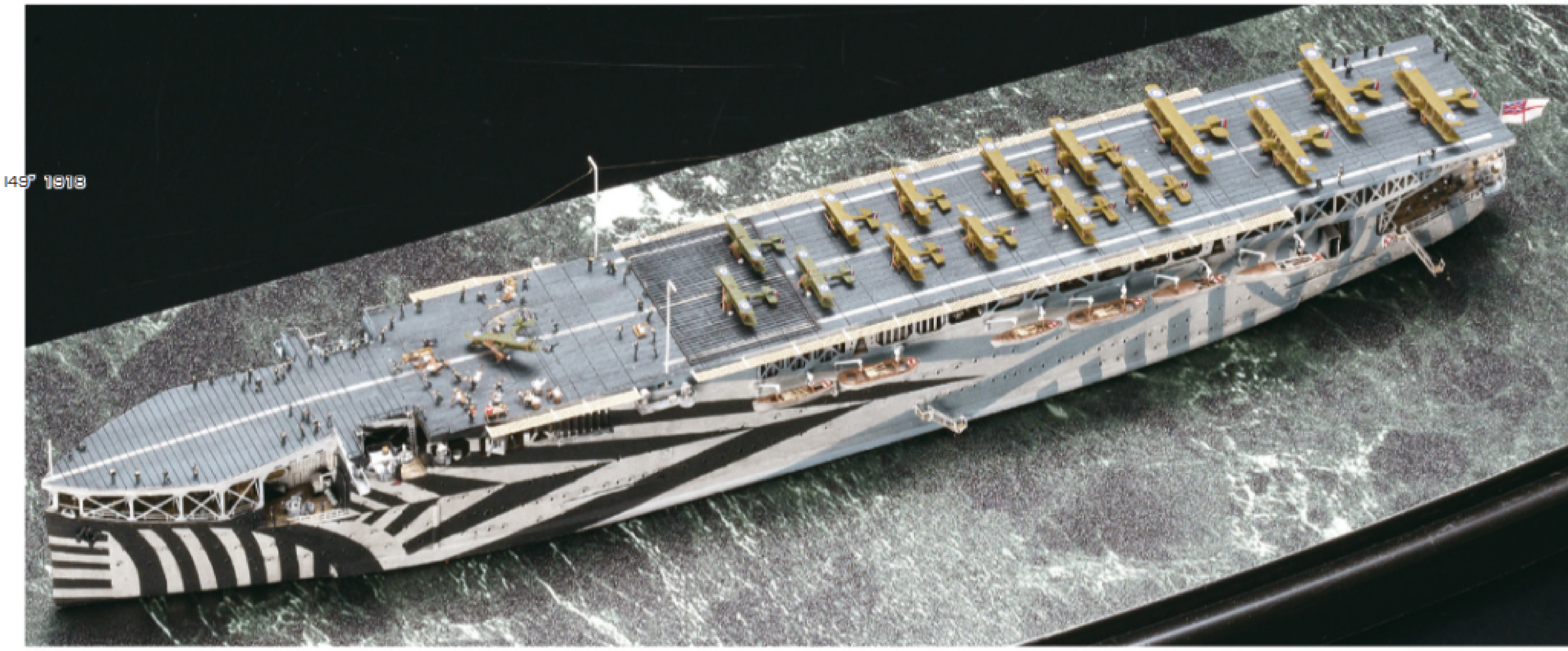
船体パーツは正面から見ると上面の中心線部分が凹むように歪んでいました。飛行甲板と内部構造物の間に隙間が生じないよう、プラ材やパテを盛りました。

中甲板と艦尾甲板裏トラス

中甲板をある程度仕上げたら、先に木甲板部分の塗装を済ませます。濃さの異なる4色をランダムで塗り分けています。

艦尾から見える甲板裏の構造材は、他の空母の例に漏れず見どころのひとつです。キットそのままでは寂しい印象なので、実艦写真を入念に観察しつつ、一部想定を交えながら補強材や梁を挿入しました。

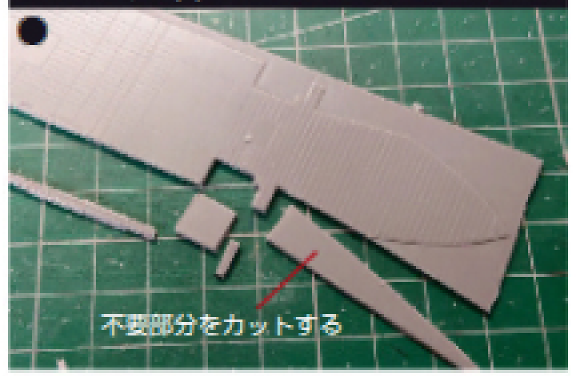
艦尾では、中甲板を縦断する大きな誘導櫓



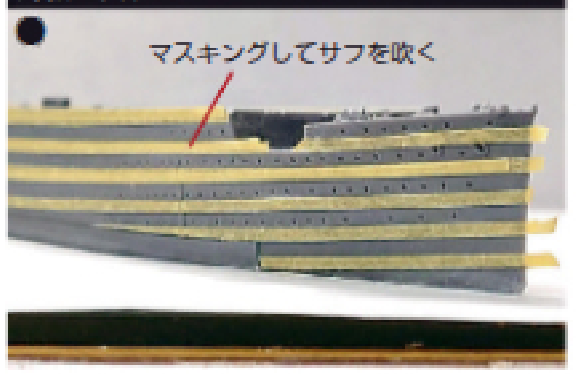


●空母「アーガス」の製作ポイント

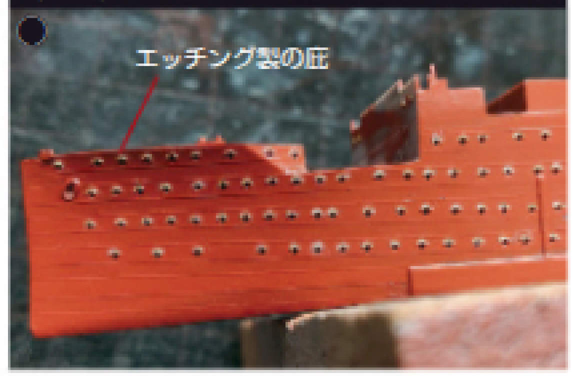
パーツの切り出し



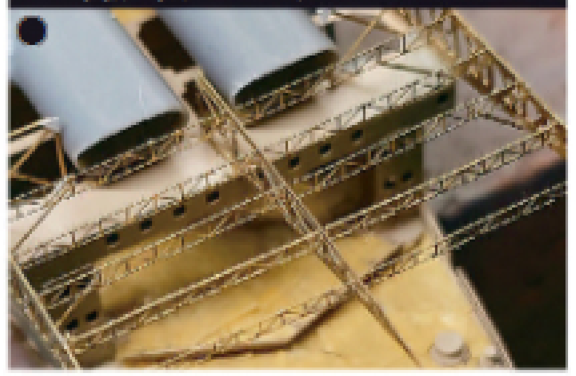
外板の表現



舷窓に庇を付ける



飛行甲板の構造材を再現する



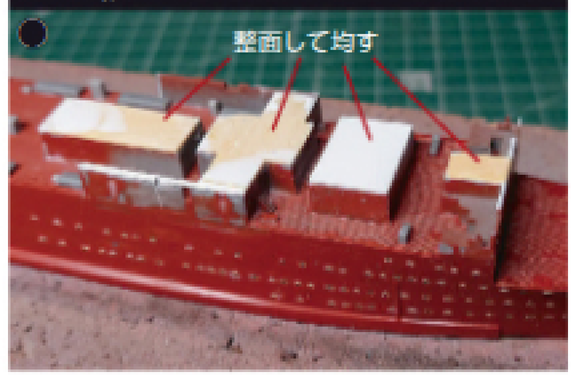
作例の飛行甲板裏側



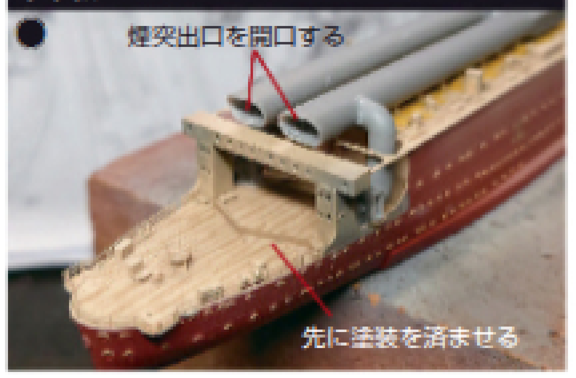
自作した小物類



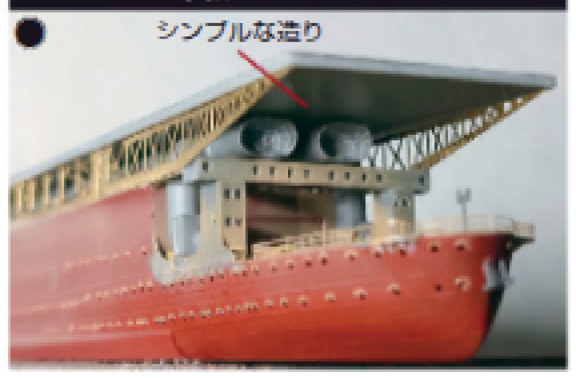
歪みの修整



木甲板の塗装



キットの飛行甲板裏側



①まずは、パーツを切り出します。飛行甲板は全体が板状ゲートで包まれているため、カタヌキ菓子のように焦らず少しずつ切除していきます。
②ゴロンと丸ごと塊状の船体には、舷窓の穴とわずかなモールドが施されています。舷側の外板継目をサーフェイサーの塗膜厚の段差で表現するため、裁断したマスキングテープを貼り付けています。
③舷側に並ぶ無数の舷窓に、眉毛状の庇を付けます。アーガスの語源「アルゴス」は 100 の目を持つ巨人でしたが、こちらは 100 どころか 300 を超える「目」に眉毛を付けねばなりません。
④船体は、中心線付近が凹むように歪んでおり、そのままでは飛行甲板と内部構造物との間に隙間ができてしまいます。そのためパテやプラ板で嵩増しして上部がツライチになるよう修整します。
⑤木甲板の構造物をある程度取り付けたら、木甲板を塗装してしまいます。木甲板色は色味の違う４色で塗り分けています。また、上部の大きな誘導煙突排煙口は、内部を深く彫り込んでいます。
⑥ほぼすべての構造物を組み付け、飛行甲板を仮置きした写真です。「アーガス」は腰高なため艦尾の飛行甲板裏は意外とよく見えますが、構造材が一切なく寂しい印象です。
⑦暗く不明瞭ながら、実艦写真をつぶさに観察すると、艦尾の飛行甲板裏には中央部の補強材や梁が存在するようです。一部想定を交えながら、構造材を自作して取り付けます。梁はトラスの汎用エッチングです。
⑧艦尾甲板裏の構造材を組み立て終えた状態です。当初より情報量が格段に向上しました。不気味な迫力を放つ誘導煙突排煙口には、後で内面に「黒色無双」を塗装します。
⑨船員用の小道具です。イギリスの船らしく、優雅なティータイムを彩る品々です。ティーカップやポット、トーストにジャムの瓶は自作ですが、やはり大きすぎました。椅子と机はファイブスターモデルの製品です。



▼パターンの異なるダズル迷彩によって左右で違った印象を受ける。迷彩はマスキングテープを塗装図に重ねて切り出したものを用いて塗り分けた。

突の排煙口が不気味な存在感を放っています。排煙口内部を深く彫りこみ、内面には光陽オリエントジャパンの水性アクリル塗料「黒色無双」を塗装しました。

ダズル迷彩の塗装

可能な限り構造物を取り付け終えたら、いよいよダズル迷彩の塗装です。幅広のマスキングテープに実物大の塗装側面図を貼り、色の境界をなぞるように切って専用マスキングシートを自作しました。

自作マスキングシートがずれないよう貼りつつ、白→ブルーグレー→黒の順で塗装。トラスの内側にある構造物や煙突側面にも、表側とずれないようにマスキングしました。右舷艦首付近にある細かな縦縞模様が最大の難関で、表側と内側ですれないよう、何度も真横から見つつマスキングしています。

全体的に多少コントラストを抑えて、おもちゃっぽくならないようにしました。

艦載機

艦載機のパーツは薄く繊細なため、慎重にゲートから切り離します。その後、表面の荒れた面を均し、滑らかにします。上翼やタイヤを付ける前に塗装を済ませ、翼間支柱の筋交い状ワイヤーを取り付けます。これは、艦船の張り線用リギングを流用しました。

脆いレジン製で複雑な姿の複葉機を16機も組み立てるのは、大変な作業でした。

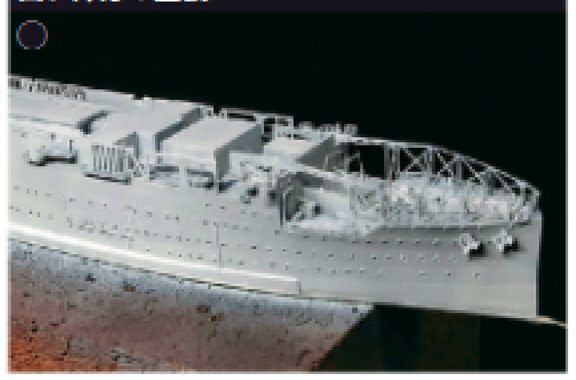
人物と小物製作

人物はYXモデル、ファイブスターモデル等の3Dプリント製品をミックスしています。ポーズを変えるため、手足の角度を変えたり、伸ばしランナーで作り換えたりしつつ、人物ごとに仕草や表情に差異を付けています。

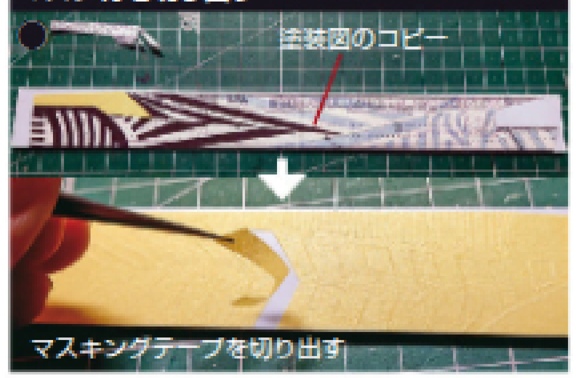
ティータイムの小物類はティーカップや

●空母「アーガス」の迷彩塗装（ダズル迷彩）

白い部分の塗装



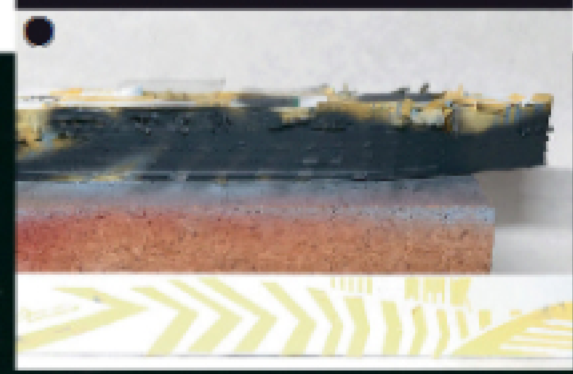
マスク材を切り出す



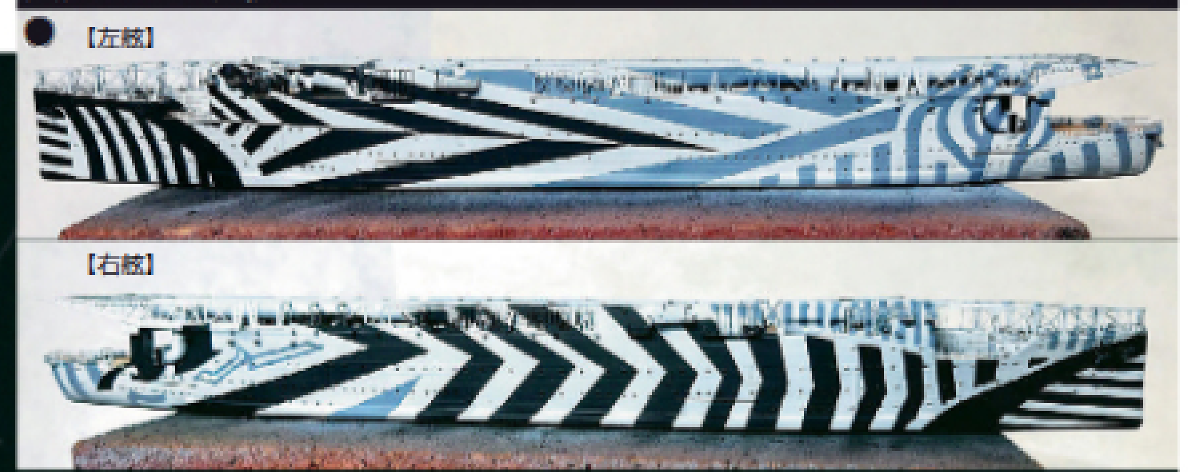
ブルーグレーの塗装



ジャーマングレーの塗装



完成したダズル迷彩



①いよいよ船体のダズル迷彩塗装です。まずは、白部分を塗装します。真っ白では不自然なので、非常に薄いグレーに替えています。
②迷彩模様は、実物大の側面図を基に作成した自作マスキングシートで塗装していきます。幅広のマスキングテープに側面図を貼り付け、色の境界をなぞるようカッターで切断して作ります。
③まずはブルーグレーを塗装します。艦尾の有機的な曲線模様はマスキングが千切れないように注意します。
④メインの縞模様はジャーマングレーで塗装します。トラス奥の誘導煙突や内部構造物にも、表面と模様がずれないようマスキングしています。
⑤これで、アーガス最大の特徴でもあるダズル迷彩が完成しました。右舷側艦首付近にあるブルーグレーの細かな縦縞模様が一番大変でした。



Royal Navy Aircraft carrier
HMS ARGUS I49 1918

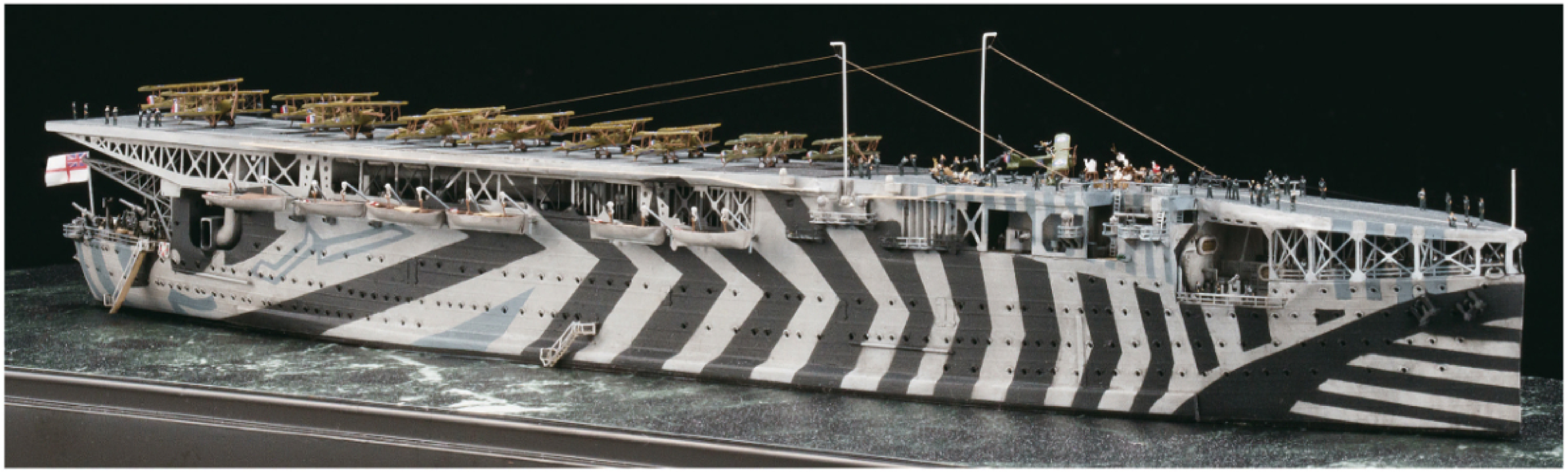
ポット、トーストやジャム瓶を自作しましたが、どれも大きすぎますね。こぼれたお茶はポリ袋をピンセットでつまんだ破片で表現しました。
　その他、汎用エッチングの梯子を応用して、スパナを作っています。

甲板の演出 1（暴走キャメル）

　いよいよ甲板演出です。暴走するソッピース・キャメルは、甲板に翼を引きずりながらティータイム中の船員たちに突っ込んでいく場面にしました。機体には暴走を止めようとたくさんの船員がしがみつくも、どんどん振り落とされてしまいます。キャメルのコクピットにいる整備員は、スパナを持ったまま投げ出されそうになっています。間一髪キャメルの衝突を免れた船員たちも、驚いて道具箱を落としてしまいました。
　ティータイム中の船員たちはパニックに陥り、机や椅子をひっくり返し、お茶をぶちまけながら一目散に逃げ出します。気付かず呑気にお茶を啜む船員に必死で逃げるよう促す船員、もはや諦めムードでジャムトーストにかじり付く船員…。
　暴走キャメルを整備していた船員たちは、ある者は顔を覆ってうつむき、ある者は天を仰いで嘆き、コートを羽織った上司と思われる船員は周囲に事の顛末を訊ねています。甲板の艦首側では、たくさんの船員が騒動を心配そうに眺めています。

甲板の演出 2（船乗り猫 Tiddles）

　一方、飛行甲板には全く雰囲気が異なる 1 シーンを入れました。飛行甲板の先端でぽつんと佇む、とても小さな 1 匹の黒猫です。
　この黒猫は「アーガス」船内で誕生した船乗り猫ティドルズ（Tiddles）です。後に空母「ヴィクトリアス」に乗船し、最終的に 3 万マイルも旅をしました。彼のお気に入りの場所は「ヴィクトリアス」艦尾のキャプスタンで、そこで撮られた写真では、頭上の時鐘に 1941 の年号が刻印されています。つまり、ティドルズが生きていたのは 1930 ～ 40 年代と考えられ、「アーガス」の竣工当



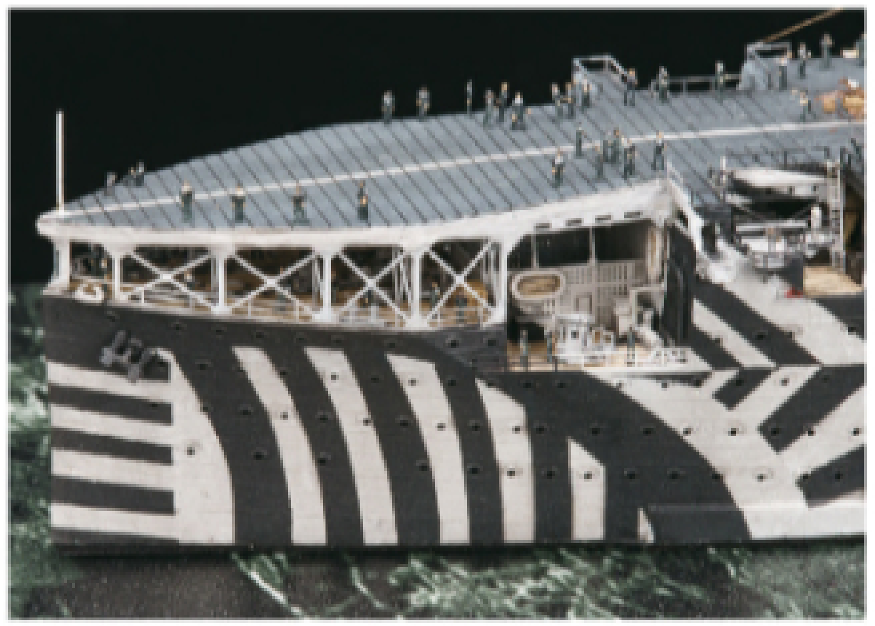




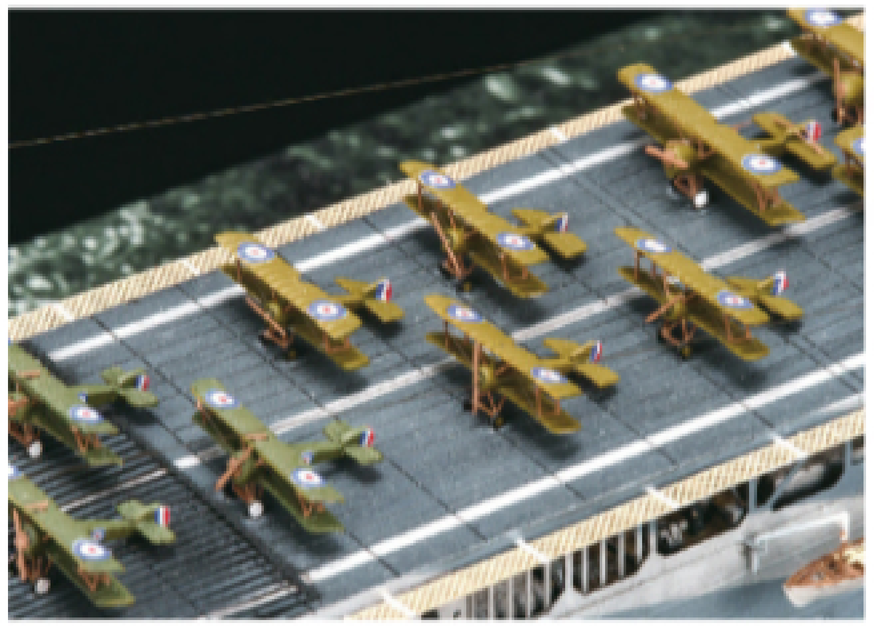
▲暴走する機体を見て、頭を抱えたり、天を仰いだりして嘆く船員たち。



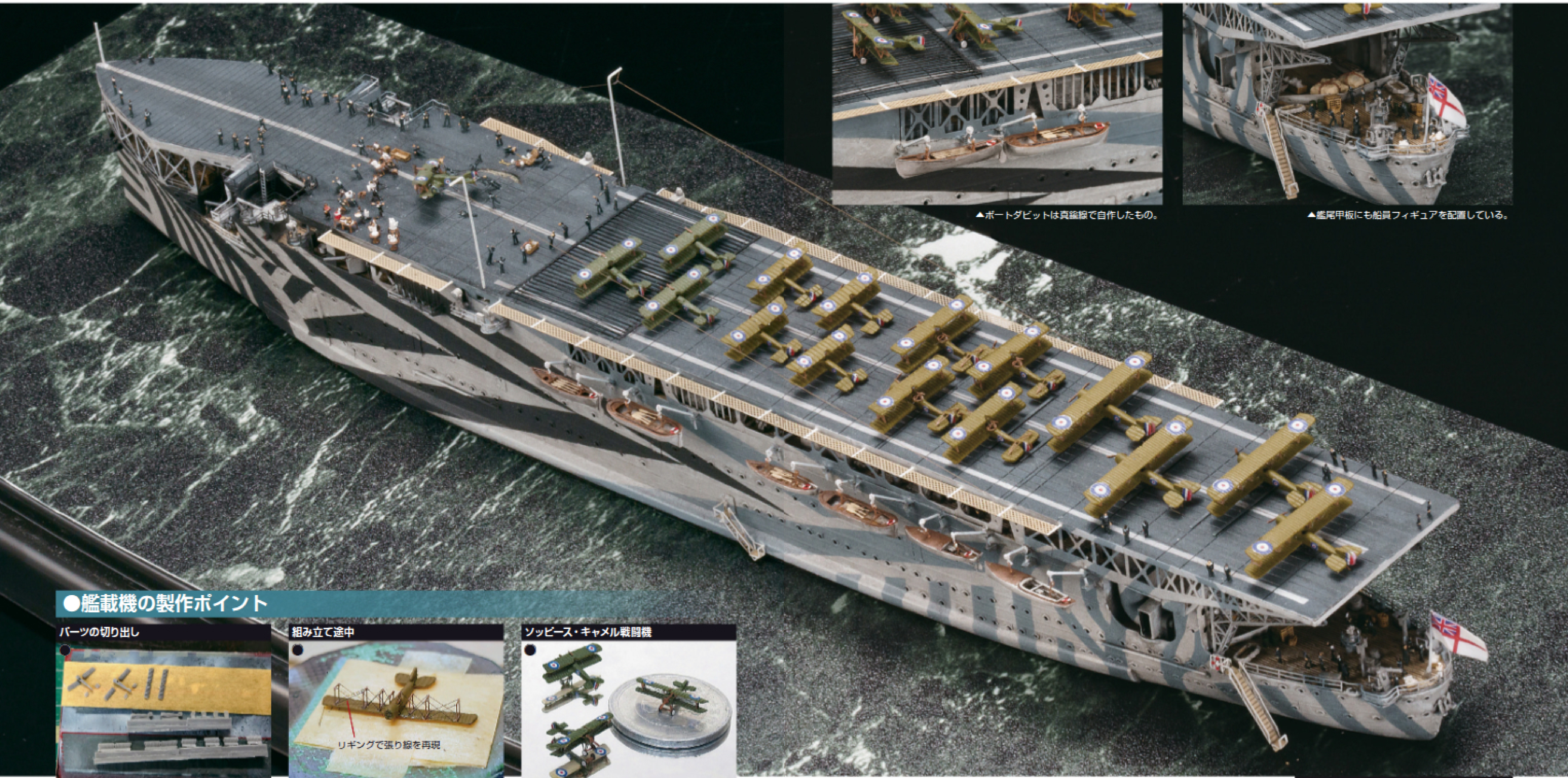
▲暴走機から逃げ惑う船員と艦首付近で異変に気付いた船員。



▲複雑な艦首付近のダズル迷彩はマスキング塗装によるもの。



▲艦載機は 1 機ずつ丹念に仕上げた。翼間の張り線も再現した。



▲ボートダビットは真鍮線で自作したもの。

▲艦尾甲板にも船員フィギュアを配置している。

●艦載機の製作ポイント

パーツの切り出し

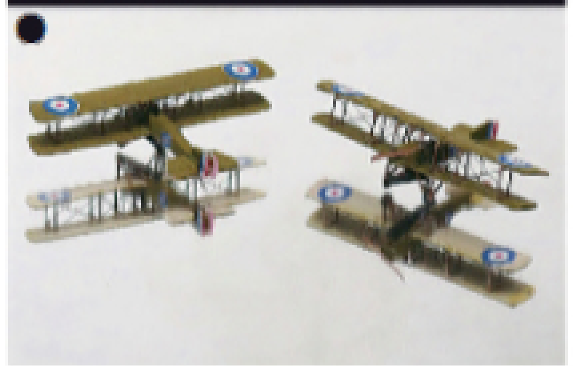
組み立て途中

ソッピース・キャメル戦闘機

ソッピース・パップ戦闘機



ソッピース・クッカー雷撃機



ソッピース・1½ ストラッター爆撃機



①艦載機の製作です。とても折れやすいので慎重にゲートから引き離し、表面のザラザラを削り取って滑らかにします。
②上翼やタイヤを付ける前に塗装を済ませ、艦船用のメタルリギングで張り線を表現します。

③④⑤⑥艦載機が組み上がりました。キットに付属するのはすべてソッピース社の航空機で、キャメル、パップ、クッカー及び 1½ ストラッターの４種４機ずつ、計 16 機を製作しました。

時（1918 年）にはまだ生まれていません。自分の故郷である「アーガス」の産まれたての姿に逢いに、未来から来てくれたのです。

傍で腰掛ける船員に、どんなことを語りかけているのでしょうか。竣工時の素敵な姿に逢えた感激の言葉、または未来の「アーガス」で過ごした子猫時代の思い出でしょうか。それとも、終生まで過ごした「ヴィクトリアス」での長旅の思い出話でしょうか…。

製作を終えて

私にとって「アーガス」は、そのダズル迷彩の妖しさに惹かれ、一時はフルスクラッチを計画するほど造りたい船でした。そんな中、竣工時の「アーガス」のキットが販売されると知った時は、歓喜したものです。レジン特有の歪みや変形、脆く破損しやすいパーツに苦戦しつつも、アイデンティティでもある迷彩塗装がカッチリ決まった時の感動、達成感は忘れられません。甲板上の「ドタバタ」と「しんみり」が同居する演出も相まって、満足感もひとしおです。最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。

船乗り猫ティドルズの物語



▲艦首には船乗り猫のティドルズを乗せた。生きた時代が「アーガス」の設定年時とは異なるが、それもまたひとつの物語である。



飛行甲板に大型飛行艇を満載し引き揚げ中の姿を製作する

■アメリカ海軍護衛空母ボーグ級

大戦中、アメリカ海軍は小型の補助空母を大量に建造した。規格が統一された輸送船の船体を転用したり、ブロック工法と電気溶接を用いることで短期間に建造することに成功、工業力の高さを示した。作例は護衛空母 CVE-90「セティス・ベイ」が前線からカリフォルニア州アラメダ海軍航空基地に修理が必要な機体を運搬中の写真にインスパイアを受けて製作したもの。CVE-90 はカサブランカ級だが、ひとまわり小型のボーグ級護衛空母で代用したフィクションモデルとなった。



タミヤ 1/700
アメリカ海軍護衛空母 CVE-9「ボーグ」
製作・文：酒本 徹
TAMIYA1/700 scale Plastic model kit
U.S. NAVY BOGUE CLASS ESCORT CARRIER
Modeled by Touru SAKAMOTO

今回のミッション

今回の特集は「甲板上に紡ぐ物語・艦船模型を演出する搭載物の魅力に迫る」とのことで、真っ先に思いついたのは空母 CV-8「ホーネット」に B-25 ミッチェル爆撃機を満載にしたドーリットル空襲でした。そちらは 1/350 で作例が掲載されるとのことだったので、別のプランを考えていたところ、編集部から「この写真を再現できないか？」とアメリカ海軍護衛空母の甲板上に PBY カタリナ飛行艇が満載された不思議な写真が送られてきました。

気になって調べてみたところ、カサブランカ級護衛空母 CVE-90「セティス・ベイ」だそうで、1944 年 7 月 8 日、前線より要修理の飛行機をカリフォルニアのアラメダ海軍航空基地に運搬中の写真でした。カサブランカ級護衛空母は S- モデルの 1/700 プラキットが存在するのですが、入手困難のためタミヤの 1/700 ボーグ級護衛空母を似たような設定で代用することになりました。

作例の設定を考える

CVE-90「セティス・ベイ」の横でボーグ級も同じ任務に就いていたというフィクション設定にしました。参考にしたモノクロ写真では、ひどく退色しているのか光線の具合なのか、主翼上面が他の機体よりも明るく見える機体が搭載されています。せっかくのフィクション設定なので、TBD デバステーター雷撃機はカラフルなイエローウイングのまま倉庫にひっそり隠れていた…ということにして飛行甲板上に載せました。

カサブランカ級の飛行甲板長 144m に対してボーグ級は 137m とわずかに短いので、写真の雰囲気を重視しながら運搬する艦載機を選んでいきます。

ボーグ級護衛空母

アメリカ海軍は潜水艦の攻撃から商船を守るため、船団護衛用の小型空母を大量に建造しました。C-3 型貨物船の船体を流用して飛行甲板とエレベーターを装備、艦載機 24 機を搭載可能な本格的な護衛空母としてボーグ級を量産しています。短い飛行甲板ですが、強力な油圧式カタパルトを装備することで、艦載機の発着艦を可能にしました。

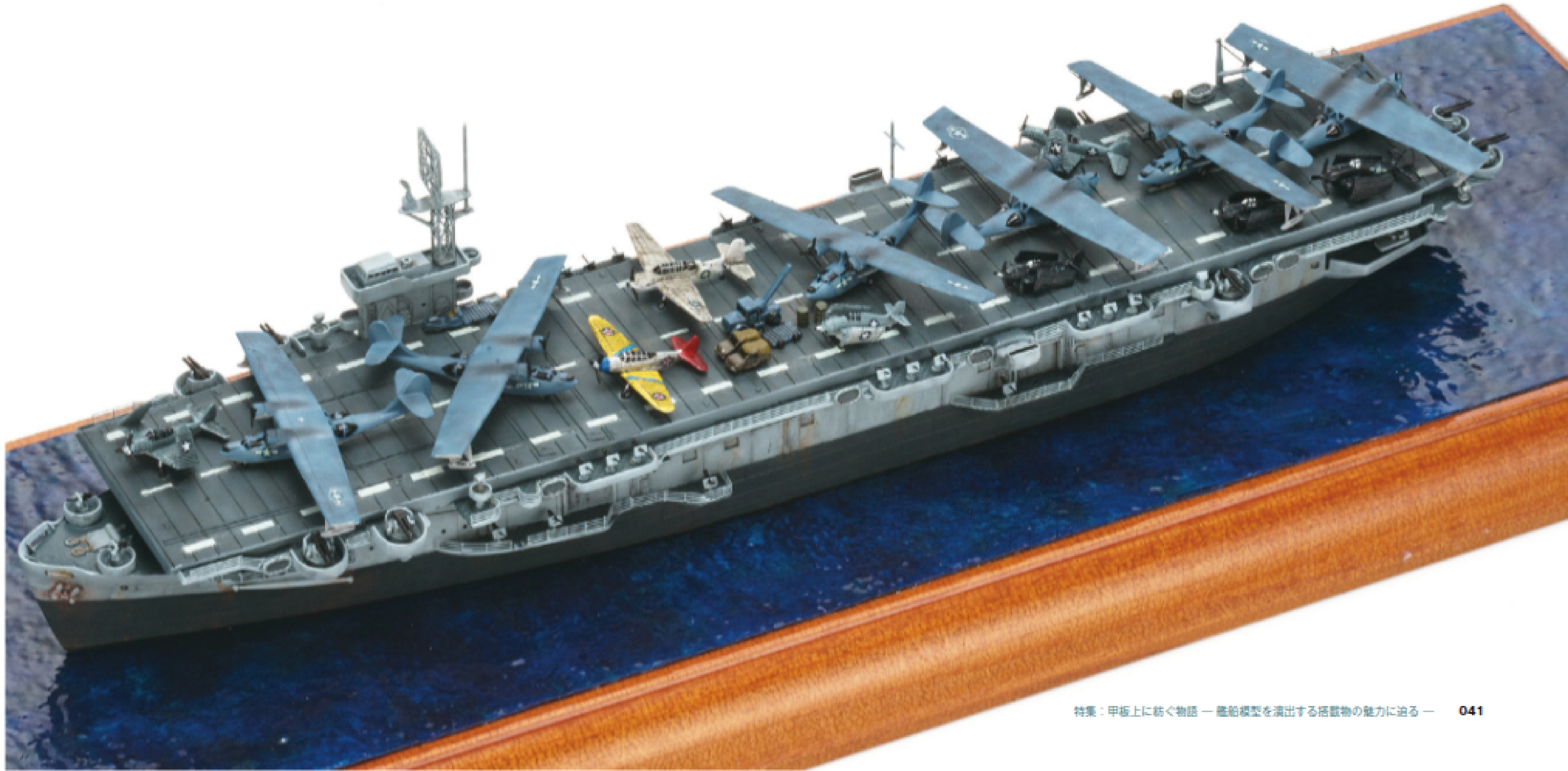
日本海軍の商船改造空母はボーグ級よりも大きいにも関わらず、発着艦に苦労して飛行機の運搬任務に終始しており、その点からも国力の違いを感じます。大西洋でドイツ潜水艦 U ボートを完全に制圧したのもボーグ級を中心としたハンターキラーの成果によるものです。

キットについて

1/700 ウォーターラインシリーズにラ



▲作例の元ネタにしたアメリカ海軍カサブランカ級護衛空母 CVE-90「セティス・ベイ」の写真。前線から旧くなった機体を NAS アラメダに運搬中のひとコマ（1944 年 7 月 8 日撮影）



インナップされているボーグ級護衛空母は、元々ピットロードが開発・発売していたキットが基になっています。1993年に金型がタミヤに移り、新たにタミヤが開発した武装パーツと艦載機を加えたもので、1/700WLシリーズでは珍しい経緯を持つキットになります。

キット製作

船体は艦首と艦尾にヒケが目立ちますので、タミヤパテで埋めて修整、平坦に整形します。艦首のブルワークにはムアリングホールが再現されてないので、ドリルで穴を開けました。

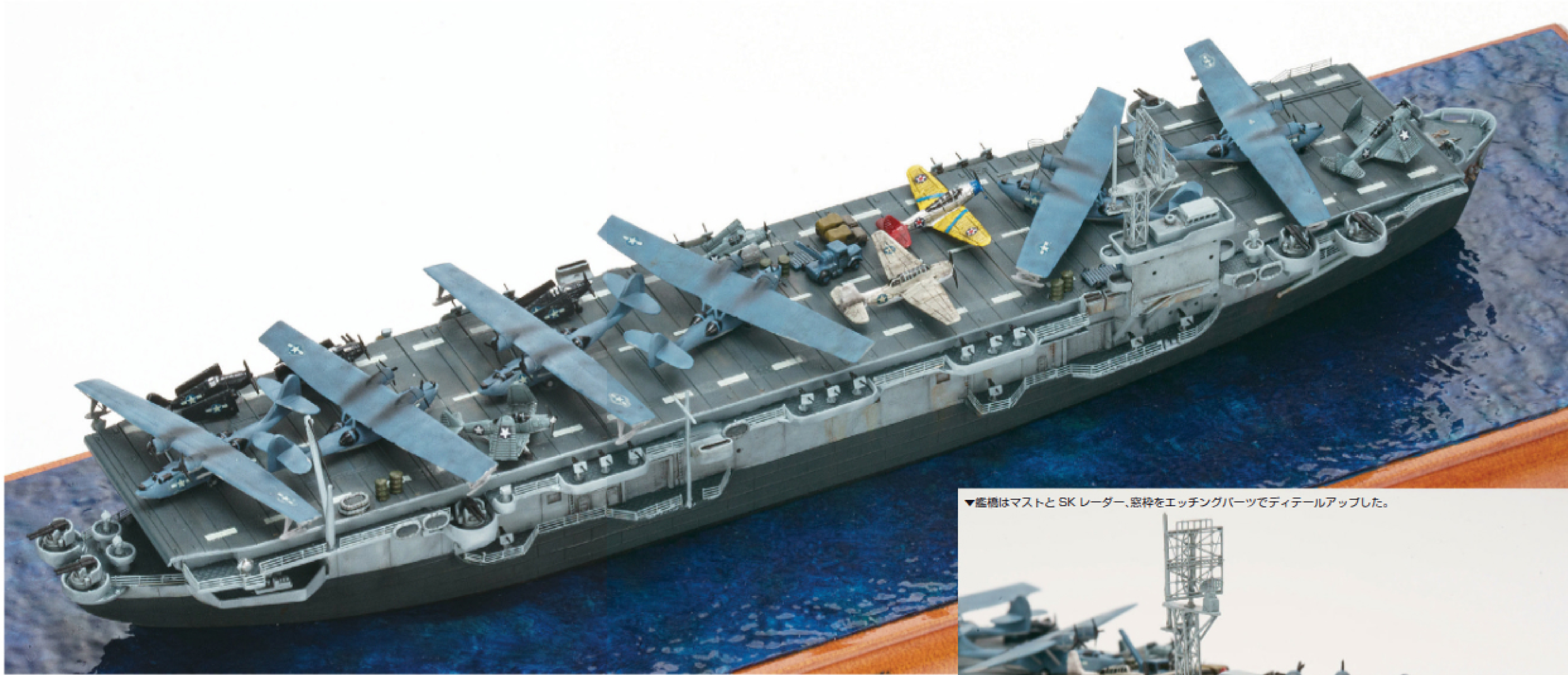
船体と格納庫側壁部のパーツはピタリとは収まりません。アメリカ海軍空母の特徴である舷側の絶壁感をしっかりと再現するため、格納庫部のモールドを取り払ってパテと#600のヤスリで面出しを行いました。

舷窓のモールドは大きすぎ、実物とかけ離れているのでパテ埋めし、改めて0.6㎜径のドリルで開け直しています。

船体はあっさりとしているので、外板表現を加えました。厚みがあってガイドに使えるタミヤの曲線用マスキングテープやハイキューパーツのスジボリ用ガイドテープを等間隔と平行に注意しながら貼り込み、カッターナイフでスジを入れて外板の繋ぎ目を再現しました。航空機燃料パイプの配管は0.4㎜径のプラ丸棒で追加しています。

艦橋窓枠、手摺り、SKレーダーは手持ちのエッチングパーツを使用してディテールアップ、艦橋上部の四脚マストは、ほぼ同じサイズの戦艦「比叡」用エッチングパーツのトラスを加工して代用しました。

武装はエリコン20㎜単装機関砲のみファインモールドの1/700ナノ・ドレッドシリーズWA19『20㎜単装＆1.1インチ四連装機関砲』のパーツを使用。キット付属の機関砲パーツも防弾板が凹形状に再現されて素晴らしいのですが、若干オーバースケール。小型空母にはナノ・ドレッドのサイズ感がしっくりと収まります。



▼艦橋はマストとSKレーダー、窓枠をエッチングパーツでディテールアップした。



●船体・上部構造物の製作

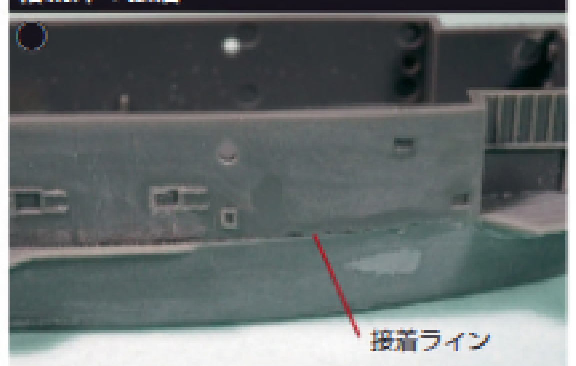
ムアリングホールの再現



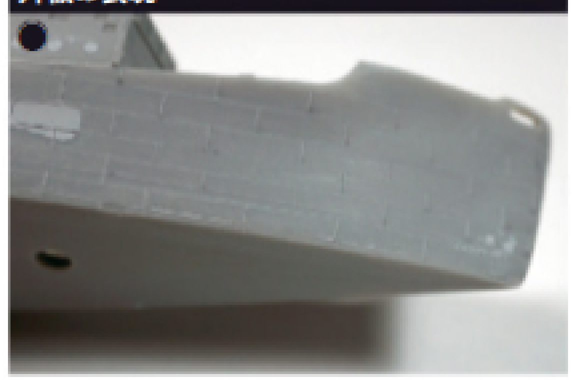
船体のヒケ処理



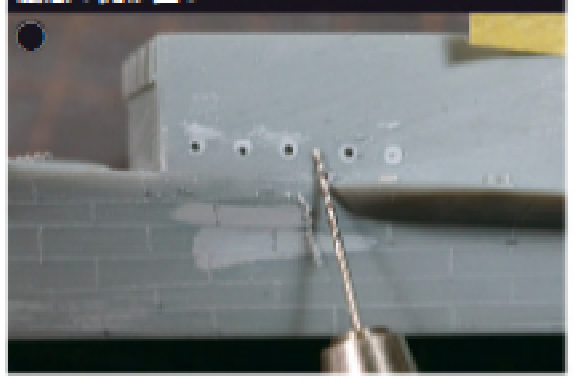
格納庫の接着



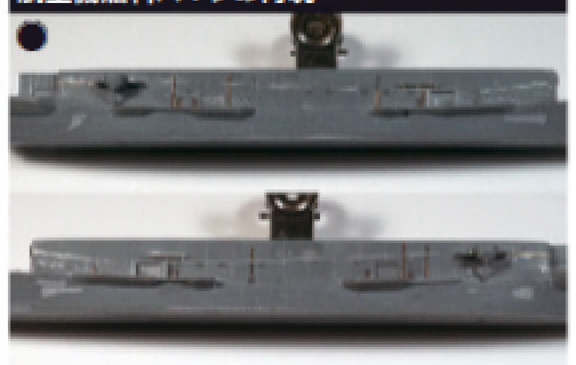
外板の表現



舷窓の開け直し



航空機燃料パイプの再現



①キットでは省略されている艦首ムアリングホールを再現する。ドリルで開口した後、デザインナイフ等で形状を整える。
②船体には大きなヒケが散見される。吃水板の接着ラインと併せて、丁寧にパテ埋め処理しておく。
③別パーツとなっている船体上部の格納庫部分は擦り合わせてなるべく隙間や段差が生じないように接着する。それでも生じる隙間はパテ埋め整形する。
④船体側面にはモールドが無いので、カッター刃で外板の継ぎ目を再現した。ガイドテープを貼ってからスジ彫りすることで均等なラインにしている。
⑤舷窓のモールドは大きすぎるのでパテ埋めし、0.6㎜径のドリルで改めて開口した。
⑥航空機燃料パイプの配管は0.4㎜径のプラ丸棒を這わせて再現した。配管が曲がっている箇所は細切れにして対処している。

●艦橋の製作

ディテールアップ



マスト支柱



マストの比較



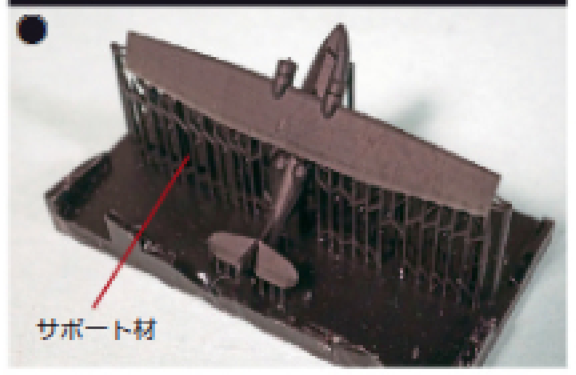
①水密扉はモールドを削り落とし、エッチングパーツに置き換えた。舷窓は船体と同様、凹モールドを埋めて0.6㎜径のドリルで開口した。
②マストのトラス部分はハセガワの戦艦「比叡」用のエッチングパーツから流用した。キットのサイズに合わせて高さを調節している。
③SKレーダーは汎用エッチングパーツ。プラットホームと斜め支柱はプラ材、後部のマストは金属線で再現している。



U.S.NAVY Escort carrier
BOUGUE CLASS

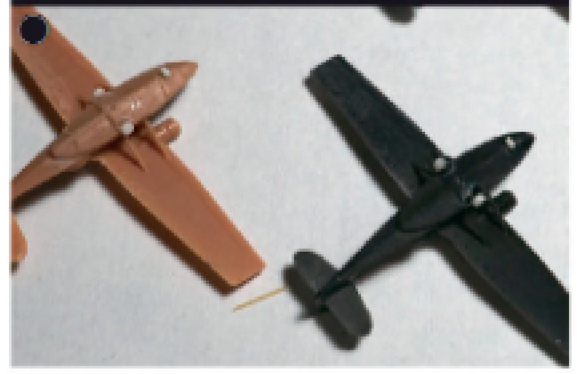
● PBY-5 カタリナの製作

3D プリントキット



①カタリナはファイブスターモデルの 3D プリントキット（2 機セット）を使用した。まずは枝状のサポートから丁寧に切り出す。

タイヤの追加工作

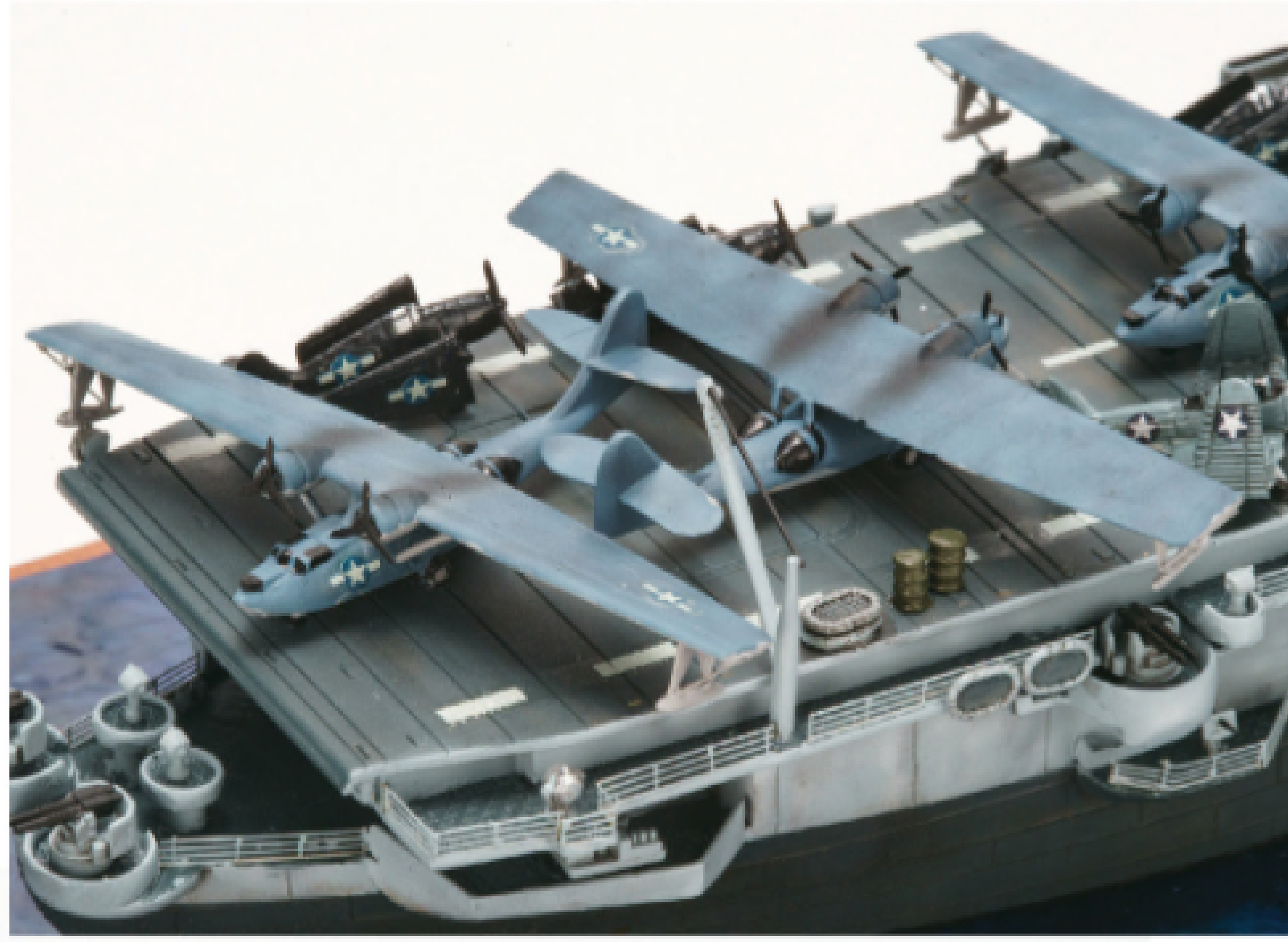


②前・主脚のタイヤは省略されているので、小径のプラ丸棒を薄くスライスしたもので自作した。

塗装



③エアブラシで基本塗装後、退色表現や排気煤の表現を加えた。1/700 といえどもカタリナは大きな機体なので手抜かりなく仕上げる。



▲完成した PBY-5 カタリナ。ボーグ級護衛空母の飛行甲板に対して明らかに大きすぎて主翼端がはみ出すためか斜めに駐機させている。作例もまずはカタリナを配置してから隙間を他の機体で埋めた。

塗　装

塗装はメジャー 22 迷彩で、船体は GSI クレオス Mr. カラーの C14 ネイビーブルー、上部は C308 グレー FS36375、甲板はビットロードカラー PC13 デッキブルー（絶版・Mr. カラー SC10 デッキブルー 20-8 が近似色）に C1 ホワイトを入れて若干明度を下げた色を使用しました。

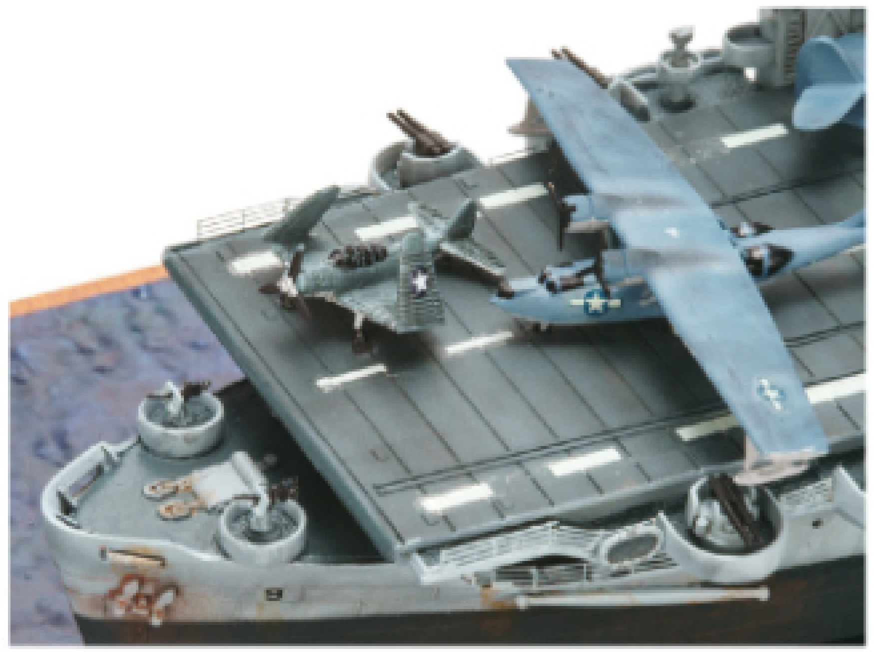
塗装手順ですが、船体と甲板は別々で塗っていきます。船体はネイビーブルーからグレー、喫水線のブラックとマスキングをしながら進めます。

飛行甲板は塗装の剥がれを再現します。木の色として Mr. カラー C19 サンディブラウンを使います。細吹きできる 0.18㎜口径のエアブラシに替えて、C72 ミディアムブルー、調色したデッキブルーとそのままのデッキブルーを数回に分け、甲板に対して横方向に細吹きしました。さらに飛行甲板の後ろからマスキング紙を被せ、少しずつ移動させながら前方を隠すように細吹きして、C19 サンディブラウンがほんの少し横方向に残るようにしました。

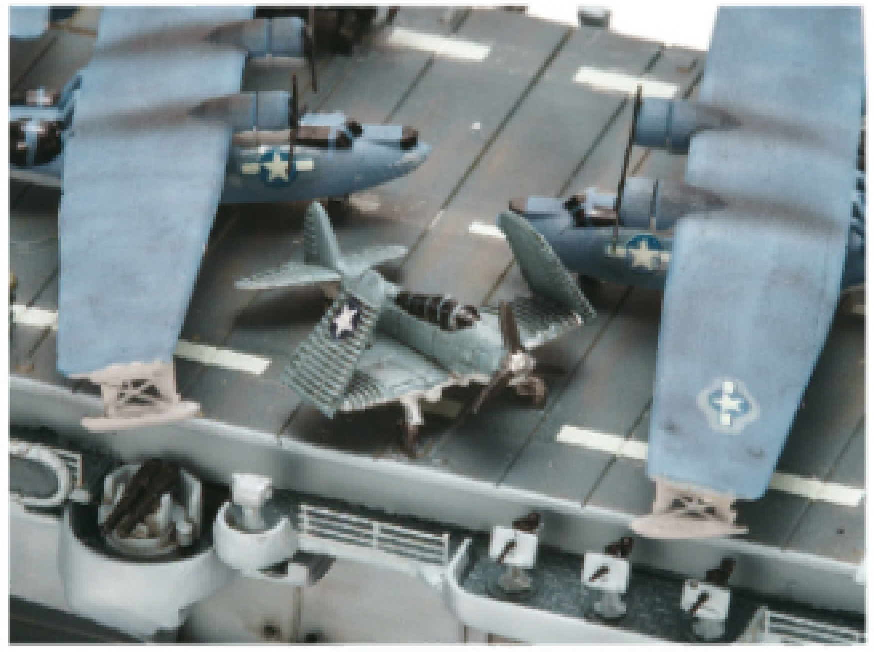
飛行甲板の白線はキット付属のデカールで











▲ PBY-5 カタリナの翼の影に隠れるように搭載されている航空機たち。中でも第二次大戦前に見られた塗色であるイエローウィングに塗られた TBD デバステーターは完全にフィクションながら良いアクセントになっている。車両は自衛隊車両を改造したものだが、このサイズならば米軍車両にも見えるだろう。

再現できますが、シルバリングが発生しやすいようです。マークソフターやマークセッターをうまく活用し、シルバリングが発生してしまった箇所はカッター等の刃先で突っついてソフターを下地まで浸透するように塗り込み、馴染んだら綿棒で密着させる方法で対処しました。

甲板上の飛行機

PBY カタリナ飛行艇はファイブスターモデルの 3D プリントモデル（レジン製）です。慎重にサポートから切り出したらフィニッシャーズのプライマー入りサーフェイサーで下塗りしておきます。タイヤはプラ丸棒の輪切りで前・主脚を追加しています。機体は C72 ミディアムブルーで基本塗装、0.18㎜口径エアブラシの細吹きで排気汚れ、退色表現を加えています。

TBD デバステーター雷撃機と F4F ワイルドキャット艦上戦闘機はフライホークの『第二次世界大戦アメリカ海軍艦載機セットⅠ』から。主翼は展張・折りたたみ状態それぞれのパーツが入っていて、特に折りたたみ状態は重宝します。

TBF アベンジャー雷撃機と F6F ヘルキャット艦上戦闘機はピットロードの『WWⅡアメリカ海軍機セット 3』から。

グロッシーブルー、ガルグレー、ミディアムブルー、ブルーグレー、イエローと 5 色の故障機で飛行甲板を彩りました。

搭載車両はタミヤ 1/700『海上自衛隊輸送艦しもきた（LST-4002）』に付属の自衛隊車両（73 式小型トラック）を加工したもので、後部の幌を削り込んでウイリス MB ジープに似せました。

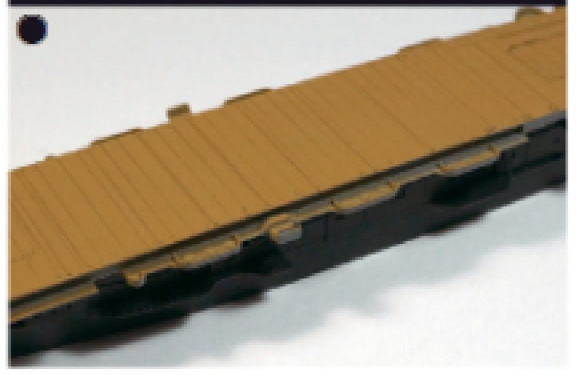
完　成

実艦写真の雰囲気を重視し、PBY カタリナを中心に配置、その他の飛行機も隙間に配置して完成となります。通常アメリカ海軍の空母といえばデッキブルーの飛行甲板上には同系色の艦載機が搭載されていますが、今回はフィクションということで色々な色と形の飛行機を載せることができ、特にイエローウイングの TBD デバステーターは良いアクセントになりました。普段とは違う雰囲気となって楽しい製作でした。

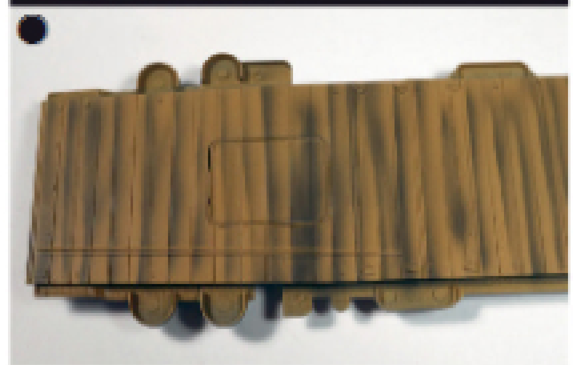
今回初めてフライホークの艦載機セットを使いましたが、細かなディテールに度肝を抜かれました。いつかこのセットを使ってカラフルなイエローウイングの艦載機が満載のアメリカ海軍空母を作りたくなりますね。

●飛行甲板の塗装

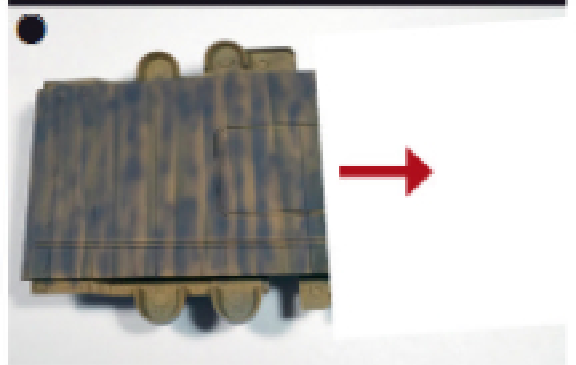
基本塗装



デッキブルーの塗装



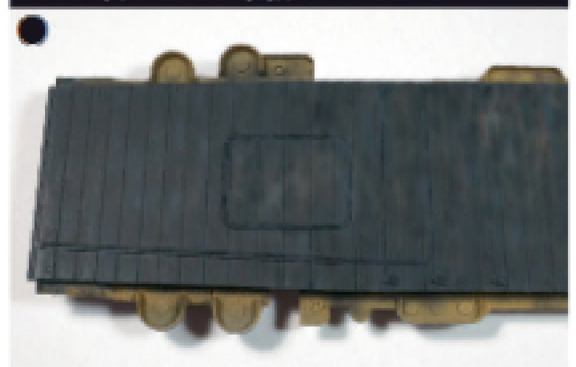
デッキブルーの塗り重ね



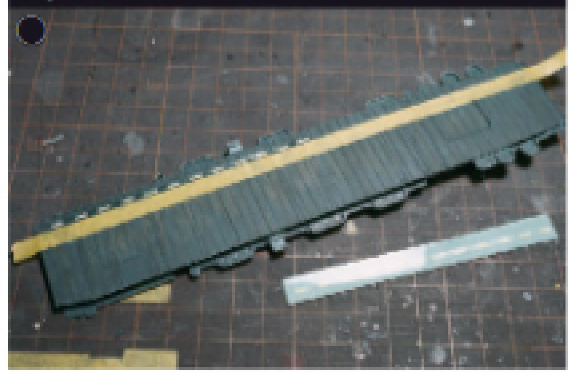
数回塗り重ねた状態



塗装を終えた飛行甲板



白線デカール



①飛行甲板はまずは Mr. カラー C19 サンディブラウンで基本塗装する。
② C72 ミディアムブルー、濃度を変えたデッキブルー 2 種を用意し、甲板に対して横方向に細吹きしていく。
③紙をあてがいながらマスキングし、少しずつスライドさせながら細吹きを重ねていく。
④ 0.18㎜口径のエアブラシを使えば細吹きしやすい。細吹きすることでスケール感が出せる。
⑤最終的に基本塗装の C19 サンディブラウンはほんのわずかに残るようにデッキブルーで塗りつぶした。退色した雰囲気になる。
⑥飛行甲板の白線はキット付属のデカールで再現。マスキングテープをガイドに歪まないように貼り付けた。シルバリングしやすいのでマークソフターやマークセッターで密着させています。





トラック諸島やラバウル方面へ陸軍機輸送任務に従事

■日本海軍航空母艦「冲鷹」

日本郵船の貨客船「新田丸」を日本海軍が徴用し運送船として使用後、昭和17（1942）年８月より改装工事に着手。同年11月に空母「冲鷹」として完成した。竣工後は航空機輸送任務に従事し、九九式双発軽爆撃機や三式戦闘機「飛燕」等の陸軍機をトラック諸島やラバウル方面に輸送した。作例はアオシマ1/700キットを製作。ピットロードの1/700日本陸軍機セットを組み合わせて、海軍空母に陸軍機が搭載されている場面を再現した。



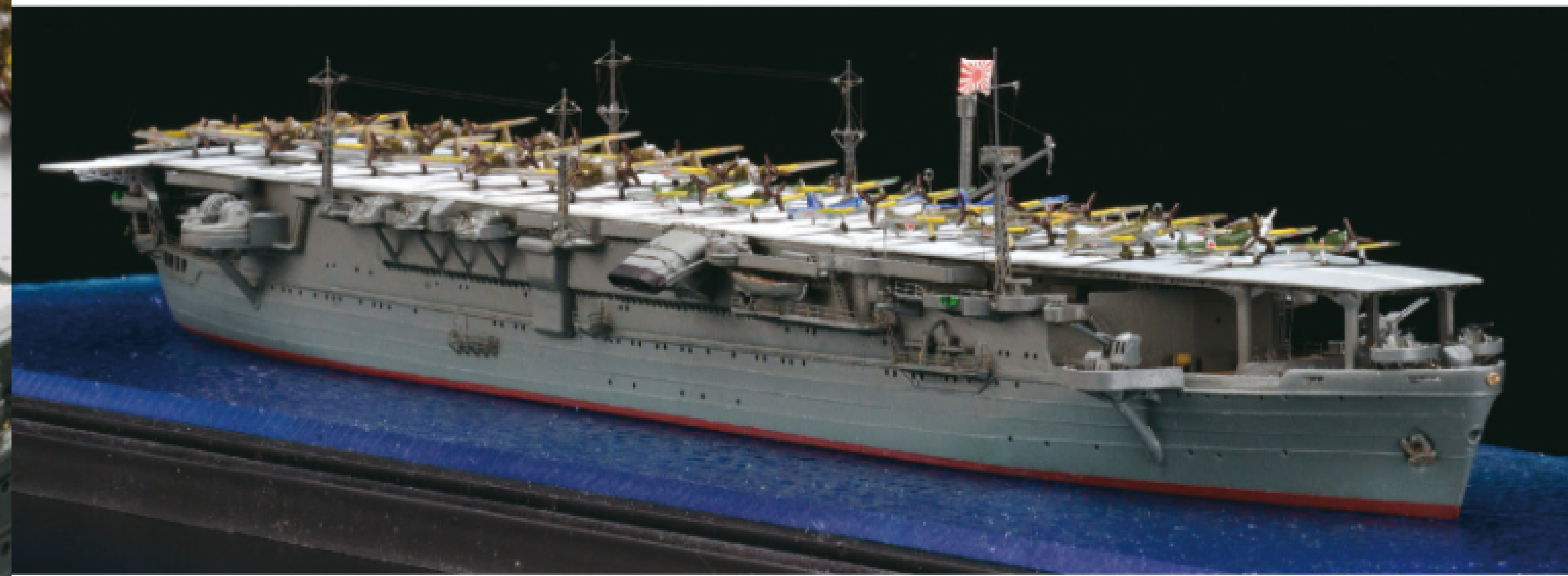
アオシマ 1/700
日本海軍航空母艦「冲鷹」
製作・文：打木進太郎
AOSHIMA1/700 scale Plastic model kit
JAPANESE NAVY AIRCRAFT CARRIER "CHUYO"
Modeled by Shintaro UCHIKI

はじめに

今回製作したのは、軍縮条約によってもたらされた空母の数的劣勢を挽回するために、民間の優秀船を転用した商船改造空母・大鷹型３姉妹の「冲鷹」である。

戦前、日本郵船が欧州航路に投入するために「大型客船建造助成施設」（海軍による空母改造用の大型優秀船建造の助成制度）によって建造した新田丸型貨客船の１番船「新田丸」は、大戦の影響で欧州航路が閉ざされたため、米国と結ぶ太平洋航路に就航したが､開戦とともに大鷹型空母の３番艦「冲鷹」として戦列に加わった。

当初海軍は艦隊決戦の補助兵力として使うことを想定していたが、小型低速の大鷹型は艦隊型空母としての運用に無理があり、結局３隻とももっぱら航空機輸送任務に使用されることとなった。３姉妹の中で最も充実した対空兵装を備えた「冲鷹」であったが、昭和18年末、輸送任務を終えての帰投中に米潜の雷撃によってその生涯を閉じてしまった。ちなみに他の姉妹たちも、翌19年船団護衛任務中に、米潜によって相次いで沈められている。



キットについて

今回製作したのは、アオシマが1982年にリリースしたキットである。本キットは、姉妹艦の「大鷹」「雲鷹」、それに改造前の貨客船「新田丸」「八幡丸」「春日丸」と同時に発売され、地味な商船改造空母の発売など夢想もしていなかったファンをして、大いに驚かせたものであった。キット自体は、1/700ウォーターラインシリーズ初期テイストいっぱいのもので、今日のキットを見慣れたファンにはかなり手強いものである。このキットが開発された当時、おそらくまともな資料も揃わず、設計者も相当苦労されたのではないかと想像できる。

そのような状況下､『艦スペ』18号（2005年発刊／絶版）において、畑中省吾氏が大鷹型３隻の見事な作り分けを発表されており、その製作記事は今回の作例においても大いに参考になった。掲載された艦型図と併せて、本クラスの模型製作における最高の資料と言えよう。「修正点の塊」のようなこのキットに手を加えて、可能な限り納得のいく姿に仕上げてこそ、真のファンというものではないか？と自分に言い聞かせながら、なんとか完成させたのが今回の「冲鷹」である。どうか優しい目でご覧いただきたい。

また、前述のように、陸軍機の輸送中という状況を再現するため、甲板上にはピットロードから発売されている『日本陸軍機セット』（１～３）からチョイスした機体を使用している。繊細なモールドでプロポーションの良い機体が多数含まれた、おすすめのセットである。

その他お馴染みのファインモールドのナノ・ドレッドシリーズの他、ピットロードの『新WWⅡ日本海軍艦船装備セット６』（NE06）を適宜使用した。

船体全般

①キットは貨客船｢新田丸｣と共通の船体パーツに空母の格納庫部分を取り付ける仕様で、一体成形の船体の下部に船底板をはめ込む形式である。船体は商船船型を強く意識したのか､後部の喫水ラインが太過ぎるようなので､喫水板を接着後､ヤスリで大幅に削り込んだ。船体のプラが厚いので特に裏打ちはしなかったが、不安な場合はあらかじめパテを充填し


▲陸軍機で埋め尽くされた飛行甲板。「大鷹」より拡大されたとはいえ、長さ172m、幅23.7mの飛行甲板は、制式の空母として運用するにはいささか狭すぎ、最大で21ノットの低速も災いし、結局大鷹型３隻は飛行機運搬艦として裏方を務めることとなった。甲板上の機体は、前から二式単戦「鍾馗」、九七式司令部偵察機、三式戦「飛燕」、九九式軍偵察機、一式戦「隼」、九九式双発軽爆、百式司令部偵察機である。

●空母「冲鷹」の製作ポイント

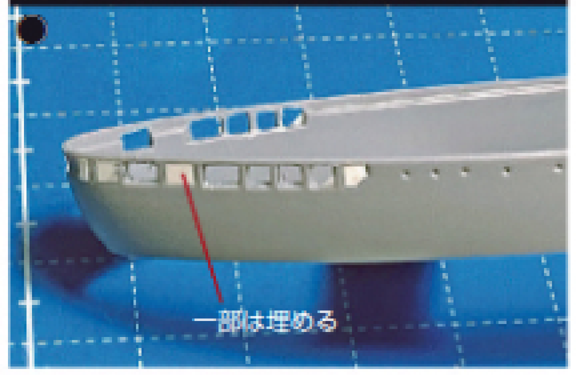
艦首甲板の装備品



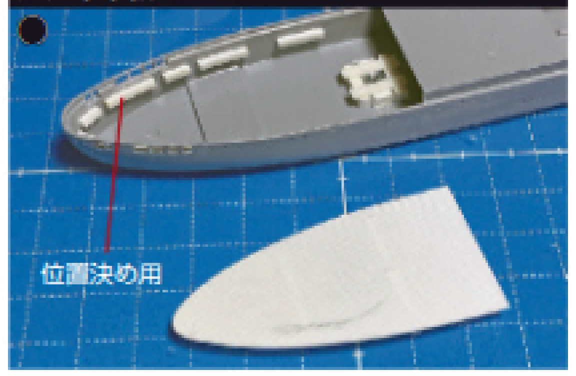
艦橋の自作



艦尾の船窓



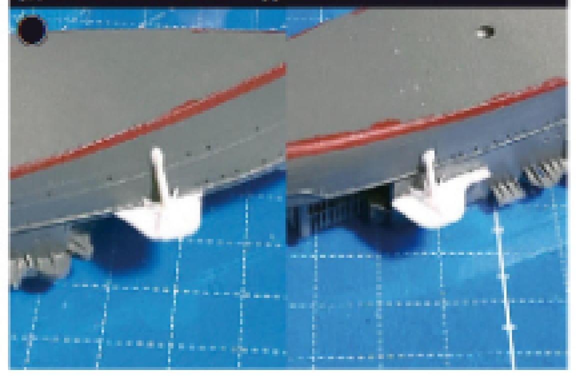
艦尾中甲板



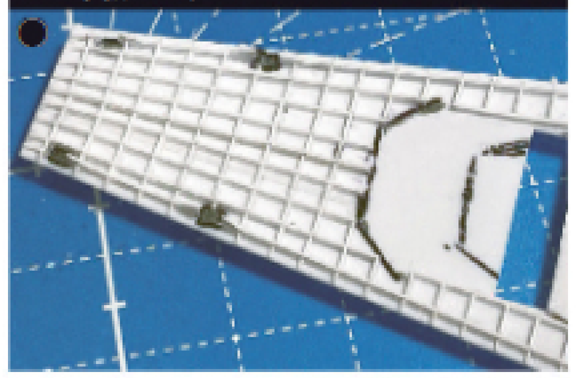
船尾の形状変更



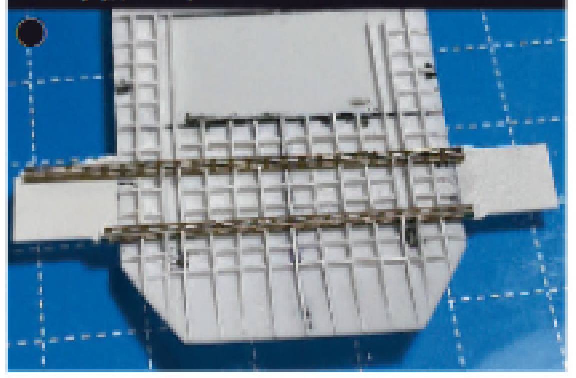
機銃スポンソンの自作



飛行甲板（前部）



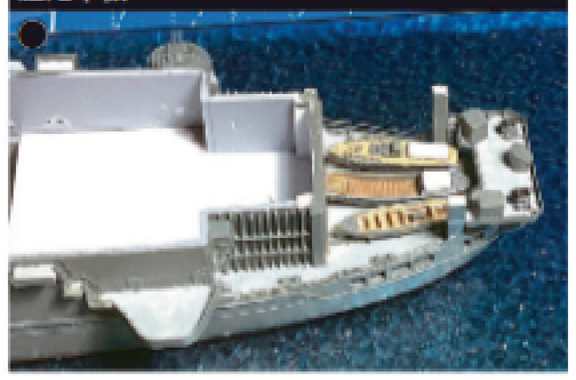
飛行甲板（後部）



艦首甲板



艦尾甲板



①艦首甲板の装備品。揚錨機は軍艦堂の 3D プリントパーツ、ボラード、フェアリーダー、波除け等はキットのモールドを削り落としてからプラ材等で作り直した。
②艦橋まわりは形状が異なるのでプラ板で作り直した。錨鎖甲板の後方デッキは木甲板説を採用。
③艦尾の客船時代の船窓は一部をプラ材で埋め、また一部は開口した。
④艦尾中甲板をプラ板で再現した。船体パーツにプラ角棒を接着し、高さを合わせている。
⑤船体後部の喫水線付近は太すぎるので、吃水板パーツを接着後に大幅に削り込んだ。
⑥機銃座のスポンソンをプラ材で自作。
⑦飛行甲板は 0.5㎜厚のプラ板で作り直した。裏側のガーダー、ビームも再現している。
⑧着艦標識は適当なエッチングパーツで再現した。
⑨艦首甲板。艦橋内部には双眼鏡等の装備品を取り付けてある。
⑩艦尾甲板に搭載されている短艇類。飛行甲板の取り付け前に塗装まで済ませておく。



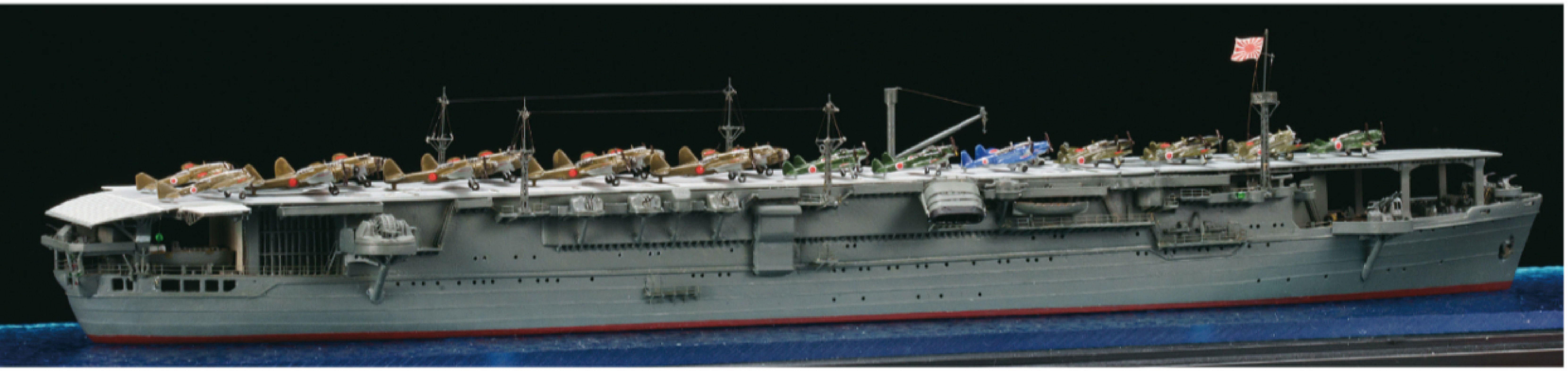


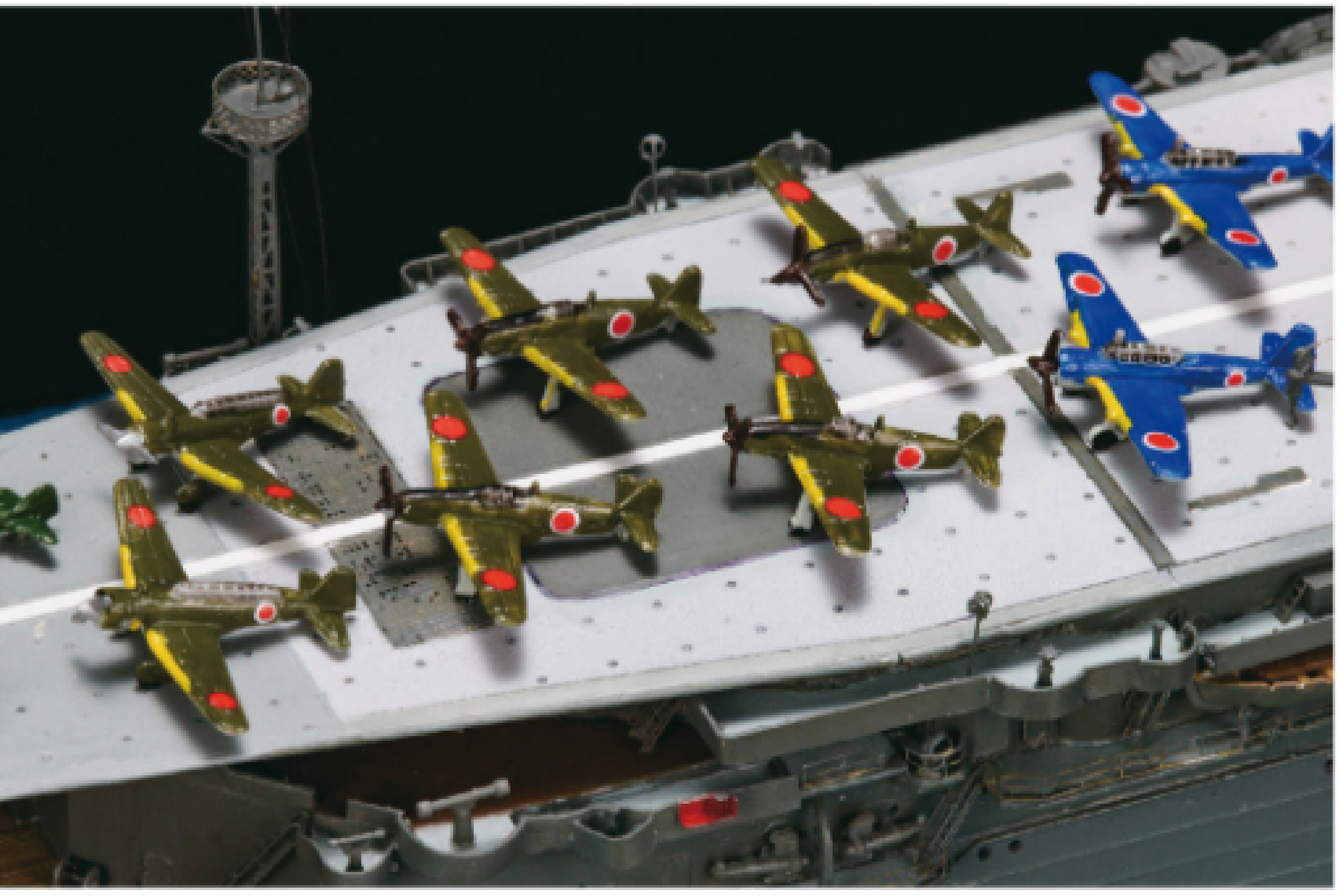
▼艦首甲板はキットパーツのモールドをすべて削り落とし、全面的に作り直した。飛行甲板前部の緑色の機体は、高速重武装の二式単座戦闘機「鍾馗」だが、実際に「冲鷹」が南方に運んだかは、不明である。



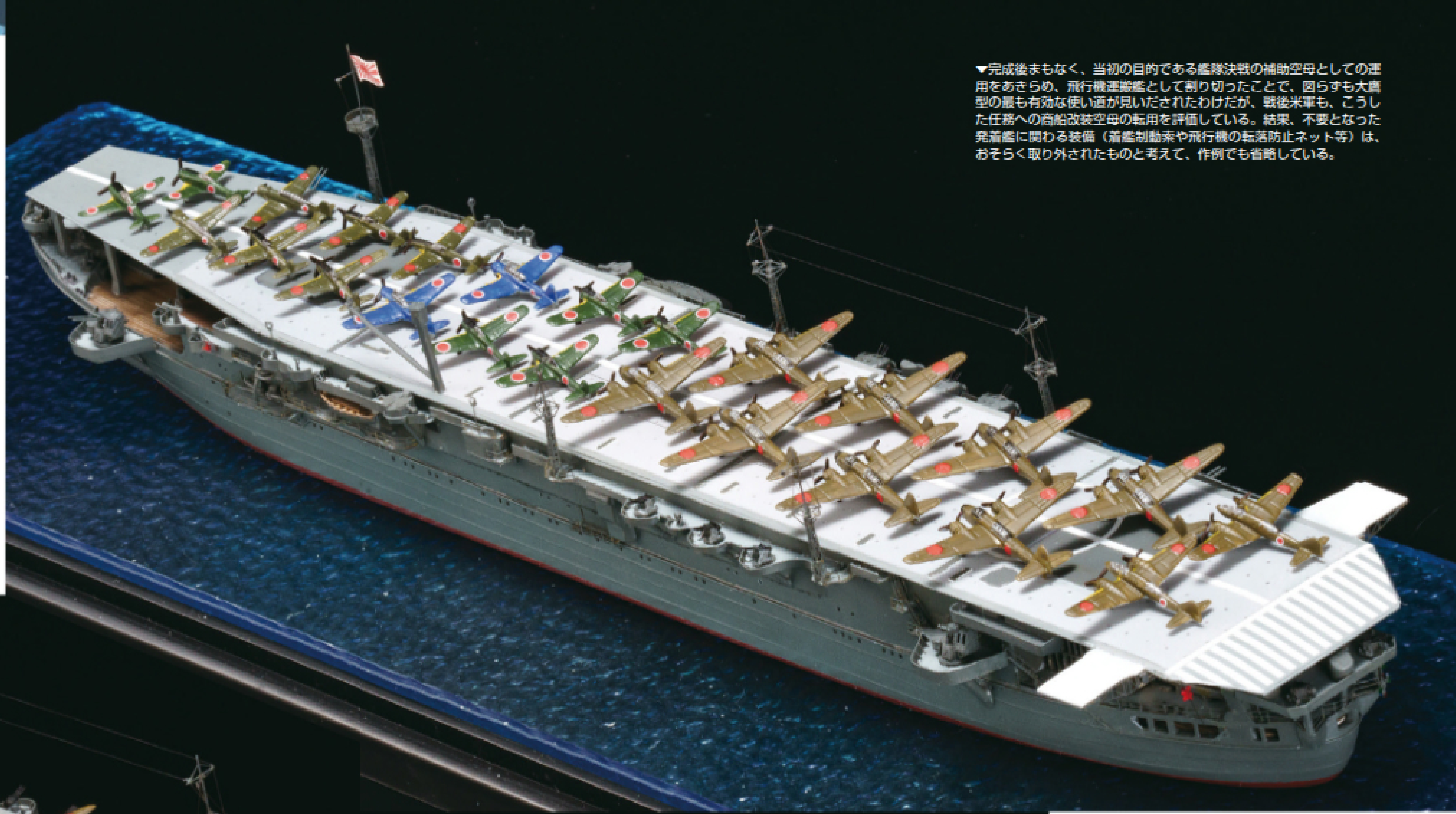
▼後部機銃座をはじめ、艦尾まわりもできるだけ作り込んだ。格納庫後端の昇降機部分にある補強リブも、細切りのプラペーパーで再現している。左右に張り出した着艦標識の支えは適当なジャンクのエッチングパーツを流用した。

ておくと良いだろう。
②格納庫壁パーツは垂直になるように注意しながら船体に取り付けるが、完成後の印象に影響するので、接着部をよく擦り合わせておくことが重要である。左右の格納庫側壁には、貨客船時代のプロムナードデッキの名残である張り出しがあったが、キットではまったく省略されているので、側壁上のモールドをすべて削り落としてから、1㎜厚のプラ板を幅8㎜、長さ 98㎜に切り出したものを格納庫上部に貼り付けて再現した。削り落とした給気ダクト等はプラ材で新たに作り付けた。
③格納庫前端の艦橋部のパーツ構成は実際の構造とはまったく異なるので、すべてプラ材で作り替えた。艦橋の窓枠には汎用のエッチングパーツを使用し、双眼鏡はナノ・ドレッドの WA43『艦艇用双眼鏡・測距儀セット』、海図台や羅針儀は適当なプラ材で作り付けた。艦橋脇の張り出し部は 0.25㎜厚のプラペーパーで作り直した。
④艦首甲板のウィンドラス（揚錨機）のモールドは削り取り、軍艦堂の 3D プリントパーツを、少し後方に位置を修正して取り付けた。錨鎖はピットロードの『日本海軍艦船装備セット 3』（E03）に含まれるもので再現した。その他、艦首甲板上のボラードやフェアリーダー、波除け等は、キットのモールドをすべて削り落としてからプラ材で新たに作り付けた。波除け後方の甲板は木甲板説を採用し、スジ彫りをしてから木板らしく塗装で再現した。円形の艦首機銃座はジャンクパーツから適当なものを流用し、下部の補強材や支柱をプラ材で再現して取り付けた。
⑤艦首甲板を囲うファッションプレートはキットのモールドの縁を薄く削り、内側にプラペーパーで補強板を再現した。艦首前端にはナノ・ドレッド『アンカー・菊花紋章セット』（WA12）の御紋章（小）を取り付けた。御紋章パーツは裏側を耐水ペーパーで削って薄くし、取り付け部の曲面に合うように少し





▲左手の九七司偵は、高速を誇った往年の名機であるが、作例の設定年時の昭和 18 年にはすでに旧式化していた。また、軍用機にしては鮮やかな青色塗装の九九軍偵は、大陸戦線でも偵察に陸上攻撃にと活躍した機体である。



▼完成後まもなく、当初の目的である艦隊決戦の補助空母としての運用をあきらめ、飛行機運搬艦として割り切ったことで、図らずも大鷹型の最も有効な使い道が見いだされたわけだが、戦後米軍も、こうした任務への商船改装空母の転用を評価している。結果、不要となった発着艦に関わる装備（着艦制動索や飛行機の転落防止ネット等）は、おそらく取り外されたものと考えて、作例でも省略している。



JAPANESE NAVY AIRCRAFT CARRIER CHUYO

曲げてから接着した。

⑥艦首両舷に畑中氏の艦型図を参考にして、彫刻刀で六角形のアンカーレセスを彫り込み、その中程にベルマウスを 0.8㎜径のドリルで開口した。ジャンクパーツから適当なサイズのアンカーを探し、0.5㎜角のプラ棒でシャンクを作り付け、ベルマウスの穴に差し込み接着した。

⑦舷外消磁電路を 0.3㎜角のプラ棒で再現した。その取り回しは箱絵を参考にした。

⑧艦尾甲板の下にモールドされた貨客船時代の窓は各舷６つを残してパテ埋めし、残した窓をくり抜き、内側の甲板（中甲板）をプラ板で再現した。また、中甲板に設置された洗濯機室もプラ材でそれらしく作り付けた。

⑨艦尾甲板に配置される短艇類（12m 内火艇、12m 内火ランチ、13m 運荷船・中発×各 1）は塗装を済ませ、所定の位置に接着した。

⑩艦尾機銃座支柱が載る艦尾の張り出しをプラ材で作り付けた。

張り出し甲板

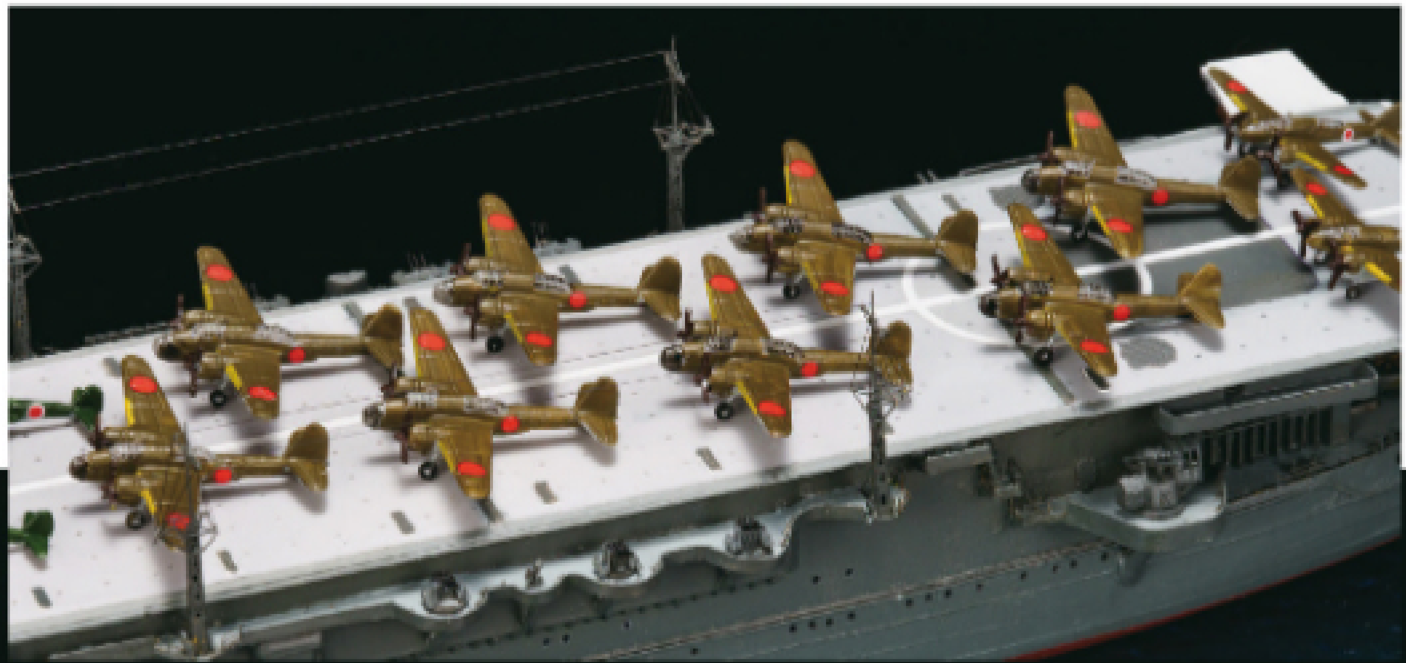
①高角砲座や機銃座等は 0.3㎜厚のプラ板で新たに作り付け、プラペーパーの細切りでそれぞれのブルワークを再現した。各支柱は適当な太さのプラ棒を現場合わせで取り付け、

三角形の補強板もプラペーパーで再現した。
② 94 式高射装置は、ヤマシタホビーの汎用パーツに変更した。

飛行甲板の製作

①飛行甲板はキットパーツの厚みが気になったので、0.5㎜厚のプラ板で自作し、裏面には 0.25㎜厚のプラペーパーを細切りしたものでガーダーとビームを再現した。着艦標識はジャンクのエッチングパーツから適当なものをチョイスして取り付けた。
②飛行甲板表面には 0.4㎜径のドリルで 3㎜間隔の浅い穴を穿って、飛行機繋止眼環を再現した。
③飛行機輸送に特化した際に不要になったと思われる制動索と、滑走制止柵のワイヤーは再現せず、制動索の扛起装置と制止柵の支柱のみ、プラペーパーで再現した。
④飛行甲板後部の 110㎝探照灯の覆いは、





◀飛行甲板後半を占める九九軽爆は、その高速と機動性の良さを活かして、中国大陸各地で対地支援等に活躍した。太平洋での戦いでは、米英の新鋭機が続々と登場し、性能の陳腐化に苦しみながらも大戦の全期にわたって戦い続けたこの機体は、筆者が最も好みとする陸軍機のひとつで、今回最多の８機も載せてしまったのもそのためである。



ファインモールドのエッチングパーツ『日本海軍・空母用パーツセット』（AM15）を使用して再現した。なお、飛行機揚収デリックの代わりに装備されたと思われる「櫓楼」をプラ材で作り付けた。
⑤前部エレベーターの前方にある遮風柵は、ジャンクのエッチングパーツを流用した。

マスト

後方の４基の起倒式マスト（無線檣）および右舷前部の起倒式マスト（信号檣）は、すべて適当なジャンクのエッチングを流用して再現した。

武装等

12.7㎝連装高角砲はナノ・ドレッド『八九式 12.7㎜高角砲（上部カバー付）』（WA31）を、また 25㎜三連装機銃はナノ・ドレッドの『九六式 25㎜三連装機銃（防盾付）』（WA25）を使用した。

搭載機

今回のメインテーマである陸軍機の輸送状態を再現するにあたり、飛行甲板に各種の機体を、さながら陸軍航空ショーのような状態で並べてみた。もちろんこのような状態は史実ではあり得なかったわけだが、作例で 1/700 の陸軍機を製作できるせっかくの機会でもあり、海軍航空隊とともに、圧倒的な米英のエアパワーと激烈な消耗戦を戦った陸軍航空隊への思いを込めた次第である。

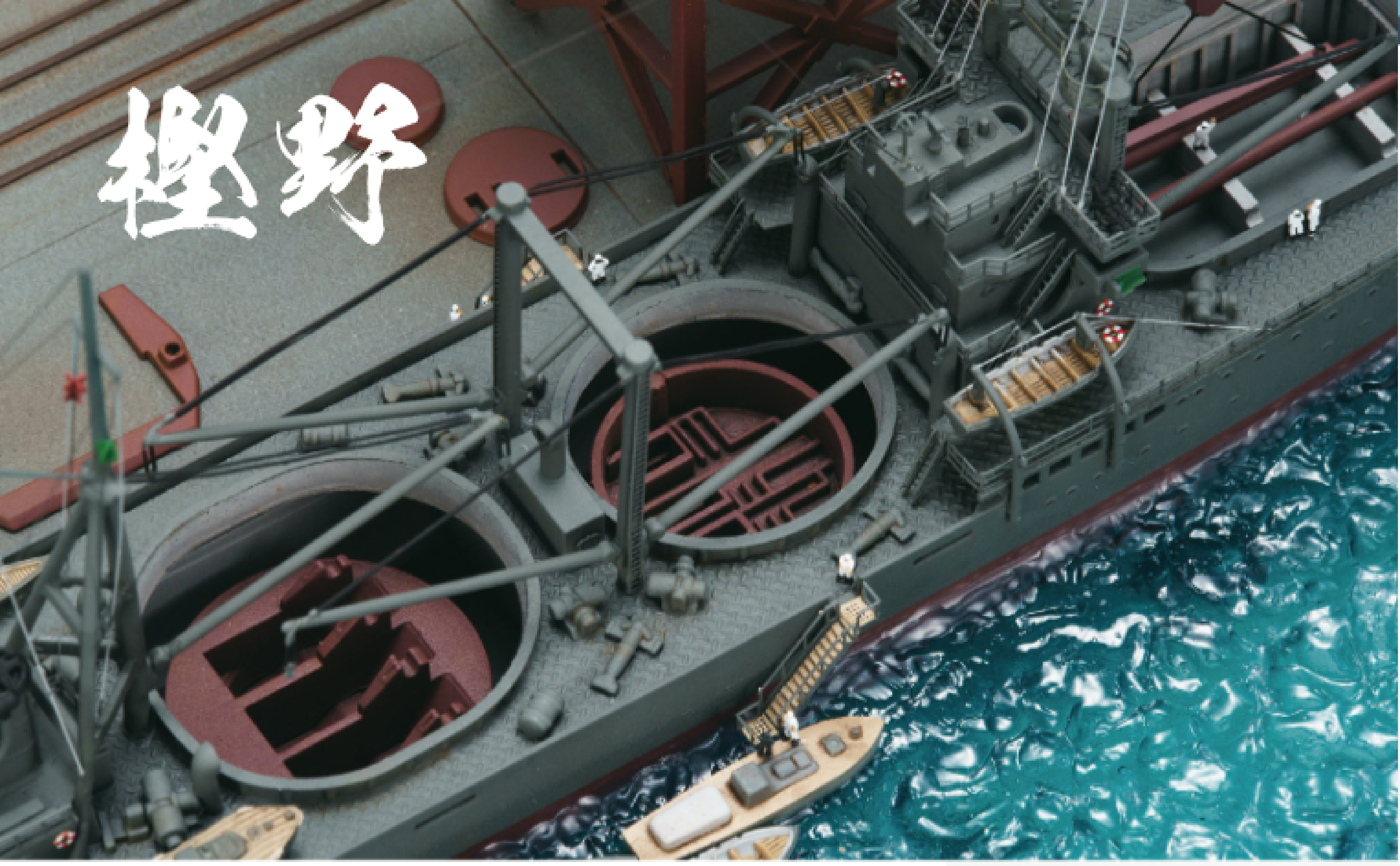
塗　装

船体の塗装はすべて面相筆および平筆による筆塗りで行なった。飛行甲板表面はラテックスが塗布されていたと思うが、その色合いが分からなかったので、想像で明るめのグレーとした。船体の塗り分け線はタミヤカラーラッカー塗料の LP18 ダルレッドを使用した。その他の上構等は GSI クレオス Mr. カラー C32 の軍艦色（2）を使用した。陸軍機の塗装はすべてメーカーの塗装指示に従って行なった。

終わりに

商船型の船体に加えて平甲板型（艦橋構造物を持たない空母）という外見同様、地味な艦歴のこの艦が、『艦スペ』誌上に登場するのは、実に 18 号（2005 年発行！）以来のことである。今回は編集長からの指令を受け、陸軍機を南方へ輸送中の姿としてみたが、いかがであろうか。華々しい海空戦等は一度も経験することなく、大戦中盤の南太平洋を舞台に、連日激烈な消耗戦を繰りひろげる陸海軍航空部隊を支え続けて、敵機や敵潜が跋扈する危険な海を走り抜け、ひたすら飛行機を運び続けた商船改造空母の姿に、何かしら熱いものを感じていただければ、製作者として幸甚である。

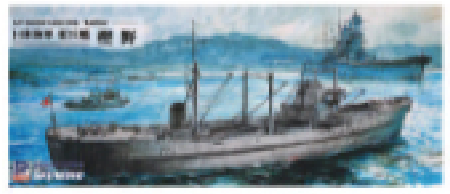
樫野



大和型の主砲を運ぶために建造された専用運搬船

■日本海軍給兵艦「樫野」

大和型戦艦に装備される九四式四十糎砲（46cm砲）は呉海軍工廠で製造され、「武蔵」を建造中の三菱重工長崎造船所、「信濃」を建造中の横須賀海軍工廠に運搬する必要があった。当時の日本海軍には砲身重量165t、砲塔の総重量は2510tにもなる46cm砲を運べる船はなく、専用の運搬船「樫野」を新造した。作例はピットロードの1/700キットを製作、主砲積み込みシーンの情景に仕上げた。



ピットロード 1/700
日本海軍給兵艦「樫野」
製作・文：渡辺真郎
PIT-ROAD1/700 scale Plastic model kit
JAPANESE NAVY CARGO SHIP "KASHINO"
Modeled by Masao WATANABE

たずさえた巨砲これぞ救国のために

日本海軍には、専門的な任務のために特殊な設計がなされた艦がいくつか存在しました。その例としては、前進基地にて艦艇の一般修理を行う"工作艦"や、前線に食料を送り届ける"給糧艦"、潜水艦への補給や休養施設として建造された"潜水母艦"等が挙げられますが、ここで紹介する「樫野」は、その中でも最も特殊な艦と言えるでしょう。

「樫野」の分類は"給兵艦"とされていますが、その実情は、大和型戦艦の砲身および砲塔を運搬するために開発された重量物運搬船でした。

大和型戦艦の46cm主砲は呉海軍工廠以外では製造できなかったため、長崎で建造中の「武蔵」と横須賀で建造中の「信濃」に搭載するには海上を輸送する以外に手段がなかったのですが、当時の日本海軍には1基あたりの総重量2510tにも及ぶ46cm砲を運べる船は存在しませんでした。だからといって民間船をチャーターしたり、未成の大型戦艦を低速で移動させるのは防諜上の問題が多かったことから、専用設計の運搬船を建造する必要に迫られたのです。

其の任務、国運を左右す

こうして建造された「樫野」は1940（昭和15）年7月に竣工。

巨大な船倉ハッチを3か所設けたことによって生じる船体強度の不足を補うために、舷側上部を外側に張り出した特殊な形状を採用し、重量物を安定して輸送できるよう、極端なまでの低重心設計がなされました。

本来の目的である主砲塔の輸送任務は、1941（昭和16）年10月3日から11月20日にかけて行われ、呉～長崎間の3往復によって「武蔵」の主砲運搬の務めを無事に果たしました。

その後は3番艦「信濃」の建造支援に就く予定でしたが、ほどなくして戦艦を含めた艦艇建造計画の見直しが行われ、工事は一時中断。開戦後は通常の輸送任務に従事したものの、1942（昭和17）年9月、台湾沖にてアメリカ潜水艦「グロウラー」から雷撃を受け、艦歴わずか2年の短い生涯を終えました。

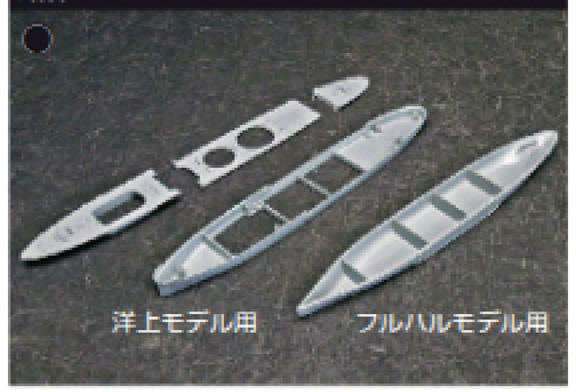


▲艦首船倉に積み込み中の大和型の46cm砲砲身。船倉内部には砲身を固定するための架台があったと想定して自作、側壁の構造材等もプラ材で追加している。

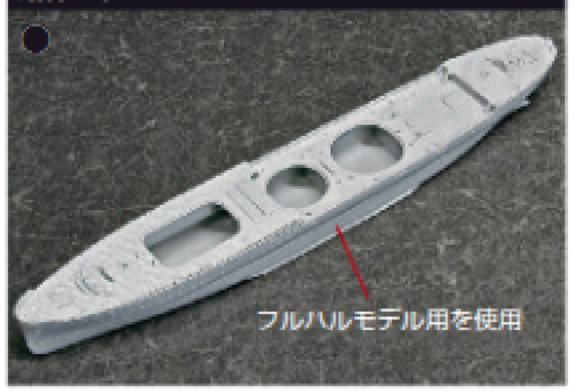


●給兵艦「樫野」の製作

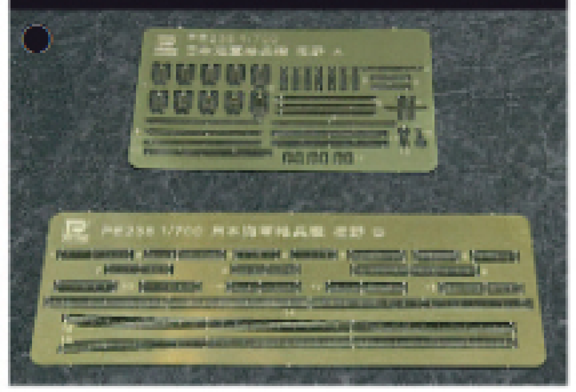
船体



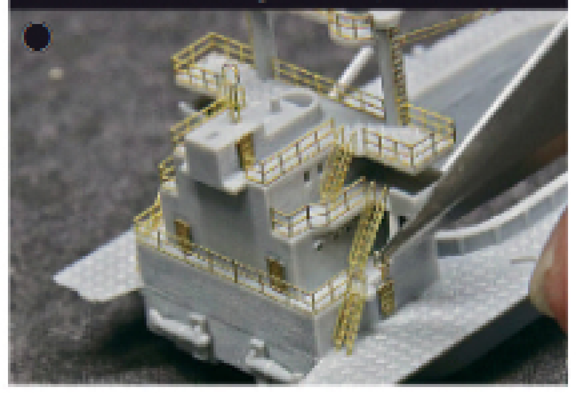
船体の組み立て



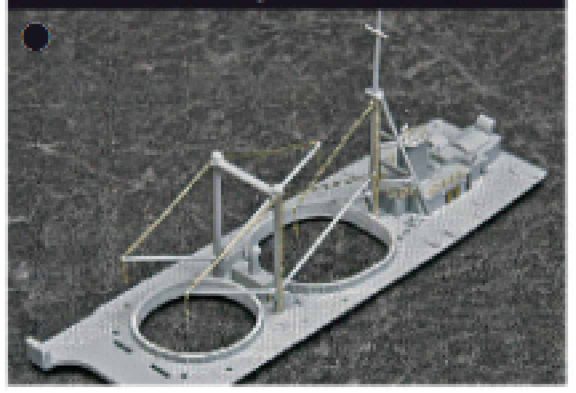
純正エッチングパーツ



エッチングパーツの取り付け（艦橋）



エッチングパーツの取り付け（デリック）



砲身用船倉



塗装前の全景



船体の塗装



甲板の接着



船首楼甲板の接着



「樫野」の完成



①キットは船体が上下分割されており、フルハルと洋上モデルの作り分けが可能。ハルの内側に船倉をイメージした隔壁が再現されているのは嬉しいポイント。
②船体上下を接着し、デッキを仮置きした様子。甲板上に３か所の大穴が設けられた本艦特有の構造が興味深い。
③ディテールアップには、ピットロード純正エッチングパーツ（品番：PE238）を使用した。手摺りやラッタル等のほか、デリックのケーブルやファンネルキャップをディテールアップ可能だ。
④純正エッチングパーツ取り付けの様子。ラッタル上の踊り場は該当する手摺りが付属していなかったので、他艦用パーツ（フジミ 1/700 航空母艦「翔鶴」用）から流用した。
⑤各種デリックや構造物上の手摺り、ファンネルキャップ等のエッチング取り付け後の様子。
⑥艦首の砲身用の船倉には、砲身を設置するための架台や補強材があるものと想定し、プラ材にてそれらしいディテールを再現した。
⑦塗装前の全景。船倉内の塗り分けや砲塔部品を設置する都合上、甲板パーツは未接着としている。
⑧船体塗装後の様子。船倉内の隔壁と内壁は明るいグレーで塗り分け、コントラストを演出した。
⑨別個に塗装しておいた砲身と旋回盤等を設置し、甲板を接着。
⑩続いて船首楼甲板と船尾楼甲板を接着し、手摺りやラッタル、ダビット等を取り付けた。
⑪その他、細々としたパーツを取り付けて「樫野」本体は無事完成となった。

レジンキットからプラキットへ昇華 ピットロードの「樫野」

前述のように、【ニッチな艦船の極み】ともいえる「樫野」ですが、1/700 キット化は初ではなく、PT エイジェンス（ウェーブラインシリーズ）のレジンキットに続いて２代目となります。

プラキット化に伴って最も進化した点は、フルハルモデルとすることで、本艦特有の大きく深い船倉を船底まで再現できるようになった点です。

また、本艦の主要な搭載品である大和型戦艦の主砲塔は新金型で用意され、砲身基部や砲室内部のみならず、砲塔下部の給弾、給薬室に至る繊細なメカニズム表現がなされています。

キット製作はストレスフリー

「樫野」本体の製作は、上部構造物のパーツ数が抑えられて組みやすさに配慮されている一方、ウインチやパラベーン、リール等は別パーツとなっており、メリハリの効いた仕上げが楽しめます。

ピットロード純正のエッチングパーツも使いやすく、手摺りやラッタル、デリックのケーブル等を手軽に再現できました。

パーツ同士のフィッティングも良好なので、組み立てに注意すべき点等はほとんどありませんが、唯一、船首楼甲板と船尾楼甲板の左右には隙間が生じがちですので、瞬間接着剤を流すか溶きパテ等で埋めておくと良いでしょう。



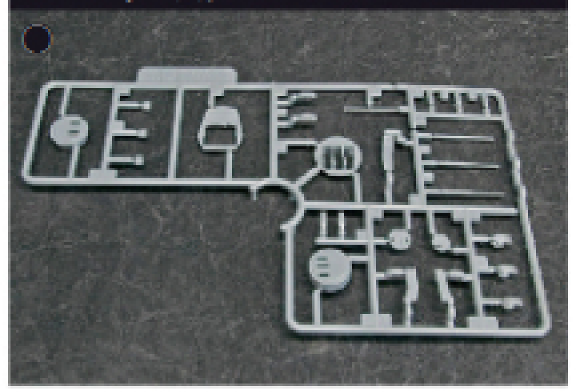


▲ジオラマ全景。「樫野」の船倉は深いのでフルハルモデルで製作し、海面を模したベースに埋め込んでいる。
◀岸壁には大和型 46㎝主砲塔の部品が分割された状態で置かれている。軍艦色に塗装される前の下地塗装状態とした。



●大和型主砲塔の製作

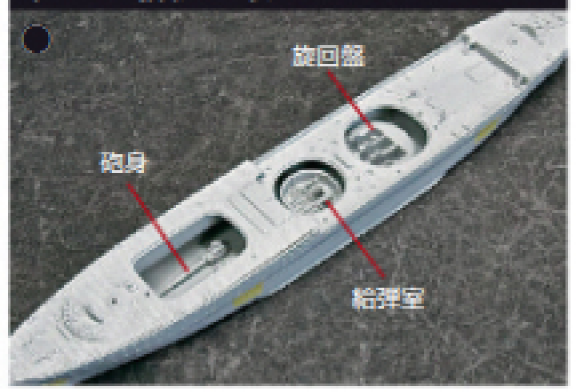
キット付属の大和型主砲



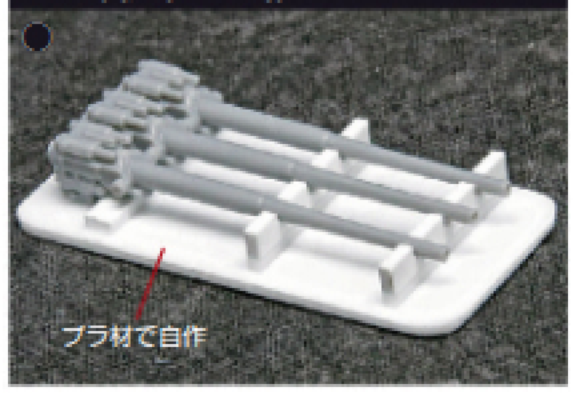
「樫野」に搭載した主砲塔



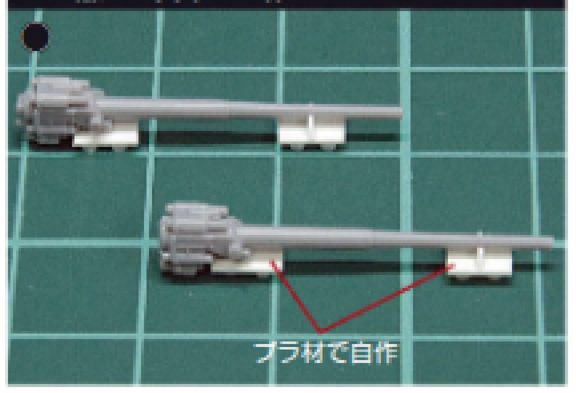
「樫野」に搭載した状態



砲身の固定架台を自作



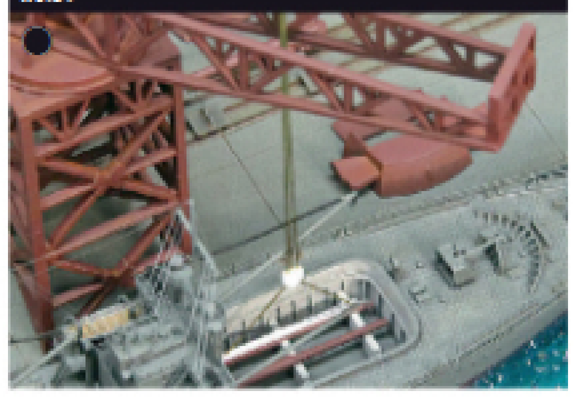
砲身輸送用貨車を自作



分割状態にした砲塔部品



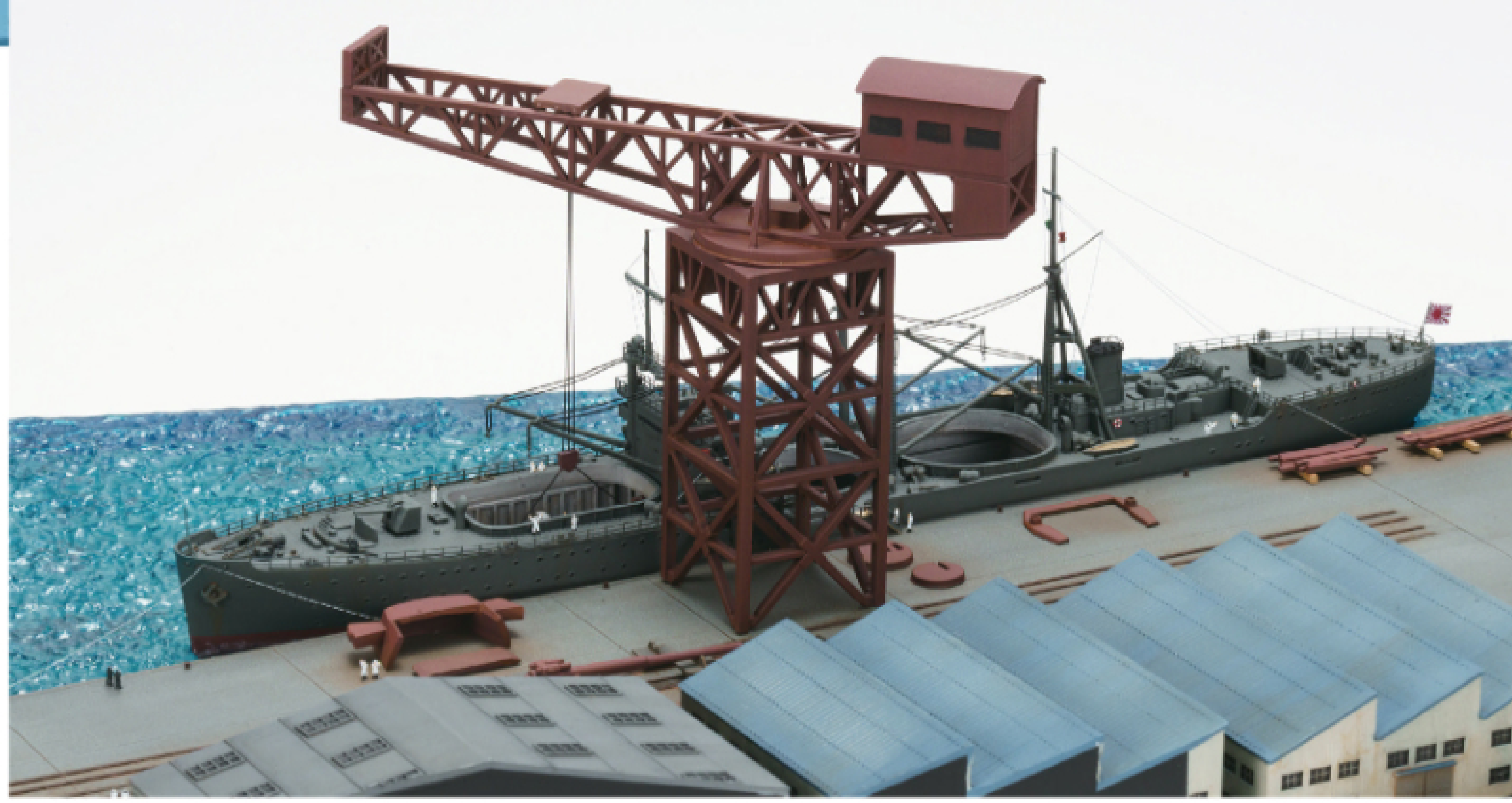
情景



①キットに付属している大和型戦艦の砲塔は素晴らしいのひとこと！ 1/350 並のディテールで砲室や基部の構造も完璧に再現されている。
②今回「樫野」に搭載した部品の全景。砲室内部や覆いは分割しつつ、岸壁に配置した。
③砲塔パーツを仮配置した様子。レイアウトは、組立図に記載された推定図に従ったもの。
④艦首の砲身用の船倉内部には、プラ材で砲身固定用の架台を自作した。
⑤岸壁側にも砲身輸送用の貨車を自作して配置。砲身の長さは約 21m ということで、在来線の特急車両くらいのサイズ感である。
⑥砲塔の覆いは、ピットロード NE08『1/700 新 WWII 日本海軍艦船装備セット（8）』の主砲塔パーツを併用して 5 分割された状態を再現。砲室＆給薬室、揚弾＆揚薬筒等も含めて計 12 個の部品に再構成し（搭載前の部品として）岸壁に配置した。
⑦砲身はクレーンにて積載中の情景とした。ケーブルは 0.2㎜径の真鍮線による自作である。

▼こちらも岸壁に置かれた大和型 46cm砲の主砲塔パーツ。「樫野」に付属するパーツを利用している。



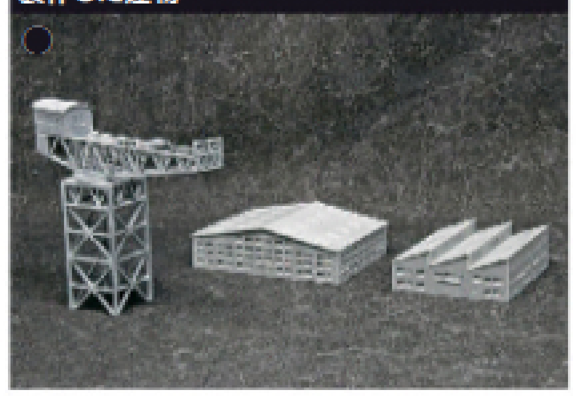


●地形と建築物の製作

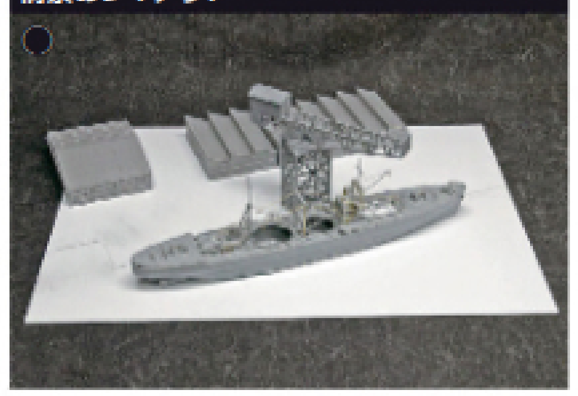
用意したもの



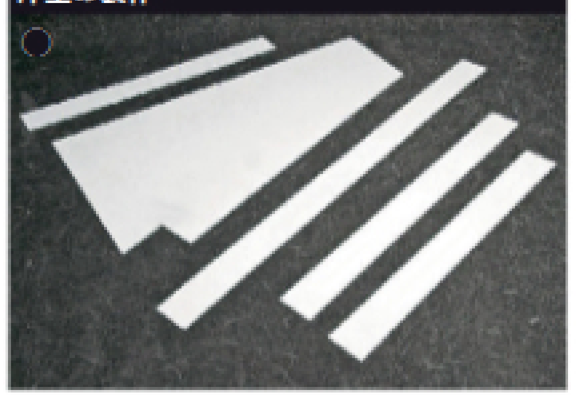
製作した建物



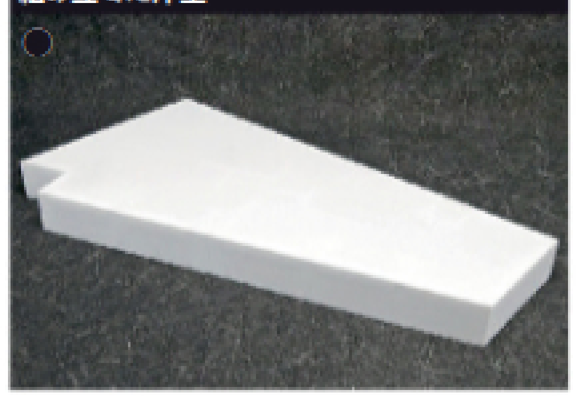
情景のレイアウト



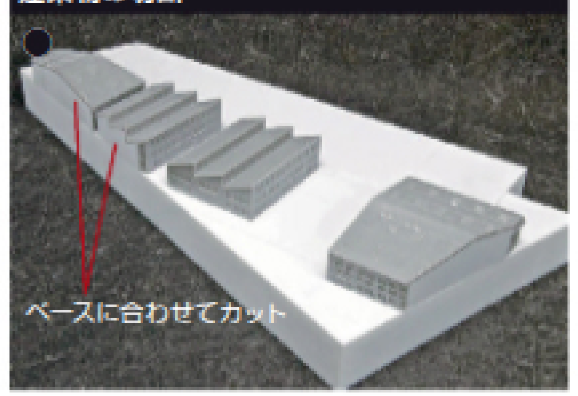
岸壁の製作



組み立てた岸壁



建築物の切断



岸壁のディテール



「樫野」を配置



①「港の情景」というとハードルが高く聞こえてしまうが、必要なものは模型店やホビーショップだけでも充分に揃えることが可能。
②建物の再現に使用したのは、1/700 ウォーターラインシリーズの『クレーンセット』とピットロードの『格納庫』『軍需工場』の３種である。
③ベースサイズを決めたらプラ板を切り出し、建物を配置しながら岸壁の形状を検討。形状が決まったら鉛筆等で下書きして岸壁の製作に進む。
④岸壁はプラ板箱組みにて製作した。側板は高さに差があると綺麗に組み上がらないので、なるべく均等に揃えることが重要となる。
⑤岸壁の高さは完成イメージを左右するので慎重に検討した。ここでは水深 14m を想定し、海水の厚み約 20㎜、岸壁は水面から約 4㎜として計 24㎜の高さに設定した。
⑥建築物はベースの切れ目に合わせて切断し、プラ板を裏貼りした。建築物の斜め配置は難易度は高めだが、模型としての見映えは良くなるのでオススメである。
⑦岸壁側面のディテールはプラ角棒にて追加し、上面には目地を入れてコンクリートの継ぎ目を表現した。港湾鉄道の軌道も、プラ角材にて自作している。
⑧塗装前に「樫野」と建物類を仮配置し、バランスを確認。港の水深は実際にはここまで深くないことが多いが、水表現をする際には少し深めにしておく方が見栄えが良い。





▲手摺りやデリックのケーブル等、純正エッチングパーツで再現している。



▲建物は静岡模型教材組合やピットロードの建物キットを利用して製作した。

塗装については、デッキ表面が滑り止めパターンで表現されているため、外舷色と船底色の２色でシンプルに纏めましたが、船倉内部の塗色は（あくまで推測になりますが）内壁と天井を明るいグレーで塗り分けることでコントラストを演出しています。

世界最大の艦砲搭載！
歴史的瞬間を切り取る

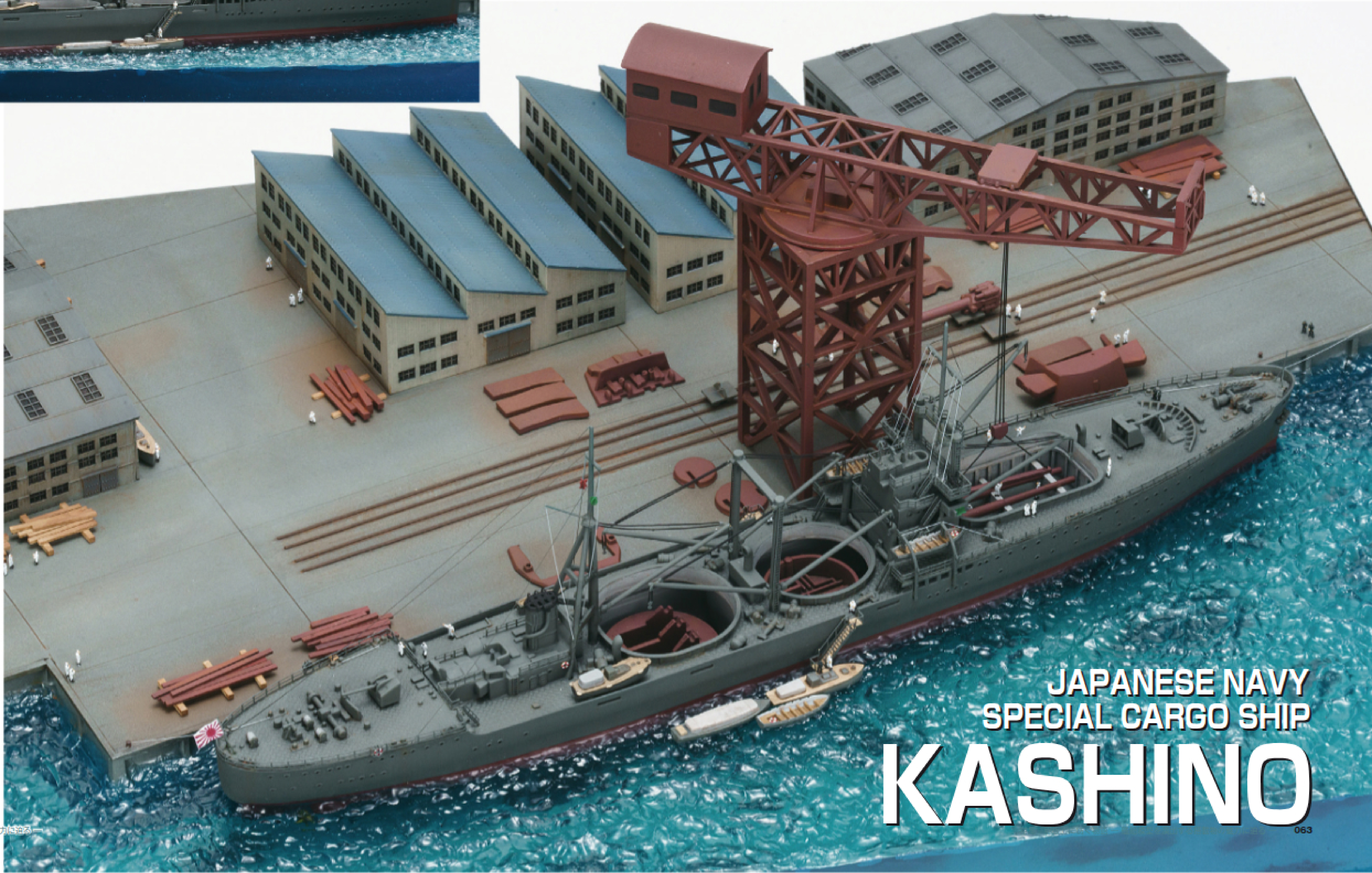
前述のとおり「樫野」の存在意義は大和型戦艦の主砲塔の運搬です。そこで本作例では、呉～長崎間の輸送任務に備えて「武蔵」用の砲塔部品と砲身の積載作業中の情景を表現しました。

情景イメージとしては、上田毅八郎先生が描かれた「樫野」の荷役中の画（学研歴史群像 太平洋戦史シリーズ Vol.37『帝国陸海軍補助艦艇』掲載）を参考にしつつ、ハンマーヘッド型クレーンを中心付近に配置し、岸壁の一部と建屋を切り取った構図に決定。キットの船倉の奥行き感を活かすために、フルハルモデルを透明樹脂の海に埋め込む手法でのジオラマ化に臨みました。

ホビーショップで揃う素材で情景表現

「港湾施設を製作し、かつ透明樹脂による水表現まで行う」となるとハードルが高く感じてしまいますが、現在では情景表現に適した素材やツールも充実しています。そこで今回は、なるべく模型店やホビーショップで入手可能なキットや素材を使用しました。

まず､情景の中心に据えるクレーンですが、これは 1/700 ウォーターラインシリーズ初期の隠れた名キット『クレーンセット』にて再現。港湾施設の建屋には、同じく古くから発売されている､ピットロードの『軍需工場』



JAPANESE NAVY SPECIAL CARGO SHIP KASHINO

●水表現と小物類の製作

海底のテクスチャー



海の断面



テクスチャーペイントの目止め



海水表現用マテリアル



樹脂の軽量



樹脂の着色



真空容器で気泡を除去



加熱して気泡を除去



①海底のテクスチャー表現は、タミヤの『情景テクスチャーペイント』を使用した。まずは「砂 ライトサンド」で底面全体を覆い「土 ダークアース」で岩場や藻類を表現していく。
②海水表現として透明樹脂（クリアレジン）を流すにあたり、透明プラ板を外周部に貼って型枠とした。
③テクスチャーペイント表面からの気泡の発生を防ぐために、光沢のあるクリアーを全体に重ねて目止めとした。
④海水表現に使用したのは『タミヤ透明エポキシ樹脂（150g）』。ボトル式で使いやすいのが嬉しいが、内容量が少なめなので、４箱を用意した。
⑤この樹脂は主剤と硬化剤を２：１の割合で混ぜると約 24 時間で完全硬化する。きちんと硬化させるには比重を合わせる必要があるので、混ぜる前にはグラム単位で正確に軽量しておくことが望ましい。
⑥着色には、タミヤカラーエナメル塗料が便利。ここでは X-23 クリヤーブルーを使用。
⑦攪拌時に発生する気泡は、食品用の真空容器を利用すれば簡単に抜くことができる。ポンプで中身の空気を吸い出し、８分ほど待てば目立つ気泡は抜けてくれる。
⑧抜けきらない気泡は、加熱して樹脂の粘性を下げると消しやすい。筆者はエンボスヒーターを愛用している。

と『格納庫』を配置しました。

岸壁はタミヤのプラ板を箱組みする要領で仕上げ、港湾鉄道の軌道や貨車、岸壁に並べられた資材等は、プラ角棒や平板等で自作しています。

水表現は根気よく進めよう

岸壁や建物が仕上がれば、あとは透明樹脂で海水を表現すれば完成です。

この透明樹脂は、取り扱いにある程度の「慣れ」を必要としますが、特別難しいテクニックを必要とするものではありませんので、本項を参考に、ぜひ多くのモデラーに取り組んでいただけたらと思います。

順序としては、まず底面にタミヤの『情景テクスチャーペイント』を盛りつけて海底を表現し、目止めとして、光沢のあるクリアーをコーティングします。

透明樹脂には、タミヤの透明エポキシ樹脂（150g）を使用し、タミヤカラーエナメル塗料の X-23 クリヤーブルーを（45g に対して５滴程度）加えて着色しつつ、少量ずつ積層していきました。樹脂が完全に硬化したら、最後にジェルメディウム等の波表現に適した素材で海面表現を加え、小船艇等を配置して水表現は完了です。

透明樹脂の積層は、一気に行うと発熱や急な硬化が生じたりして大きな失敗に繋がりやすいので、少量ずつ、きっちり時間をかけ丁寧に進めていくのがコツになります。

各工程の詳細は、工程写真の項にも詳しく解説しておりますので、ぜひご参照ください。

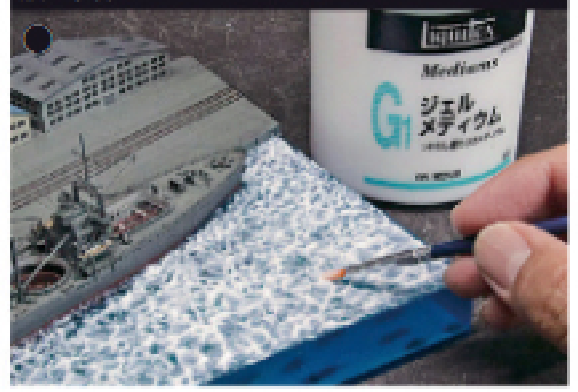
樹脂の流し込み



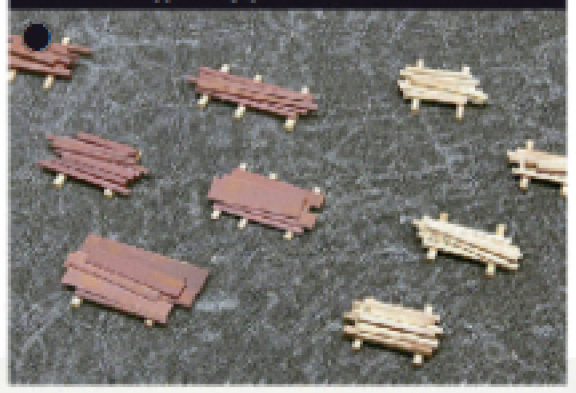
「樫野」を設置



波の表現



プラ材で自作した資材



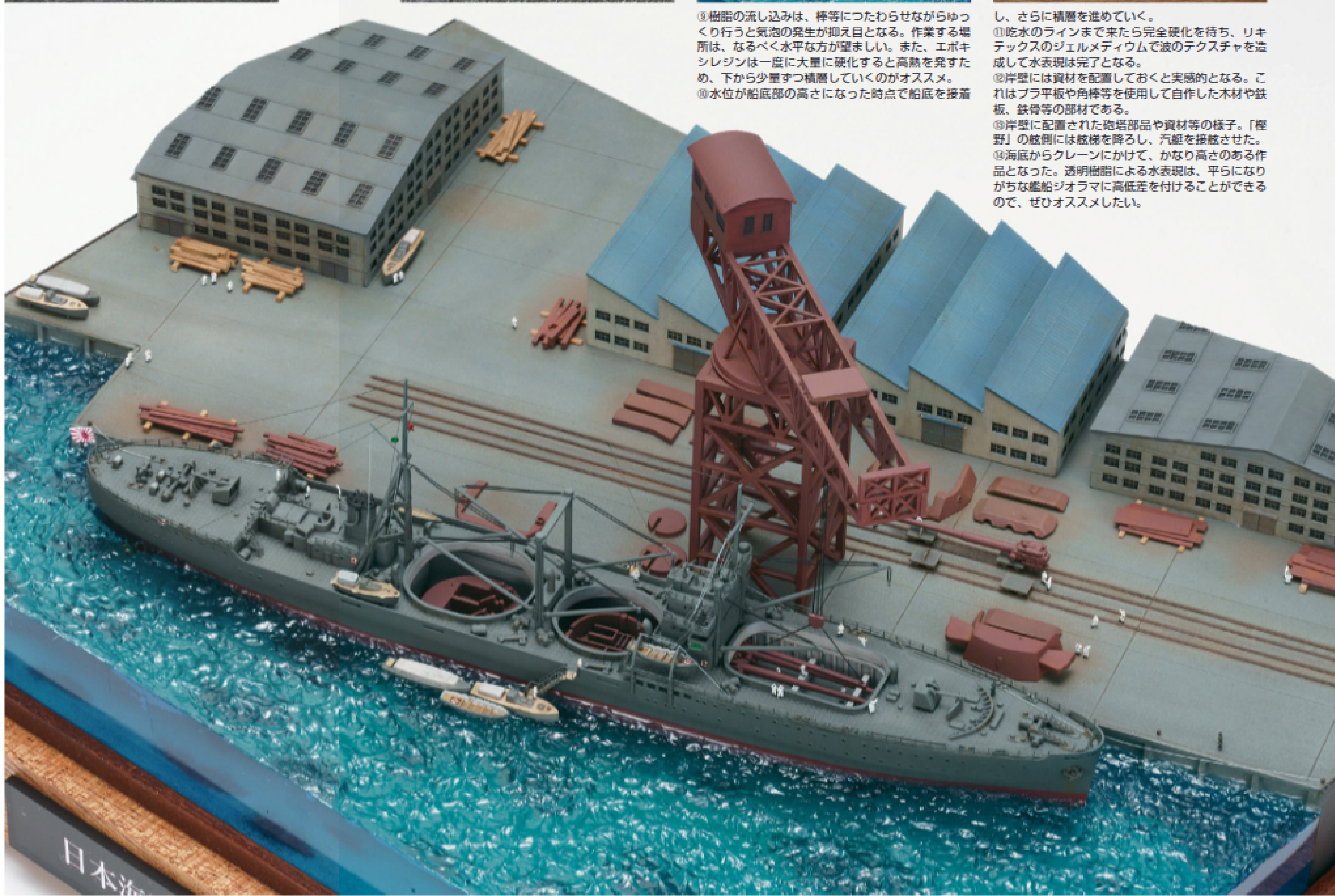
汽艇を設置



完成



⑨樹脂の流し込みは、棒等につたわらせながらゆっくり行うと気泡の発生が抑え目となる。作業する場所は、なるべく水平な方が望ましい。また、エポキシレジンは一度に大量に硬化すると高熱を発するため、下から少量ずつ積層していくのがオススメ。
⑩水位が船底部の高さになった時点で船底を接着し、さらに積層を進めていく。
⑪吃水のラインまで来たら完全硬化を待ち、リキテックスのジェルメディウムで波のテクスチャを造成して水表現は完了となる。
⑫岸壁には資材を配置しておくと実感的となる。これはプラ平板や角棒等を使用して自作した木材や鉄板、鉄骨等の部材である。
⑬岸壁に配置された砲塔部品や資材等の様子。「樫野」の舷側には舷梯を降ろし、汽艇を接舷させた。
⑭海底からクレーンにかけて、かなり高さのある作品となった。透明樹脂による水表現は、平らになりがちな艦船ジオラマに高低差を付けることができるので、ぜひオススメしたい。





艦尾に35tクレーンを装備した二式大型飛行艇の母艦

■日本海軍水上機母艦「秋津洲」

全長 28.13m、全幅 38.00m にもなる二式大型飛行艇の修理・整備に特化した水上機母艦「秋津洲」は、昭和 17（1942）年４月 29 日に竣工した。艦尾の 35t クレーンで機体を吊り上げ、後甲板に搭載して整備することができた。作例はアオシマ 1/700 キットを製作。別売エッチングパーツを用いてフルディテールアップしている。



アオシマ 1/700
日本海軍水上機母艦「秋津洲」
製作・文：koima
AOSHIMA1/700 scale Plastic model kit
JAPANESE NAVY SEAPLANE TENDER "AKITSUSHIMA"
Modeled by koima

はじめに

「秋津洲」は日本海軍が大型飛行艇の補給や修理を行うために計画・起工し、昭和 17（1942）年４月 29 日に竣工しました。竣工後南方に進出し、ラバウルやショートランド泊地で飛行艇の補給・整備、輸送等で活躍も、昭和 19（1944）年２月トラック島空襲に遭遇。トラック泊地を脱出して横須賀に帰投しました。工作艦の多数喪失に伴い、「秋津洲」を工作艦として投入することになり、同年９月にヒ 75 船団と共に出撃。

途中でフィリピンマニラ港へ向かうも、アメリカ軍機の活動が活発でコロン湾に退避しましたが、アメリカ空母艦載機の攻撃を受けて同年９月 24 日に沈没しました。比較的浅い海底に沈んでいるので、現在でもダイビングスポットとして「秋津洲」を見ることができます。

「秋津洲」最大の特徴は艦尾にある 35t クレーンで、九七式飛行艇や二式飛行艇を吊り上げ、甲板上に収納して補給・整備を行います。ただし飛行艇を収納している時は、破損防止のため航行しない運用でした。また独特な迷彩塗装が施されており、模型製作時のポイントとなります。

キット

アオシマ 1/700「秋津洲」は艦船模型ブームの中、2017 年に新規金型で発売されたキットです。純正エッチングパーツも同時発売されましたが、現在は入手が難しく、テトラモデルのエッチングパーツ（ピットロード用）が比較的入手しやすいです。作例ではアオシマ純正、テトラモデル、アーティストホビーのエッチングパーツを組み合わせて製作しました。また小さな装備品を中心に、3D プリント品を活用してみました。



▲艦橋構造物は丸々アーティストホビーのエッチングパーツに置き換えた。リノリウム甲板の押さえ金具は 0.1㎜径の真鍮線を埋め込んで再現している。



▲ 12.7㎝連装高角砲はファインモールドのナノ・ドレッドシリーズを使用。砲身をアドラーズネストの金属砲身に置き換えている。

船体の工作

バスタブタイプの船体には固定用ナットを２つ仕込みました。舷外電路はエッチングパーツに置き換えるため一旦削除、舷窓は 0.4㎜径ドリルで開口します。サフ塗装後にエッチングパーツで舷外電路を再生し、窓枠も汎用エッチングパーツを取り付けました。

甲　板

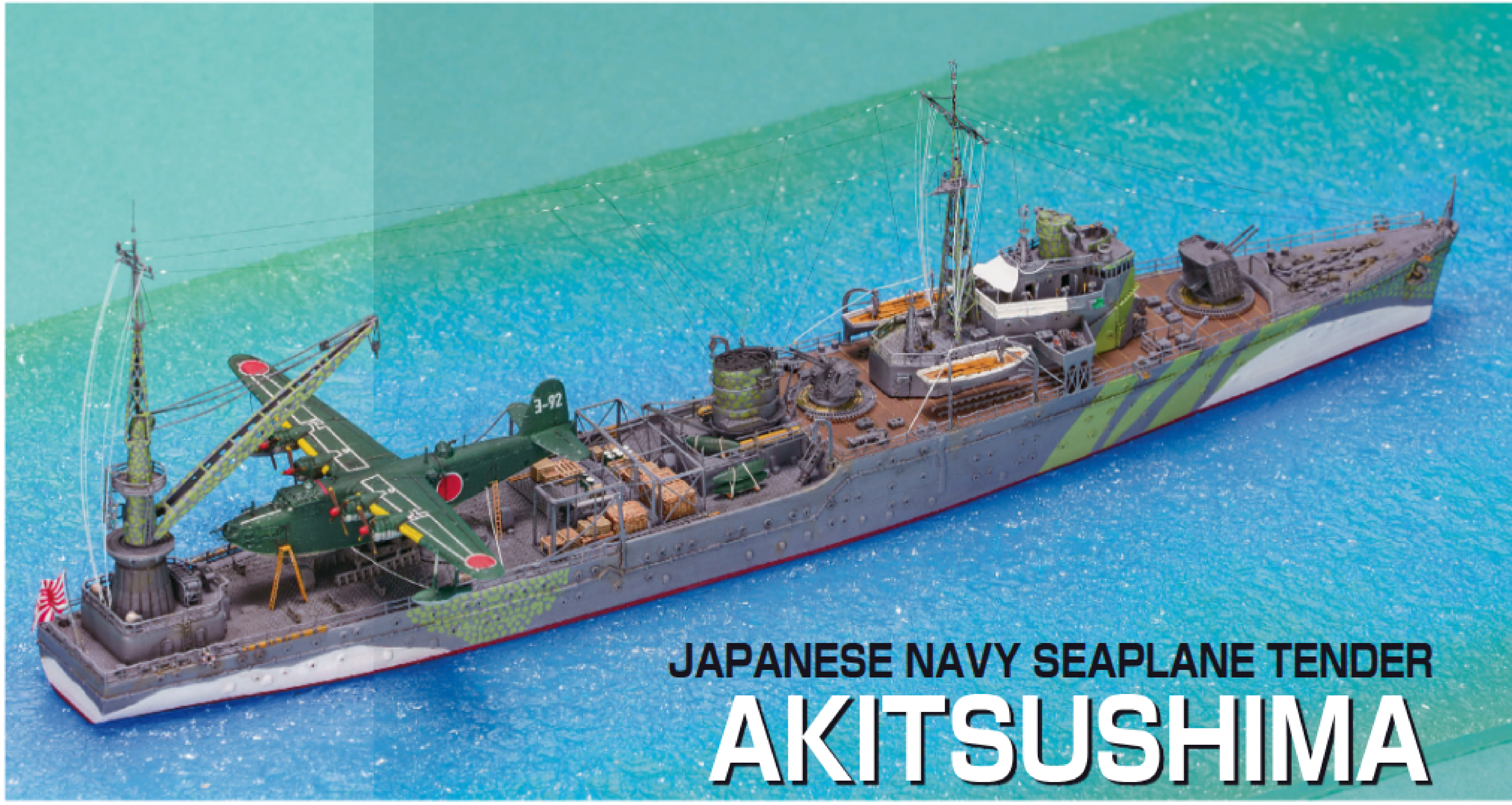
前部・後部甲板はアオシマ純正エッチングパーツ甲板を使用しました。ボラードはエビックホビーの金属製に変更、チェーンは 3D プリント品を使用しています。

飛行艇が載る台座やターンテーブルはテトラモデルのエッチングパーツです。リノリウム甲板のリノリウム押さえは溝を掘った上でモールドを削除、リノリウム色の塗装後に 0.1㎜径の真鍮線を埋め込みました。

高角砲台座は一旦削り取り、アーティストホビーのエッチングパーツに置き換えました。艦橋両舷の運搬軌条も一旦削り取り、汎用エッチングパーツで置き換えました。



JAPANESE NAVY SEAPLANE TENDER AKITSUSHIMA



艦　橋

アーティストホビーのエッチングパーツで置き換えます。左右の機銃座を支える柱が船体に隙間なく取り付けられるように仮組み、調整をしました。

トップの九四式高射装置はピットロードNE03『新WWⅡ日本海軍艦船装備セット3』に置き換えました。双眼鏡はナノ・ドレッド、伝声管はエビックホビーのエッチングパーツ、舷灯は軍艦堂の3Dプリント品を使用しました。

艦橋前面付近のホーサーリールはテトラモデルのエッチングパーツです。艦橋後部の防暑キャンバスはあぶらとり紙を白塗装したものです。

マスト

実艦に一番近そうなアーティストホビーを採用、トップは少し切り取りナノ・ドレッドの2kw信号灯と風速風向計のエッチングパーツを取り付けています。上に昇るための梯子も背面側に取り付けています。

35tクレーン

クレーンも実艦に最も近いアーティストホビーを採用、ワイヤーがクレーン本体に入る箇所のみテトラモデルを使用しています。こちらも最上部に軍艦堂の2kw信号灯を取り付けています。

武　装

後部高角砲はナノ・ドレッドで、砲身はアドラーズネスト金属砲身に換装しています。前部高角砲はピットロードの艦船装備セット3を使用、同じく金属砲身に換装しています。艦橋両脇の連装機銃や弾薬箱はナノ・ドレッドです。

その他装備品

パラベーン・爆雷投下台・爆雷投射機は軍艦堂の3Dプリント品を使用。煙突脇の木材はプラ棒から作りました。艦橋両脇のカッターボートはナノ・ドレッドです。予備のフロートは煙突周辺に配置しました。

塗　装

最初に船体はガイアノーツのGS-04サーフェイサーエヴォ オキサイドレッドを塗装。次に外板鋼板表現のため、2㎜幅マスキングテープを縞模様になるように貼り付け、ホワイトサーフェイサーを塗装します。

艦底色はタミヤカラーラッカー塗料のLP-18ダルレッドを船体下方に塗装後、1㎜幅のマスキングテープで最下部を覆っておきます。

次に船体色としてLP-15横須賀海軍工廠グレイを塗装、付属デカールをコピーして作製した型紙を基にマスキングシートを切り抜き、船体に張り付けて迷彩の白色部分を塗装します。白色部分を切り抜いたマスキングシートで覆った後、GSIクレオス Mr.カラーC605外舷22号色部分とC14ネイビーブルー部分をマスキングテープを駆使して再現します。

特徴的な外舷22号色の点々模様は公試中の写真を参考に、極細の面相筆でひとつひとつ手描きしました。大きさが場所によって異なりますので、写真を参考に点々の大きさを変えると良いでしょう。煙突は最上部まで点々塗装です。

リノリウム甲板はタミヤカラーラッカー塗料LP-17リノリウム甲板色を使用。高角砲台座の木製部分は4色で塗り分けています。

簡略化のため、艦橋の塗装は船体と順番を入れ替えます。サーフェイサー塗装後、全体を外舷22号色で塗装、次に外舷22号色を残す部分を極細のマスキング後、ネイビーブルーの部分を塗装。さらにネイビーブルー部分をマスキングした後に船体色を塗装しました。最後に手摺りの防風キャンバス部を木工用ボンドを水で溶いたもので膜を作り、乾燥後ファレホ等の水性塗料で白色に筆塗りしました。

キットには迷彩部のデカールも同梱されていますので、塗装が苦手な方はこちらを使うと良いでしょう。

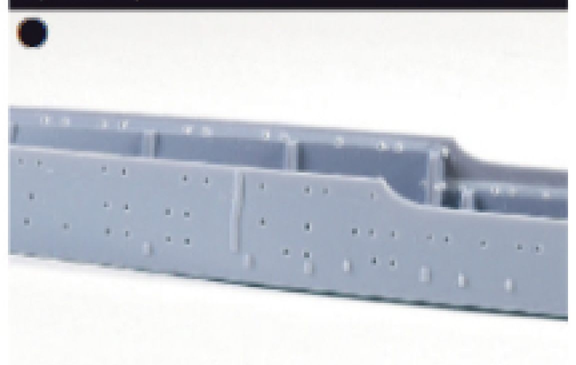
二式飛行艇

二式大艇とも呼ばれる二式飛行艇は九七式飛行艇の後継として開発された四発大型飛行艇です。航続距離は7000～8000㎞もあり、長距離の偵察や攻撃にも使用されました。「秋津洲」の甲板上を彩る二式飛行艇は1/700でもかなりの大きさがあります。実機の写真や大スケール模型を参考に出来るだけディテールを追加してみました。

まずアオシマの二式飛行艇はコックピット

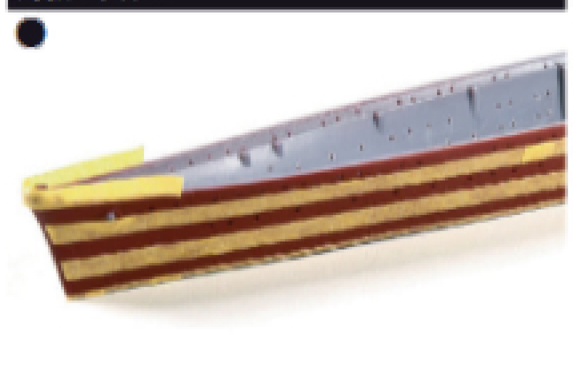
●水上機母艦「秋津洲」の製作ポイント

舷窓の再現



▲船体の舷窓は再現されていないので、0.4㎜径のドリルで開口した。舷外電路はエッチングパーツに置き換えるためモールドを削り落とした。

外板の表現



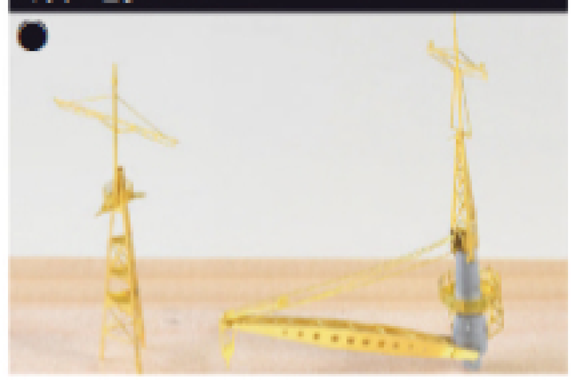
▲船体にはマスキングテープを等間隔に貼り込み、サーフェイサーを厚吹きすることで外板鋼板の段差を表現している。

艦橋構造物



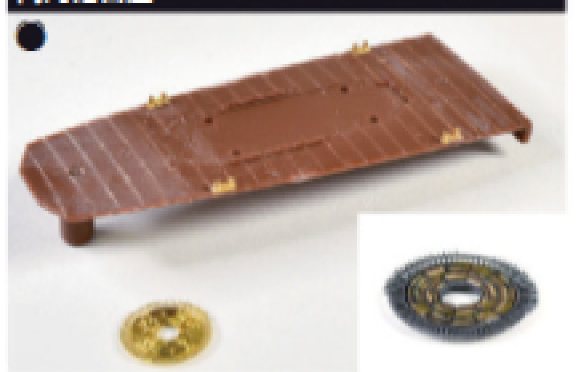
▲艦橋構造物はアーティストホビーのエッチングパーツ。艦橋を丸々置き換えるもので、折り曲げ、箱組みして形にする。

マストとクレーン



▲マストとクレーンもアーティストホビーのエッチングパーツを使用。一部テトラモデルのパーツも組み合わせている。

高角砲台座



▲高角砲台座はキットのモールドを削り落とし、アーティストホビーのエッチングパーツに置き換えた。木目は茶色系に色で細かく塗り分けた。

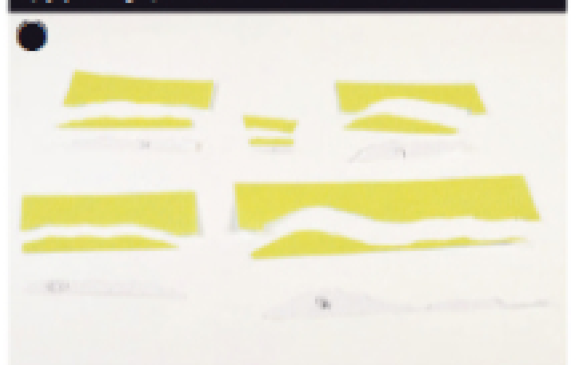
錨鎖甲板



▲錨鎖甲板はアオシマ純正エッチングパーツに、金属製ボラード、3Dプリント製チェーンを用いてディテールアップした。

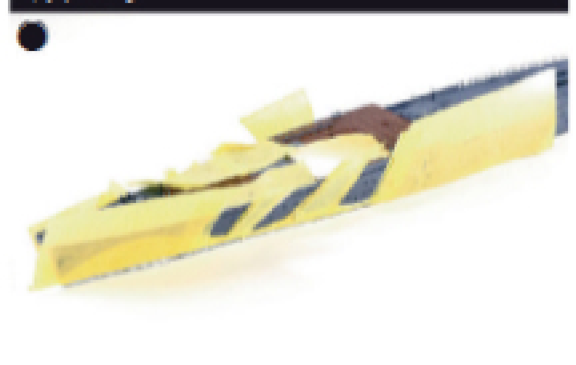
●水上機母艦「秋津洲」の迷彩塗装

マスキングシート



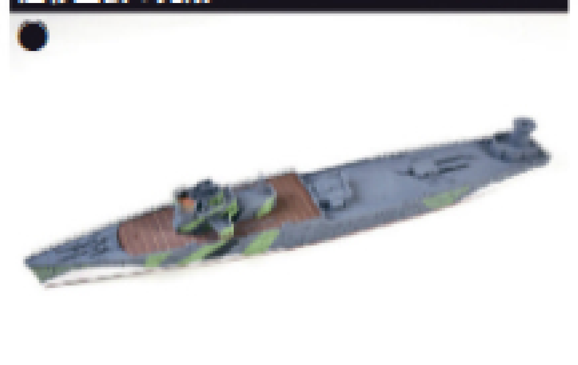
▲キットには迷彩を簡単に再現できるデカールが付属する。作例は塗り分けにしたので、迷彩デカールを型紙にしてマスキングテープを切り出す。

マスキング



▲切り出したマスキングテープを貼り込んだところ。1色ごとにマスキング、塗装を繰り返して迷彩パターンを完成させていく。

迷彩塗装の完成



▲迷彩塗装の完成した船体と艦橋構造物。迷彩の点々の部分は面相筆を用いてひとつひとつ丁寧に描き込んでいる。

●二式大型飛行艇の製作ポイント

風防・機銃座



▲風防や機銃座はキットのモールドを削り落とし、エッチングパーツの窓枠を取り付けた。汎用パーツを使って形状を合わせている。

機体下面



▲機体下面のディテールアップ。艇体左右の波除けと後部の水中安定板をプラ板で追加した。

塗料の剥がれ



▲先に銀色サーフェイサーで下地塗装し、機体色でオーバーコート。タガネで突いて下地の銀色を露出させることで塗料の剥がれを再現した。



秋津洲





の風防形状が実機と少し異なりますので、窓枠等の汎用エッチングパーツを駆使して置き換えました。5か所ある機銃座も同様に置き換えています。機首の機銃座は一一型と一二型で形状が異なり、今回は一二型相当の形状にしています。

窓は全て開口､主翼と尾翼は削って薄くし、パネルラインを再生しています。主翼発動機脇の点検用足場収納部のラインも追加しています。前部底面には波除用のヒレ通称かつお節をプラ板で追加、後部の水中安定ヒレも同様に追加しました。機首にあるレーダーアンテナは電探エッチングパーツや真鍮線で自作しました。

塗　装

銀色サフ⇒タミヤカラーラッカー塗料のLP-31 暗緑色2⇒LP-32 明灰白色の順で塗装。その後タガネ等で表層の塗膜を細かく剥がして銀色サフを露出させ、塗装剥がれを再現しています。

窓には水で溶いた木工用ボンドを使い、ガラス表現をしています。

デカール

日の丸、主翼前面の敵味方識別帯、機体番号は付属デカールを使用。主翼上面のウォークウェイラインは極細白線デカールを細かく切って組み合わせて再現しました。機首の白線も汎用白線デカールを使用しています。

機体周辺部小物

整備・補給を行う場合を想定した小物類を機体周辺に配置しています。中小の雑貨箱は軍艦堂の3Dプリント品、魚雷は別の航空機キットの3Dプリント品を流用。ドラム缶も3Dプリント品を使用しています。大型雑貨箱・木製パレットはフライホークのハンマーヘッドクレーン付属のエッチングパーツを流用しています。二式飛行艇左舷ハッチ部にはエッチングパーツで自作した脚立や梯子を配置しました。

組み立て・仕上げ

艦首・艦尾の旗竿は実艦を真似て0.15㎜径の真鍮線で自作しました。信号灯として光





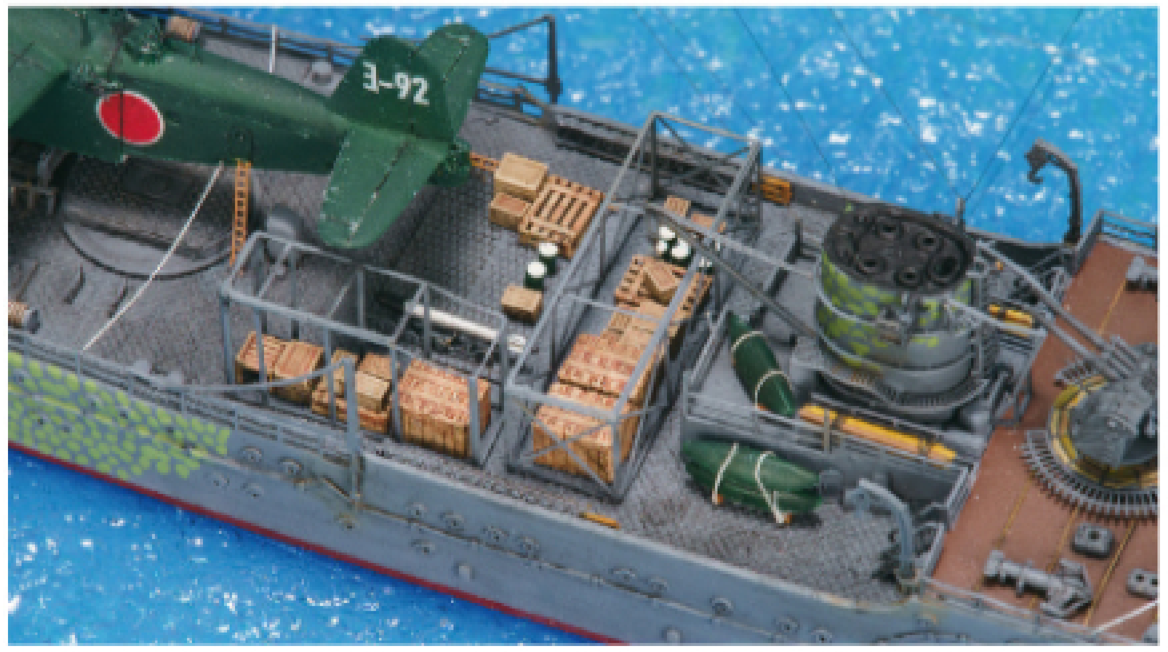
ファイバーを切ったものをどちらにも取り付けています。
　張り線は、信号索は白色のメタルリギング、その他の張り線は0.04号のメタルリギングを使用しました。碍子表現は白色アクリル塗料を極細の筆で置くようにして再現しています。マストの信号索はマストを艦橋に設置する前に取り付けると作業が楽になります。
　ベースはアクリル板を塗装後、KATOの『大波小波』で微細な波を造形します。飛行艇搭載時は停船状態ですので、航跡等の白波は不要です。「秋津洲」は南方で行動することが多かったので、明るめの海色にしてみました。

おわりに

　戦闘艦と異なり補助艦艇は地味な印象ですが、大型飛行艇が甲板上に搭載されている「秋津洲」は他にない特徴があり模型映えします。飛行艇自身も作り込みができますし、整備補給を想定して飛行艇周辺をジオラマのように作り込む楽しさもありますので、ぜひ製作にチャレンジしてみてください。



▲艦橋トップの九四式高射装置はピットロードの装備品セットを使用した。



▲甲板上に並べられた小物類は3Dプリントパーツを使用。木箱の色が良いアクセントになる。



▲二式飛行艇の主翼上面に引かれた歩行帯は白い細切りデカールを貼り込んで再現した。



現用艦ならではの平和的な日常風景を表現する

■海上自衛隊 護衛艦「こんごう」DDG-173

中期防衛力整備計画に基づく昭和63年度計画7200トン型護衛艦2313号として起工され、1993年5月に就役した日本初のイージス・システムを備えたミサイル護衛艦が「こんごう」である。現在は就役から30年を迎え、後継艦が検討されつつある。作例はハセガワ1/700キットを製作。甲板上では音楽隊の演奏とテレビ番組の撮影中の模様を再現している。



ハセガワ 1/700（限定版）
海上自衛隊護衛艦「こんごう」"ハイパーディテール"
製作・文：大谷 貢
HASEGAWA1/700 scale Plasticmodel kit
J.M.S.D.F.DDG "KONGO" HYPER DETAIL
Modeled by Mitsugu OHTANI

現在も親しまれる日本初のイージス艦

護衛艦「こんごう」は日本初のイージス艦であるこんごう型護衛艦の1番艦です。「こんごう」の名を冠する船としては、明治時代のコルベット艦「金剛」、戦艦「金剛」に続く3代目です。1993年に就役して以来、現在も各地を回り、一般公開を通じて多くの人々に親しまれています。

護衛艦「こんごう」を作ります

キットは、ハセガワの1/700『海上自衛隊 護衛艦こんごう "ハイパーディテール"』（限定版）です。大判の専用エッチングが付属し、そのままでもフルディテールアップ相当の完成度になります。「こんごう」には格納庫がありませんが、後部甲板に載せられるヘリコプターSH-60Jが1機付いてきます。

現用艦ならではの演出

本艦の製作にあたり、1/700の人々による艦上演出は、当初より既に決めていました。自衛隊特集のテレビ番組の撮影風景です。自衛隊マニアの芸能人や元自衛隊員の芸能人（をモチーフにした人物）がロケ隊を連れて、「こんごう」の艦上で色々な施設を見学するシーンを再現しています。

芸能人は3人いますが、それぞれモデルにした人物がいます。赤スーツの人物と迷彩服の人物は、何となく見当が付きそうです。一方、青いロングパンツの女性は、当初はちゃんとモデルがいたのですが、全く似ない姿になってしまいました…。

ロケ隊には、様々な道具を持たせました。カメラやマイク、レフ板（円形の白い反射板）、日傘、果てにはカンペ用のスケッチブックまで持っています。

艦橋前の音楽隊は、後から思い付きで追加しましたが、ロケ隊以上に目立ち、本艦のシンボルと言って良いほど見ごたえのある演出となりました。男性隊員と女性隊員で、制服に微妙な差異があるのもポイントです。

テレビ番組の撮影という、私たちの日常の娯楽に直結する題材を艦船模型の演出に使えるのも、現用艦だからこそできることだと感じています。



▲後部デッキでテレビ番組を撮影中のロケ隊。自衛隊ロケではお馴染みの上下赤いスーツを着た芸人、迷彩服でほふく前進する元自衛隊の女性芸人、それに女優の姿が見える。

船体本体

ここからは、「こんごう」本体の組み立ての解説です。こんごう型の写真は豊富にあるため、細部の構造物も可能な限り再現を試みています。

所どころ上手く合わない場所があるため、プラ板等で隙間を埋めつつ、合わせ目を丁寧に処理します。歩廊や張り出し床は極限まで薄く削り、裏側の補強材も追加します。

艦橋構造物

メインの艦橋や後部艦橋には、監視カメラや給油装置等、キットでは省力されている装備品も自作して設置しました。至る所に設置された、赤い消火設備はファインモールドのナノ・ドレッド1/700『WA42 現用艦 浮環・消火設備セット』を使用しました。

TACANを含むマストトップはすべて自作しました。高さが少し足りずに寸詰りになり、本来設置されるはずのVHFアンテナが入らなかったのは心残りです。工期の面から、修正は断念しました。

信号旗箱もプラ板で作り直し、内部に畳んだ旗を再現しました。

兵装類

主砲は純正エッチングパーツに加えて、外殻の継目やリベットを表現し、精密感を高めました。砲身は、マスターの真鍮製砲身に置き換え、下部には薬莢受けも再現しています。

CIWSはキットのパーツを使用し、ひたすら手を加えました。ラッタルや小扉を追加、独特な形の土台を自作する等、苦労しました。素直に別売されている精密パーツに置き換えた方が得策でした。

対艦ミサイルと魚雷発射管はナノ・ドレッドの1/700『WA35 現用艦 対艦ミサイル&短魚雷発射管』に置き換えています。

艦載艇、ヘリコプター

両舷に吊るされた内火艇は、実艇写真を見ながら改造しています。ハンドルは軍艦堂の



レジン製ブレーキハンドルを流用しました。ボートダビットも吊り金具の改造や駆動ワイヤーの再現等、各部に手を入れて精密化しました。
　後部艦橋左舷側に置かれたゴムボート「複合艇」も同様に改造します。舷側のロープは、繋がったままの舷窓庇で代用しました。
　ヘリコプターは、SH-60J を手本に各部を造形し直し、キャノピーのフレームを汎用エッチングパーツで作り直しました。

塗　装

　こんごう型は、全身ほぼグレー１色なので、単調にならないよう陰影のメリハリを付けました。最初に黒い下地塗料を全面に塗布し、陰の部分は控えめに、陽の部分は多めにグレーを塗布することで陰影をつけています。手入れの行き届いた清潔感を出すため、ウェザリングは最小限にしています。
　喫水線付近には、海面の照り返しを表現するため、微妙に陰影が「まだら」になるよう塗装しています。

人　物

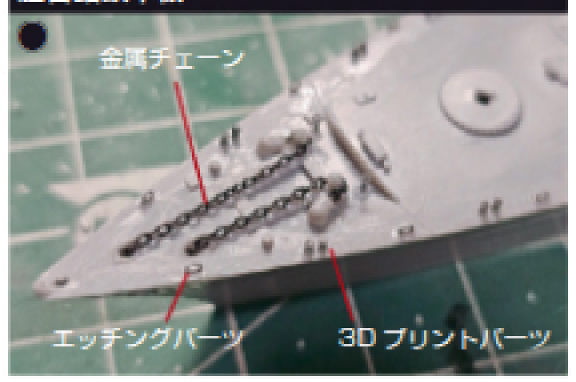
　人物は、和巧の紙製人形『作業員セット』を改造して作りました。少しオーバースケールですが、改造が容易で汎用性が高いため、好んで使用している素材です。
　今回は、1/700 で女性の造形に初チャレンジしました。まずは大まかな横シルエットを切り出し、パテ等で立体化し、銅線で腕を表現しました。不自然にならない程度に女性

Japan Maritime Self-Defense Force DDG
DDG-173 KONGO

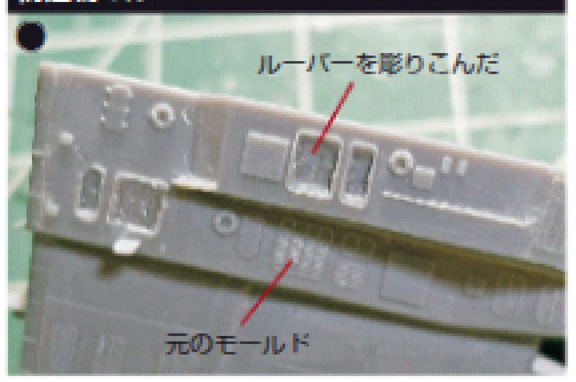


●船体・上部構造物の製作

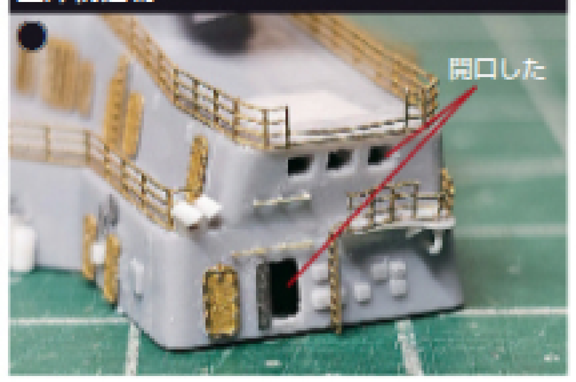
艦首錨鎖甲板



構造物のルーバー



上部構造物



艦橋付近の工作



マスト



艦橋のディテールアップ



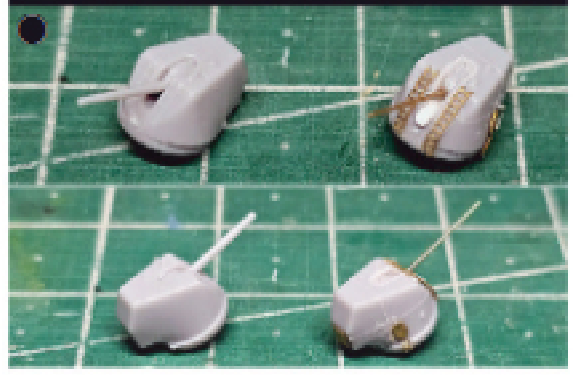
①艦首の鎖は、モノクロームの極細チェーンに置き換えます。ボラードは、軍艦堂の 3D プリントパーツ（駆逐艦用）を流用し、フェアリーダーは「模型工房ボラード」の汎用エッチングです。
②上部構造物壁面にたくさんあるルーバーは、内部の奥行きを出すために少し彫り込んでみましたが、ほとんど効果がありませんでした。
③後部艦橋の最後尾はヘリコプターと共に目立つ部分です。ドアや窓を開口し、監視カメラやジャッキステーを設置する等、ディテールを追加していきます。
④艦橋を船体に組み込む際、一部に隙間が生じたのでプラ材で埋めました。張り出し足場や歩廊は薄肉化またはプラ板で作り換えています。
⑤ TACAN が組み込まれたマストトップは、真鍮線等で自作しています。高さが少し足りず、本来設置されるはずの VHF アンテナが収まりませんでした。
⑥艦橋に取り付けられるものはすべて取り付けた状態です。壁面の細かい箱や監視カメラ等、実艦写真を見ながら取り付けています。

▼大戦時の艦艇と比べると一見シンプルに見える現用艦だが、ディテールの徹底的な作り込みによってここまで精密なモデルに仕上げることができる。

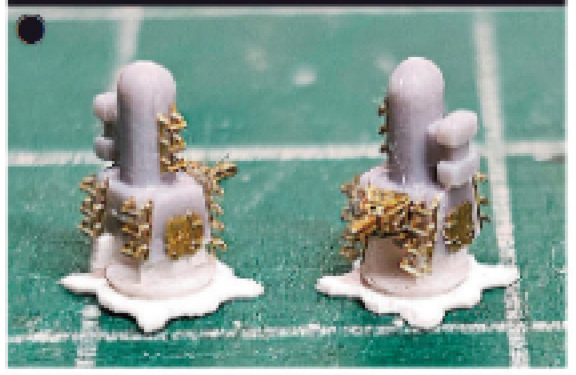


●装備品のディテールアップ

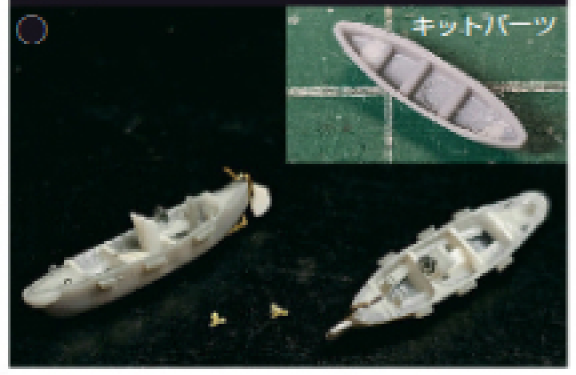
127㎜単装速射砲



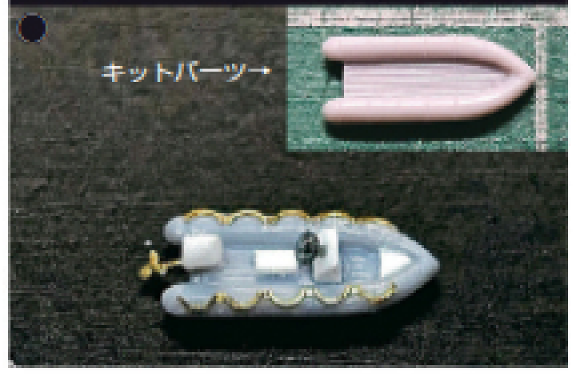
CIWS



内火艇



複合艇



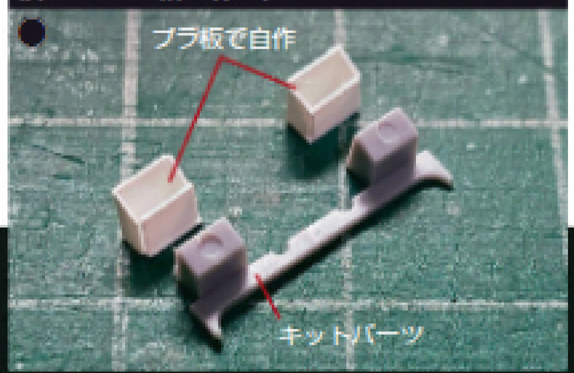
哨戒ヘリ SH-60J



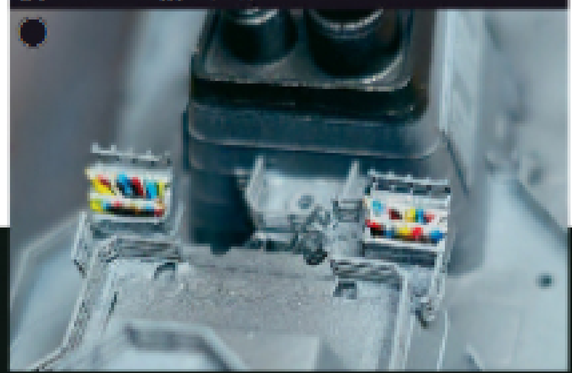
ボートダビット



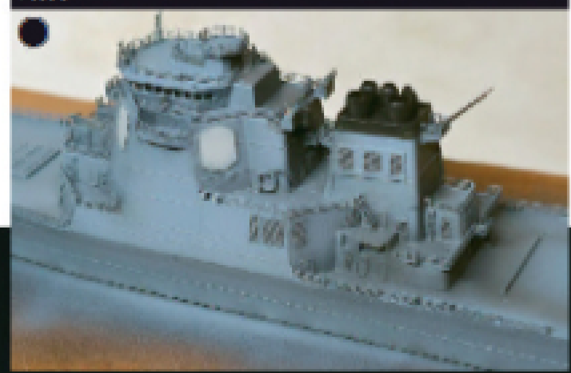
信号旗収納箱を作り直す



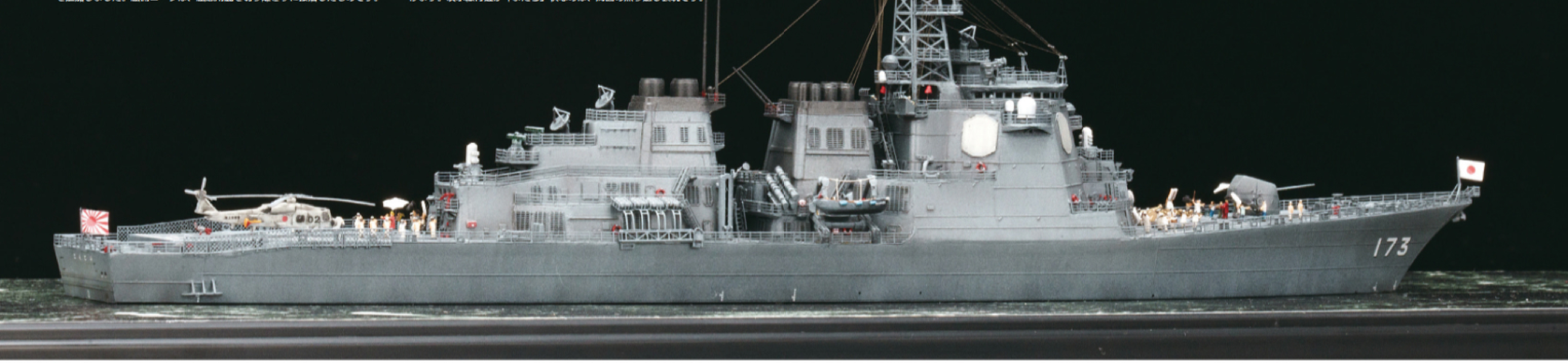
信号旗収納箱の完成



船体の塗装



①主砲の精密化ビフォーアフターです。純正エッチングのほか、継ぎ目やリベットのモールド、薬莢受けを追加しています。砲身もマスターの真鍮製のものに置き換えています。
② CIWS はキットのパーツを頑張って精密化しましたが、ゴテゴテし過ぎてしまいました。素直に精密なアフターパーツを採用するのが吉のようです。
③内火艇の精密化です。防舷材や腰掛板、操縦用ハンドル等を再現しています。２隻の間にある２つのとても小さい三つ葉型のものは、スクリューです。
④複合艇も精密化します。チルトアップした状態の船外機、操縦用ハンドル等を追加しました。舷側ロープは、舷窓用匝を切り離さずに接着したものです。
⑤ヘリコプターは実機写真を見ながら、各部を改造しています。キャノピーのガラスフレームは、汎用エッチングを組み合わせて作り直しました。
⑥ボートダビットの吊り金具が棒状であったので作り換えました。また、側面には駆動ワイヤーも再現しています。
⑦信号旗収納箱は、キットでは四角い塊なので、プラ板を箱組して表現することにしました。
⑧信号旗箱が出来上がった様子です。中には畳んだ信号旗を再現しました。
⑨黒サーフェイサーを塗布してからグレー塗装の濃淡で陽と陰のメリハリを付けます。喫水線付近が「まだら」状なのは、海面の照り返し表現です。



らしいラインを模索するのに苦労しました。

自衛隊員の服装は、女性隊員は上衣を着た姿、男性隊員はいわゆる「シャツイン」の姿にすることで差異を出しました。

女性隊員の場合、脚や胴を極限まで細く造形し、上半身は別の紙で上衣を表現し、銅線を接着して腕を表現しています。一方、男性隊員は、音楽隊は銅線で腕を表現していますが、他の隊員は無改造でそのまま立体化しています。

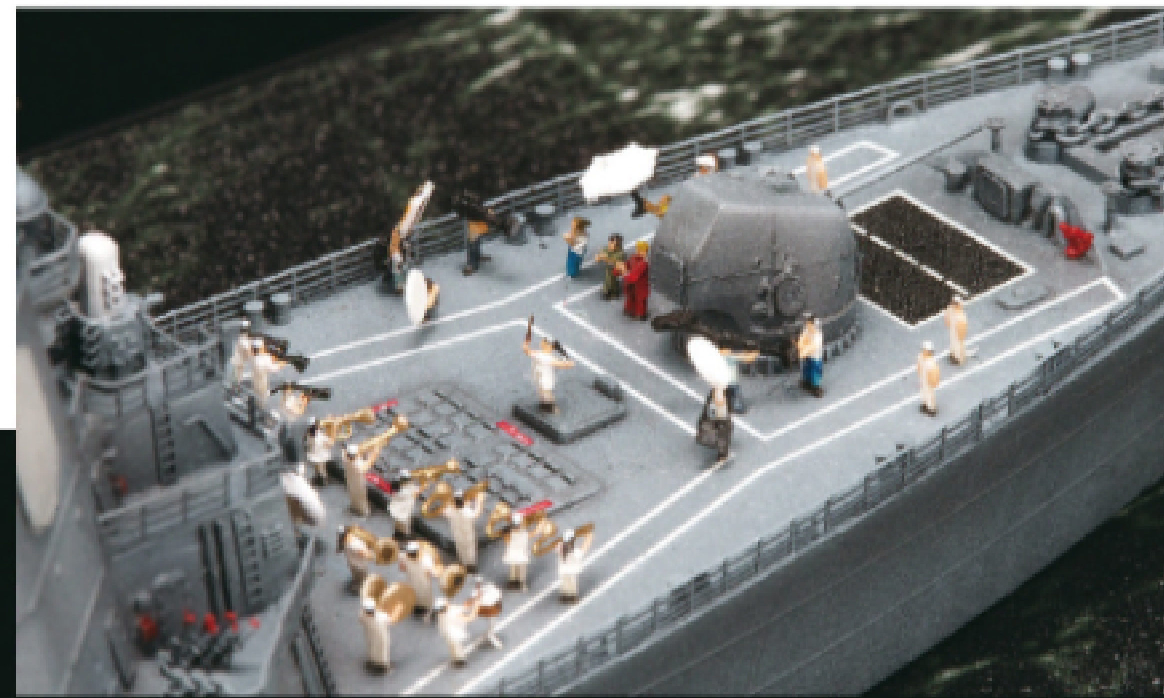
人物用の小道具

今回の小道具は、実にバラエティに富んでいます。音楽隊の楽器は、すべて真鍮線や銅線、汎用エッチングパーツで作っています。例えばトランペットは、真鍮線の先にパテを玉状に付け、乾いた後に先端を切断してラッパ部分を造形します。ループ部分とピストンバルブは、錨鎖エッチングのθ型部分を接着することで、まとめて表現しました。楽器は全体的にオーバースケールですが、スーザフォン（白い大きな管楽器）はさすがに大きすぎでした。

ロケ隊の小道具もすべてプラ材等で自作です。日傘は、八角形に切り出した折り紙を加工して作りましたが、立体的にする際に七角形になってしまいました。カンペ用のスケッ



▲▼艦首デッキでは音楽隊による演奏が行われている。楽器はすべて金属線等で自作したもの。後部デッキにいたはずのテレビ番組のロケ隊がここにも見える。番組制作スタッフのレフ板やカンペ用のスケッチブック、日傘、撮影用のテレビカメラ等の小物にも注目。







▲各種レーダーや通信設備を備えたマストは現用艦モデルの精密感を演出する重要な部分。純正エッチングパーツと真鍮線等の金属材料を組み合わせながら組み立てた。

チブックは、一目でスケッチブックとわかる、お馴染みの模様・色合いにしました。

甲板演出

いよいよ人物と小道具を配置します。まずは音楽隊ですが、これだけの人数が収まる場所がなかなか見つからず、結局艦橋と VLS の間のやや危険な場所での演奏となってしまいました。

ロケ隊も配置していきます。主役となる芸能人３人の位置を決めたら、カメラやマイク、レフ板等を配置します。スタッフが女性芸能人に日傘をさし向けていますが、この日傘が意外と邪魔で、芸能人たちを鑑賞しにくくしてしまったのがやや残念です。

艦の前部では、音楽隊の演奏に拍手している様子を、艦の後部では敬礼する隊員たちに迎えられつつヘリコプターと対面する様子を現しています。芸能人のうち迷彩服を着た１人が、なぜかほふく前進のまま隊員に挨拶しています。きっと挨拶は元気の良い「はい～！」でしょう（笑）。

製作を終えて

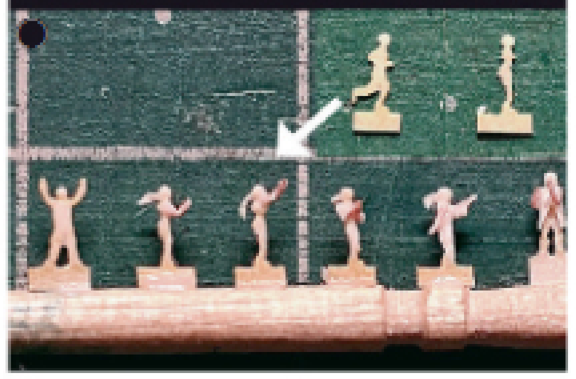
これまで私は第二次世界大戦中の艦艇を中心に作ってきましたので、本作は初めての現用艦でした。当初は、昔の船と異なるノッペリした姿に戸惑いましたが、完成してみるとその巨躯のような迫力と格好良さに気づき、現用艦特有の魅力が分かった気がしました。また、艦上演出も「音楽隊の演奏」と「テレビ番組撮影」という新たな方向性に挑戦してみました。1/700 という小スケールにつき細部の表現には限界がありましたが、お楽しみいただけましたでしょうか。

最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。

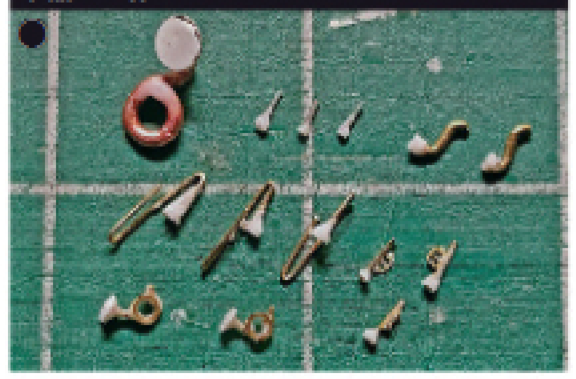


●人物・小物の製作

人物



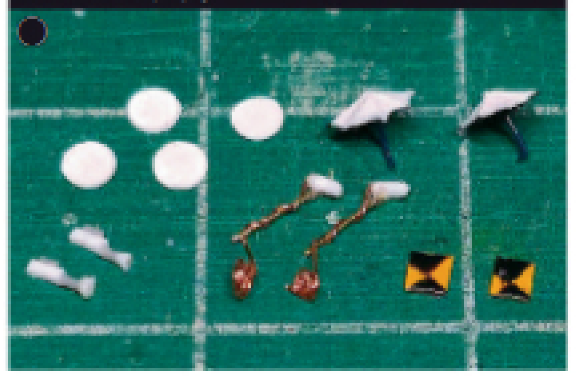
楽器の自作



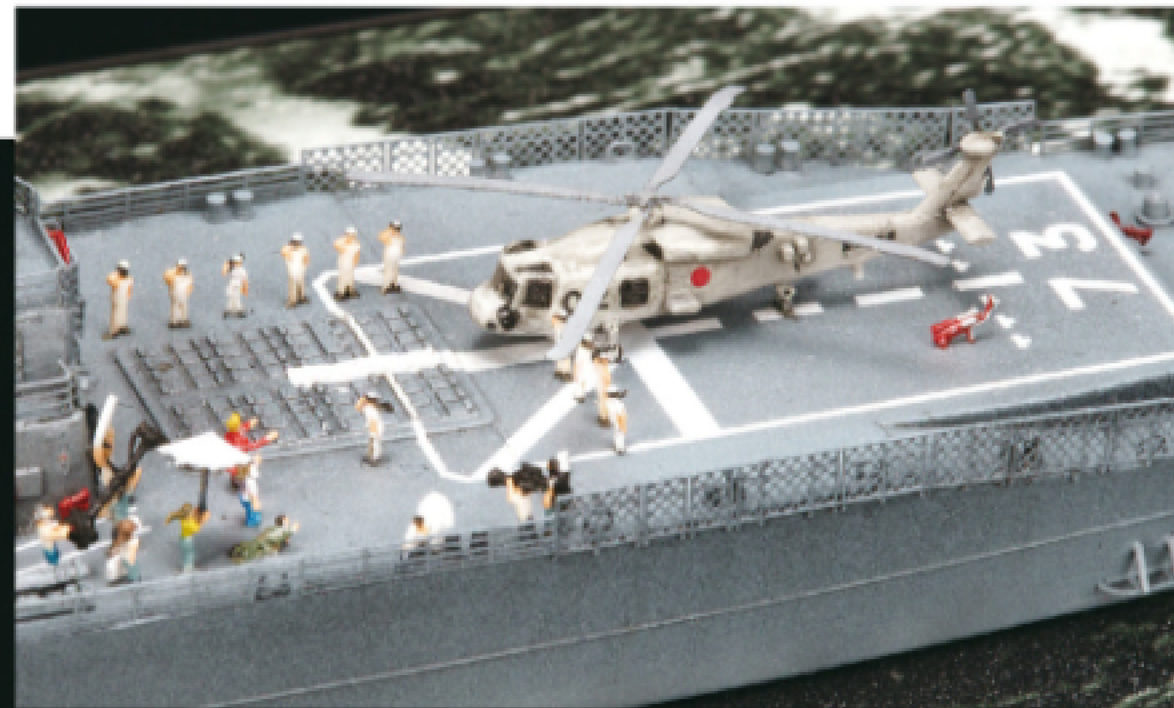
音楽隊



ロケ隊の小道具



①人物は和巧の紙製乗組員を改造しました。女性フィギュアは、大まかな側面シルエットを切り出してから立体化しました。一方、男性は無改造でそのまま立体化しています。
②音楽隊の楽器はすべて自作です。いずれも真鍮線や銅線、汎用エッチングを組み合わせて楽器らしく見せています。この写真では、トロンボーンとサクソフォンが大きすぎたので、後に作り直しました。
③人物に楽器を持たせて音楽隊が出来上がりました。女性隊員は上衣を着た姿、男性隊員は「シャツイン」の姿にする等、服装に差異を付けています。スーザフォン（白い大きな管楽器）が、やたらと大きすぎましたね。
④テレビ番組ロケ隊の小道具です。カメラにマイク、日傘、白いレフ板、そしてカンペのスケッチブックを自作しています。



▲飛行甲板の様子。SH-60J 哨戒ヘリコプターはキャノピーフレームをエッチングパーツで作り直した。



こんごう型搭載の 127㎜速射砲 砲撃の瞬間を切り取る

■護衛艦こんごう型 54 口径 127㎜単装速射砲

海上自衛隊の護衛艦たかなみ型、こんごう型の主砲として装備されているオート・メラーラ 54 口径 127㎜単装速射砲（コンパット砲）は、イタリア海軍マエストラーレ級フリゲートをはじめ、ドイツ海軍、オランダ海軍等の世界中で採用されている速射砲である。作例はフジミの集める装備品シリーズの 1/70 キットを製作。キットは砲塔本体と簡易的なベースのみなので、周辺の甲板を自作して護衛艦「こんごう」の砲撃シーンを再現した。



フジミ 1/70
護衛艦こんごう型 54 口径 127㎜速射砲
製作・文：近藤 靖
FUJIMI1/70 scale Plasticmodel kit
J.M.S.D.F.Naval Gun 127/54 Compact
Modeled by Yasushi KONDO

オート・メラーラ 54 口径 127㎜速射砲

1970 年代に配備され始めたイタリアのオート・メラーラ社が開発した強化プラスチック製シールドで覆われた軽量の砲塔で、31㎏の砲弾を最大 23㎞先まで飛ばすことが可能です。有効射程は水上戦闘時には 15000m、対空戦闘時は 7000m となります。俯仰範囲は -15 度～ 83 度です。

砲弾は甲板下で給弾されてマガジンドラムに装填され、発砲後の薬莢は砲身下側から甲板にバラバラと放り出されます。砲身は水冷式で、汲み上げられた海水を使って発射直後に砲身内を冷却、次弾発砲までの短い時間を使って冷却する仕組みになっています。

製作のきっかけ

いまや最新型とは言えない今回の速射砲ですが、海上自衛隊のこんごう型イージス艦や、かわぐちかいじ氏原作のコミックやアニメ『ジパング』にも登場し、その高性能ぶりが表現されていたことからファンも多く、とても有名な砲塔と思います。私が実物を見たのが 2023 年の海上自衛隊横須賀基地で開催されたオータムフェスタで、護衛艦「まきなみ」がこの砲塔をデモ稼働させていました。油圧で動くので「ゴゴゴ」の感じでは無く、「ブーン」という軽快な作動音が会場に響き渡っていたのが印象的でした。

動画サイトで「127 ミリ速射砲」で検索して発砲シーン見ると「バァン…ガラララン、バァン…ガラララン」と発砲音の 1 秒後位に大きな薬莢が甲板に落ちる金属音が響き、その直後に次弾が発砲され、1 分間で 45 発の発射速度のリズムが面白いと感じました。

このキットはパーツも少なく、比較的作りやすいので製作された方は多いかもしれませんが、過去の作例でも本体にウェザリングを施したシンプルな作品が多く、このスケールを生かしたジオラマにしたいと考えました。

製作準備

今回は砲塔本体、甲板及び船体、VLS 装置、発砲エフェクトの製作、海面の取り付けの順番で完成させることにしました。

キットは護衛艦たかなみ型とこんごう型が発売されています。この砲はやはりこんごう型イージス艦搭載のイメージが強く、「こんごう」の甲板上での発砲シーンとしました。そうなると、発砲している資料を集めることが重要となるのですが、調べていくと「砲弾が飛び出した瞬間」の写真がいくつかありました。

砲塔本体

キットは 1/70 と珍しいスケール設定で、なぜこのスケールになったのか不明です。パーツ点数は 47 点と少なく、組み立てるだけならば短時間で製作可能です。

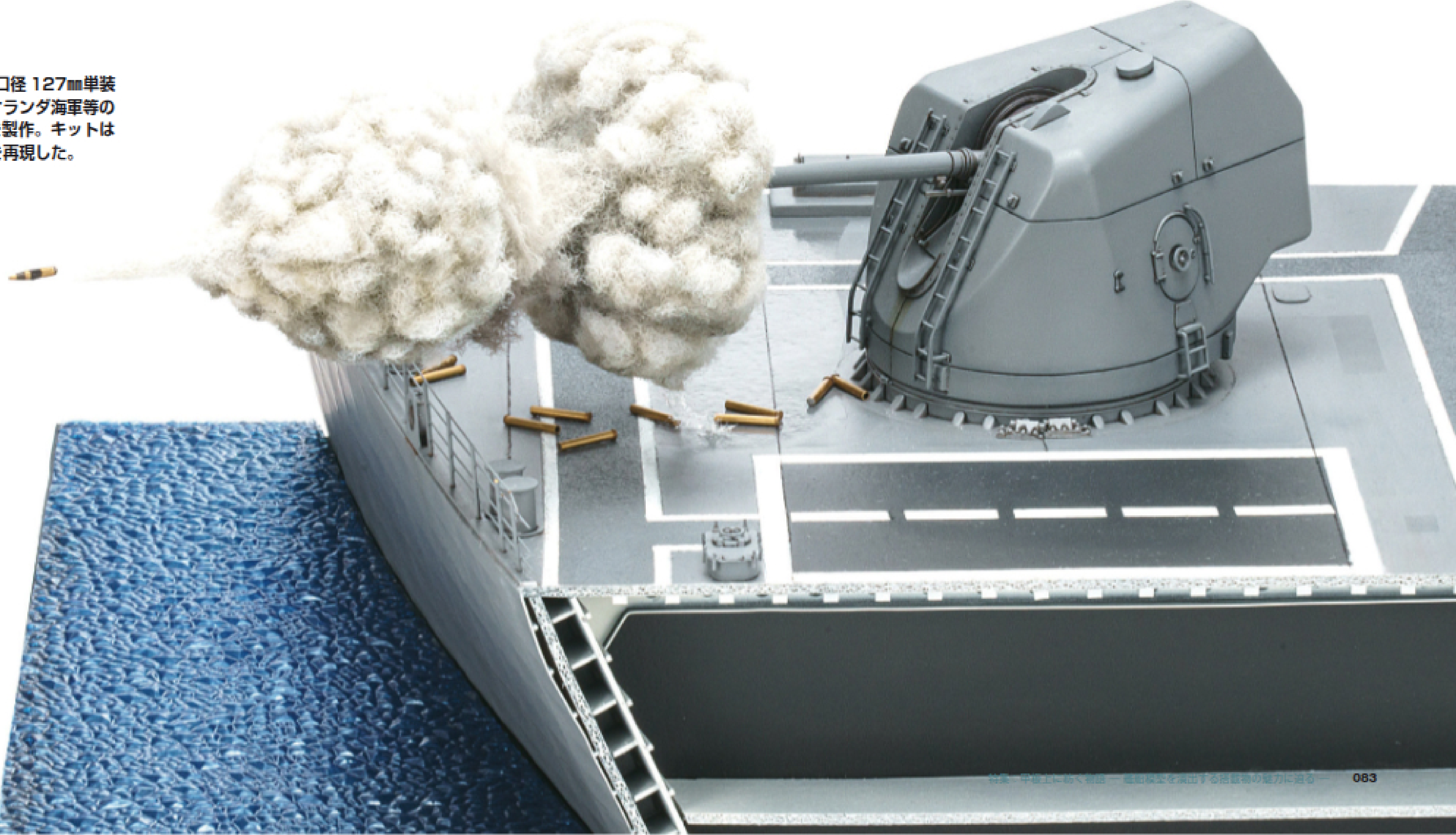
曲面で構成されたスタイルは、現代の直線中心の船のデザインの中で柔らかさを感じることができるので、個人的にも好きなデザインです。

今回は素組みで完成させたのですが、パーツの合いは完璧でストレスはありませんでした。作り替えたパーツは砲塔両脇にあるメンテナンス用のアクセスハッチの円形ハンドルです。円形のパーツを自作するのは苦手なので、キャラクターモデル用の円形ノズルパーツを使ってサイズ合わせをし、真鍮棒を瞬間接着剤で整形、固定しました。

塗装は GSI クレオス Mr. カラーの海上自衛隊護衛艦カラーである C607 2704（灰色、N5）とし、天蓋部分は塩マスキングを使って斑な退色感を入れてみました。

▼全景。フジミ 1/70 127㎜速射砲を製作、その周辺をプラ材等で自作した。発泡煙は水槽フィルターを加工して表現。砲身先端からは発砲と同時に冷却水が放出されて甲板上に流れ出している。

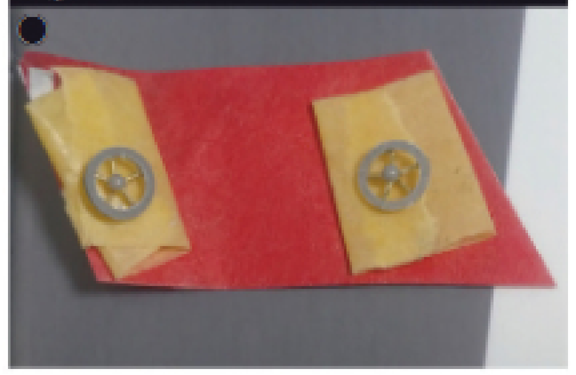




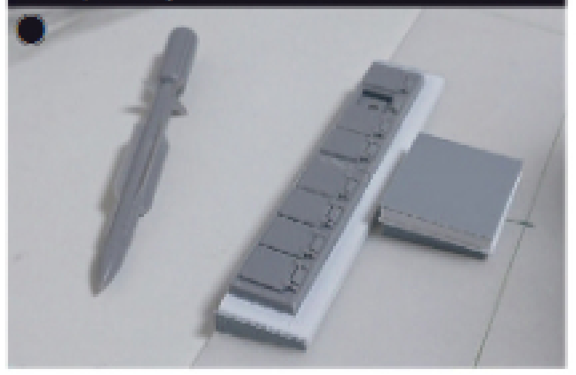
Oto Melara 127㎜ Gun

●製作ポイント

円形ハンドル



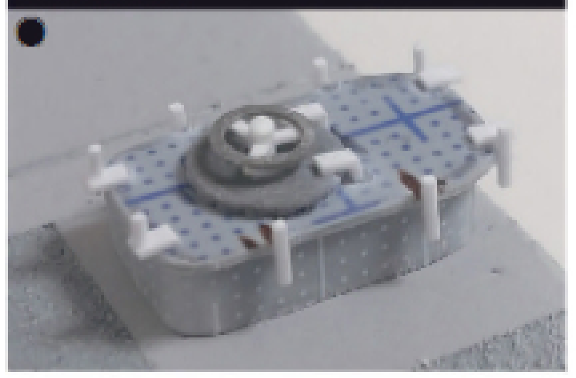
VLS 発射装置



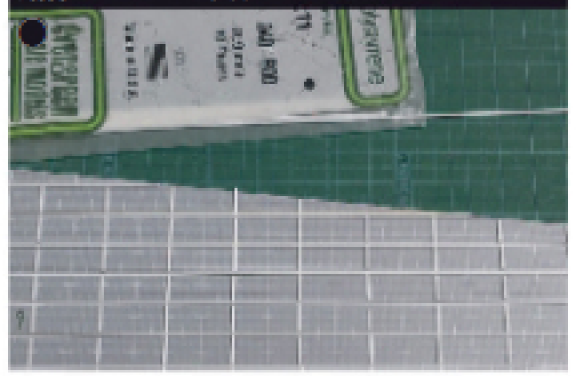
フェアリーダー



アクセスハッチ



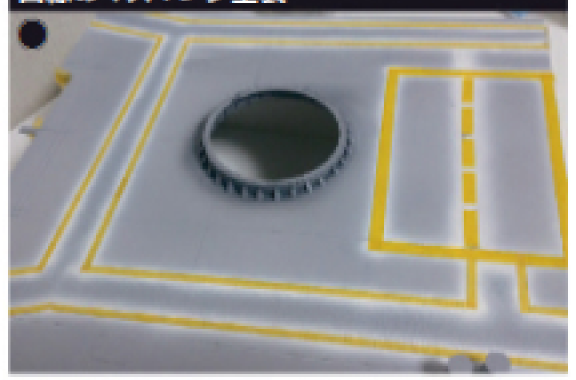
船体の痩せ馬を表現



歩行帯



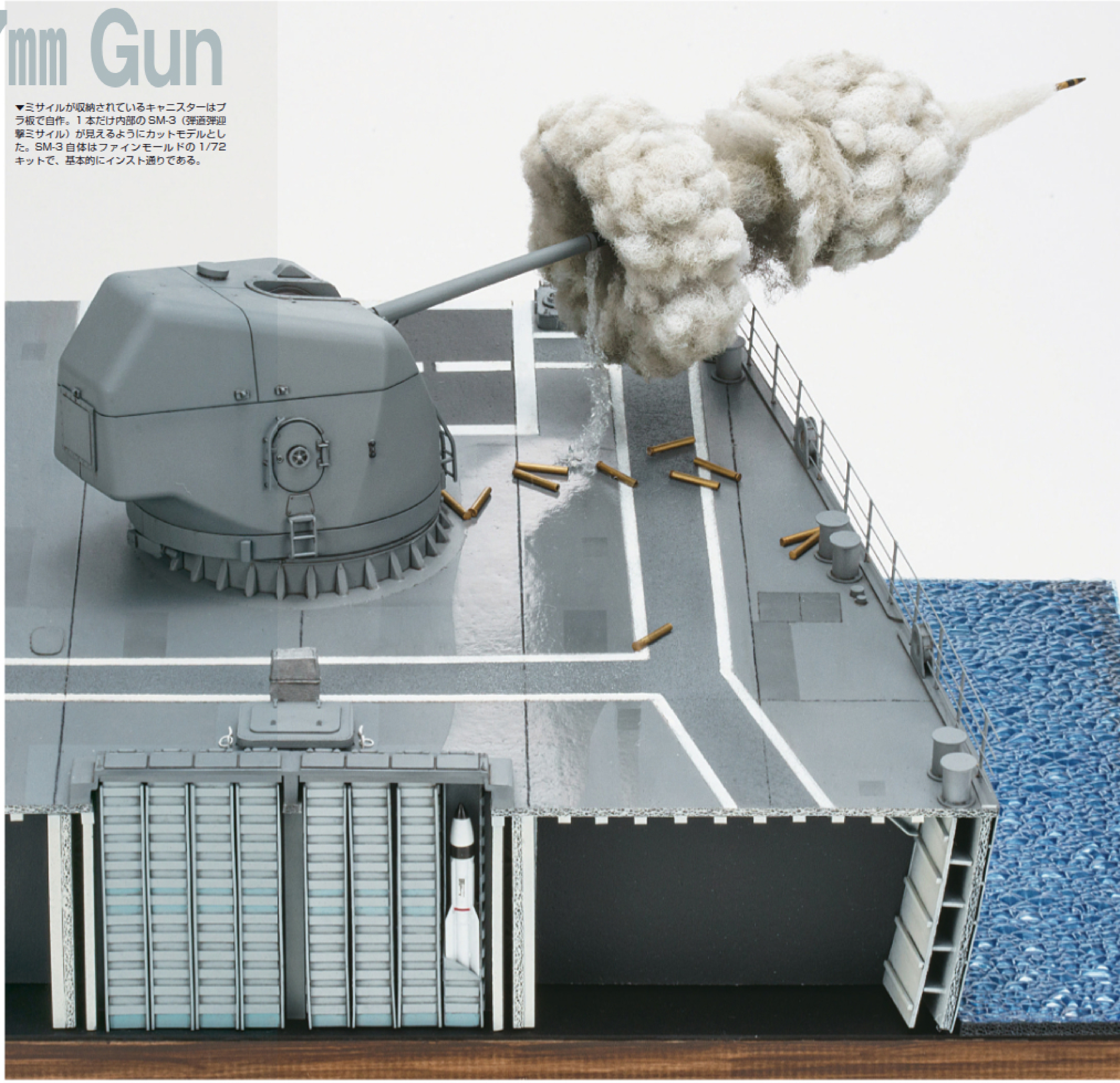
白線のマスキング塗装



発砲煙の芯材



①扉に付く円形ハンドルが一体モールドだったので、キャラクターモデル用の円形パーツを活用して立体的に作り直した。0.3㎜径の真鍮棒を星型に組み、真ん中に0.7㎜径の丸棒を接着した。
② Mk41VLS 発射装置はファインモールド 1/72「弾道弾迎撃ミサイル SM-3」に付属するパーツを加工し、甲板に取り付けた。「こんごう」の前甲板は艦首に向かって上り坂になっており、海面から垂直に設置することを考慮して水平に取り付けるべく、基部には斜めになるようにプラ板を取り付けている。
③甲板の舷側側に設置されているフェアリーダー等の装備品は、実際の船舶装備品を製造している企業のカタログ等で形状を確認して、スケールダウンして作ってみた。
④艦内へのアクセスハッチ。実際の資料写真を参考に方眼スケール付きのプラ板やプラ棒を用いて自作。全体のバランスを調整して作っている。
⑤舷側鋼板部分の裏側には 1.0㎜径のプラ丸棒をプラ用接着剤で接着した。これで現用艦の波打ち鋼板を再現した。
⑥戦闘通路の滑り止めのザラザラ表現にはアサヒペンのストーン調スプレーを活用した。ジオラマ製作には重宝する資材である。噴射圧が強めなので試し吹きは必須。
⑦白線の塗装準備写真。白線を引くために予め概ねの白線を塗装しておき、マスキングしてから甲板色で塗装すると白線が残るという段取りで塗装した。白線は真っ白だと浮き立ってしまうので、明るいグレーを使用している。
⑧発砲煙の芯になるものは無いかと探し回って、百円ショップで見つけた「ジャンボスポイト」なる商品。大きさはピッタリ、透明でかつ、加工がしやすいのが決め手になった。



▼ミサイルが収納されているキャニスターはプラ板で自作。1本だけ内部のSM-3（弾道弾迎撃ミサイル）が見えるようにカットモデルとした。SM-3 自体はファインモールドの 1/72 キットで、基本的にインスト通りである。

甲板ベースの製作

今回は船体のカットモデルになりますので、ベースの製作はどの範囲を切り取るのかがポイントになります。経験的に大き過ぎるのは取り回しが悪く、最終的に30×30㎝としました。

そしてピットロードの1/350「こんごう」のインストに描かれていた上面図を参考に前甲板右舷側を切り取ることで、甲板上にはハッチやボラード、フェアリーダー、戦闘通路、ヴァートレップ甲板、VLS発射基部、手摺りを配置することで「こんごう」であることを表現することにしました。

まずはボラードです。基本的には実物写真を参考にしますが、一般船舶の装備品を製造している企業のカタログ数値を参考に詳細なバランスや大きさを見ていきました。ボラード自体はウェーブの丸パイプを切断するだけの作業ですので簡単です。上部には円形プラ板を接着しています。

フェアリーダーも同様に製作しました。曲面が組み合わされた複雑な形状なので、ウェーブのプラ・プレートとプラパイプを組み合わせ、隙間を瞬間接着剤で埋めることで強化と最終的な整形を行いました。実物は接舷用のロープがスムーズに通るように曲面が多いのが特徴なので、それを再現のポイントとしています。

仕上げはスポンジヤスリと紙ヤスリ、スティックヤスリを鋭角部分と曲面部分を出すために使い分けています。また、最後に実物同様に補強材部分も再現して完成とし、甲板に取り付けました。

右舷甲板上に設置されている艦内へのアクセスハッチは実物写真を見て大きさを推定し、プラ板を使って製作しています。

次はMk41VLS発射装置の甲板部分の製作です。キットはファインモールド1/72「弾道弾迎撃ミサイルSM-3」の付属パーツを使用しました。「こんごう」の前甲板には29セル（基）が設置されていますが、キットには2×4列に並んだ8セルが用意されているので、これを前寄りの1列8セルの状態に加工して甲板に取り付けました。後ほど内部再現の工作をするので、甲板上でのバランスをチェックしました。なお､「こんごう」の前甲板は艦首に向かって約5度の上り坂になっており、この傾斜も考慮して水平に取り付けられているように発射装置の甲板部は整形しています。

塗　装

本格的な塗装の前にマスキングをして戦闘通路（歩行帯）独特の荒い粒子が混ぜられたザラザラの表現をアサヒペンのストーン調スプレーを使って表現してみました。これは大きめの粒子が混ぜられたストーンテクスチャーとなるので、私は飛行機の滑走路表面の製作にも使っています。とても噴射圧が強いので、遠目で何度か吹き付けるくらいで調整すると良い感じに仕上がります。

戦闘通路の塗装ですが、予め概ねの白線を塗装しておき、白く塗装した部分をマスキングして甲板色で塗装すると白線が残るという段取りです。白線は真っ白では無くC311グレーFS36622を使いましたが、見た目は完全に白線です。また、ヘリからの資材投下に使われるヴァートレップ甲板も同様の手順で白線を引きました。





今回の模型は艦船模型としては1/70と大型スケールなので、若干演出的な塗装もしています。ほぼ同じグレーで全体が覆われている部分を模型として表現しているので、単調な塗装となることは避けられません。そこで情報量を増やすために、甲板の基本色の上に甲板上にC608暗灰色2705（N4）でタッチアップの跡を付けました。甲板は常に直射日光に晒されていることから退色は白くなることを前提に、タッチアップしたと見せる部分は少し濃いグレーとしました。余談ですが海上自衛隊では塗装のことを「塗粧」ということもあるそうです。

艦内部分 Mk41VLS

「こんごう」は2007年、米軍以外としては初めて弾道弾迎撃ミサイルSM-3によって高度160㎞を飛行するミサイルの迎撃演習に成功した艦艇となりました。前述のとおりファインモールドの1/72キットを使って甲板部は再現していますが、カットモデルとして内部も簡易的に表現してみました。Mk41VLSは8セルを1ユニットとして装備されており、それぞれのセルにミサイルを収納した長い箱状のキャニスターが垂直に収められています。全弾がSM-3では無いと思いますが、1本のキャニスターをカットモデルにしてSM-3の弾体が見えるように収納しました。実際の運用ではどのように収納されているのかは当然分かりませんでした。

発砲エフェクト

最後の製作は速射砲から発射される砲弾と発砲時の煙です。こうすることで躍動感を出したいと考えていたので、可能な限り実物の瞬間写真を参考にすることにしました。

発砲煙自体はコシの強い水槽フィルターを使うことを決めていましたが、砲塔に対しても大きめでかつ芯のあるしっかりとしたモノを作らなければ自重に耐えられず、固定ができないことを心配しました。そこで100円均一ショップで見つけた「ジャンボスポイト」なる商品に目を付けました。これを切断して黒色に塗装し、2つの煙の塊の芯として前述の水槽フィルターを瞬間接着剤で貼り付ける作業を行いました。瞬間接着剤を使うのは作業スピードを上げるためです。

概ねの形状が完成したら、次に参考にした写真の内側から沸き立つ細かい煙の盛り上がりをフィルターを小さく丸めて外側から取り付けていくことで全体を整えていきました。塗装前提なので瞬間接着剤で固定しながらバランスを見ました。

この煙エフェクトに砲身から伸ばした真鍮パイプと先端に取り付けた手芸用の針を繋げて、先端に丁寧に塗装した弾体を取り付けました。

発砲時には色々なことが甲板上で起こります。そのひとつが発砲後の砲身下からの空薬莢の排出で、甲板には薬莢が散らばります。また発砲時には海水で砲身を冷却させる必要があるため、砲身の先端近くには冷却水排水孔があり、甲板上にそのままザーッと排水されます。これがかなりの量で甲板の傾斜と艦首側からの風で水浸しになる程で、これらの水も再現しています。甲板の排水はマスキングの上、光沢のC46クリアー（透明）を吹いて水表現としました。

最後の海面です。海面から甲板までの高さは不正確ですが、海面表現シートを使って製作しました。

最後に

今回は発砲エフェクトを加えることで躍動感を出してみました。エフェクトは効果的に製作できれば作品が引き立ちますが、その分ハードルが高まるのが難しい点です。速射砲本体は短時間で完成しましたが、全体の完成までには何回もの試行錯誤も含めるとそれなりの時間を費やすことになりました。しかし、オリジナルのジオラマ作品を作ると色々な知識を得ることができます。今後も楽しい製作を続けていきたいと思います。

大和
YAMATO

空前絶後の超絶キット再び
今度は就役時の「大和」を立体化





ポントスモデル 1/700
日本海軍 戦艦「大和」就役時仕様
製作・文 / 宮﨑日出雄

NEW KIT REVIEW

ディテールアップパーツメーカーとして勇名をはせるポントスモデルがリリースしたオリジナルのプラキット 1/700 戦艦「大和」1945 天一号作戦時から早３年。今度は就役時がモデル化された。以前に月刊『モデルアート』誌上で天一号作戦時の作例を製作した宮﨑氏が、再びこの超精密キットに挑む。

はじめに

韓国のポントスモデルが満を持してリリースしたボリューム満点のキットです。2021年に発売された 1/700『日本海軍戦艦「大和」1945 天一号作戦仕様』に手を加え、新造時の姿を上手く再現しています。箱を持った瞬間に感じる独特のズッシリとした重さは相変わらずで、エッチングパーツシートが４枚、その他金属挽物で精密に再現された数々のパーツで構成されます。樹脂パーツよりも、エッチングパーツが主役のキット構成です。

キットについて

今回作例用に用意されたキットは極初期の試作生産ロットということですが、量産ロットでは解決済みの改善点がいくつかあるようです。その部分を踏まえた上で、ストレート製作した時のポイントや注意点等を紹介していきたいと思います。

製　作

まずキット製作にあたり精密ピンセットを複数種類（先端のピンが極細 / 超極細タイプ、それに細いが剛性があるタイプ）用意することをお薦めします。先に紹介したとおりエッチングパーツシートが４枚同梱されていますが、非常に微小なパーツ折り作業が要求されます。多少金額は張りますが、製作のストレス軽減にもなりますし、何より部品紛失のリスク低減にもなります。

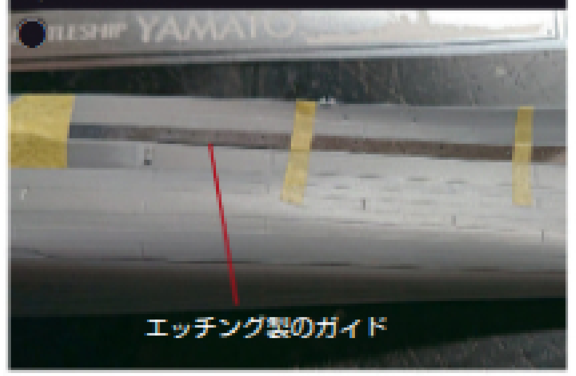
加えて金属挽物を切断するペンチ、エッチング用ニッパーや金属ヤスリ（ダイヤモンドが削り面に含有されているタイプ）の準備も必要です。エッチングパーツの切り出しが多いため、カッターの替刃も十分に準備した方が良いです。ちなみに作者はデザインナイフ替刃ケースを３個消費しました…汗

船　体

まず船体を組む前に、舷窓の穴を付属のエッチング製ガイドを使って開口していきます。ガイド穴は約 0.3㎜径です。最初に 0.3㎜径のドリルであたりをつけて、さらに 0.6㎜径のドリルで穴を開けます。組み立て図面では 0.5㎜径ドリルを使う指示となっていますが、舷窓パーツの穴径が 0.5㎜より若干小

●戦艦「大和」就役時の製作ポイント

舷窓のガイド



舷窓の開口



船体の合わせ



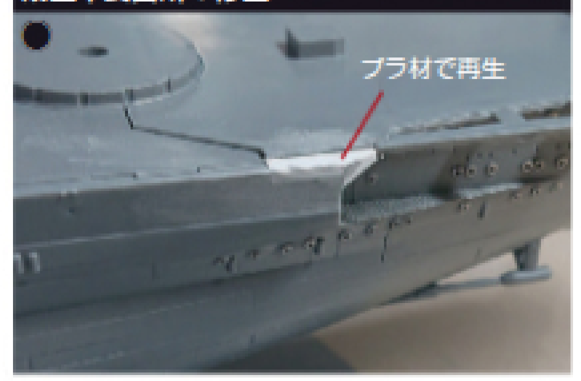
補強桁材の加工



艦首内側の削り込み



成型不良箇所の修整



①船体の舷窓はキット付属のガイドパーツをあててドリルで開口する。位置がずれないようにマスキングテープで固定すると良い。
②ガイド穴に合わせて 0.3㎜径のドリルで開口する。ガイドを外してから任意のの大きさに拡げる。作例では 0.6㎜径とした。
③左右分割の船体パーツを合わせたところ隙間が開いてしまうことが判明。
④そこで補強桁パーツの接着面を削って調整する。干渉しそうな箇所を見極めて、なるべく密着するようにしておきたい。
⑤艦首は内側の肉厚な部分を削ることで合わせが改善する。
⑥船体パーツ左舷の舷外装載艇格納口に湯回り不良があったので、プラ材を接着、削り出すことで再生した。

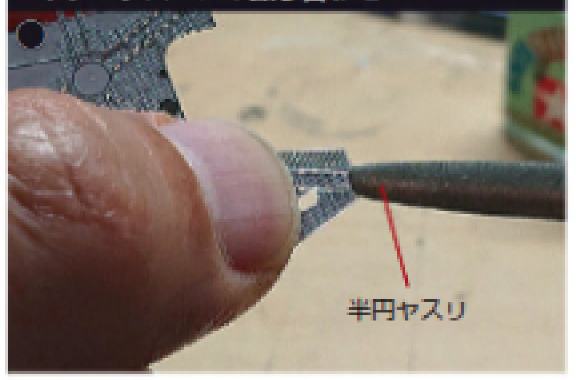


●戦艦「大和」就役時の製作ポイント

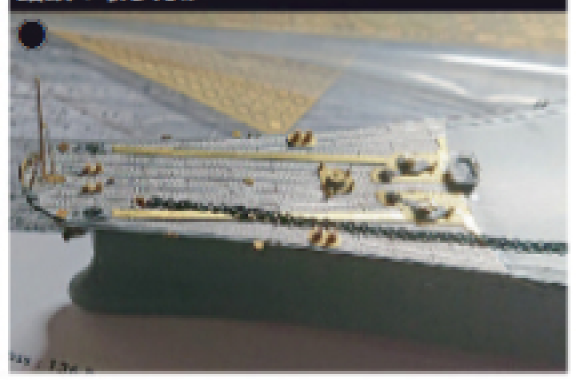
航空機搬入口



エッチングパーツの擦り合わせ



錨鎖の取り付け



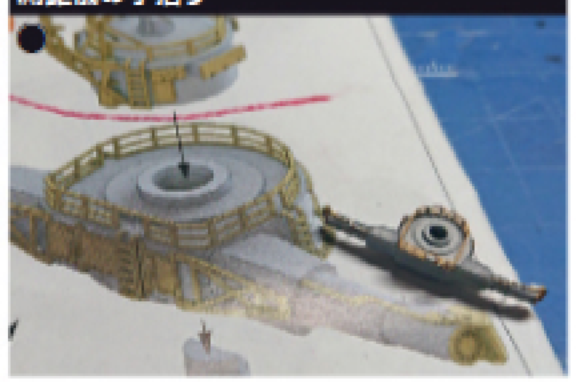
艦橋の合わせ目処理



信号機甲板

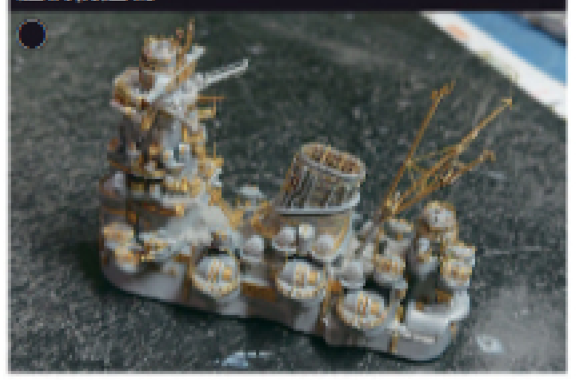


測距儀の手摺り



①航空機搬入口は周囲に隙間ができるので埋めた。
②プラパーツとの合わせをヤスリがけして調整する。ヤスリがけの際にエッチングパーツが歪まないようにしっかりと保持しておく。
③錨鎖甲板の様子。錨鎖はキット付属の金属チェーンで再現可能。
④艦橋の左右パーツを合わせた際に生じたわずかな隙間には 0.1㎜厚のプラペーパーを挟んで修整した。
⑤信号機甲板のエッチングパーツは微妙にサイズオーバーなようなので、周囲を少しずつカットして調整した。
⑥測距儀上部に取り付ける手摺りは長さが足りない。外周に沿わせるのは諦めて側面を直線的にすることで長さを稼いだ。

艦橋構造物



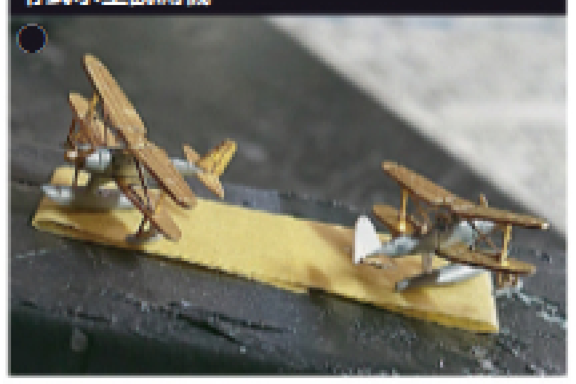
煙路仕切り板



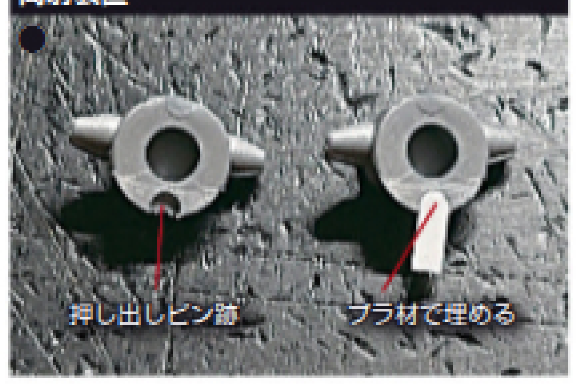
ボートダビット



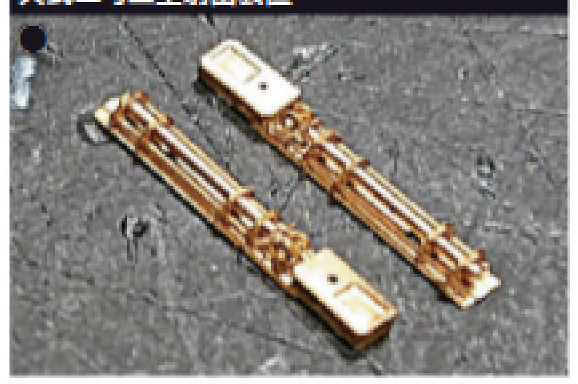
零式水上観測機



高射装置



呉式二号五型射出装置



①組み立てを終えた艦橋構造物。プラパーツは必要最小限のモールドで、ディテールはエッチングパーツや真鍮挽き物で追加していく構成。
②煙突内部に仕込む仕切り板のエッチングパーツはプラパーツと干渉するので短くカットした。
③ボートダビットの支柱は真鍮パーツが付属するが、調整のしやすさを優先してプラ製自作パーツに置き換えた。
④零式水上観測機の主翼はエッチングパーツで薄く仕上がる。
⑤ 94 式高射装置のパーツは押し出しピン跡が外観に影響を与えているので、プラ材を接着して整形した。
⑥トラス構造の隙間から見えるカタパルトの内部も再現される。

▼2021年に発売されたポントスモデル 1/700 日本海軍戦艦「大和」1945 天一号作戦（月刊『モデルアート』2022年7月号掲載作例・製作：宮崎日出雄）との並び。就役時は最終時に比べて機銃が少ない分だけ組み立ては楽かと思えたが…やはり一筋縄ではいかない歯ごたえ十分のキットだったようだ。



さい気がしたので、今回は0.6㎜径のドリルを使いました。

船体パーツは左右分割方式です。両パーツの間に取り付ける補強パーツは若干サイズが合っていないようで、組み立て後に船体パーツ接着面で少し隙間が発生します。補強パーツの接着面を削って隙間を極力無くします。最後に残ったわずかの隙間には、0.1㎜厚プラペーパーの細切りを植え込み修正します。

今回は極初期試作ロットということで、船体左舷の舷外装載艇格納口が湯まわり不足で成形不十分な箇所がありました。こちらは当該箇所を切り取ってプラ板で成形し直しています。

上甲板

このキットの特徴はプラパーツは非常にアッサリとしたもので（素体・芯の扱い）、その表面にエッチングパーツでディテールを追加していくというものです。プラパーツとエッチングパーツ間の設計精度の緻密さが必要ですが、この点はちょっと甘い気がします。例えば後部甲板のエッチング（S84）をプラパーツ（B28）に取り付ける際もかなりタイトな接着となり、特に短艇格納路内の箇所では少々ヤスリがけによる調整が必要でした。逆にエッチングパーツ同士の取り付け精度は非常に高く、飛行甲板（S17）へガイドレールを取り付ける際はピッタリと位置が決まり気持ち良い位です。

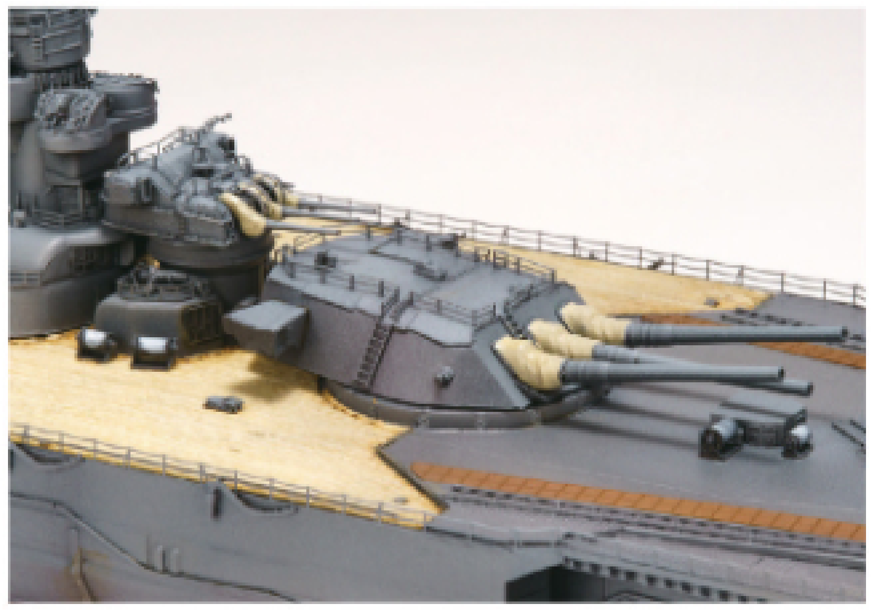
飛行機作業甲板のプラパーツ（B5）ですが、接着方法が悪かったのか船体中心線から左舷寄りに若干ずれてしまいました。結果、甲板裏側、舷外装載艇格納口の補強材エッチングパーツについて、左舷側は船体との間に隙間が生じ、逆に右舷側ははみ出し防止策として削る作業が必要となりました（反省）。

ボラードやホーサーリール芯は金属挽物で複数種類のサイズが準備されています。最初に組み立て図と比較して必要個数があるか確認、その後はプラケース内に分別保管した方が効率的です。

木甲板シートですが、ちょっとプラパーツとずれている箇所が散見されます。特に主砲バーベット部と干渉する点は残念でした。バーベット部で干渉する甲板シートを切り取ったり、逆にシートの余白を使って隙間を埋めたりしています。上部構造物パーツを取り付ける際もシートが若干干渉しました。瞬間接着剤を使ってシート干渉部上に構造物を取り付けています。

艦 橋

船体同様に舷窓用の穴を開口します。艦橋基本パーツのC10～C9接着時に少々隙間が生じますので、0.1㎜厚のプラペーパーで埋めています。組み立て後の艦橋を上部構造基礎パーツC1に接着する際も隙間が生じますので、同じくプラペーパーの細切りで隙間埋めします。



▲46㎝三連装砲は砲身基部の防水布パーツ（3Dプリント製）の選択によって仰角をつけることも可能。砲身は真鍮挽き物パーツが付属する。



▲就役時の特徴である船体左右に装備された15.5㎝三連装副砲塔。キットに付属する木甲板シートはピタリと合わない箇所があるので注意。

最上部の防空指揮所～ヤードは3Dプリントパーツで再現されています。防空指揮所の望遠鏡やヤード先端の誘導灯のモールドも緻密に再現されており、今さらながら3Dプリントの凄さに驚かされました。予備パーツも1セット入って嬉しい配慮です。残念ながら試作ロットではモールドが一部潰れており、予備パーツからの移植が必要でした。移植できない部分は作り直しています。

94式高射装置の舷灯塗装ですが、作例では誤って点灯部を赤と緑に塗ってしまっています。正しくは点灯部では無く、周囲の四角部分を塗装します。15m測距儀頂部の手摺り（T33）は長さが若干足りず、組み立て図のようにプラパーツに沿って取り付けることはできませんでした。

煙突・マスト

煙突口頂部の仕切り板（U291、U305）は煙突プラパーツ（C6、C7）と内側で干渉するようです。ペンチで切断して長さを調整しました。煙突パーツのガイド穴に沿ってモンキーラッタルを取り付けますが、穴位置や精度は問題無く、ストレス無く取り付けることができました。ただしその後に取り付ける蒸気管パーツとモンキーラッタルは干渉する箇所が多く、干渉箇所の蒸気管パーツを一部切断したり、削って細身にしたりという工夫が必要です。

探照灯甲板のエッチングパーツ（U292）はプラパーツ（C3）と干渉するので、プラパーツの内側をルーターで削っています。

マストは金属挽物でできているので、精度や質感、強度はバッチリです。ただ組み立て作業の段取りを考慮して、三角補強材エッチング（U373）の丸穴は半分切り取って後から取り付けることができるように作業性を容易にしています。

武　装

主砲塔上部の手摺りエッチングはプラパーツにモールドされているガイド穴を利用すると容易に取り付けることができます。砲基部のキャンバス覆いはプラパーツと3Dプリントパーツの2種類が用意されています。作例ではプラパーツを使用しました。

副砲は周囲覆いのエッチング（V51、52）をプラパーツに取り付ける際、湾曲折り曲げに多少コツが必要です。なにしろポントスのエッチングパーツは厚みがあり（0.3㎜位？）、谷折り山折り以外の湾曲成形作業にはコツと労力が要ります。剛性のある細身ピンセットがあると便利です。

副砲砲身のキャンバス覆いは3Dプリントパーツを使用してみました。皺のリアルな表現が素晴らしいです。金属挽物の砲身を挿入する際はちょっと硬いので注意が必要です。作者は勢い余って挿入時に弾いてしまい、砲身を1本紛失してしまいました（泣）。

作例では2番、3番副砲の側面モンキーラッタルは取り付けていません。初期設計ミスでパーツ数が足りなかったためです（現在は改善済みとのこと）。主砲同様に手摺りはガイド穴を利用することで、問題無く取り付けることができました。

高角砲は砲身シールドのエッチングパーツ（V93）がプラパーツの取り付け溝と干渉します。そこでノミを使って溝幅を若干広げました。

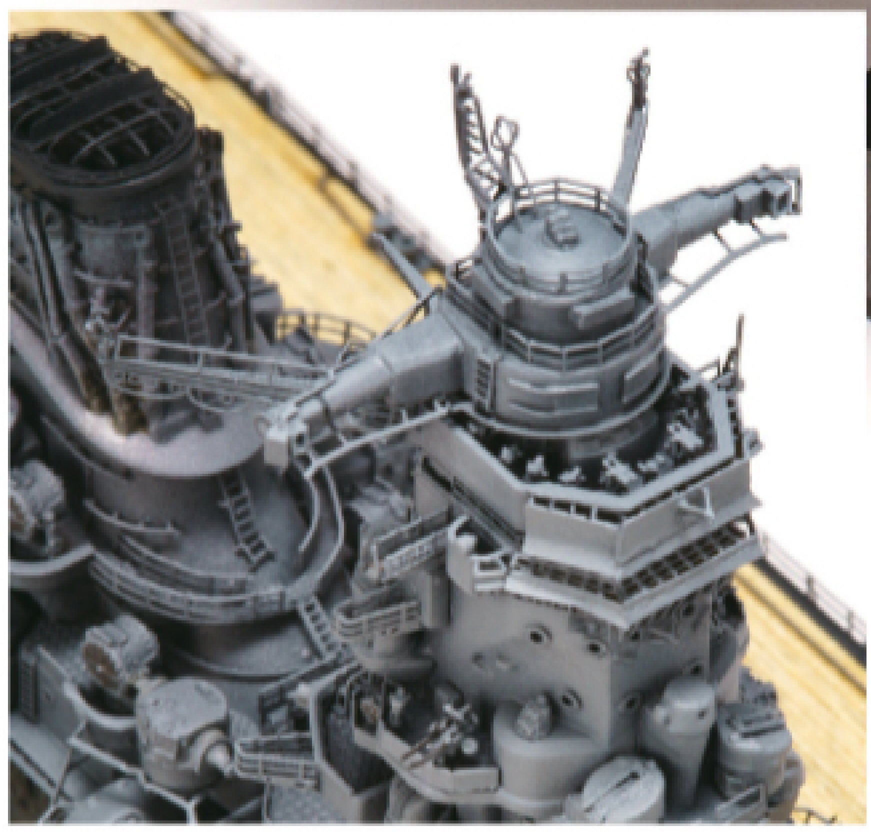
その他

クレーンではエッチングパーツ（U194）





▲マストは真鍮挽き物パーツを中心にガッチリと組むことができる。



◀防空指揮所とヤードは一体式の3Dプリント製のレジンパーツ。双眼鏡や誘導灯等も驚異の一体成型で再現されている。作例は一部に成型不良があったので予備パーツから移植している。

YAMATO1941





の一部を丸める作業にコツが必要です。この手の作業では剛性がある精密細ピンセットがあると作業性が格段に上がります。各パーツを組み上げる際に使用する金属挽物軸（BR18D 等）は、作業性を高めるために 0.3㎜径のプラ丸棒に置き換えました。実際のパーツより長めの軸を準備して、組み上げ後に両端を切断して長さを調整する方が楽な気がします。

カタパルトはエッチングパーツの精度が高いので組み立てはスムーズに進むでしょう。ただし内部構造を組み立てる時に非常に細かいパーツを扱います。精密極々細ピンセットが活躍します。

艦載機

主翼や尾翼はエッチングパーツで再現されています。組み立て図を最初に見た時には正直不安で仕方ありませんでしたが、薄さも理想的で、パーツ精度が高いので想像より格段に簡単に組み立てることができました。

艦載機のデカールはマークソフターとの相性が良く、パーツ表面に良く馴染みます。

塗　装

基本塗装はラッカー系塗料を使っています。下地塗装はまずGSIクレオス Mr.カラーの C40 ジャーマングレーで全体塗装を行い、さらに斜め上方向から C29 艦底色を吹き付けます。

軍艦色は C601 呉海軍工廠標準色をベースに、C73 エアクラフトグレーを混ぜて明るめに調色したものを吹いています。

艦底は C29 艦底色に C158 スーパーイタリアンレッドを混ぜて、こちらも明るめに調色したものを塗装しています。下地のダーク系色と表面の明るめの色のバランスを見ながら、複数回薄く表面塗装を繰り返します。

まとめ

極初回試作ロットということで製作には難儀しましたが、エッチングパーツのボリュームから『ガッツリと模型を作っている』という大きな満足感を得ることができました。価格面でもアフターパーツとしての価値も非常に高い、お得感に満ちたキットと言えるでしょう。ただし私のような老眼近眼持ちには、ちょっと辛い作業になることは確かですね。





▲艦載機は零式水上観測機が２機付属する。呉式二号五型カタパルトやジブクレーンはほぼエッチングパーツで構成されており、さすがの精密感を誇る。



【参考文献】
学習研究社歴史群像・太平洋戦史シリーズ 54『戦艦大和・武蔵』
TAMIYA NEWS SUPPLEMENT 別冊　森恒英『軍艦雑記帳』上／下巻







アオシマ 1/700
日本海軍 駆逐艦「秋月」更新版 艤装パーツ付属
日本海軍 駆逐艦「冬月」更新版 艤装パーツ付属
日本海軍 駆逐艦「陽炎」更新版 艤装パーツ付属
製作・文 / 李 昌慶

NEW KIT REVIEW

更新版艤装パーツで生まれ変わったアオシマ駆逐艦

これまでの各社共通の装備品パーツ（X・W ランナー）に代えて、新規に独自開発された艤装パーツを組み込むことでリニューアルを図ったアオシマの 1/700 ウォーターラインシリーズ。今回は秋月型駆逐艦「秋月」「冬月」と陽炎型駆逐艦「陽炎」（いずれも更新版 艤装パーツ付属）の３隻をまとめて紹介する。

アオシマが日本海軍共通の艤装パーツを完全新金型で開発、これを同封してリニューアルした駆逐艦３隻をニューキットレビューすることになりました。最後までお付き合いいただけると幸いです。

ここで作例として取り上げるのは 1/700 秋月型１番艦「秋月」と８番艦「冬月」、それに陽炎型１番艦「陽炎」の３隻です。また比較用に、従来の装備品セットで製作した秋月型 10 番艦「宵月」も併せて紹介します。

秋月型駆逐艦「秋月」

「秋月」は昭和 17（1942）年６月に竣工しました。ソロモン諸島に向かう途中で B-17 を撃墜する等、防空駆逐艦の面目躍如といった働きをしましたが、昭和 18（1943）年１月に米潜水艦による雷撃が原因で艦橋下部の船体が切断する事態となり、辛うじて佐世保へ帰還しました。長い修理期間を経て戦線復帰しますが、昭和 19（1944）年 10 月 25 日のエンガノ岬沖海戦で援護射撃中に爆発を起こして沈没してしました。

秋月型駆逐艦「冬月」

秋月型８番艦として昭和 19（1944）年５月に竣工したのが「冬月」です。沿岸の回航護衛に従事していましたが、昭和 20（1945）年４月７日に決行された沖縄水上特攻（天一号作戦）に「大和」と共に出撃。奮戦しますが「大和」をはじめ多数の艦が戦没するに至り作戦は中止、残存艦として生存



●駆逐艦「秋月」「冬月」「陽炎」の製作ポイント

船体



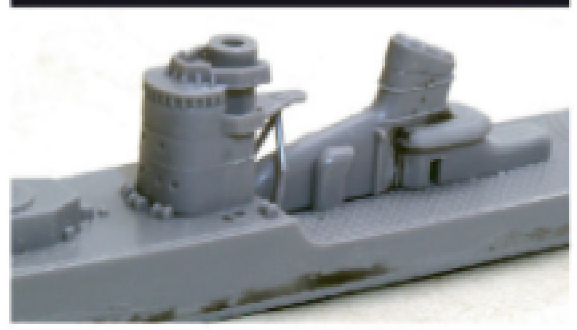
▲甲板まで一体成型の船体。喫水板パーツは接着後に合わせ目を丁寧に整形しておきたい。

接着面の整形



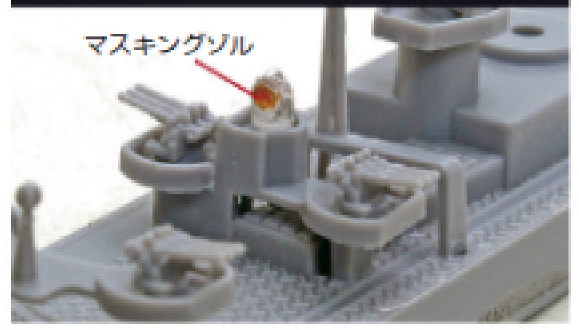
▲接着面はバリや捩れがある場合もあるので、軽く平らにヤスることで密着度を増しておく。

艦橋構造物



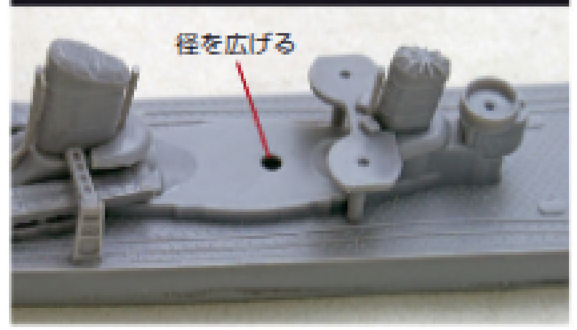
▲組み立てた艦橋構造物。接着ラインはヤスリがけして一体感を高めておく。

探照灯



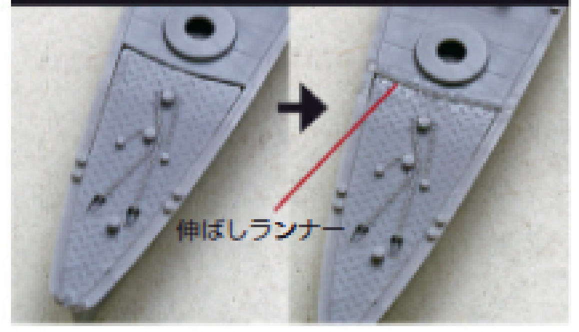
▲透明パーツの探照灯はレンズ面をマスキングしてから銀→軍艦色で塗装すると実感が出る。

魚雷発射管の取り付け穴



▲魚雷発射管パーツの取り付け穴はややタイトなので、少しだけ広げておくとスムーズ。

錨鎖甲板



▲錨鎖甲板後端に生じた隙間は伸ばしランナーを貼ってリノリウム押さえ金具として隠した。

■ 従来版&更新版 艤装パーツを比較してみる

日本海軍 駆逐艦「宵月」（従来版）

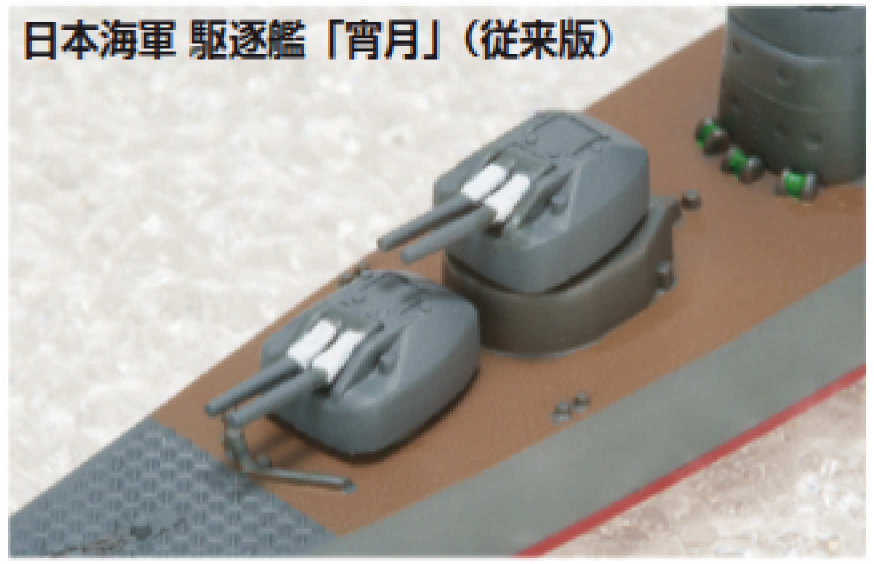


日本海軍 駆逐艦「宵月」（従来版）

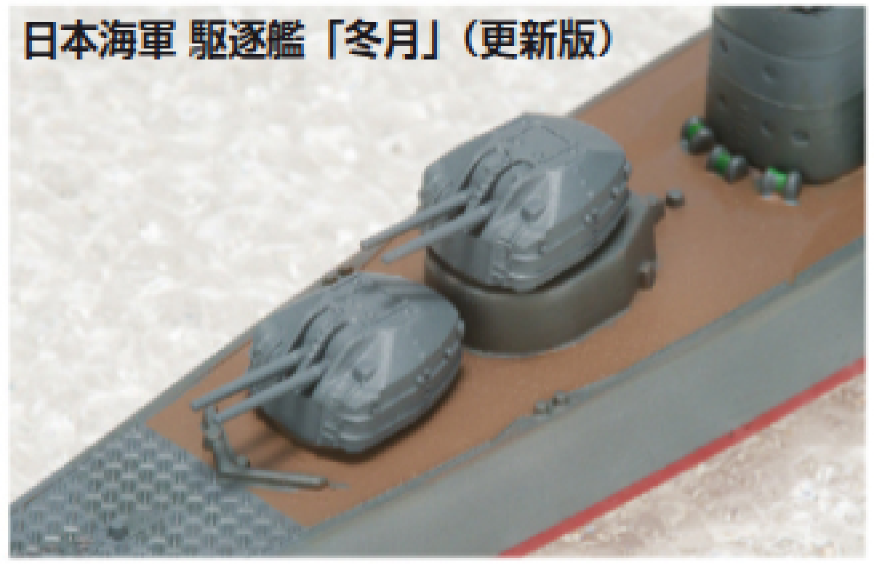


比較用に従来の装備品パーツで仕上げたアオシマ 1/700 日本海軍駆逐艦「宵月」を掲載する。2000 年頃に順次行われた 1/700 ウォーターラインシリーズのリニューアルに併せて共通化が図られた装備品ランナーが追加された製品で、装備品ランナーは静岡模型教材協同組合から『小型艦兵装セット』として別売もされている。

日本海軍 駆逐艦「宵月」（従来版）



日本海軍 駆逐艦「冬月」（更新版）

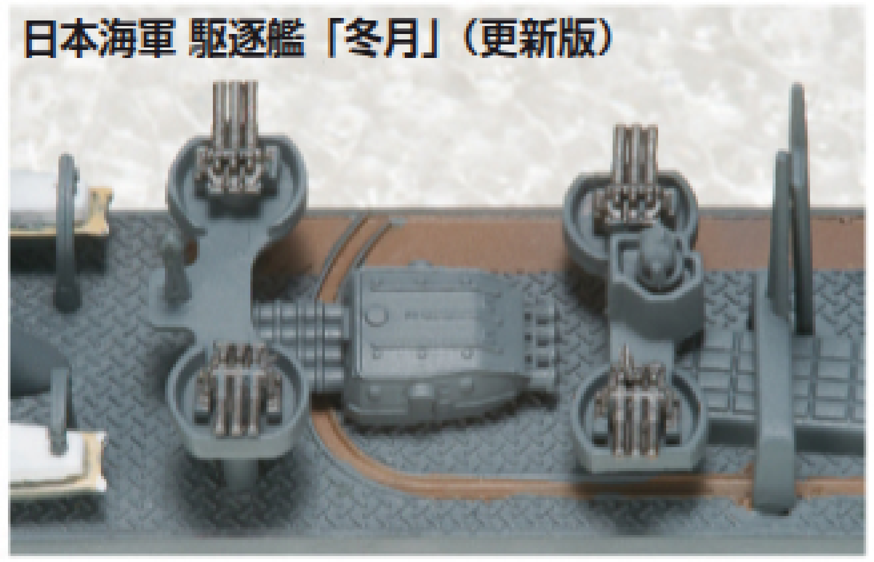


▲九八式 10cm連装高角砲。側面には一切モールドがなかった従来版に比べて更新版ではジャッキステーやリベットまでモールドされた。

日本海軍 駆逐艦「宵月」（従来版）



日本海軍 駆逐艦「冬月」（更新版）



▲九六式 25mm三連装機銃。更新版は従来版よりもコンパクトになり、射撃手の座席もそれらしい形状に改められた。

日本海軍 駆逐艦「秋月」（更新版）



日本海軍 駆逐艦「秋月」（更新版）



者救出に尽力しました。帰還後は防空砲台として終戦を迎え、掃海作業を支援する工作艦となった後、昭和 23（1948）年に防波堤の基礎としてその生涯を終えました。

陽炎型駆逐艦「陽炎」

陽炎型 1 番艦として昭和 14（1939）年 11 月に竣工しました。南雲機動部隊の護衛として真珠湾攻撃、ラバウル攻略作戦、セイロン島機動作戦等の主だったほとんどの作戦に従事。その後は第二次ソロモン海戦、ヘンダーソン基地艦砲射撃、南太平洋海戦、第三次ソロモン海戦、ルンガ沖夜戦等各地を転戦し活躍しました。しかし、昭和 18（1943）年５月８日輸送作戦中のソロモン諸島クラ湾にて触雷し、航行不能となったところを米軍機の攻撃を受けて戦没しました。

従来の兵装セット

キット付属の各社共通装備品セットとして 1/700 ウォーターラインシリーズを支えて来たのが、1994 年に開発された『大型艦兵装セット』（Wランナー）と『小型艦兵装セット』（Xランナー）です。まだディ

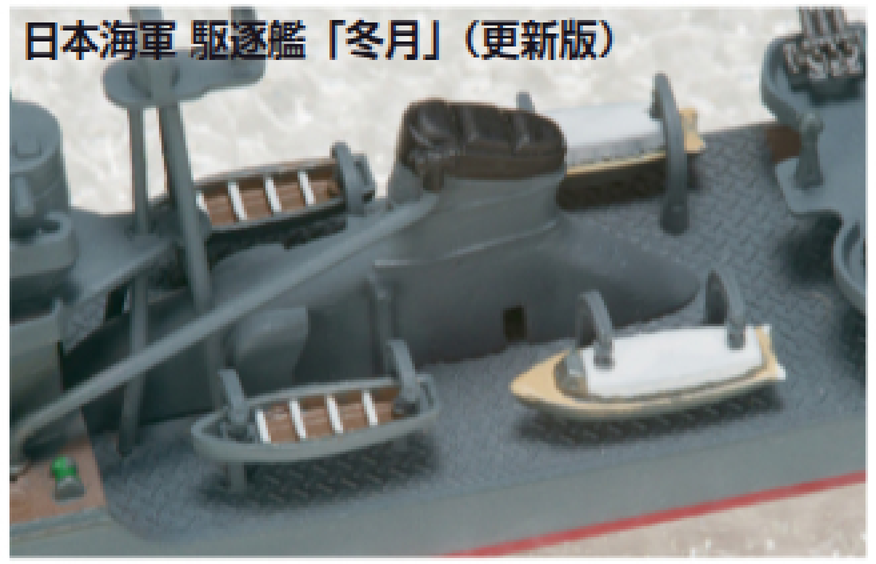


▲キャンバス無しの 7m 内火艇

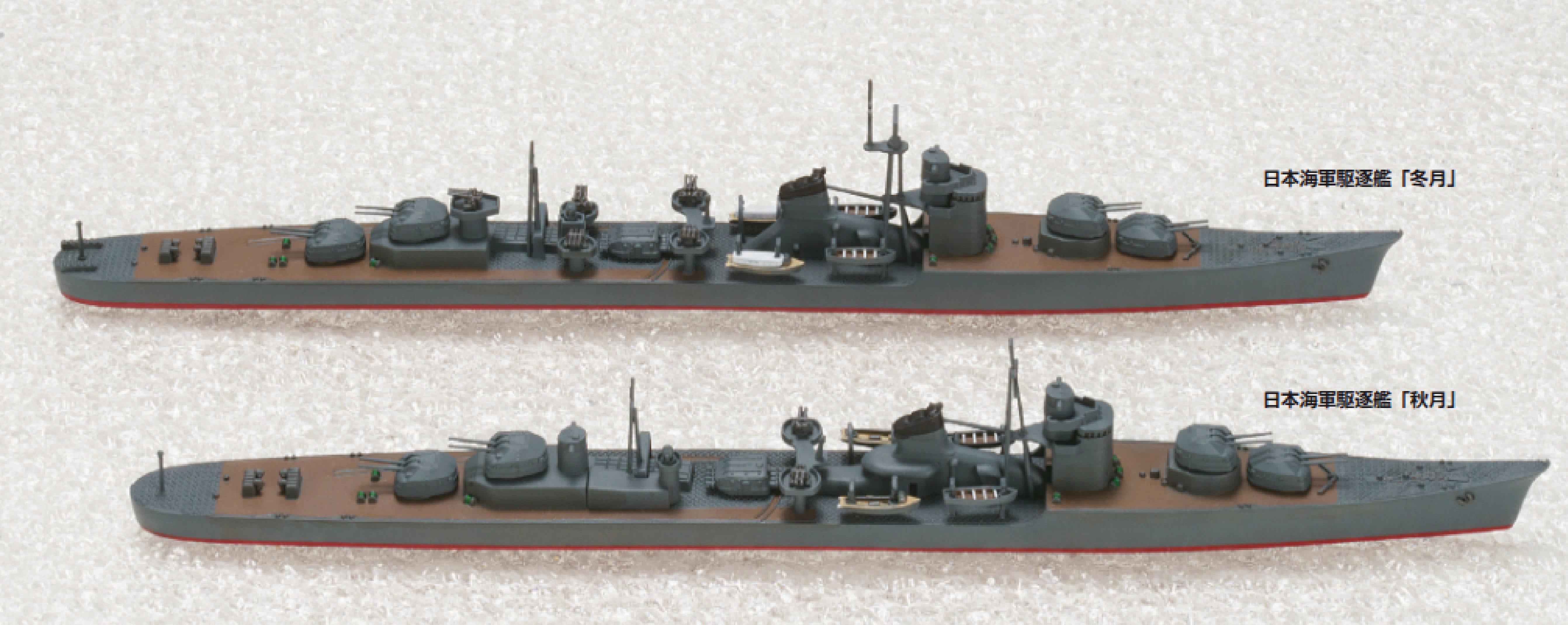
日本海軍 駆逐艦「宵月」（従来版）



日本海軍 駆逐艦「冬月」（更新版）



▲7m カッターと 7m 内火艇。更新版では 7m 内火艇のキャンバス部分が別パーツ化され、取り外した状態も選べる。ボートダビットも更新された。



テールよりもコレクション性を重視していた1970年代に開発されたキットに同封されると、これら初期開発モデルのディテールの底上げに貢献し、より精密な仕上がりとなりました。

一時期は休眠状態だった1/700WLシリーズですが、その後はディテール重視のリテイクと新規キット化で再び活況をもたらしてくれました。そういった新規開発のハイディテールのキットにも対応する、息の長い兵装セットといえるでしょう。

一方、1/700WLシリーズに心血を注いで来たアオシマは、さらにハイディテール化する他社キットに抗衡すべく、ハイレベルの艦船キットを次々リニューアルしてきました。当然これらニューキットは従来の兵装セット（X・Wランナー）に相応しいディテールを誇りますが、そのポテンシャルはまだまだ余力を残していました。

更新版艤装パーツ

今回新規開発された「更新版艤装パーツ」は、アオシマのキットのポテンシャルを限界まで引き出す優れたパーツ群といえるでしょう。丁寧な彫刻から生まれる繊細なディテールはメリハリが有り、同社のモデルをより引き立ててくれます。また彫刻は細かいですが繊細すぎるという訳では無く、強度も配慮しながら再現されているので、組み立て作業も容易に行えます。

例えば九六式25㎜三連装機銃の銃身は、細ければ細いほどスケール感が増して緻密な仕上がりとなりますが、強度という点ではそのディテールに比例して扱い難くなり、ちょっと触れただけでも銃身が折れ曲がってしまう傾向が有ります。せっかくキレイに揃えた銃身が、不注意から来る事故で折れ曲がると心も折れてしまいますよね。

製　作

このようにディテールの優れた更新版艤装パーツを奢られた「秋月」「冬月」は、船体の左右両舷側にディテールを追加してモデルとしての密度を向上させています。こういったモデルのアップデートを常に行い、製品の「鮮度」を高める努力を惜しまない企業努力には頭が下がる思いです。

組み立てにおいて注意する必要が有るのが、九二式61㎝四連装魚雷発射管の取り付けです。船体側の取り付け穴がわずかに小さいため、棒ヤスリ等で軽く広げるように整形しておくと良いでしょう。

ボートダビット

ボートダビットは船体への接着位置が組み立て説明書では判断しづらいので、塗装図面を参考に位置決めを行いました。

「陽炎」も同様の傾向が有るので、同じように下処理を行っています。また「陽炎」は艦首錨鎖甲板とリノリウム甲板の間に隙間が発生し易いので、伸ばしランナーを作り、リノリウム押さえとして隙間に接着することで整形の必要も無く埋めることができます。

探照灯

クリアーパーツで成形された探照灯はレンズ部分をマスキング、最初にGSIクレオスMr.カラーSM201スーパーファインシルバー２を反射板代わりに塗装した後、軍艦色を塗り重ねます。小さいながらレンズの奥がキラキラ反射するので、手間をかけただけの仕上がりになるかと思います。

それでは機会がありましたら、またお会いしましょう。





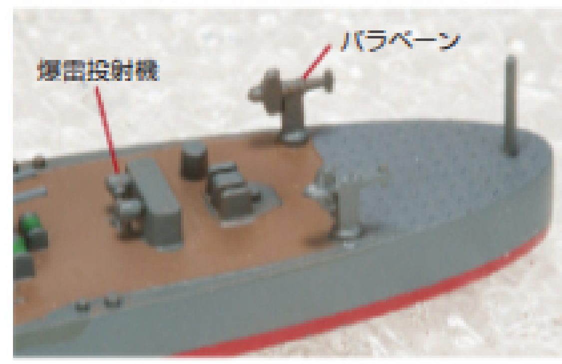




▲新設計による50口径12.7㎝連装砲。側面のディテールまで再現されている。



▲九二式61㎝四連装魚雷発射管と九六式25㎜連装機銃も新規パーツとなっている。



▲九四式爆雷投射機、パラベーンも新規パーツ。従来パーツよりもそれらしい形状とサイズ感となる。

世界の客船
Passenger ships of WORLD

キュナードは1907年、ぎりぎりのきわどい設計の高速客船を２隻建造した。しかし性能のために犠牲にした点も多かった。３隻目はそれを反省し、安全性を重点に造られ、２度の大戦に従軍した唯一のキュナーダーとなった。

連載：第四十一便

キュナード・ライン客船「アキタニア」
完璧なスーパーライナー

Cunard Line Super-Liners "AQUITANIA"

文／イラスト・写真：西村慶明

３隻目は難産であった

20世紀当初、キュナードは大西洋航路を３隻でウィークリー運航ができる、３万総トン、25ノットの高速客船を造りはじめた。設計したのはキュナード社のアーキテクト、レオナルド・ペスケットである。イギリス人は新規を嫌い、オーソドックスに走りがちだったが、この船は違っていた。贅肉を削り落とした駆逐艦のような船体に25基ものボイラーと直動式タービンを搭載した。おかげで船体の直線部分は全て機関室となり、貨物船倉もクロスバンカーも設けられなくなってしまった。煙突は４本、プロペラは４軸。船倉は船首・船尾の三角部分のみ。バンカーも二重底を利用し、二重底壁面に石炭取り出しハッチを設けた。

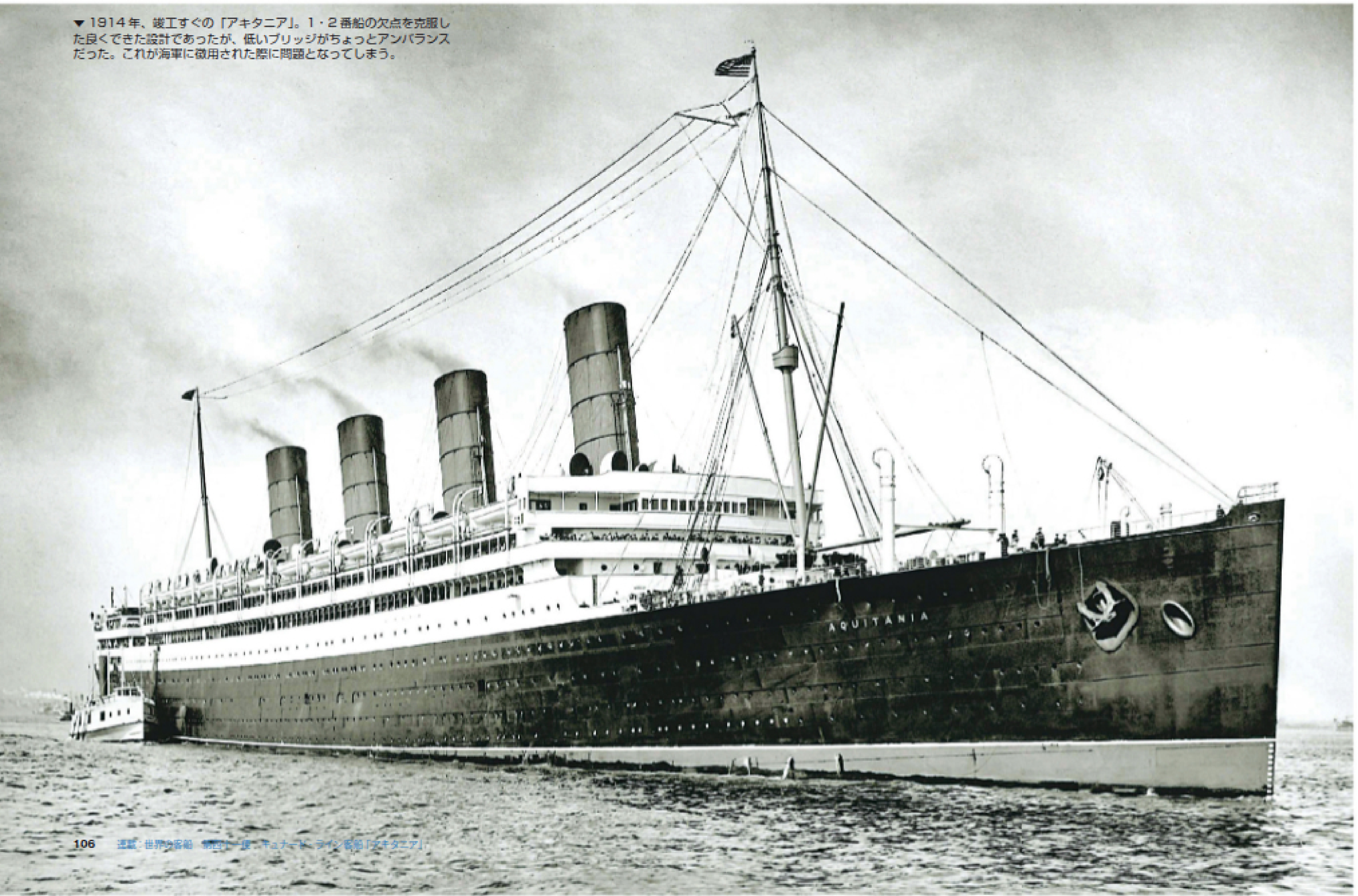
１番船はジョン・ブラウン建造で「ルシタニア」。コールサインはHLJW。1907年８月に完成し、９月から大西洋定航に就いた。２番船はスワンハンターの建造で「モレタニア」。コールサインはHLTQ。1907年11月に就航した。初期の計画ではもう１隻、３番船がビッカースで造られることになっていたが、詳細が発表された段階で、ビッカースは降りてしまった。

「ルシタニア」と「モレタニア」の２隻は予想通りの性能を発揮し、大西洋のグレイハウンドとなった。特に「モレタニア」の調子は良くて、1908年には平均24.86ノットを出してブルーリボンを獲得し、その後もどんどん自己記録を更新していった。でも２隻の欠点も明らかとなった。船体がスリムすぎてローリングが激しいし、機関室のスペースが狭くてボイラーの給炭がつらい。タービンとプロペラは直結で、ギアで回転を落としていないので、プロペラの回転速度は高すぎる。いわばレーシングカーのような客船を造ってしまったのだった。

資金難でペンディングとなっていた３番船の建造計画が復活したのは1911年だったが、２隻の運航データを基に、３番船の設計見直しが行われた。参考にしたのは、1911年に就航したホワイトスター・ラインの「オリンピック」だった。「ルシタニア」の船幅26.7mはたしかにきつい。幅を広げて、コールバンカーにもっとゆとりを持たせ、石炭を取り出しやすくしたい。船幅を29.6mに拡張することにした。全長も274.8mに延ばした。総トン数は大幅に増えて、４万6000トン。船体は３割がた大きくしたが、エンジン馬力は「ルシタニア」の７万2000馬力から６万2000馬力へと２割ほど縮小してしまった。同じ直結タービンの４軸だから、当然速度は落ちる。最大24ノット、巡航23ノットと、ブルーリボンは眼中にない、ゆったりした大型客船となった。まあ、「オリンピック」「タイタニック」のキュナード版である。

1911年、３番船がジョン・ブラウン造船所へ発注された。設計デザインは「ルシタニア」と同じレオナルド･ペスケットである。ジョン・ブラウンの409番船は1913年４月21日にクライド河に進水し、「アキタニア」と名付けられた。フランス地方の古代ローマ時代の地名。コールサインはJFQG。

「アキタニア」は「ルシタニア」の４本煙突デザインを踏襲した。上甲板を１層増やしたが、形態が整っているので、逆にそんなに大きく見えないが、計測した総トン数は４万5647トン。旅客定員は「ルシタニア」の2200人から大きく増えて3230人となった。１等618人、２等614人、３等1998人である。「タイタニック」の教訓で、救命ボートは定員分搭載した。「ルシタニア」はジョン・ブラウン特許の蛙の頭のようなベンチレーターを立て並べたが、これはやはり普通のカウルヘッド型になった。建造費は「ルシタニア」より安かった。



▼1914年、竣工すぐの「アキタニア」。1・2番船の欠点を克服した良くできた設計であったが、低いブリッジがちょっとアンバランスだった。これが海軍に徴用された際に問題となってしまう。

[SHIP DATE]
■アキタニア（AQUTANIA）
コールサインJFQG、1935年からGLRZ。キュナードライン／キュナード・ホワイトスターライン　船籍リバプール。　４万5647総トン、全長274.8m、幅29.6m、1913年４月21日進水、1914年５月10日竣工。ジョン･ブラウン造船所クライドバンク建造409番船。パーソンスタービン４軸、６万2000馬力。巡航速力23ノット、最大速力24ノット。旅客定員１等618人、２等614人、３等1998人、乗組員972人。

つかの間の定期運航であった

「アキタニア」は1914年５月10日に完成し、キュナードへ引き渡された。５月11日はホリー諸島への０号クルーズ。24ノットを記録したがそれ以上は出ず、もう少しスピードを上げるために船底を磨いて再塗装しようということになり、14日に新しく造られたリバプールのグラッドストーン・ドックへ入っている。大西洋処女航海は５月30日リバプール発のニューヨーク行きである。ニューヨークのノースリバー54番ピアが当時のキュナード専用桟橋で、到着は６月５日朝。７日半かかっているが、それは船長が新人で、タービンのアタリも出ていないので慎重を期した結果で、２航以後は23ノットでアンブローズ灯船まで５日半、全行程６日間で走るようになった。「ルシタニア」クラスより半日遅いのだけど、とにかく高速客船が揃い、キュナードで長年の夢であった３隻によるウィークリー運航が実現した。でもそれは２か月間、「アキタニア」はたった３往復しただけで終わってしまう。８月４日には第一次大戦が勃発してしまったからである。

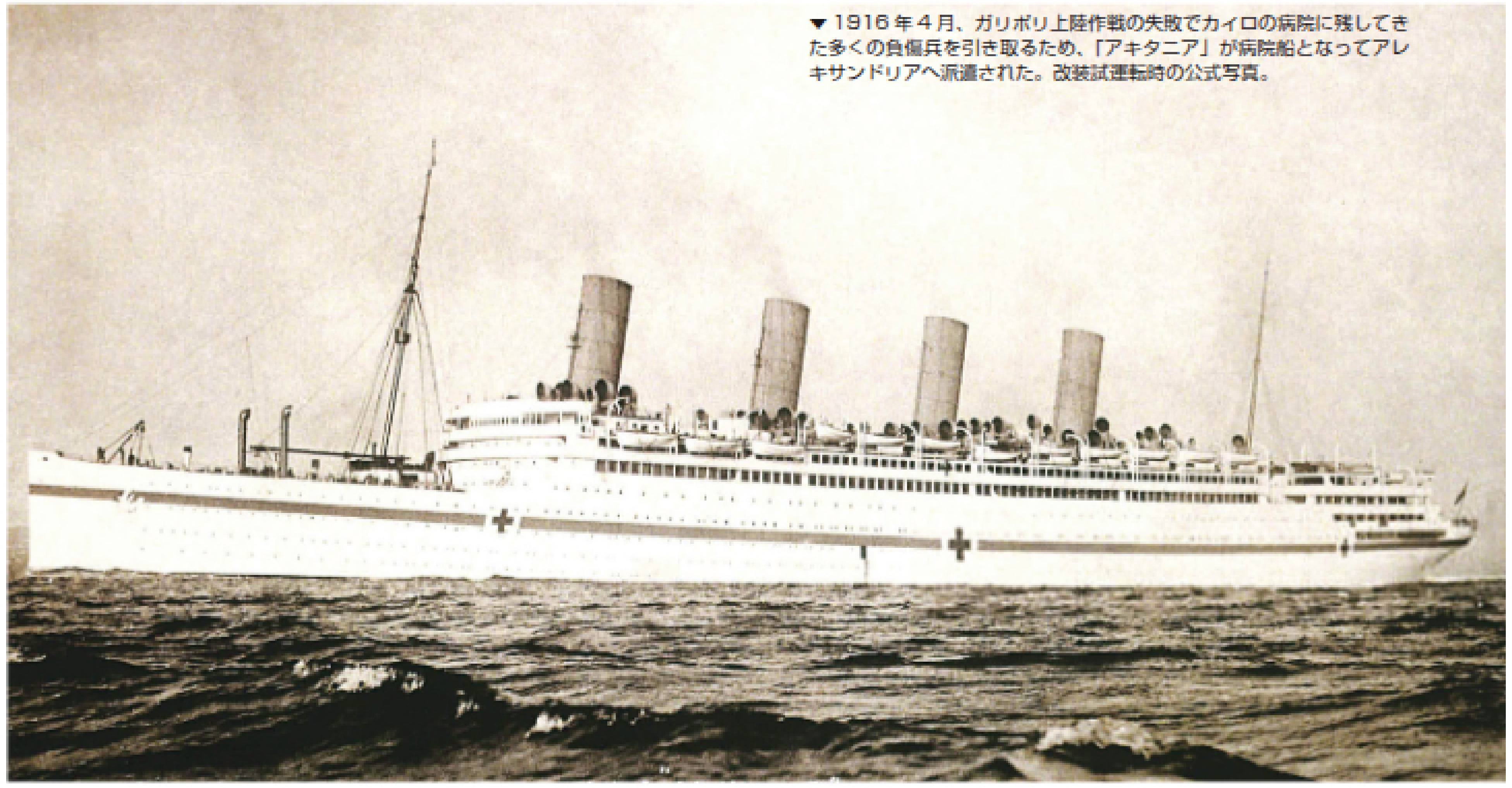
開戦時、「ルシタニア」はニューヨークに、「アキタニア」はリバプールにいた。「モレタニア」はニューヨークに向けて大西洋を航行中であったが、当時は英領だったカナダのハリファックス行きに変更し、26ノットという驚異のスピードで突っ走った。「アキタニア」もハリファックス行きに変更した。

そんな慌ただしい中の８月８日、英カナダ軍兵士を乗せてカナダから帰着した「アキタニア」はリバプール港内でレイランド汽船の「カリフォルニアン」と衝突してしまい、ポート側にかなりの損傷を受けた。でもこれが幸いした。優先的にドック入りできて、いち早く修理をし、ついでに武装を施してしまった。６インチ砲を前後の甲板に４門設置し、「アキタニア」は1914年８月22日には戦争参加の準備を整えた。この時、ブリッジが低すぎて前方がよく見えないから、潜水艦や魚雷艇と戦えないという欠点が指摘された。そこで、ブリッジの屋根上にオープンのブリッジ設備をひと揃え取り付けた。これをフライングブリッジという。小型の軍艦ではよくある設備で、荒天時はつらいが、緊急時の仕様だ。ブリッジは２段になった。

塗色は黒の船体に黒ベタのファンネル。海軍省に徴用され、特設巡洋艦として北海パトロールの任務に就くことになった。他に「ルシタニア」と「モレタニア」がやはり同様の改装を済ませていた。第10巡洋艦スコードロンを組むはずであった。しかし、開戦当初、船体に装甲のないバッカント級巡洋艦が北海パトロール中に３隻も立て続けにＵボートに沈められてしまった。Ｕボートは何の警告もなくいきなり魚雷を発射してくるということも判明した。バッカント級と同様、船体に装甲のない構造の特設巡洋艦も危ない。英海軍省は考えを改め、特設巡洋艦の北海パトロールは止めることになった。「ルシタニア」と「モレタニア」、「アキタニア」は９月30日付でキュナードに返還された。ニューヨーク定期航路に復帰し、アメリカから郵便物と戦略物資を運ぶことになった。その戦時下の定期運航で、「ルシタニア」はＵボートに撃沈されてしまった。

ガリポリ上陸作戦は大失敗

1914年のクリスマス。第一次大戦は予想に反して、戦線は東部・西部ともに膠着状



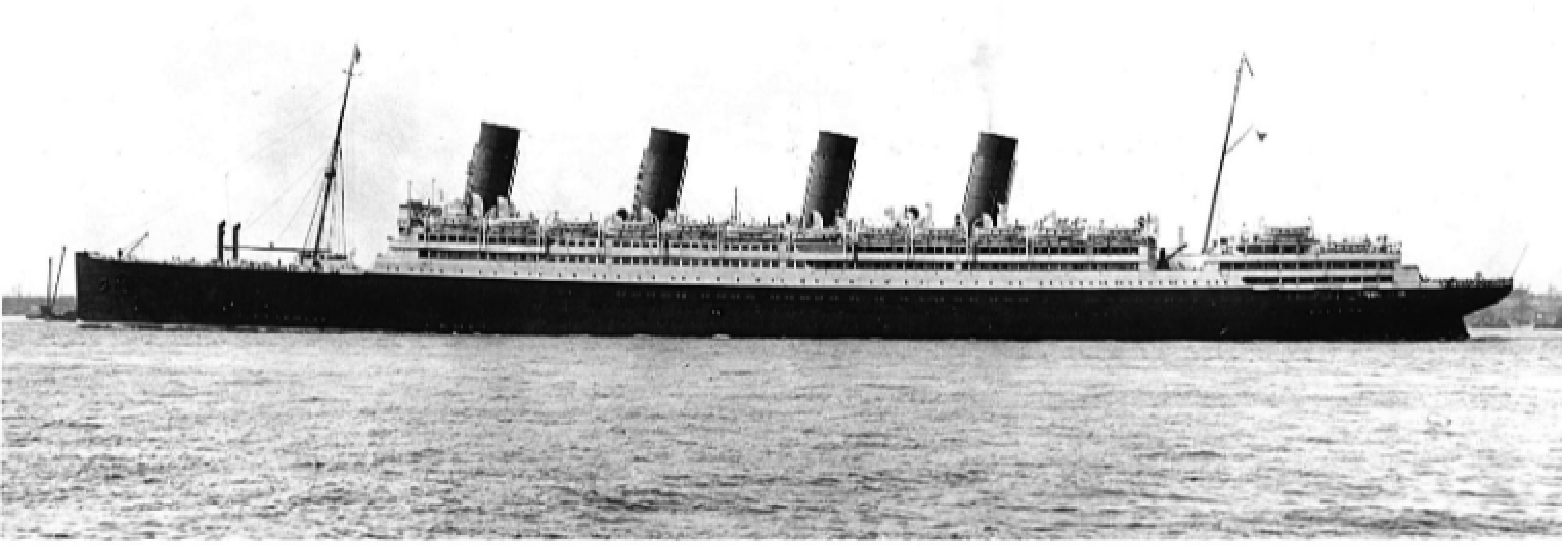
▼1916年4月、ガリポリ上陸作戦の失敗でカイロの病院に残してきた多くの負傷兵を引き取るため、「アキタニア」が病院船となってアレキサンドリアへ派遣された。改装試運転時の公式写真。

態になってしまった。ロシアには強力な黒海艦隊があったが、オスマントルコが黒海の出口のボスポラス海峡を抑えているので出撃できない。ウクライナの小麦も輸出できない。ボスポラス海峡の要塞、ガリポリに上陸作戦を決行して、戦況を打破しようということになった。発案したのは、海軍大臣だったウインストン・チャーチルである。

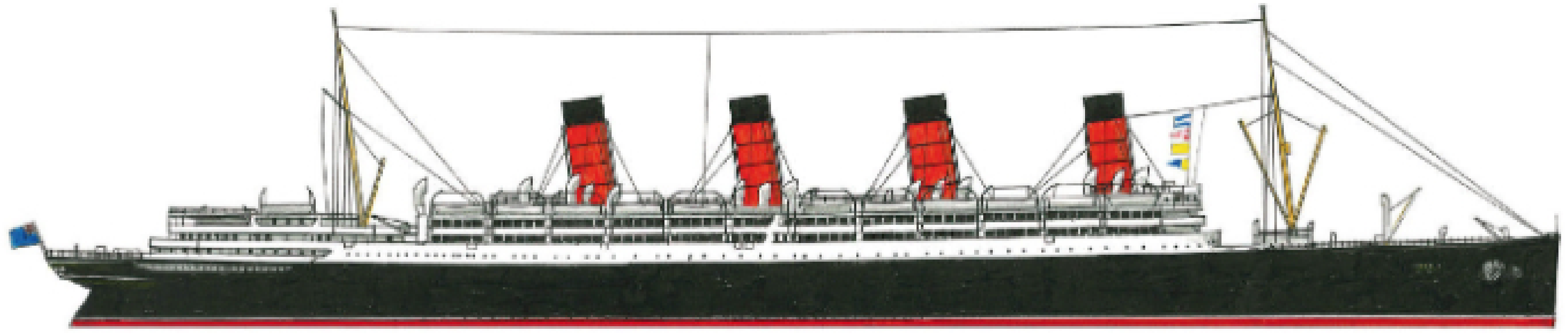
1915年1月、ガリポリ上陸作戦が立案された。動員する兵力は7万5000人。英第29師団1万7000人にオーストラリア・ニュージーランドのアンザック兵2個師団3万人、フランスは1個師団1万6000人。それに英海兵隊1万人、馬1600頭、トラック300台である。これらを一気に輸送するには巨大客船が必要だ。「モレタニア」と「アキタニア」と多数の中型貨客船が徴用動員され、客船「フランコニア」がエジプトのアレキサンドリアで海軍作戦本部として使われることになった。

1915年2月、ダーダネルス作戦がスタートした。「アキタニア」と「モレタニア」は黒ベタの煙突に加えて、ハウスも明るいグレーに塗った。「アキタニア」は4000人、「モレタニア」は3000人の兵士を乗せてサウサンプトンを出港した。目的地はギリシャのレムノス島。しかしレムノス島は港湾施設がなく沖止めなので、前線基地はエジプトのアレキサンドリア港に置いた。2隻は続けて3往復し、4月までに第29師団と海兵隊、合計2万5000人をアレキサンドリア経由でレムノス島に運んでいる。エーゲ海ではUボートに狙われて雷撃も受けたが、何とか回避して被害はなかった。アンザック兵はカイロ経由でやって来た。4月には装備品と馬、車等も積んだ貨物船もレムノス島に到着し、1915年4月25日、いよいよレムノス島からガリポリ上陸作戦が決行された。しかし作戦は上手くいかなかった。上陸地点は道もない荒れ果てた岩場で、地図もろくに無い。トルコの反撃はすさまじく、兵士は海岸に釘付けとなり、英海兵隊とアンザック軍に膨大な死者が出た。連合軍は結局8個師団12万人も投入しながら、目的を達することができなかった。

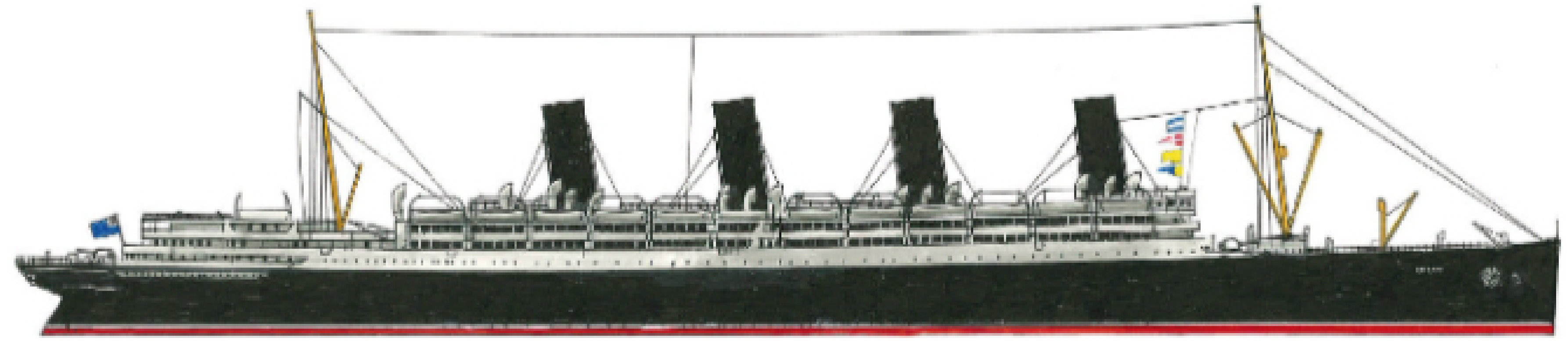
▼第一次大戦後、「アキタニア」はキュナードのスーパーライナーの1隻として、サウサンプトンからニューヨークへの定期航路を開始した。石炭から油焚きに改造され、性能は向上した。ブリッジも一段高くなっている。1931年9月、ニューヨークの写真家パーシー・ルーミス・スピアーの撮影である。



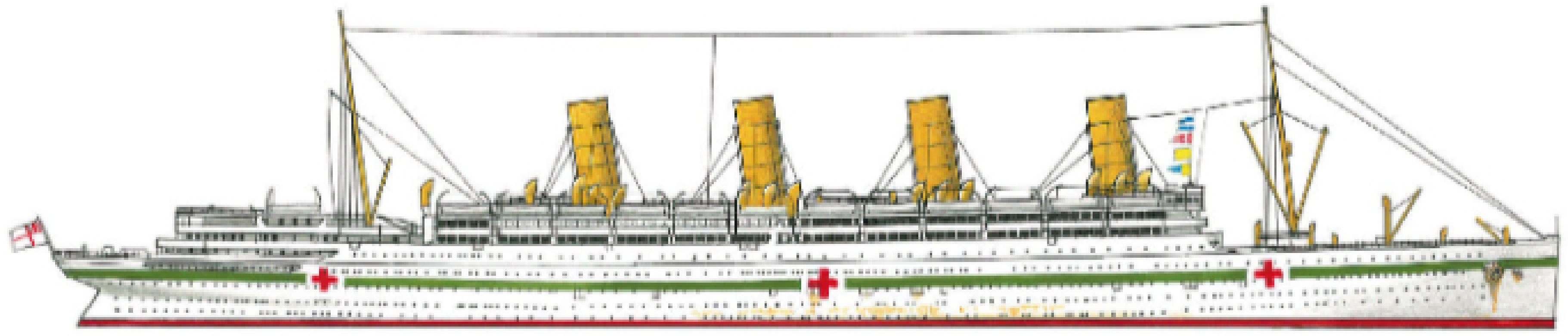
■「アキタニア」1914年5月～1914年8月
狂気の高速客船「ルシタニア」の欠点を克服し、ほぼ完璧となったのが「アキタニア」で、1914年5月からサウサンプトンからニューヨークへの定期航路に就いた。しかし活躍は6月まで。第一次大戦が始まったからである。



■「アキタニア」1914年8月～1916年4月
英海軍は「アキタニア」を武装して北海パトロールに使おうとしたが、危険が多すぎると取りやめキュナードへ返還、ニューヨーク定航路に戻した。1915年2月には再徴用され、ガリポリ上陸作戦に使われ、ギリシャのレムノス島へ3往復。6月までに12000人の兵士を輸送した。船体と煙突は黒、ハウスは薄いグレーだったようである。



■「アキタニア」1916年4月～1917年4月
ガリポリ上陸作戦は大失敗。1916年からは病院船に改装し、軍艦となってアレキサンドリアからサウサンプトンまで負傷兵を運んだ。広くオープンなプロムナードデッキを板とカーテンで仕切って、病室として使用している。



6月になり、さらに英軍2個師団を派遣することになり、「アキタニア」「モレタニア」に加えて「オリンピック」を追加することになった。3隻はドックに入って整備し、2万5000人の兵士を乗せて6月末にサウサンプトンを出港、2週間かかってレムノス島に到着し、8月6日スブラに上陸作戦を決行したが、やはり前進できなかった。結局ガリポリ上陸作戦は1万5000人の死者を出してどこへも進撃できなかった。作戦は大失敗と結論づけられ、撤退することになった。ずさんだった上陸作戦とは異なり、撤退作戦は秘密裏に慎重に練り上げられた。撤退用に用意された船は56隻。負傷者も多く大型の病院船も必要で、就航したばかりの「ブリタニック」が病院船に変更され、撤退は静かに、12月に決行された。白塗装の「ブリタニック」、黒塗りの「アキタニア」と「モレタニア」はレムノス島のムドロスからサウサンプトン直行便に使われた。「アキタニア」は撤退作戦で3往復運航し、延べ3万人を乗せたと記録されている。

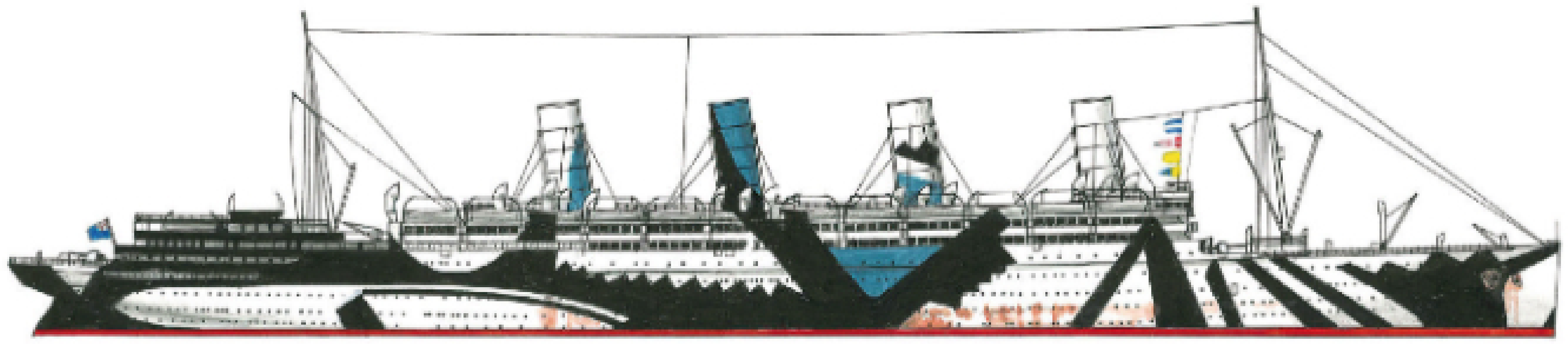
アメリカ兵員輸送船となった

1916年2月になり、ガリポリ撤退も終了して、「アキタニア」はドックイン。4月からは病院船として運航されることになった。ガリポリの傷病兵を多数ムドロスやカイロの病院に残してきており、その本国輸送に病院船「ブリタニック」1隻では運びきれなくなったからである。「アキタニア」は海軍艦艇を示すホワイトエンサインに変更され、病院船となった。プロムナードデッキをカーテンで仕切って病室とした内部写真がある。ムドロスやアレキサンドリアからサウサンプトンへ輸送を開始、傷病兵はワイト島の海軍病院へ送られた。僚船の「ブリタニック」が11月21日に触雷沈没したこともあって、結局「アキタニア」は病院船として1916年12月まで働いている。

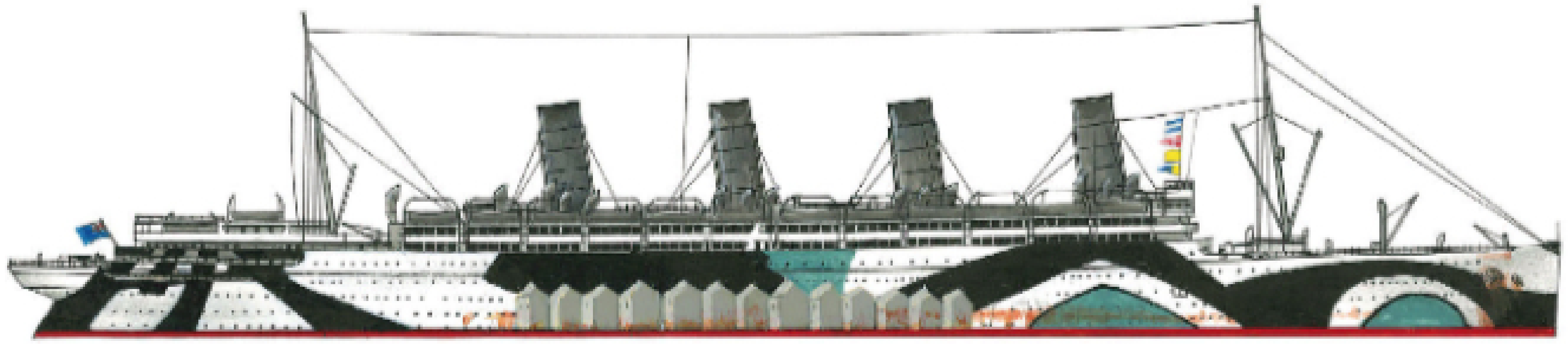
1917年春、病院船から解除され、兵員輸送船に戻ったが、さしあたって上陸作戦は無く、1年間係船されて過ごした。

その間にダズルペインティング迷彩が施された。ダズルペインティングとは「くらくら迷彩」。Uボート対策である。Uボートは水上艦や輸送船と競走したりはしない。ここぞと思われる海峡入口等で、じっと獲物が来る

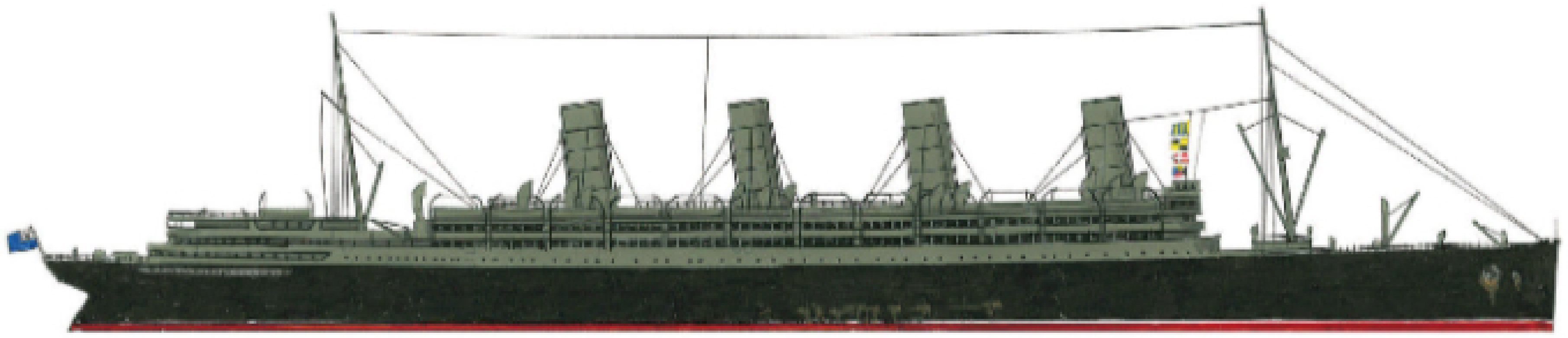
■「アキタニア」1917年4月～1918年
1917年4月には、イギリスでダズルペインティングがなされた。海洋画家ノーマン・ウィルキンソンの提案と監督で、
各船さまざまにデザインされて手塗り塗装された。この姿で1918年4月から、米兵をニューヨークからブレストへピストン輸送された。



■「アキタニア」1918年～1919年4月
1918年夏には、「アキタニア」はアメリカでドックインした。その折、アメリカ式のカモフラージュ塗装がなされた。
ワーナー・ダズルスキームという曲線のパターン。家屋とおぼしき絵も船体に描かれているのは、勝利の見えてきた余裕だろうか。



■「アキタニア」1939年9月～1940年11月
第二次大戦の始まった1939年9月、定期客船の運航は停止されたが「アキタニア」だけは郵便輸送の名目でニューヨーク航路の運航を続けた。
船体は黒、ハウスと煙突は暗いホームフリートグレーに塗られ、グロテスクな姿でミステリーシップと呼ばれた。中立禁制品の武器弾薬も運んでいたという。

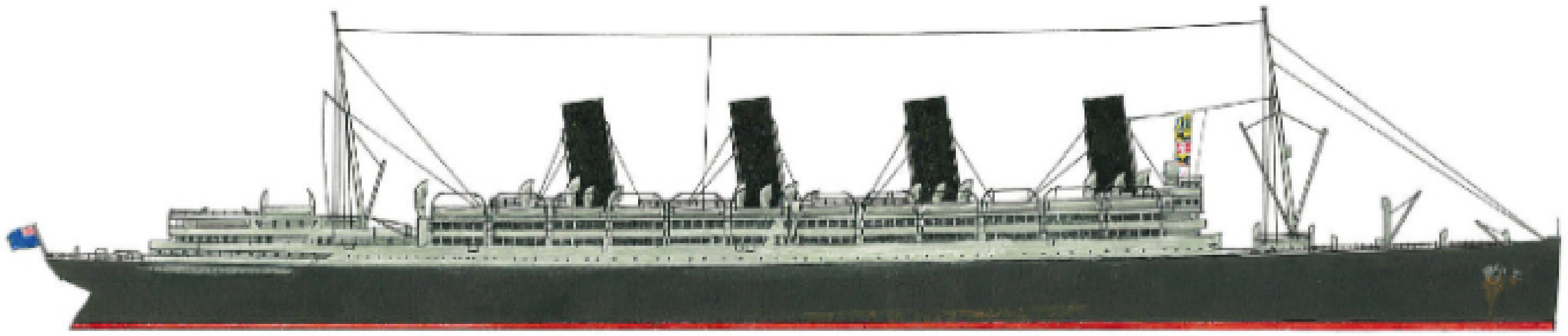


のを待ち受けている。水平線上に煙が見えたら潜航し、浅深度で潜望鏡を上げて瞬間的に速度や方位を計測し、魚雷を撃つ。その潜望鏡計測を誤らせるのがカモフラージュ塗装である。第一次大戦中期から研究が始まり、海洋画家ノーマン・ウィルキンソンの提案した派手な「ダズルペインティング」が効果ありと認められて、1917年夏から連合国に大幅に採用された。カモフラージュはパターンを覚えられては効果がなくなるから、1隻ごとに大きく異なる。多くの画家やデザイナーが動員され、膨大なカラースキーム画が描かれて、塗られていった。当初は黒、白、グレーに加えてグリーンにブルー、バフ、レンガ色が使われたが、次第にモノクロームを主体に、グリーンかブルーを加える取り合わせに落ち着いている。

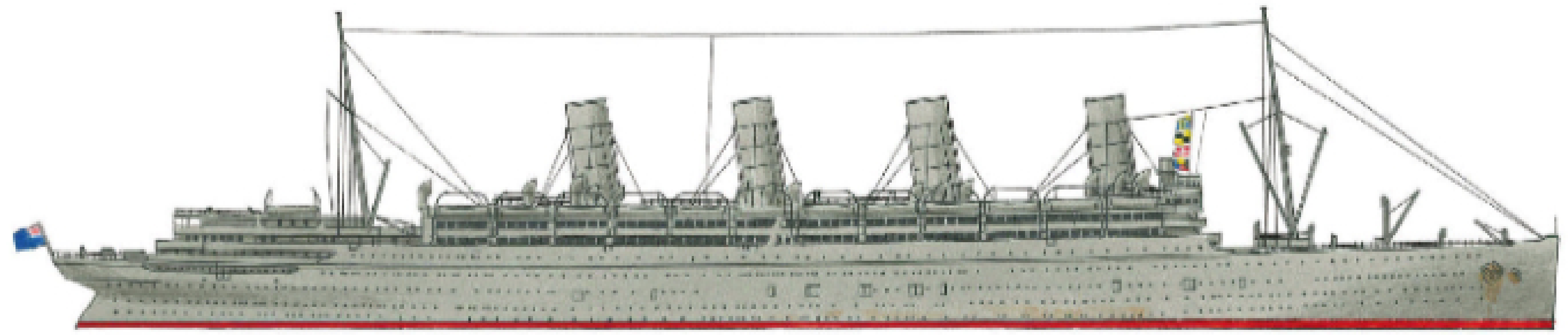
「アキタニア」は画家アントニオ・ヤコブセンのデザインが採用され、黒、白、ブルーに塗り分けられた。武装も再搭載された。イギリスはこれで大西洋航路を復活させ、アメリカから兵器や戦略物資を運ぼうと考えていたのである。アメリカは最初は中立だったから、表立ってはできない。でも「ルシタニア」で使った手があった。普通の食糧や木材と申告しておき、出港してから本当のカーゴリストを修正提出するのである。でもそんな姑息な手は必要なくなった。1918年4月6日、ついにアメリカが参戦してくれたのである。ニューヨークからフランスのブレストへ米軍兵士を輸送することになった。イギリス海軍は「アキタニア」「モレタニア」「オリンピック」を提供し、フランスは「フランス」を出す。アメリカ海軍はドイツから分捕った「リバイアサン」と4隻のフォアスタッカー客船を使うことになった。「アキタニア」はアメリカで入渠し、ダズルペインティングを再塗装した。船体のダズルペインティングはアメリカ式のワーナー・ダズルスキームと呼ばれる波型パターンに変更された。面白いのは、その船体中央に家屋の列が描かれたこと。勝利が見えてきた余裕だったのだろうか。

速度によって船団が組まれた。「アキタニア」の僚船は「モレタニア」である。1919年5月までの1年間、2隻はニューヨークからブレストへ大西洋を定期便のように往復した。13万人の兵士を輸送したといわれている。

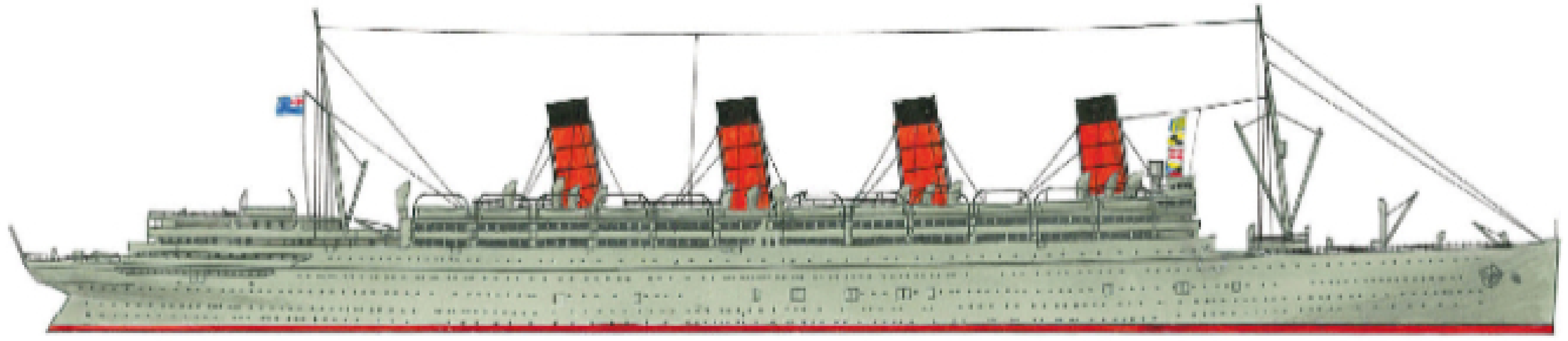
■「アキタニア」1940年11月～1941年12月
1940年11月、「アキタニア」は英海軍に徴用され、シンガポールのセレター軍港で兵員輸送船に改装された。
船体と煙突はごく黒に近いスレートグレー、ハウスはバトルシップグレーとなった。太平洋の暗い海の色に合わせたとされている。
オーストラリア兵をスエズへ運んだ。



■「アキタニア」1941年12月～1945年9月
1941年12月、アメリカが第二次大戦に参戦し、「アキタニア」は米海軍に徴用された。
アメリカでドックインし、米海軍のヘイズグレー1色になった。ポートモレスビー等の最前線まで行っている。



■「アキタニア」1945年9月～1948年3月
1945年8月、第二次大戦の終戦で「アキタニア」は英政府に返却され、英海軍の徴用に代わりオーストラリアやカナダ兵の帰還輸送に使うことになった。
バトルシップグレーに改められ、武装解除。煙突は船長の要望でキュナードカラーに変わった。
1948年3月には帰還輸送が終わり、キュナードへ返却されている。

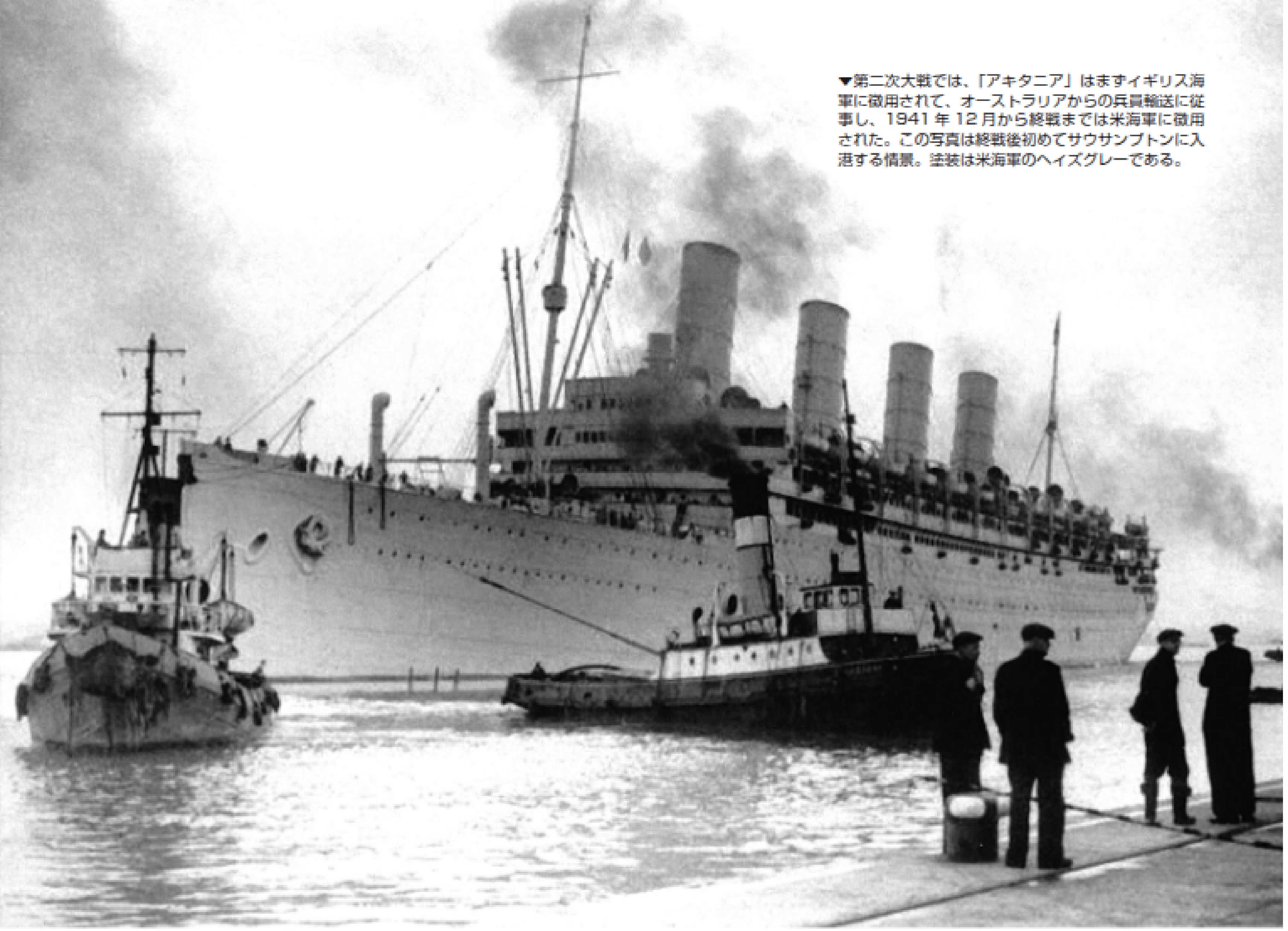


大西洋横断に就いていた1918年10月9日、「アキタニア」はアイルランド西岸沖をサウサンプトンに向かって高速航行していた。船内には8000人のアメリカ兵。護衛は5隻のフォアスタッカー型駆逐艦。強風と荒波のなか、懸命のエスコートに就いていた。その1隻、駆逐艦「ショウ」がいきなり「アキタニア」の船首を横切ったのだが、駆逐艦は操船を誤り、「アキタニア」は「ショウ」の左舷横腹後部にもろに衝突し、「ショウ」は真っ二つになった。ラミングされたと説明されている。「ショウ」の後部は失われたが、前半主要部分は沈まなかった。他の駆逐艦が生存者を救助し、「ショウ」は駆逐艦に曳航されてポーツマスに入港した。「アキタニア」の方は何の損傷もなく、サウサンプトンに入港している。

ようやく巡ってきた安定航海

1919年4月、第一次大戦は終結した。「アキタニア」はニューヨークへの帰還輸送をやり、キュナードに帰って来たのが1919年5月である。タイン造船所へ入り、客船への復旧工事を行った。このチャンスを捕えて、油焚きに改造することになった。石炭焚き時代は石炭消費は1日1100トン、350人の火夫と運搬人を必要としたが、油焚きにすると1日油650トン、火夫50人で済んだ。1919年6月14日にはサウサンプトンの新ターミナルが完成したので、キュナードは母港をリバプールからサウサンプトンに替えた。でも船籍はリバプールのままである。

1920年3月6日、サウサンプトンから晴れて第一次大戦後初の商業航海に出発した。ライバルのホワイトスターは「オリンピック」時代からサウサンプトンだったから、これでスーパーライナーは全てサウサンプトン発となったわけである。途中フランスのシェルブール寄港も定期となった。1920年には世界的な石炭ストが巻き起こったのだが、この時キュナードの「モレタニア」と「アキタニア」はすでに油焚きに改造されていたから、ラッキーであった。1921年春には北ドイツ・ロイドの「インペラトール」が「ベレンガリア」と改名されてキュナードのフリートに加わった。でも24ノットのスーパーライナーが3隻揃ってウィークリーサービスが完成したのもつかの間の1921



▼第二次大戦では、「アキタニア」はまずイギリス海軍に徴用されて、オーストラリアからの兵員輸送に従事し、1941年12月から終戦までは米海軍に徴用された。この写真は終戦後初めてサウサンプトンに入港する情景。塗装は米海軍のヘイズグレーである。

年6月、不況のため「モレタニア」がサウサンプトンで係船されてしまった。欠けた1隻はホワイトスターの「オリンピック」を入れた。協同運航でも郵便契約に適うことに気がついたからである。でも1922年には「モレタニア」は復活する。

1930年は最悪の年。世界不況で客は激減し、冬の大西洋は大荒れ。油を節約して全高速客船が18ノットに落として走った。

まだ世界不況が続いている1931年、キュナードは「アキタニア」「ベレンガリア」「モレタニア」の3隻で週1便運航。ホワイトスターは古い「ホメリック」「オリンピック」と「マジェスティック」の3隻で週1便運航である。ニューヨークからクルーズにも出た。「アキタニア」と「モレタニア」は冬期に地中海8週間をやり、ビルフランシェ（現在のニース）に入っている。サウサンプトンからはジブラルタル6日間をやった。「アキタニア」は英政府にチャーターされ、英軍兵士を乗せてパレスチナまで行っている。1933年には「アキタニア」は3か月かけてオーバーホールをやった。1934年には「モレタニア」はクルーズ船に落とされ、白船体になった。1935年にはコールサインを変更。GLRZとなった。

1936年には、キュナードのスーパーライナー「クイン・メリー」が就航した。同時にニューヨークの到着場所もノースリバーの54番ピアからベイスンの広い90番ピアに変更になった。「モレタニア」は1935年に白船体のままで廃船となったが、「アキタニア」は元気で、1936年に近代化改装を行った。外観で目立つ点は、フライングブリッジに密閉型の操舵室を設置して、本格的なナビゲーションブリッジにしてしまい、下段のブリッジを廃止してしまったことである。プロペラも新設計のに替えて、ちょっと性能が向上した。

隠密定期航行を決行した

第二次大戦が始まった1939年9月3日、「アキタニア」はニューヨークを出て、大西洋をサウサンプトンに向かっていた。名目はアゾレス諸島クルーズ。英政府の要請でドイツの「ブレーメン」を監視して31日の夕刻6時の出港になったが、結局「ブレーメン」を見失い、ひとりアゾレス諸島へ向かったのである。客は少なかったが、その中に米国外交官ウイントン・ウィグレーが乗っていた。開戦の連絡と同時に灯火管制を実施し、アゾレス諸島は抜港。ジグザグコースを取って6日にはサウサンプトンに飛び込んでいった。この時、虎の子の「クイン・メリー」は運航を止めてニューヨークに係船されてしまったのだが、「アキタニア」はその後も大型客船でただ1隻、ニューヨークへの航海を続行させることになった。客船の原価償却は当時は20年ぐらい。「アキタニア」はほとんど償却しているから、帳簿価格は安い。いざとなったら犠牲にする覚悟である。サウサンプトンを9月11日に出港、17日にニューヨークへ入ってきた。船籍はキュナードのままで、黒の船体、煙突とハウスはホームフリートグレーに塗られ、グロテスクな姿となっていた。ニューヨーク出港は10月27日である。正規の客は取らず、表向きは郵便輸送、実は食料品等の貨物に偽装して禁制の武器弾薬を運んだのである。これは第一次大戦の初期にもやった。国際法の中立違反であるが、米当局は知らないふりをした。月1回のペースで90番ピアに入ってくるこの船をニューヨーカーは「ミステリーシップ」と呼んだ。ニュース写真も残っている。アメリカが正々堂々と軍事物資をイギリスに輸送できるようになったのは半年後、1941年3月のレンドリース法成立からである。でもその前、1940年3月には、「アキタニア」はミステリー運航をやめて、シドニーからオーストラリア兵を中東へ運ぶことになった。コンボイ名はTC-1。「アキタニア」に「エンプレス・オブ・ブリテン」「エンプレス・オブ・オーストラリア」「ダッチェス・オブベドフォード」「モナーク・オブ・バーミューダ」で、戦艦「フッド」等6隻の戦艦や巡洋艦がエスコートした。

1940年11月に、「アキタニア」は英海軍に制式徴用された。シンガポールで黒船体に黒煙突、バトルシップグレーのハウスとなった。最初に行った作戦は通商破壊をやっていたドイツ特設巡洋艦「コーモラン」の追跡である。巡洋艦「シドニー」と組んで「コーモラン」を追い詰め、パース沖で11月19日に仕留めて、2隻は11月24日にシドニーに戻ってきた。1941年12月には日本と開戦。早速「アキタニア」は日本軍が侵攻してきそうなオーストラリアの信託統治領、ニューギニアのポートモレスビーへ4150人のオーストラリア兵を運んだ。

1941年12月末、アメリカが第二次大戦に参戦してすぐ、「アキタニア」は米政府にチャーターされた。シンガポールで塗色を米海軍のヘイズグレー1色にして、ハワイへやって来た。ホノルルから米本土へ米兵の家族や子供を疎開させるためである。サンフランシスコまで7日間で航海した。この航海はマトソンの「ラーリン」とコンボイを組んだが、サンフランシスコ入港は濃霧で苦労した。勝手知った「ラーリン」に先行してもらい、無線封鎖していたので、ラーリンの航海灯と汽笛で誘導してもらって、ゴールデンゲートを通過した。

1942年2月からは、「アキタニア」はガダルカナル奪還のアメリカ兵を乗せてポートモレスビーへ行った。5月からはニューヨークへ戻ってグーロック行き。カナダのハリファックスからスコットランドのグーロックへもカナダ兵を運んだ。その後は「クイン・メリー」や「イル・ド・フランス」等とコンボイを組んで、オーストラリア兵を乗せて北アフリカへ。他にも「アキタニア」はクイン姉妹の影に隠れる形で、けっこう世界を巡り歩いた。30年も経った古客船は「グランド・オールド・レディ」または「グラニー」と愛称された。1945年8月15日の終戦で「アキタニア」は米海軍の徴用を解かれ、英政府に返された。英海軍の徴用になり、早速ドックインして武装を解除、船体を英海軍のバトルシップグレーに塗り替えた。煙突は船長の依頼で、キュナードカラーに戻された。1945年秋と1946年には日本進駐のイギリス兵を乗せて日本に来る計画もあったが、結局輸送人数が少ないので、取りやめになったらしい。戦時中の航行距離は52万6000マイル。40万人の兵士を運んだ。

戦後もオーストラリア兵やカナダ兵を本国へ輸送する任務に就いた。サウサンプトンからシドニー行きとハリファックス行きである。それが終了し、キュナードに返還されたのは、1948年3月であった。

商業航海はカナダ航路へ

「アキタニア」はキュナードに戻って、1948年3月にサウサンプトンのキングジョージ5世ドックに入渠し、客船に復元され、正規のキュナードカラーとなって商業航海に復帰した。しかし華のニューヨーク航路には復活せず、1948年5月30日から、サウサンプトン発のカナダのハリファックスへの命令航路についた。最初に運んだのはドイツで進駐軍となっていたカナダ兵とその家族。一般乗客は少なかった。しかし将来性を考えてカナダ行き航路は大型客船で維持してゆこうということになり、1949年5月からは定期航路に昇格。これがキュナード・カルテットの新造就航に発展するのだ。

1949年11月19日、「アキタニア」のハリファックス行きがサウサンプトンから出た。11月24日にハリファックスに到着し、これが最終便となった。新船「フランコニア」等のカナディアンカルテットの就航が始まったからである。「アキタニア」は係船され、年末にはキュナードが「アキタニア」の廃船を発表した。大西洋を横断すること450往復、300万マイル。120万人を運んだ。キャリア36年、通常のオーシャンライナーの2倍の長寿であった。

1950年2月、売りに出された「アキタニア」がブリティッシュ・アイアン・アンド・スチール社に買われた。2月19日にはサウサンプトンでフラッグセレモニーが行われ、キュナードの籍を離れた。そして翌2月20日、スクラップの地、スコットランドのクライド河口へ自力回航されて行ったのである。終焉の地、ガレロッホ到着は21日であった。「アキタニア」は36年の長寿であった。

参考文献
『Liners in Battledress』David Williams著
英Conway Maritime Press（1989年出版）
戦時中の各国の客船カモフラージュ塗装を写真で解説。巻末に研究論文も。
『Ocean Liners of the Past・Aquitania』
英PSL（1971年出版）シップビルダー誌の建造技術報告をまとめたもの。



▼第二次大戦後、オーストラリア兵士の帰還輸送でシドニーに入港した「アキタニア」。船体は英海軍のバトルシップグレーに塗り直され、キュナードカラーのファンネルが復活した。着桟したのはサーキュラキイではなく、軍港のあるウールームールーであった。

好きなモノを好きなように作りたい！

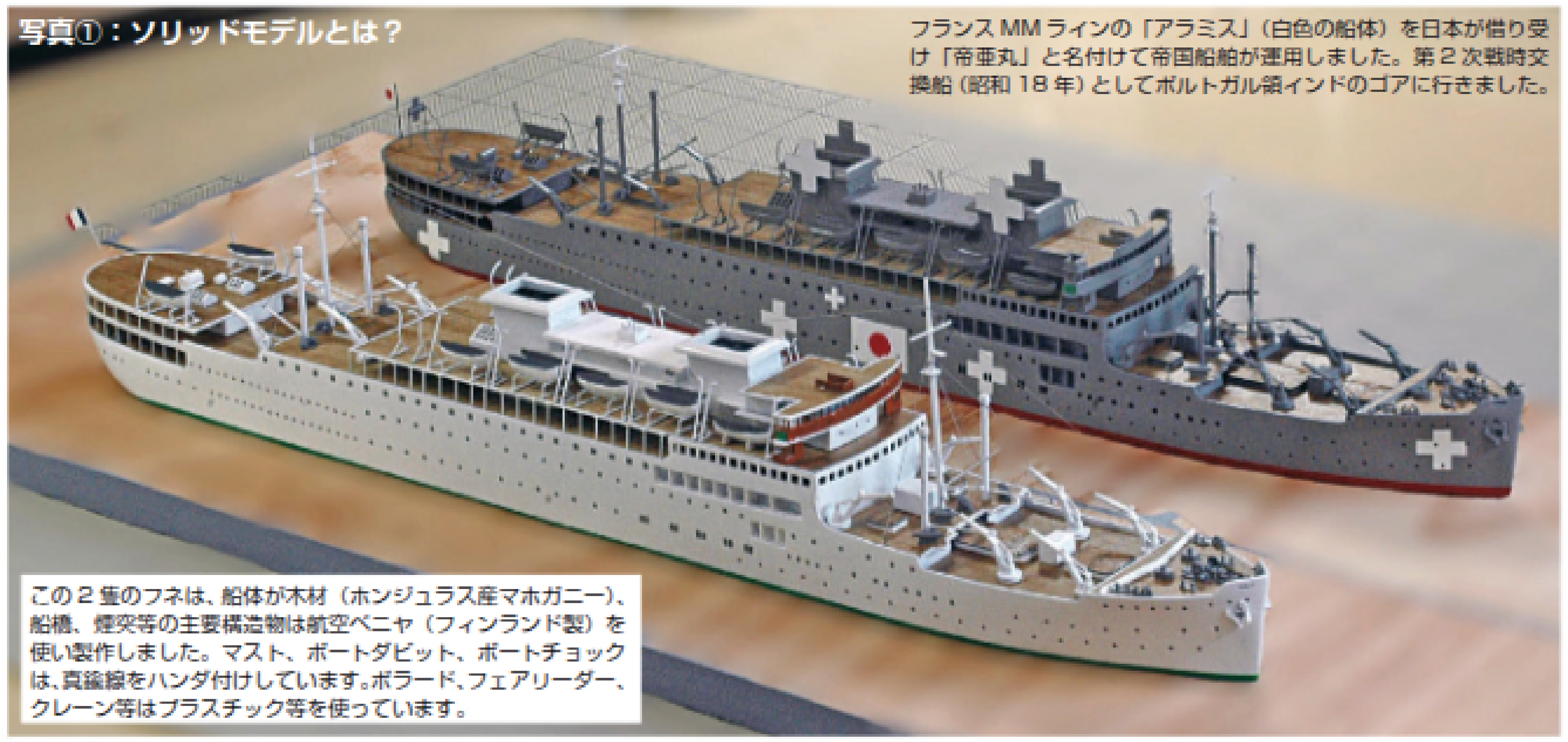
艦船ソリッドモデル入門

Vol.41
エンプレス・オブ・ブリテン（前編）

Wooden Ship Model Style

写真・文・製作：鎌倉 巧

今回からはカナダのケベックとイギリスのリバプールを結んでいたカナディアン・パシフィックのオーシャンライナー「エンプレス・オブ・ブリテン」を製作していきます。



写真①：ソリッドモデルとは？

フランス MM ラインの「アラミス」（白色の船体）を日本が借り受け「帝亜丸」と名付けて帝国船舶が運用しました。第２次戦時交換船（昭和 18 年）としてポルトガル領インドのゴアに行きました。

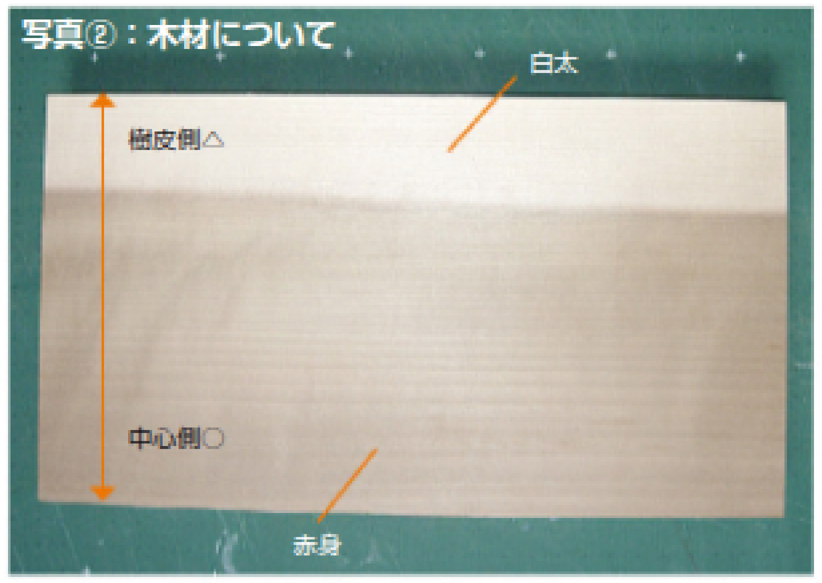
この２隻のフネは、船体が木材（ホンジュラス産マホガニー）、船橋、煙突等の主要構造物は航空ベニヤ（フィンランド製）を使い製作しました。マスト、ボートダビット、ボートチョックは、真鍮線をハンダ付けしています。ボラード、フェアリーダー、クレーン等はプラスチック等を使っています。

はじめに

本誌に艦船ソリッドモデル入門を書き始めて前号で遂に Vol.40 となり、連載が丸 10 年となりました。これもひとえに熱心な読者モデラーとモデルアート社からの叱咤激励のおかげと衷心よりお礼申し上げます。

艦船ソリッドモデルを手掛ける人は、今や絶滅危惧種に近い存在で、若い世代の方に「木材でフネを作る」というと、お土産屋さんで見かける民芸調のフネを想像するようで、理解してもらうには一苦労します。ただ、サブタイトルにありますように「好きなものを好きなように作りたい！」（この名付け親は、前編集長の真島栄二氏）には、このソリッドモデルの技術を用いるのが一番の近道なのではと思っています。モデルシップの縮尺、大きさに捉われることなく自由に設定でき、どんなものでも作れる最大の利点がここにあります。ソリッドモデルというのは、インジェクションキットとはアプローチが違うという、ただそれだけのことです。

10 年ひと昔といいますが、小学４年生の少年が二十歳になるのですから時の流れというのは実に早いものです。若い世代の方に「ソリッドモデルというものがどんなものなのか」を知ってもらうために、今回は原点に返って少し説明したいと思います。



写真②：木材について

◀サンプルとして用意した朴の木ですが、一目見て分かるように上と下では色が違います。上の白い部分は「白太（しらた）」（辺材）で木材の樹皮側になり、下の緑がかった部分は「赤身（あかみ）」（芯材）といって木材の中心側になります。白太は、樹木の若い部分で水分を多く含み、軟らかく変形しやすいため模型には不向きです。ソリッドモデルは、乾燥の行きとどいた赤身の部分を使って作ります。

プラモデル出現以前

日本でプラモデルが普及しはじめたのが今から 70 年近く前のことで、それまでの模型は木材と金属を利用して作られていました。艦船模型に限っていえば、船体及び主要構造物は木材を削り、マストや細かな艤装品には金属を用いていました。このソリッドモデルの技術、今ではプロの業者や一部の特化したマニアだけが試みていますが、プラモデル出現以前のモデラーは、皆模型を作るといったらこうするしかなかったので、木材と金属を中心に艦船模型を作るというのは、ごく普通の当たり前の話しだったと思って聞いてください（写真①）。

木材について

木材と金属で艦船模型を作るといっても、素材は適したものを用いるのが完成への近道で、木材は木であれば何でも良いとわけではなく、模型製作に適し加工しやすいものがいくつかありますので紹介します。

ビギナーには、なんといっても朴の木（ほおのき）がお勧めで、ここにその朴の木の板をサンプルとして用意してみました。見ていただくと分かりますが、１枚の板でも白い所と緑がかった部分があり、この白い部分は、辺材といって樹木の外側にあたるところで、ここは模型の素材としては適さず、反対側の濃い緑色をした部分は通常、赤身といって樹木の中心部に近い所のもので、ここを模型の素材として用います（写真②）。

日本産では朴の木以外にも、桧、姫小松、一位、桜、銀杏等、一般的な彫刻に適した樹木は、だいたい利用できます。外国産であれば、ホリー、レモン、洋梨、ウォールナット、マホガニー等が利用でき、これらの木材は、一部はホームセンターや専門店で入手可能ですが、インターネットで購入することもできます。

塗装について

船体・主要構造物の加工が終わった木材パーツは塗装となるわけですが、ソリッドモデルの場合は木材に直接塗料を塗ることは避けましょう。まずはじめに、木材の表面の下地処理をしなければいけません。

以前はサーフェイサー、またはサンディングシーラーを使って下地処理していたのですが、今はまずはじめに瞬間接着剤を木材の表面に塗って下地を整えます（写真③）。瞬間接着剤を用いることにより、木材の表面を樹脂化させることができます。その後にグレーのサーフェイサーを塗ってはサンドペーパーをかけるという作業を繰り返し、均一で丈夫な下地を作ります（写真④）。

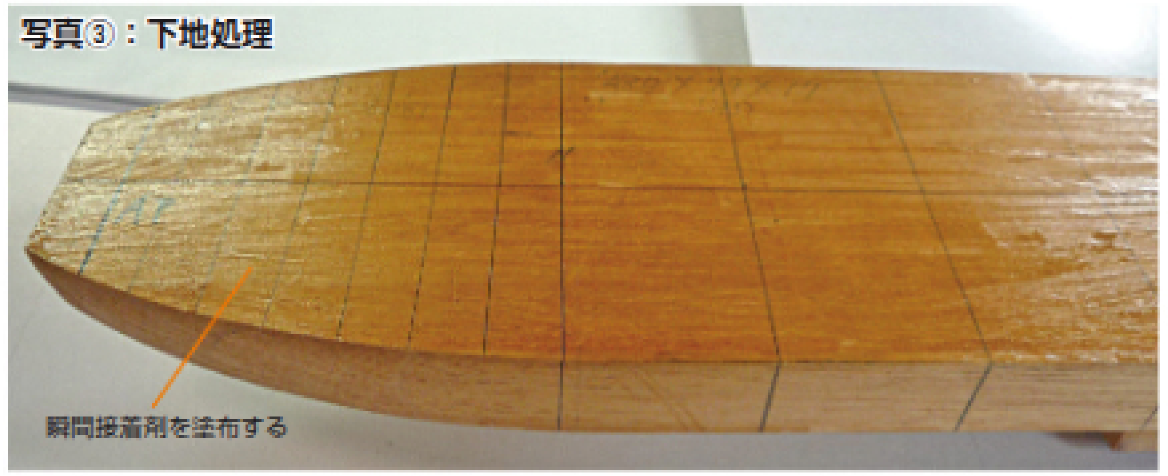
金属について

金属の方では、真鍮材が線材・板材ともに様々な種類が揃っており、大変便利です。これらの接合は、ほとんどの場合ハンダを用います。ハンダごてはワット数が高いものが扱いやすいといわれていますが、小型の艦船モデル、特に 1/700 くらいの大きさであれば 30 ～ 40 ワットのハンダごてが１本あれば、ほとんどの作業はできると思います（写真⑤）。

ハンダはペーストが入っていない錫 60％配合のものが良く、フラックス（塩化亜鉛水溶液）を使い接合するとハンダの流れもよく、綺麗に仕上がります（写真⑥）。フラックスを使用したパーツは、必ず水洗いをしなければいけません。フラックスは強酸で、これを怠ると部品に酸化が起こり、塗装しても錆が出てきます（写真⑦）。

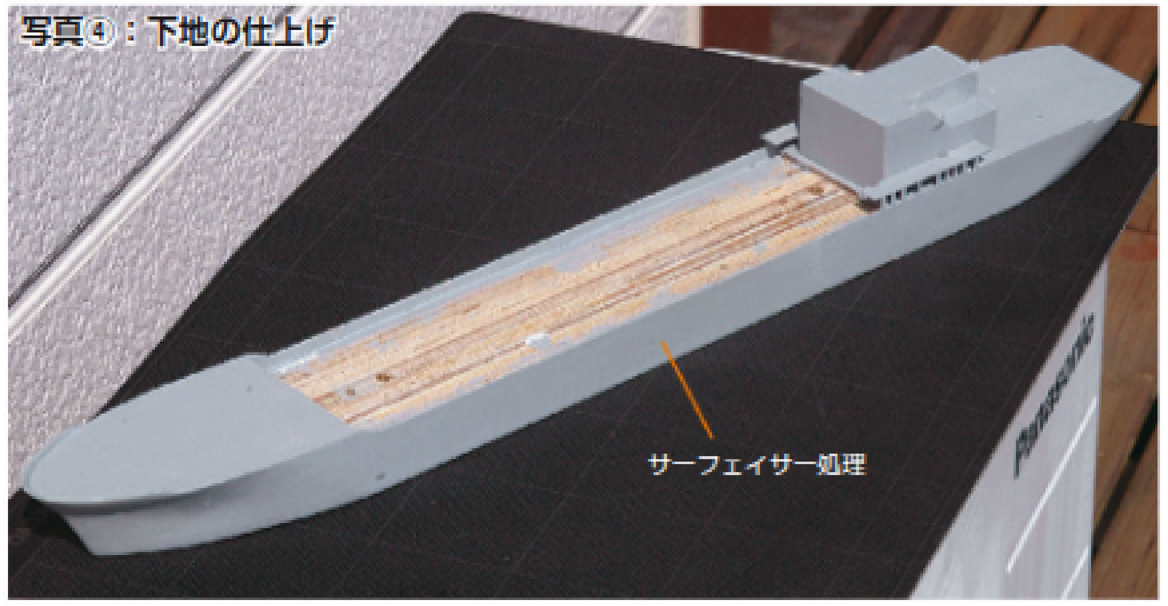
金属部品を水洗いし、乾燥が終わると塗装することができますが、必ずサーフェイサーを吹き付けます。最近のサーフェイサースプレー缶は、金属プライマーも入っており、木材・金属の下地処理に優れています。

ソリッドモデルの場合は、木材や金属には直接塗装することができないので、どのパーツも必ず下地処理をしなければなりません。こうしたことは非常に手間であるため、ソリッドモデルが敬遠された一因かと思っています。



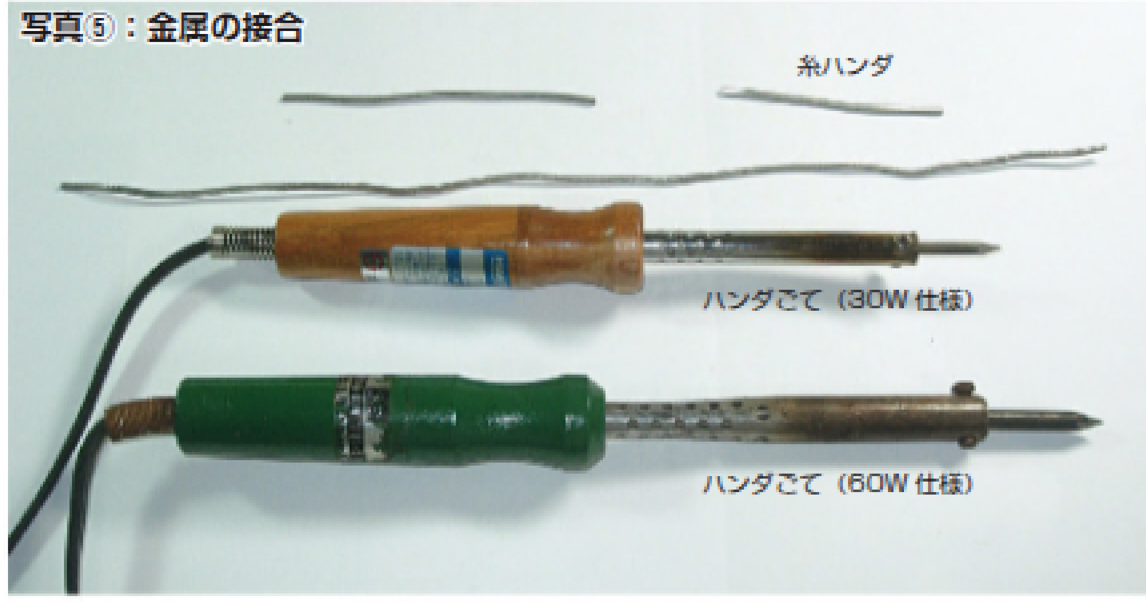
写真③：下地処理

▲ソリッドモデルの場合には、木材に直接塗料を塗ることはできないので、はじめに下地を整える必要があります。その昔は、サンディングシーラーやサーフェイサーを使っていましたが、この手法ですと木材の継ぎ目等が年数の経過とともに必ず浮かんできます。確かな理由は分からないのですが、塗料痩せ等が原因かもしれません。これを解決したのが下地処理に瞬間接着剤を使うことです。写真は、船体に瞬間接着剤を塗ったところです。瞬間接着剤はハケ塗りが難しいので、厚紙等で作ったヘラで表面に伸ばしていきます。



写真④：下地の仕上げ

▲瞬間接着剤を全体に塗り終わりましたら、グレーのサーフェイサーをハケ塗りしてサンドペーパーで磨きます。#240 くらいから研ぎはじめ、番手を上げていきます。#400 くらいになりましたら、ハケ塗りからスプレー缶のサーフェイサーに替えて、#600 くらいになるまで研いでいきます。



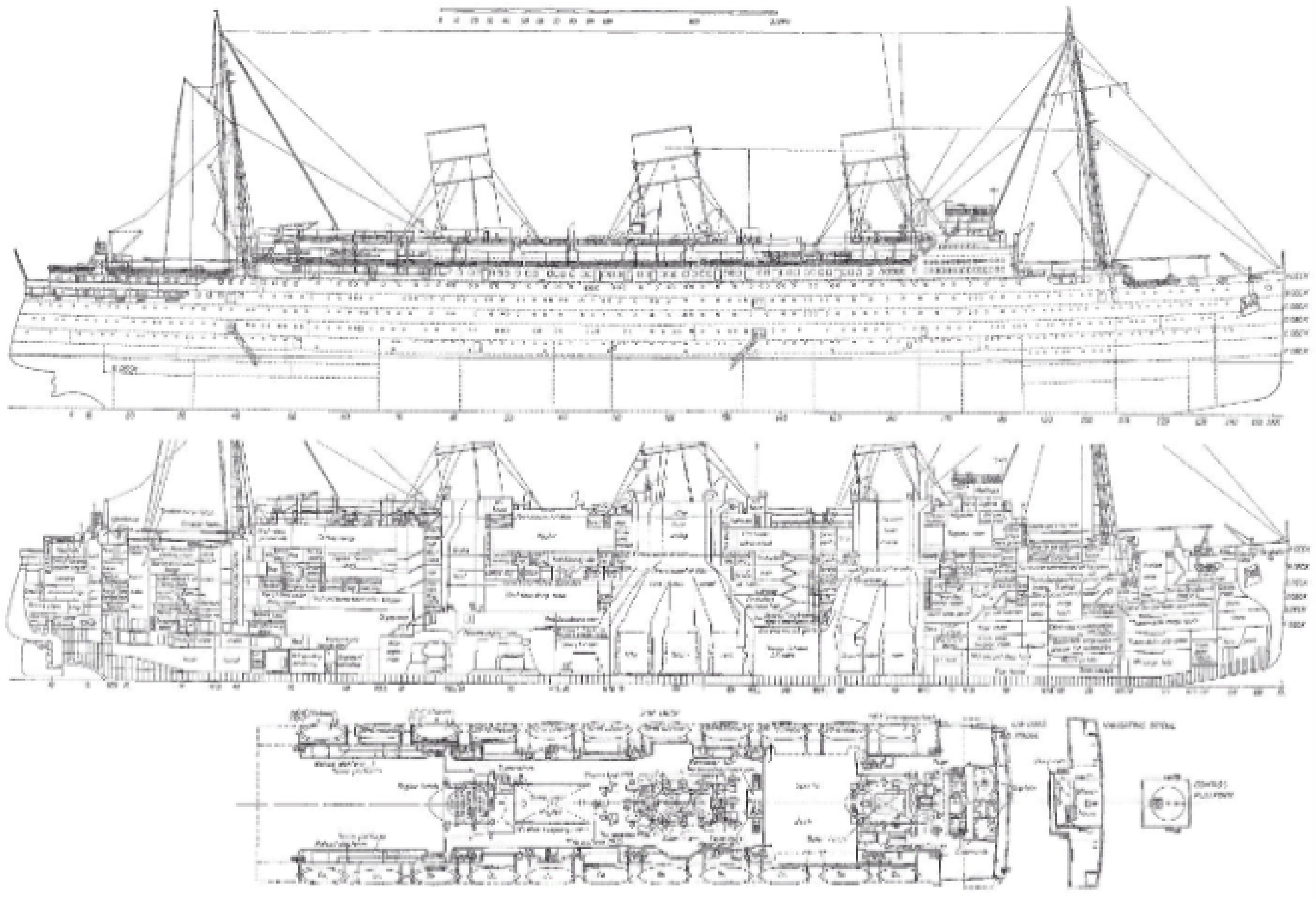
写真⑤：金属の接合

▲ソリッドモデルで使う金属は、線材・板材ともにほとんど真鍮または銅で、他にたまに洋白があり、これらの接合にはハンダが一番適しています。ハンダごては、ワット数が高いものの方が蓄熱量を多いのですが、それに合わせてコテの重さも出てきますので、取り回しが便利な 30 ～ 60W くらいのコテが良いのでないでしょうか。（上側 30W、下側 60W）また小手先のチップは、ヤスリで削ることができるものに交換すると良いでしょう。

可能性を求めて

ソリッドモデルとひとくちでいってしまうと、なんだか固いイメージが先行して、この素材を使ったら定義違反ではないのではないかとか、余計なことを考えたりしますが、そんなルールは一切ありません。木材、金

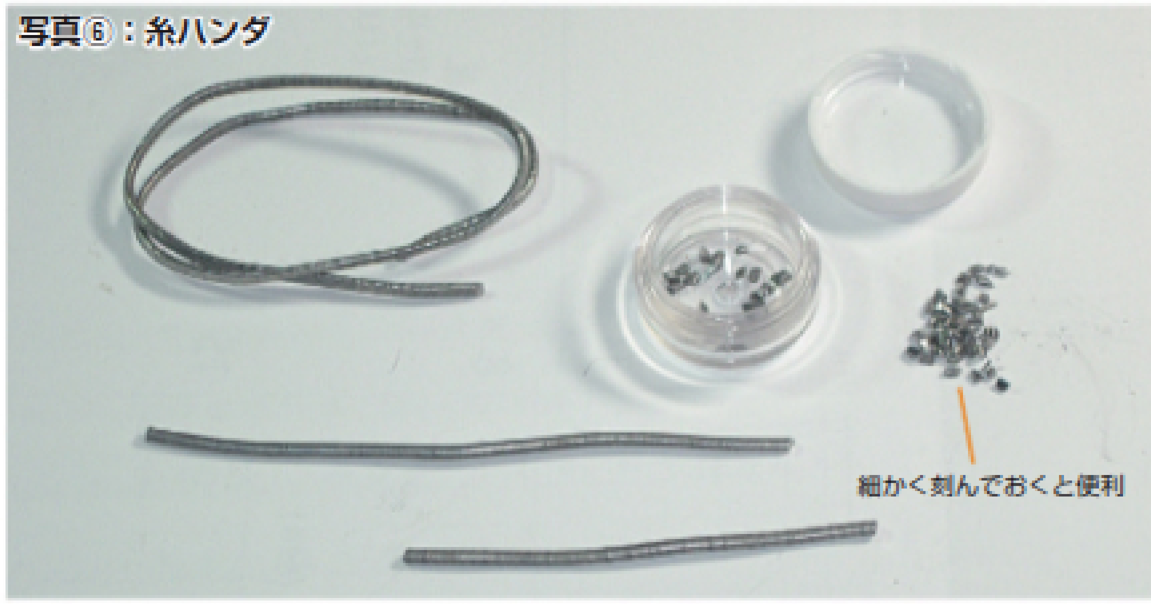
The Canadian Pacific Quadruple-screw Liner "Empress of Britain"—Outboard and Inboard Elevations and Deck Plans.



出典：The Shipbuilder & Marine Engine-Builder

属、プラスチック、紙、布、ケミカルウッド、ABS、FRP 等々すべての物がソリッドモデルの素材となり得ますし、また使うべきと考えます。こうして素材それぞれに対しての知識と工作技術が融合すると、あらゆるサイズのしかもジャンルを問わない模型製作が可能となるわけです。

プロの業者等は、こうした技術をもってメートル級の艦船模型を作ったりするので、読者の方々にも参考になればと思っています。私の場合スケールに関しては、軍艦模型は 1/500 洋上モデルとし、商船模型は 1/300 フルハルモデルを基準としています。こうした理由は、このスケールの艦船プラモデルの発売が極めて少なく、一目見ただけでオリジナルと分かる模型の世界を目指してきたからです。



▲糸ハンダは、ペーストの入ってない錫 60%配合のものが模型に一番向いているといわれています。接合の際にフラックス（塩化亜鉛水溶液）を使いますが、作業後のパーツは必ず水による洗浄をしなければなりません。フラックスは、強酸なので金属を腐食させてしまいます。糸ハンダは、ニッパーで細かくしておくと適量取るのに大変便利です。

考古造新（古きを考えて新しきを造る）

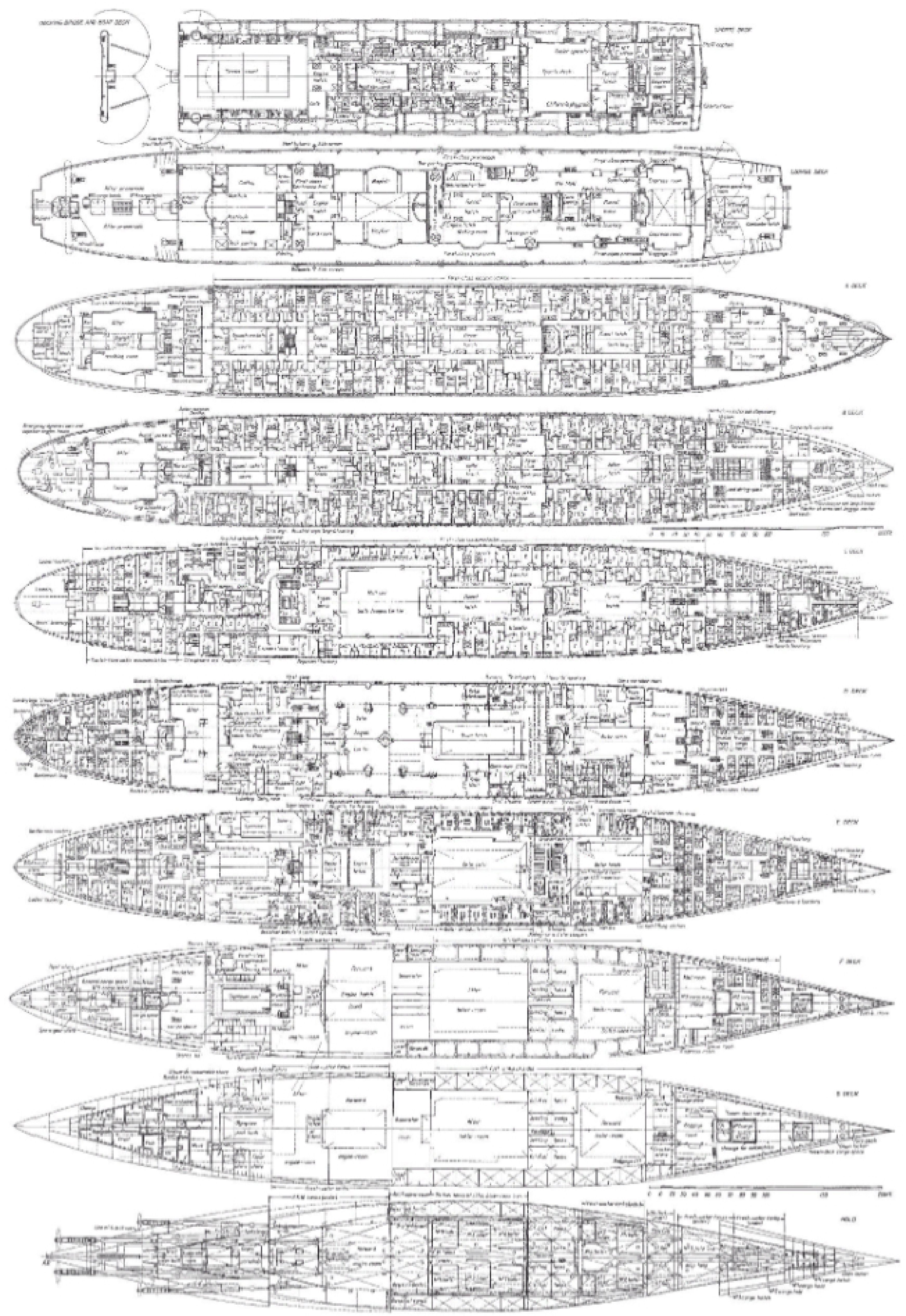
これから先、自分のリサーチした結果を模型に反映したい、オリジナル模型を追求したい方には、きっとこの内容は参考になると思っています。ソリッドモデルの技術は古くからあり、木材と金属だけではなく、現在はこれにプラスαで素材になるもの（プラスチック、ABS 樹脂、ケミカルウッド、塩ビ等）がたくさん出てきました。また、接着剤やパテの類の進化も見逃せません。これらの全く新しい発想で開発された製品のおかげで、現在はソリッドモデルを作るにしても便利な世の中になってきたのです。

エンプレス・オブ・ブリテン（Empress of Britain）

おさらいが少し長くなりました。今回は、戦前の大型客船を作ってみようと思います。カナディアン・パシフィック社は、カナダの開拓を目指して今から 140 年以上前にイギリスに誕生した会社で、鉄道、不動産、ホテル、船舶等保有した大組織でした。所有したフネの特徴は、白い船体に黄色の煙突で、カナダを起点に大西洋、太平洋にその船隊を送り出していました。

日本にも早くから来航していて、別府、神戸、横浜等に寄港し、その中で「エンプレス・オブ・ブリテン」は、8 回その姿を見せました。最後の日本寄港は 1939 年で、この年ヨーロッパでは第二次世界大戦が始まり、これ以降本船は二度と日本に来ることはありません

全長 231.8m 幅 29.7m（この図を 266% 拡大すると 1/500、190% 拡大すると 1/700 になります）



でした。結局「エンプレス・オブ・ブリテン」は戦渦に巻き込まれ、1940 年 10 月にドイツ軍の航空攻撃を受けた後に U ボートに仕留められてしまい、海中にその姿を没してしまいました。

「エンプレス・オブ・ブリテン」は当時日本で最大であった戦艦「長門」クラスより全長で７メートルほども長かったので、その大きさが想像できるのではないでしょうか。第二次世界大戦において沈没した、最大の商船とも言われています。

図　面

今回の図面は、東京海洋大学図書館所蔵の『The Shipbuilder & Marine Engine-Builder』1931 年５月号からの複写です。保存状態が極めて良好で、ゴミやシミ等が全くなく素晴らしいものです。一連の図面には舷外側面、船内側面、各層甲板平面が全て揃っており、模型製作にも非常に適しています（図面参照）。

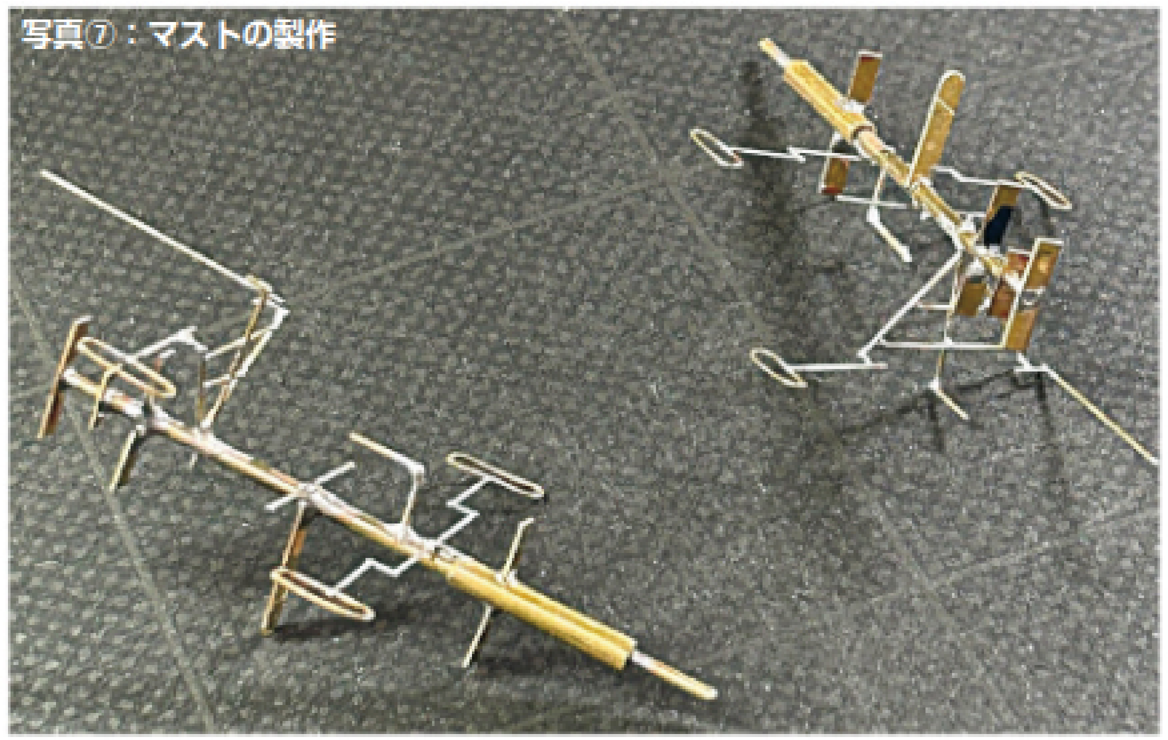
船　体

今回の船体は他からの流用を試みてみました。以前に 1/300 で「金剛丸」「興安丸」を作ろうと用意していたのですが、平面形状を削り出した時点で作業がストップしてしまい、そのまま時が流れてしまいました。改めて眺めて測ってみますと 1/500 で「エンプレス・オブ・ブリテン」に形状が似ていることが分かりました（写真⑧）。全長で長さが不足しているので、中央部付近を切断して延長用の木材を入れてみました（写真⑨）。実際の造船所でも行われる延長工事の方法で、今回はこれを模型の上でやってみました。幅はほぼ同じで、船首及び船尾の平面形状は「エンプレス・オブ・ブリテン」の方がシャープな恰好をしているので、もう少し削る必要があります（写真⑩）。

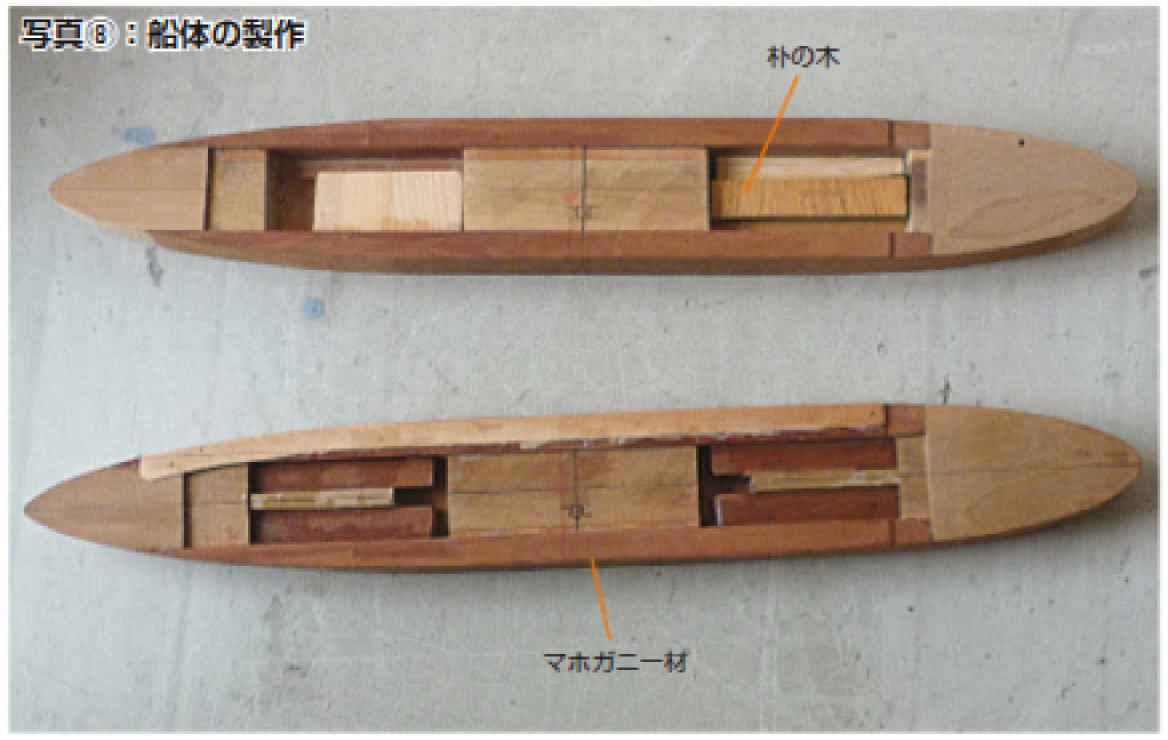
参考までに既存の船体を使って幅を広げる場合は、中心線に沿ってノコギリを入れます。ブレないように慎重に作業を行いますと、左右に分離させることができます（写真⑪）。この状態で広げたい幅の木材を中心に入れて木工ボンド（タイトボンド）を均一に塗り、C 型や F 型クランプを使って圧着させます（写真⑫）。

煙突（Funnel）

「エンプレス・オブ・ブリテン」には、巨大な３本の煙突があり、平面形状はタマゴの形をしています。この煙突を作るのに今回は、銘木の名に相応しい桑の木を使うことにしました。桑の木の数ある産地の中でも伊豆七島のひとつ御蔵島産のものが最高級とされていて、江戸指物の世界では古くから珍重されてきました。この度、小さな角材を遂に手に入れることができたので使ってみることにしました。レモンや洋梨に比べて導管が粗いようにも思えますが、刃物の入り具合が良く、



▲作例のマストですが、大きさ的には数センチくらいですが、このようにハンダを使って組むことによって細かくても丈夫なものを作り出すことができます。熱伝導の関係で、こっちを付ければあっちがポロリなんていうことがよくありますが、ワット数の高いコテで一気に作業をしますと上手くいくと思います。後にサーフェイサーを吹いてからレーダーや航海灯等を付けると良いでしょう。



▲この２隻は、以前製作していた 1/300「金剛丸」と「興安丸」で、舷側はホンジュラス産のマホガニー材を使い、内側は朴の木のブロックを入れてみました。他にもブレがこないように内部に木材を入れてガッチリ固定してあります。この大きさとスタイルが「エンプレス・オブ・ブリテン」の船体にそっくりであることに気がつきました。



▲ 1/500 で「エンプレス・オブ・ブリテン」の船体長は 464㎜で 20㎜ほど不足があるので、中央部を切断して朴の木のブロックを入れます。切断の際に使用するノコギリは、ピラニアノコ等のアサリが無いものがお勧めで、切断面が綺麗なので後の接着作業が楽になります。



▲厚さ 20㎜の朴の木のブロックを入れてみました。船首及び船尾の平面形状は、「エンプレス・オブ・ブリテン」の方がもっとシャープな形なので、削る必要があります。



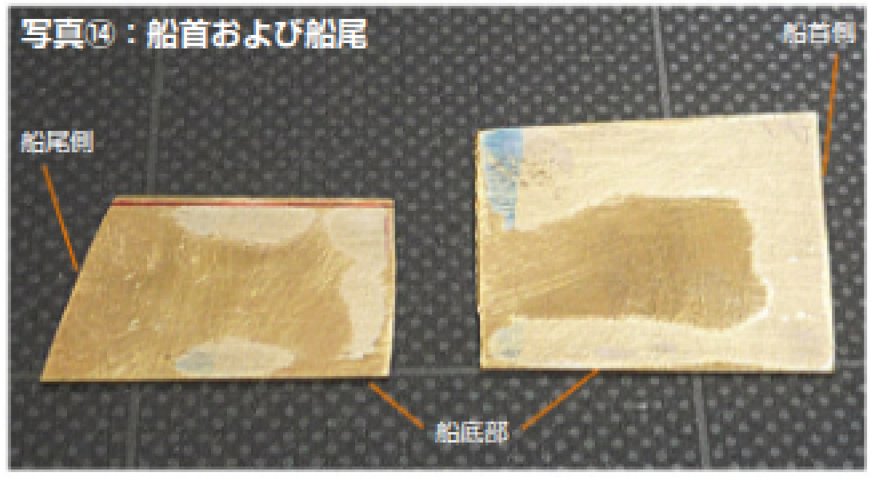
▲既存の船体をセンターラインで手切りしてみたのですが、ノコギリがうまく入って上下の誤差が 1㎜くらいで済み、自分でもびっくりしました。もし多少の誤差が生じても増幅材を入れますので、そこにセンターラインを引き直せば問題ありません。



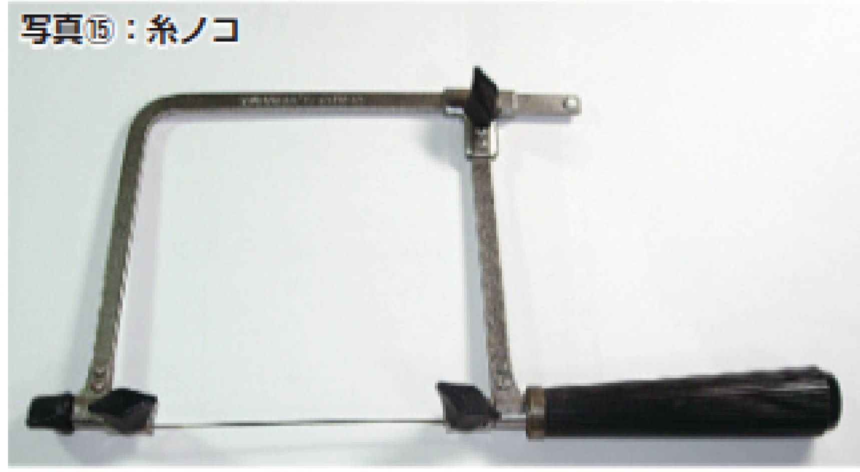
▲船体を中央部で左右に切断してブロックを入れますが、この時の接着剤は木工ボンド（タイトボンド）が良いでしょう。セメダインやコニシの木工ボンドでも強力にくっつくので構わないのですが、タイトボンドは乾燥後が固形の石膏のような感じになるので、カンナがけが非常にスムーズにできます。圧着にはＣ型やＦ型クランプを使いますが、ベンチバイスで挟んでも良いでしょう。



▲遂に手に入れた御蔵島産の桑の木です。角材の角を切り出しで落としていき、なんとなく楕円の形になってきましたら、#80 くらいのサンドペーパーを使ってタマゴ型に整えていきます。桑の木の表面は実に滑らかで下地処理等を楽しみにしています。



▲今回は、0.5㎜厚の真鍮板を使いました。はじめに表面を #150 くらいのサンドペーパーで荒らし、そこに図面を瞬間接着剤で張り付けます。それを糸ノコで切っていき棒ヤスリ等を使って側面形状を整え、その作業が終わりましたら図面をサンドペーパーで削り取ります。



▲糸ノコは大変便利な道具で、各メーカーからたくさんの種類が売り出されています。ふところの深さが 13㎝前後のものが一般的のようで、これひとつあるとほとんどの作業にほぼ困りません。写真はエンジニア社のもので、ふところの深さが 13㎝くらいです。

磨くと表面がツルツルになります。

煙突は、３本を個別に作るのではなく１本をそのまま加工し、後に３分割しました（写真⑬）。

船首及び船尾の作り方

洋上模型をシャープに美しく見せるコツは、やはりなんといっても船体が飾り台やテーブルに隙間なくピタリと置くことができるというのがポイントでしょう。モデルシップの船体が、ホギングやサギングの状態で隙間があるようでは興醒めといったところでしょうか。

このようなことを解決する手段として、船首及び船尾に真鍮板を差し込みますと側面形状も正確な形となり、接地面がピタリと決まります（写真⑭）。

真鍮板の切り出しは、糸ノコを使います。糸ノコは、少しふところが深いものが使い勝手が良く、刃はスイス製またはドイツ製がお勧めです（写真⑮）。

ここまでの作業を終えて

今回は、連載 10 周年の区切りということもあり、ソリッドモデルというものがいかなるものであるかということを知っていただくために、原点に返る説明を入れさせていただきました。この拙文が少しでもソリッドモデルに関心を持つきっかけとなり、これから始めようとするビギナーの方々への製作の一助になれば幸いです。

本題の「エンプレス・オブ・ブリテン」は、次回は船体の細部工作、下地処理から艤装に入り、完成を目指す予定です。（つづく）

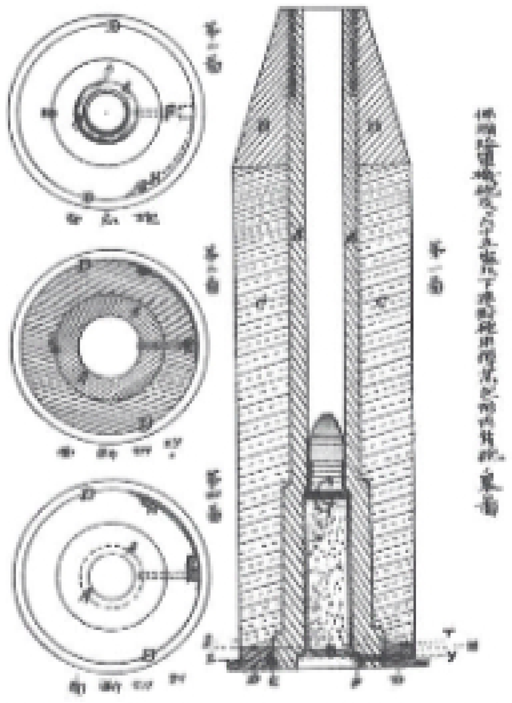
日本海軍艦船図鑑

連載 第 48 回

構成 / 作図 / 文：佐藤邦彦

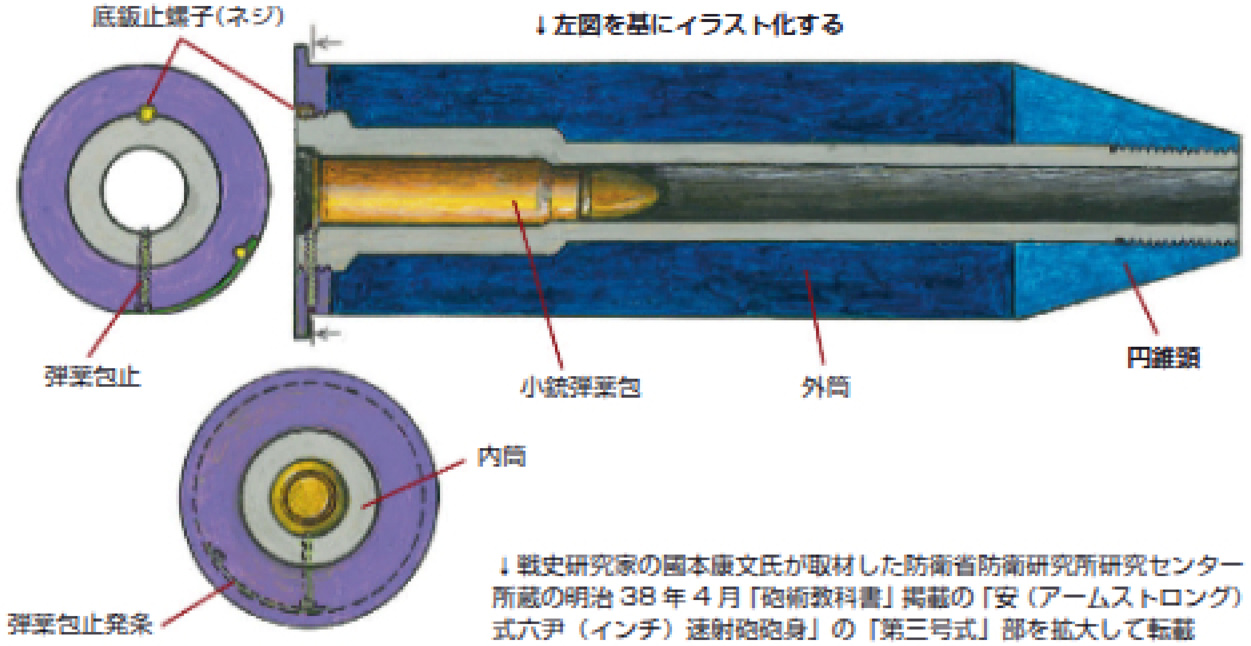
内筒砲から外筒砲へ

「射撃用標的」の展開では「内筒砲標的」「外筒砲標的」を説明なしにそのまま掲載してきた。今回は「内筒砲」から「外筒砲」への変遷と、連載では割愛した標的を含め検証する。

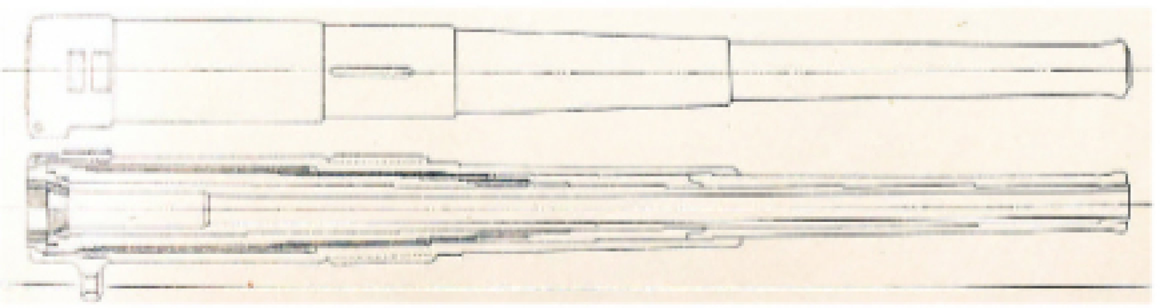


↑アジア歴史資料センター（アジ歴）で公開されている「小口径速射砲用内筒砲採用の件」として明治 28 年の報告書掲載の「仏国海軍機銃砲及び六十五密（ミリ）以下速射砲用弾薬包形内筒砲の略図」を転載する

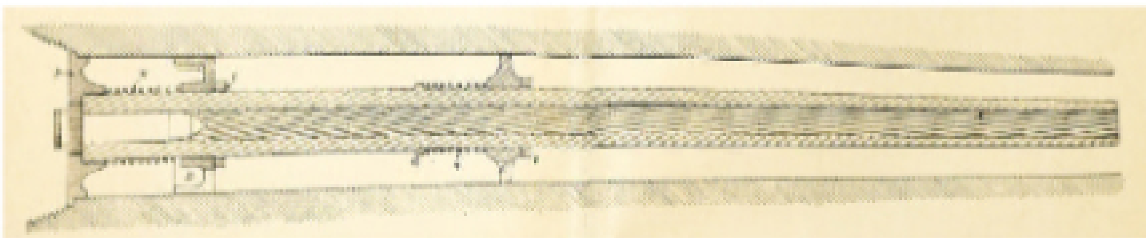
↓左図を基にイラスト化する



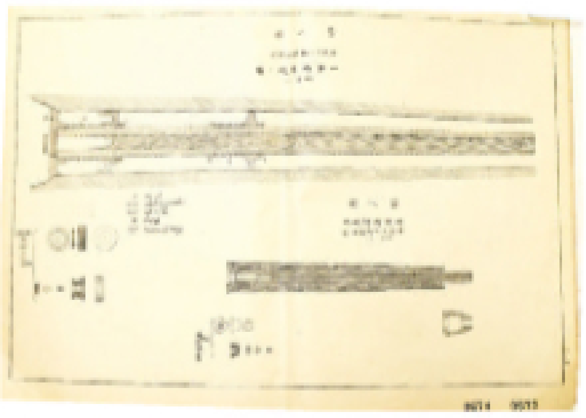
↓戦史研究家の國本康文氏が取材した防衛省防衛研究所研究センター所蔵の明治 38 年 4 月「砲術教科書」掲載の「安（アームストロング）式六尹（インチ）速射砲砲身」の「第三号式」部を拡大して転載



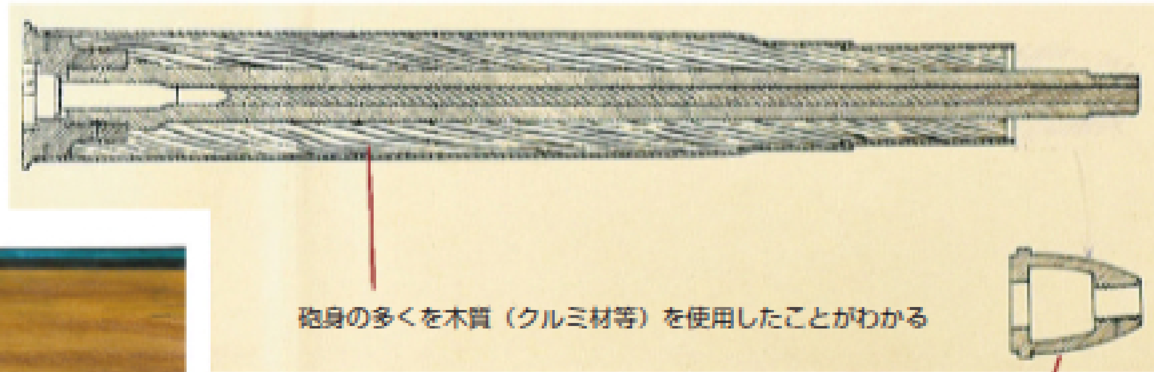
↓上の第七図は「一尹内筒砲ノ図」砲筒内中央に装着する「内筒砲」の仕様がよくわかる



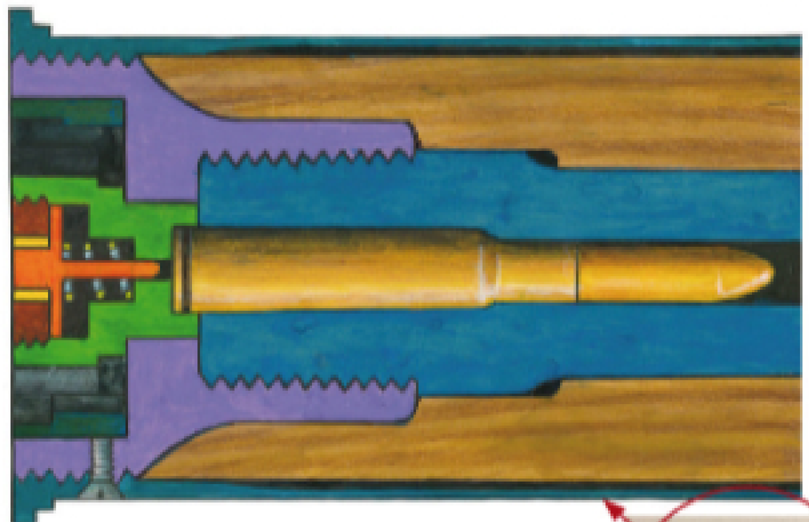
↓同じ防研所蔵の明治 35 年 1 月「軍隊教育教程 士官学校」掲載の「内筒砲」の図



↓下の第八図は「保式速射砲用弾薬包形内筒砲ノ図」
「保」はホッチキス製を示す。上に示した仏海軍仕様の全長を伸ばした改良型と思われる

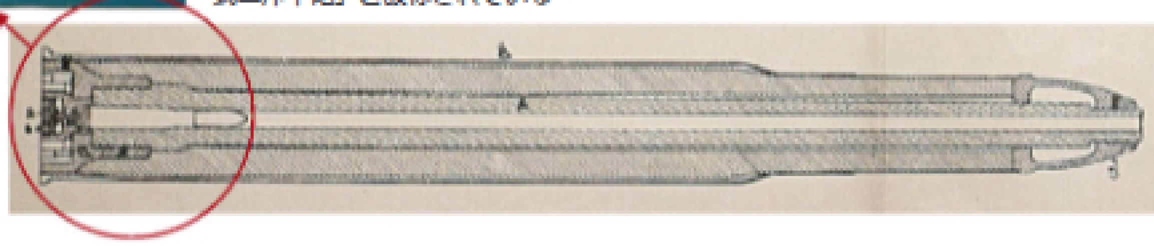


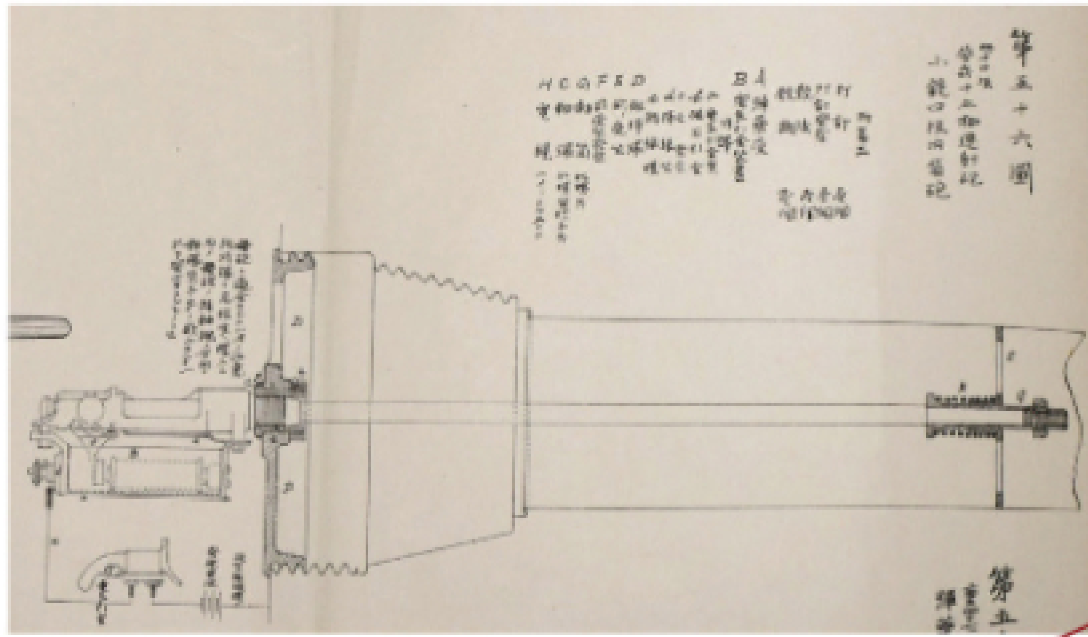
「円錐頭」が外された形で描かれている。弾薬包形内筒砲は装填するだけで中心が確保される



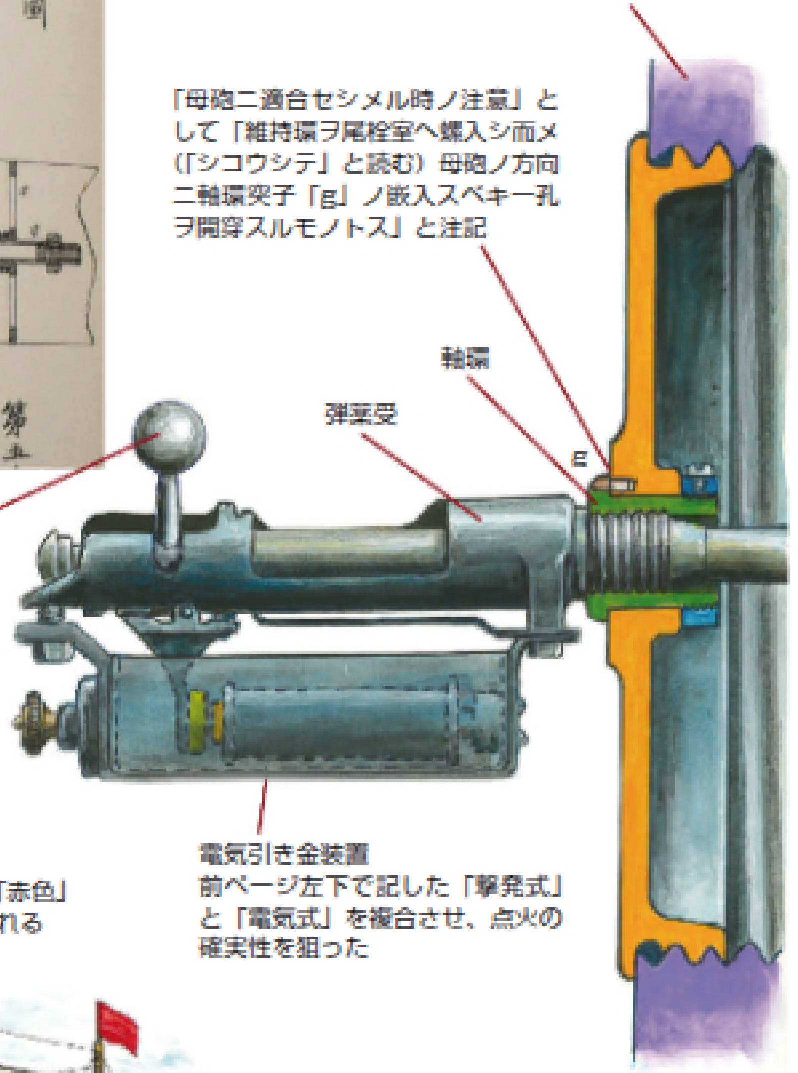
↑右断面図の○部を拡大イラスト化する。火管の底部を打撃する「撃発式」点火方式がわかる

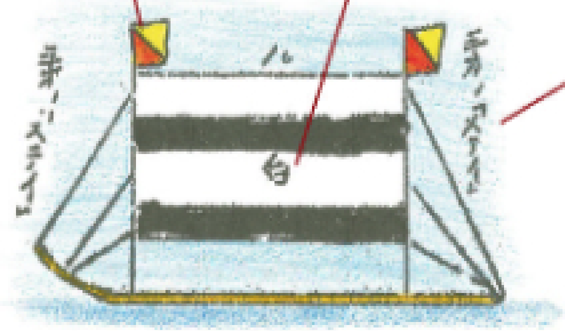
↓上と同じ明治 38 年「砲術教科書」掲載の「重四十七密米（ミリメートル）山内・保式速射砲弾薬包形内筒砲」の図。山内式は保式の改良型で、砲身・閉鎖機等に互換性は無いが弾薬・弾薬包型内筒砲は共通。明治 41 年に「山内式二斤（ポンド）半砲」と「保式二斤半砲」と改称されている





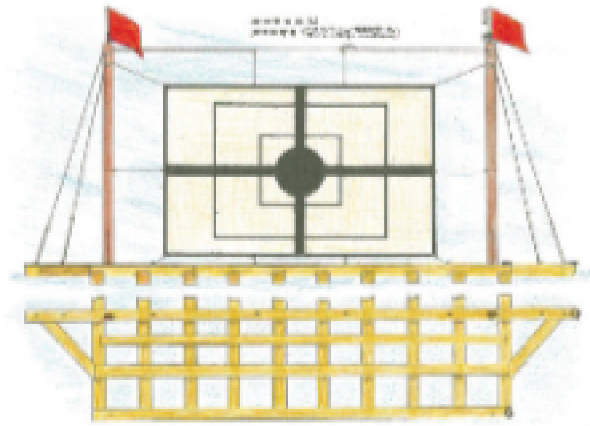
←前ページ下の第五十七図の上に掲載されている第五十六図「四十口径安式十五拇（センチ）速射砲　小銃口径内筒砲」

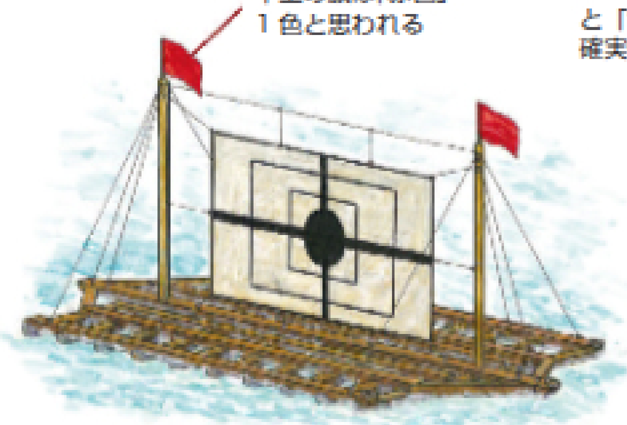




←「アジ歴」明治 37 年「極秘令達（4）」で「海上通常標的を用いて内筒砲訓練で転調した布的」として記載されている標的図を（加筆彩色して）転載する

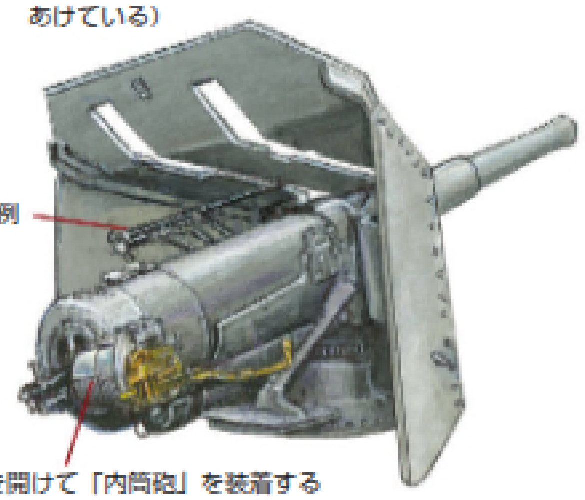
↓「アジ歴」明治 40 年の「砲台射撃」で「標的筏の適否は射撃の進行及び成績に多大の影響を及ぼす」として「戦闘射撃」の予備訓練としての「砲台射撃用標的筏」の図を掲載している（加筆彩色して転載する）





↑左の「標的筏」全体をイラスト化する

↓（ナックル付き）波除盾のスリットは装備する照準器に合わせる形状なので、左右異なることもある（汎用化の例では共に大きめにあけている）



↓「四十口径安式十五糎砲」の全体





←砲に刻印される銘の例。「鋼線式」はまさに明治 36 年に（前ページ掲載の）「三号式」として制式となったばかりの最新式

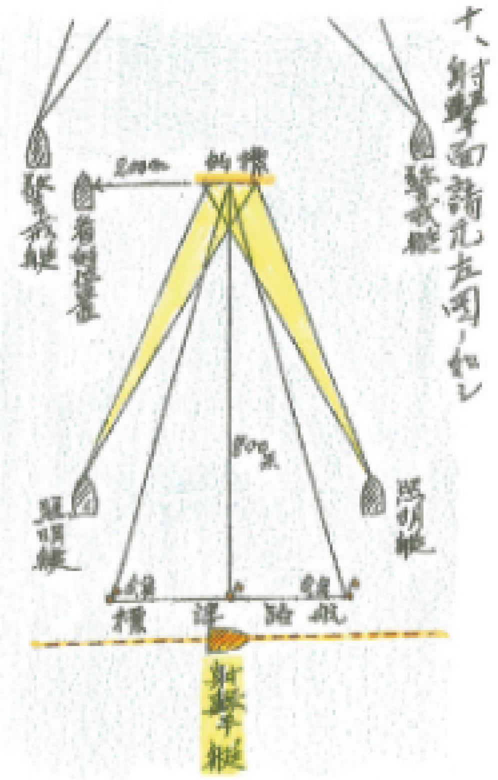
↓戦史研究家・小玉克幸氏提供の「標的射撃の光景」と題する絵はがき。起倒式手摺りを倒し、砲は俯角である。高い乾舷でもあり標的は遠くないことを伺わせる。甲板上に置かれている備品に興味を持つが、残念ながら不明





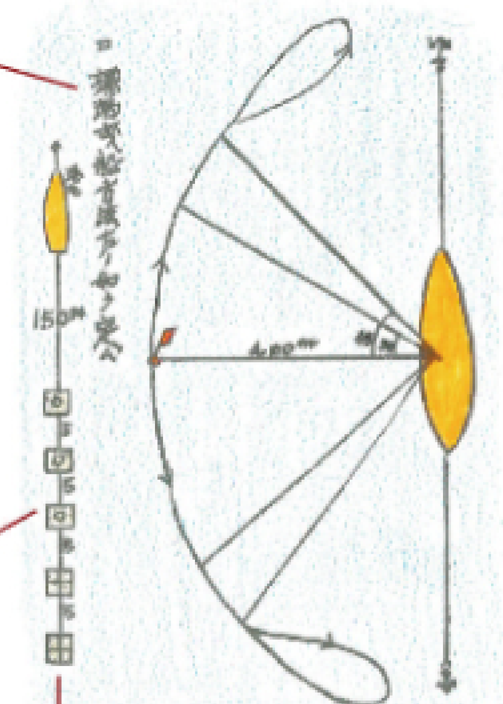
↑左に掲載した絵はがきは「裏焼き」となっているので、資料として正確を期するため左右反転して拡大掲載する

↓「アジ歴」明治 40 年 10 月の「第 10 艇隊第 12 艇隊連合夏期演習記」添付の「射撃面諸元の図」を（加筆彩色して）転載する。「内筒砲」による（定位置の）標的から 800m の距離を置いての「夜間射撃演習」の様子がわかる



↓「アジ歴」大正２年６月の「練習射撃中漁夫殺傷事件付調問書」添付の図を（加筆彩色して）転載する

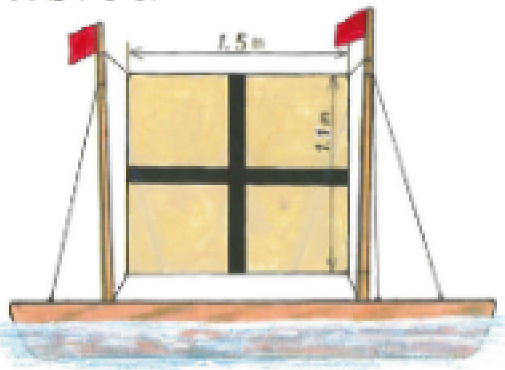
ロ「標的曳船方法左ノ如ク定ム」とある



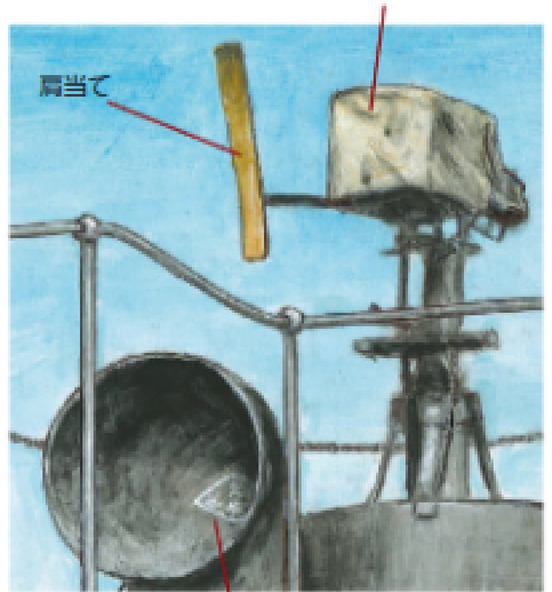
標的の布面には照準標識が（前方3つが）○印で（後方2つが）十字であったようだ

400m の距離を置いて標的曳航船（「港丸」と判読）が左右に移動（速度４～５節）し、軍艦「朝日」の「外筒砲」が射撃した射弾が漁師を殺傷してしまった事件の報告書である

↓原書房刊「海軍制度沿革」掲載の明治 42 年制「内筒砲標的及筏略図」を（加筆彩色して）転載する（「五、射撃中ハ標的ノ柱ニ赤旗ヲ掲クルモノトス」による）



キャンバスで覆われる「保式四十七粍速射砲」と推測する



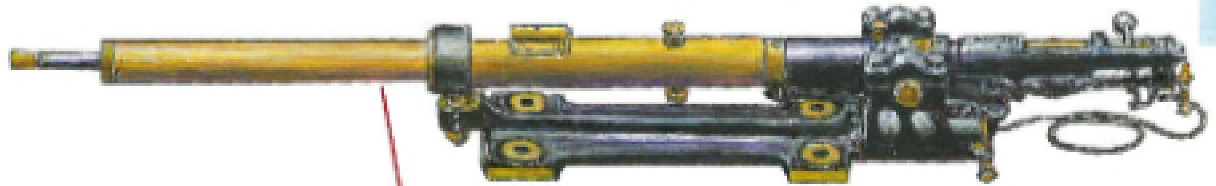
肩当て

↑下写真の通風筒まわりをイラストで示す



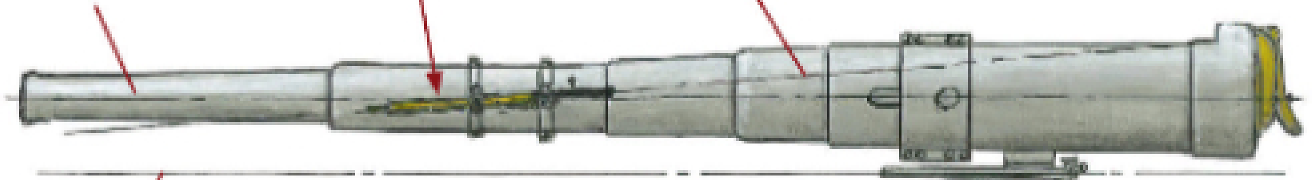
↑菱形に４文字は「火気厳禁」の警告印と思われ、通風筒内に記されるのが意外

↓明治 39 年９月 29 日令達で兵器として採用になった「廣木式小銃口径外膅砲」（「膅」の字は出典の「海軍制度沿革」による）「廣木式」は海軍技師廣木八郎考案になることによる



砲軸線

外筒砲で調定した照準線



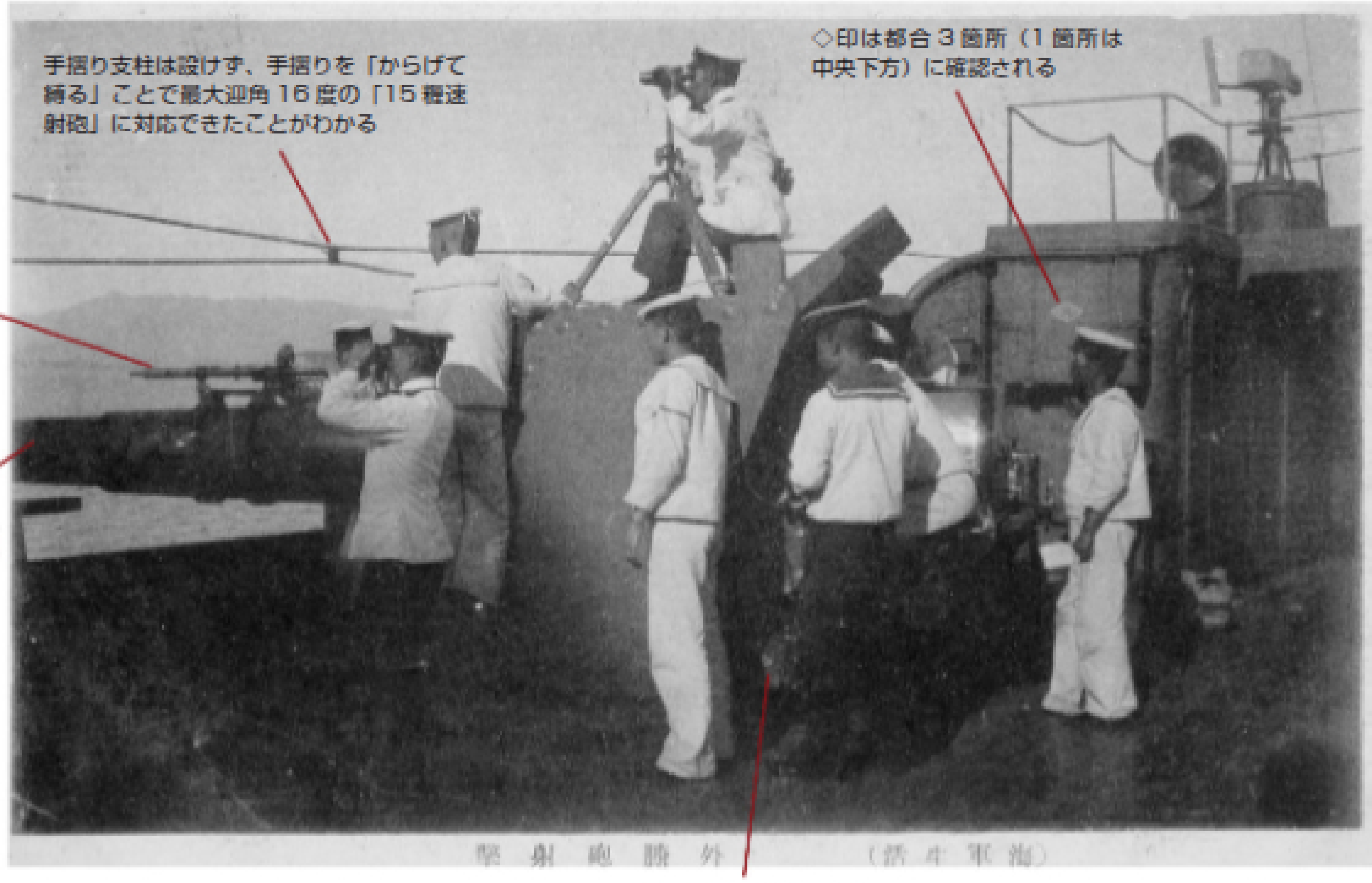
砲軸線と平行の照準線

手摺り支柱は設けず、手摺りを「からげて縛る」ことで最大迎角 16 度の「15 糎速射砲」に対応できたことがわかる

◇印は都合３箇所（１箇所は中央下方）に確認される

廣木式小銃口径外膅砲

「四十口径安式十五糎砲」



→小玉氏提供の「外膅砲射撃」と題する絵葉書（「膅」の文字が用いられている）

ここにも◇印が確認できる

↓前ページと同じ艦と判断される「火災操練」と題する絵葉書



上面にリブ付き（スリットが無い）「（ナックル付き）波除盾」

この位置に「通風口」が確認できる

甲板上のホースが４本で、放水が５本も見える

写真提供：堤明夫氏（元防衛大学校教授・海将補）



保式五十七粍砲

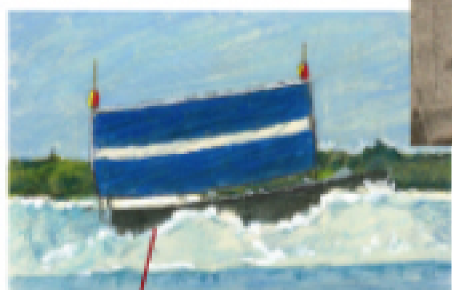
→大正３年 10 月頃、北米沿岸における装甲巡洋艦「出雲」艦尾の二十糎連装砲に外筒砲を装備して訓練中の写真。一次大戦後「出雲」は同じ装甲巡洋艦「浅間」と戦艦「備前」（旧「レトヴィザン」）と共に遣米支隊に所属してアメリカ西海岸の防衛任務にあたった

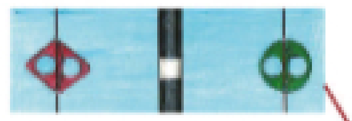


↑外膅砲射撃
写真には「実弾射撃演習は命数を縮め弾丸装薬に巨額の費用を要するを以て砲身の上に小銃の銃身を加工したる外膅砲なるものを取り付けこれに相応する近距離に標的を置き断えず射撃演習を施行し得べき軽便なる方案なり」と注釈がつけられている

資料提供：大和ミュージアム

↓曳航される射撃標的筏をイラスト化する（色を「勝ち色」とした）大きな波しぶきを上げている

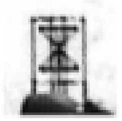




↑独特な「舵柄信号」の標識板の様子

うっすらと「方位測定器アンテナ」が確認できる。この甲板は（前号で紹介した）昭和５年以降搭載機が繋留される

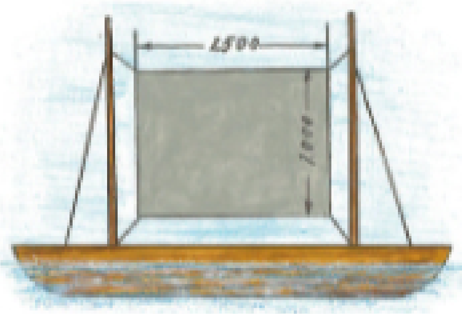
→「方位測定用アンテナ」を他の「迅鯨」写真の部分を拡大して見る





↑大正 14 年６月、標的を曳航して伊勢湾に向かう「迅鯨」

國本康文氏提供の「海軍制度沿革」によると
●明治三十五年四月一日付で「一吋（インチ）三十七密米口径内筒砲ヲ廃シ代フルニ小銃口径内筒砲ヲ採用ス　但克（クルップ）砲、十吋安砲及四十斤安砲用内筒砲ハ従前ノ通」
●明治三十五年十月一日付「本年四月第四十二號但書克砲、ノ下「加（カネー）砲、比（フィブリール）砲」ヲ加フ」
●明治三十九年九月二十九日付「海軍技師廣木八郎考案ノ小銃口径外膅砲ヲ採用シ廣木式小銃口径外膅砲ト称ス」
但シ製造次第逐次従来ノ小銃口径内筒砲及弾薬包形内筒砲ト交換供給シ四十七密米以上ノ砲ニ使用セシム
●大正五年一月二十六日付「短三吋外膅砲ヲ兵器ニ採用ス」と続く



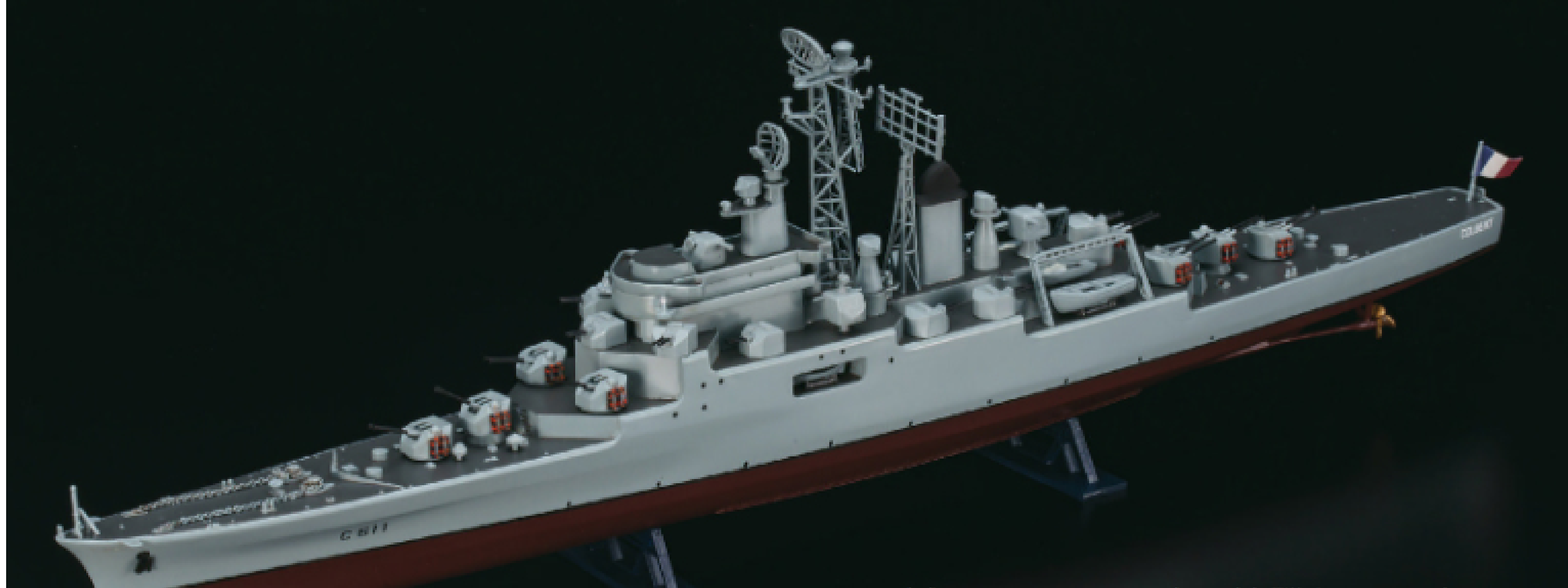
←「海軍制度沿革」訓練規則の昭和三年十二月制の「小銃口径外膅砲標的略図」を（彩色加筆）転載　それまでの図では 3.5 インチを換算して 1.1m としたが、1m とすべきだったかもしれない（3.5 インチの計算値は 1.0668m）

ラベールアーカイブス #78
浮かぶ大統領官邸といわれた防空巡洋艦



エレール 1/400 フランス海軍防空巡洋艦「コルベール」(C611)
Heller1/400 Croiseur Colbert（C611）

欧州出張編その 10
製作 / 文：河野嘉之



▲完成すると全長 45cmを超える大きな防空巡洋艦「コルベール」。キットは就役直後の姿を再現していて、12.7cm両用砲と 57mm砲の連装砲塔がずらりと並んでいる。艦中央部にはレーダーマスト等が並んでいるが、同社の初期キットの常で、形にするだけでも大変だ。

ここのところエレールの駆逐艦、フリゲートを紹介しているが、今回は満載排水量 11,000 トンを超える大型艦「コルベール」を紹介しよう。「コルベール」はフランス海軍の戦後２隻目の防空巡洋艦だ。竣工当時の姿はご覧のように 12.7cm両用砲 16 門と 57mm砲 20 門という姿だった。1972 年の改装で主砲を 10cm砲２門、57mm砲 12 門とし、艦尾にマズルカ艦隊防空ミサイルを搭載し、ミサイル巡洋艦となった。

エレールの「コルベール」

今回はフランスとして２隻目となる防空巡洋艦「コルベール」を紹介しよう。エレールは「コルベール」が就役した２年後の 1961 年に初版を発売した。エレールのボックスイラストは独特の芸術的なもので有名だが、この「コルベール」初版のイラストもなかなか洒落た雰囲気のものだ。「コルベール」はその後、そのまま発売されていて、ボックストップの小さな表記が変わった程度の第２版が 1974 年に発売された。

そして、1975 年には「コルベール」の前級となる 1/400「ド・グラース」の初版が発売された。「コルベール」と「ド・グラース」は似ているが同型艦ではなく全く別の艦だ。エレールのキットは実艦通りに全く別キットとして製作されている。「コルベール」の初版から 14 年後の発売なので、キットの出来も進化していた。

その後、1980 年には「コルベール」「ド・グラース」ともにブルー箱として発売され、1992 年には「ド・グラース」が、2000 年には「コルベール」がボックスイラストをリニューアルして発売された。2012 年に、ほぼ同じボックスデザインで「コルベール」が発売され、2017 年には「コルベール」と「ド・グラース」が揃ってジュエルボックスとなって発売された。現在、2023 年版のカタログからは落ちていて、模型店店頭でも売り切れのところも多いようだ。

1/400「コルベール」

前述のように初版発売が 1961 年と、同社キットの中でも古いキットだ。パーツ数は 186 点。下写真のように船体は左右分割で、水平面は大きく３分割されている。12.7cm両用砲と 57mm砲のパーツは砲塔と砲身でだけで 44 点もあり、マストとアンテナ類もバラバラにパーツ化されている。

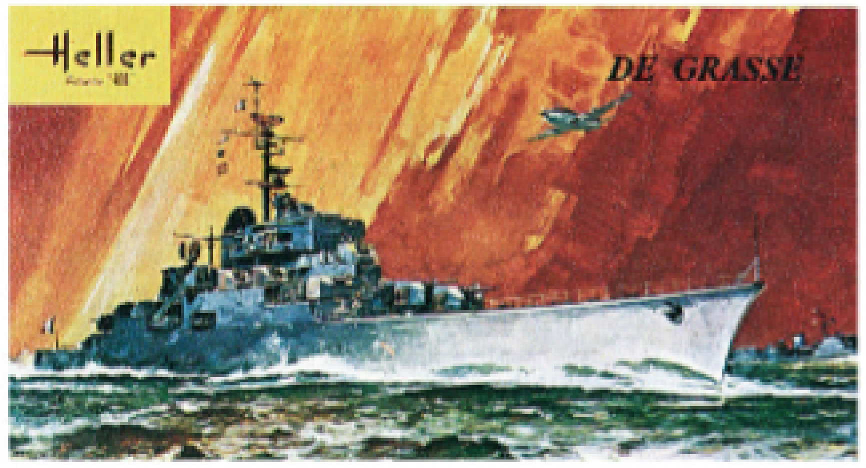
いつものように船体左右パーツを接着して、内側に補強用のプラ板を貼り付ける。船体パーツの表面はスムーズで、部分的に溶きパテサフェーサーを少し塗って 600 番のペーパーがけで下拵えは終了する。今回は、ハルレッド、ブートトップの黒ラインを塗装した後、３分割された水平面のパーツを接着し、先に甲板等の水平面をダークグレーで塗装した。

水平面を丁寧にマスキングし、船体と垂直面のライトグレーを塗装して、各部をタッチアップ。この時点で船体をエナメル塗料でウォッシングする。あとはいつものように、各パーツを下拵えしてある程度まとめて塗装し、ウォッシングして組み付けを繰り返す。

今回、大変だったのはやはりマストとレーダーアンテナのパーツだった。「コルベール」



▲1961 年発売の巡洋艦「コルベール」初版。昔のエレール特有の芸術的なボックスイラストだ。127 ページの実艦写真と比べてもわかるように、「コルベール」の特徴を良く捉えたものだ。このボックスとほぼ同じで、細かい文字の表記等が変えられた第２版が 1974 年に発売され、1970 年代末まで発売されていた。この時期、同社の箱は下箱が段ボール折り込みのしっかりしたものだった。L860（45 × 25 × 6cm）



▲1975 年（カタログでは 1976 年）に発売された巡洋艦「ド・グラース」初版。「コルベール」と「ド・グラース」は似ているが、同型艦ではなく別の船だ。しかし、エレールのこの２つのキットを同型艦の箱変えキットだと紹介している資料もあったので、改めてここに紹介するが、このキットは実艦通りに全くの別キットとして製作されている。当然とはいえ、半世紀前のエレールの姿勢を高く評価したい。862（45 × 25 × 6cm）



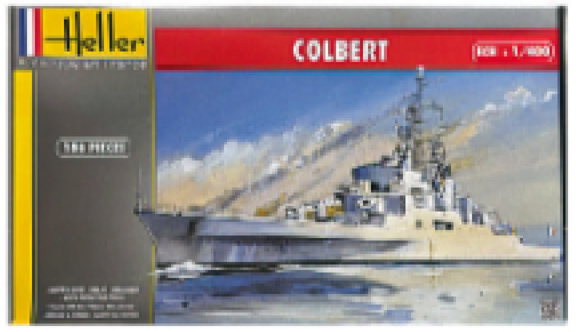
▲1992 年に発売された「ド・グラース」の第３版。この時期の同社キットは車、飛行機、船等全てこのようなシュールなボックスイラストに変えられてしまった。あまりの落差に悲しくなるほどだ。これでは、店頭で見ても購買意欲が削がれるというものだろう。No.81039（45 × 25 × 6cm）



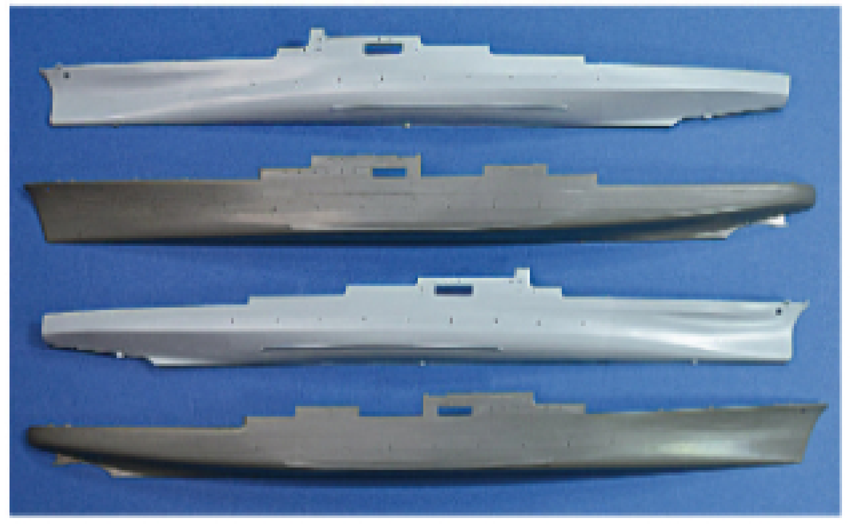
▲2000 年に発売された「コルベール」の第５版。ボックスイラストとデザインが一新され、随分明るくなった。初版のようなドラマチックさはないものの、なかなか美しいイラストだ。この時点で実艦は退役から約 10 年が経ち、浮かぶ博物館として公開されていた。81040（45 × 25 × 6cm）



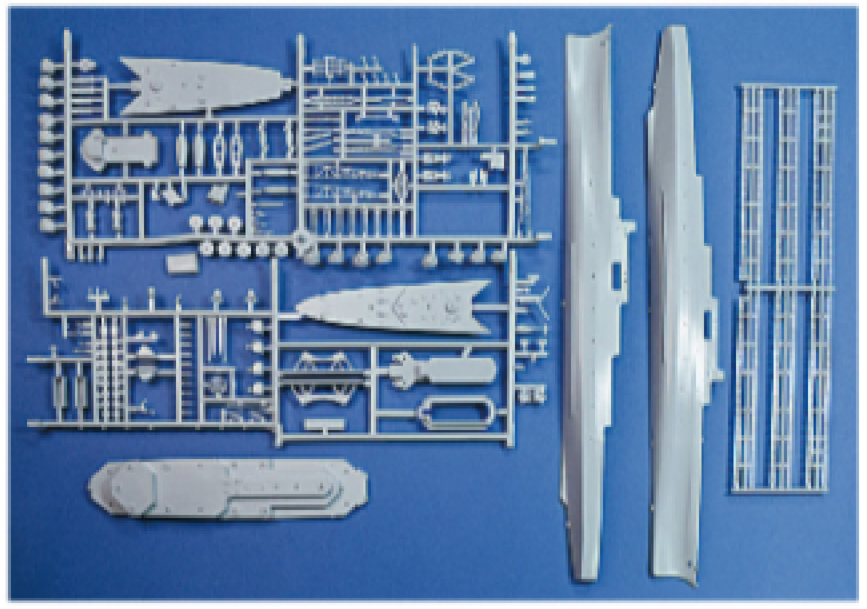
▲2017 年に発売された「ド・グラース」の第４版。「ド・グラース」は初版が 1975 年発売と遅かったため、この最新版で第４版だ。イラストは初版と同じものをカットしていて、オレンジに染まるバックに対潜哨戒機アリゼが飛んでいる。81040（45 × 25 × 6.5cm）



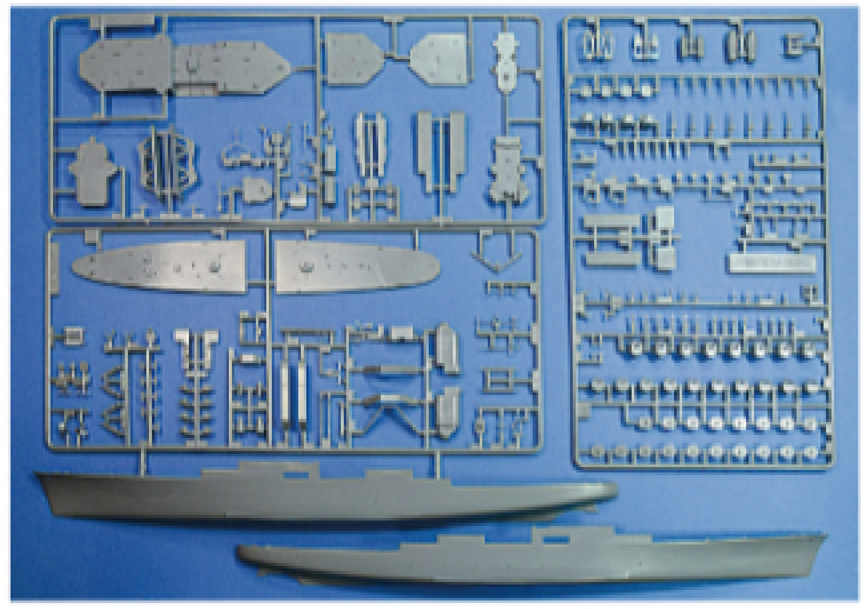
▲2017 年に発売された「コルベール」の第６版。「ド・グラース」の第４版と同じデザインで、フラップがトップのエンド側とサイドについたジュエルボックスタイプに変更された。ボックスには 186PIECES と表記されている。81040（45 × 25 × 6.5cm）



◀ 1/400「コルベール」（ライトグレー）と「ド・グラース」（ダークグレー）の船体パーツ比較。このように、２つのキットは全くの別もので、船体自体の形状も大きく異なっていることがわかる。「ド・グラース」の完成品全長は約 47cmと、「コルベール」より 2cm弱長い。



▲1/400「コルベール」のパーツ一覧。船体は左右割りで、水平面は前後甲板と中央の構造物の３分割でまとめられている。12.7cm両用砲のパーツは２分割の砲塔と砲身、57mm砲のパーツは砲塔と砲身で構成されている。手摺りパーツはエレール汎用のものだが、今回も使用しなかった。



▲1/400「ド・グラース」のパーツ一覧。パーツ数は、「コルベール」の 186 点に対して 257 点とかなり多い。エレールらしいアバウトな出来だが、初版発売は「コルベール」より 14 年後の 1975 年なので、パーツはシャープにモールドされていて、バリや成型不良等も見られない。



は艦中央部に大きなメインマストを持ち、その直後にも大きな長方形のDRBV-20C長距離対空レーダー用のマストがある。エレールはこれらのマストとレーダーアンテナをほぼ正確にパーツ化してはいるのだが、これまたいつものようにバラバラで嵌合等はなく、全てが点接着によるイモ付け。もちろん、各パーツの接着位置を示す組み立て説明図等もどこにもないので、各パーツの位置関係も不明だ。

ただそれだけなら今までのように根気よく組めばなんとかなるのだが、このキット（2017年版）は押し出しピンの跡が深く、細いパーツの中央に押し出しピンが配置されているためにパーツが断裂していたり、その先にプラが流れていなくてパーツの一部が欠損しているものも少なくなかった。

さすがの私もこれには参ったが、別売エッチングパーツ等を使ったディティールアップはしないという本連載の縛りがあるので、実艦写真やネットにある少ないこのキットの完成写真等を参考に、プラ棒等も使ってなんとか形にした。近所のT氏によると「エッチングパーツがデフォルトの今、このストレート感がなかなかクールやね」なのだそうだ。

古いキットをストレート組みしてその雰囲気と時代を楽しむ、というのが本連載の主旨だが、今回はちょっとキツかった。だが、ご覧のように、完成すれば砲熕兵器満載の防空巡洋艦らしさが溢れる、ちょっと珍しい姿が手にできる。エレールならではの個性的な完成品となった。

防空巡洋艦「コルベール」

フランス海軍は第二次大戦前の1938年に軽巡洋艦「ド・グラース」を起工したが、大戦中に建造が中断された。船体は戦後1946年になって進水し、その後、防空巡洋艦として改設計されて、1956年に就役した。「ド・グラース」は全長188.3m、満載排水量12,350tで、12.7cm両用砲連装砲塔8基と57mm砲連装砲塔10基を搭載した砲熕兵器のみの防空艦だった。

「コルベール」は新型空母「クレマンソー」の艦隊護衛用に、「ド・グラース」の改良型として計画された防空巡洋艦だ。全長180.47m、満載排水量11,093tと「ド・グラース」より若干小型だが、同じく12.7cm両用砲連装砲塔8基と57mm砲連装砲塔10基を搭載した砲熕兵器のみを搭載していた。船体は艦尾をトランサムスターンとし、艦首舷側にはナックルをつけた。また、艦内の構造は将来のミサイル兵装の搭載を考えて設計されていた新しい艦だった。

「コルベール」は1953年に起工、1956年に進水し、1959年に就役した。1961年、「コルベール」はフランス領モロッコの初代統監であったユベール・リヨテ元帥の遺骨を本国に送還。1964年にはトゥーロンのフランス地中海艦隊の旗艦となった後、シャルル・ド・ゴール大統領の南米歴訪に使用された。そして、1967年には大統領のカナダ訪問にも使用され、当時は"浮かぶエリゼ宮"（フランス大統領官邸）とも呼ばれた。

1972年、「コルベール」はブレストでミサイル巡洋艦への改修を受けた。それまでの砲熕兵器を一度撤去し、改めて10cm単装砲塔2基とボフォース57mm連装砲塔6基を搭載。艦尾にはマズルカ艦隊防空ミサイルの連装発射機を搭載した。そして、1982年にはブリッジ前方にMM38エグゾセ対艦ミサイル単装発射機4基も搭載した。就役当時も艦尾はヘリ甲板とされていたが、改装後はより広くなり、アルエットⅢ1機を露天係止できた。「コルベール」は湾岸戦争にも派遣されたが、帰国直後に退役し、1993年からはボルドーに回航されて博物館船となった。この博物館は財政難から2006年に閉館し、ブレストへ回航された。そして、フランス海軍最後の防空巡洋艦だった「コルベール」は2016年にボルドー／バッサンスで解体された。



▼実艦は全長180.47m、全幅20.3m、満載排水量11,093トンと均整のとれた艦影で、中央部にボリュームがあり、堂々としている。エレールのキットはそのイメージをよく捉えている。12.7cm両用砲の砲塔側面にはライフラフトのパーツがある。

Photo（特記以外）：Marine nationale（フランス海軍）



▲就役直後、1960年代初めの「コルベール」。12.7cm両用砲と57mm砲の砲塔がこれでもかと言わんばかりに搭載されている。中央マスト上の大きなレーダーはDRBV-23A対空レーダーで、その前下方にはDRB-10B高度測定レーダーがある。その前とファンネルの前後にあるのはDRBC-31A射撃指揮装置で、その前後と舷側の少し大きな射撃指揮装置はDRBC-31B。



▲就役直後の「コルベール」。艦中央のファンネルから後方にぎっしりと搭載された対空砲塔が勇ましい。ファンネルの両側に57mm砲塔が2基ずつ並び、ファンネルの後方にはDRBC-31A射撃指揮装置と57mm砲の砲塔がある。その後方には12.7cm両用砲の砲塔が4基並んでいる。後部甲板はヘリ甲板で、Hの文字が見える。後方から見た艦影もバランスが取れていて美しい。

Photo：Jenny Scott



▲1988年10月24日、オーストラリア、アデレード港を出港する「コルベール」。「コルベール」は1972年に大改装を行いミサイル巡洋艦となった。12.7cm両用砲と57mm砲を全て撤去し、10cm単装砲等2基とボフォース57mm連装砲塔6基を搭載した。艦尾にはマズルカ艦隊防空ミサイルの連装発射機を搭載し、ブリッジ前方にはMM38エグゾセ対艦ミサイル単装発射機4基も搭載した。



▲ミサイル巡洋艦への改装後はレーダーも一新された。ブリッジ上方にDRBV-23C対空レーダーがあり、メインマスト中程にDRBI-10高度測定レーダー、メインマスト上半分はECM/ESMアンテナ類となっている。排煙がかかっているマスト上にはURN-20TACANアンテナがある。ファンネル直前にあった大きなDRBV-20C長距離対空レーダーは改装後に後方へ移設された。



▲改装後の「コルベール」は対空用の砲熕兵器が整理されてすっきりとした艦影となった。前甲板には10cm単装砲等2基が搭載され、その左右にはMM38エグゾセ対艦ミサイル単装発射機4基も搭載された。ブリッジ周りも大きく改装され、メインマストの両側にはSATCOMアンテナが搭載されている。



Photo：Pibwl

▲1991年に退役した「コルベール」は1993年からフランス南西部のボルドーに回航され、ガロンヌ川に係留されて博物館船となった。各部のレーダーアンテナや砲身、マズルカミサイル連装発射機は残されているものの、マズルカミサイル用DRBC-51BFCSレーダーは撤去されている。この博物館は財政難により、2006年に閉館してブレストへ回航された。



▲1961年6月9日、イタリア、ジェノヴァに停泊する「ド・グラース」。「コルベール」の前級となる「ド・グラース」は1956年に就役した。「コルベール」と同様に12.7cm両用砲連装砲塔8基、57mm砲連装砲塔10基を搭載している。このページ上の「コルベール」と比べるとその艦影の違いがよくわかる。レーダーアンテナ類は「コルベール」よりも少ない。

Photo：Pline



▲博物館時代に撮影された「コルベール」艦尾甲板上のマズルカミサイル連装発射機。マズルカはセミアクティブレーダーホーミング誘導のブースター2段式で、射程距離55km、最大射高30km、飛翔速度マッハ2.7。「コルベール」は48発を搭載していた。

読者情報コーナー

伝声管

でんせいかん

— READERS VOICE —

（艦スペ 93 の感想）

■東京都　中島一さん（49）

タミヤ 1/700「大和」＋ファインモールドのナノ・ドレッドは誰しも考えるが実行したことのないことに思えますので、作例を見られて良かったです。「古鷹」の作り比べもとても分かりやすく良い記事だと思います。貴誌は判型が大きく写真も大きいため老眼にはありがたいです。細密パーツはたくさん出ているものの解像度がチグハグに見える作品も見かけるので、この着眼点は素晴らしいと思います。個人的には老眼ですし、キットストレートで作るとは思いますが…

■兵庫県　戸島正彦さん（51）

最近の作例のディテールの素晴らしい細密さには感嘆するとともに自分には一生できそうもないなと思ってしまうのですが、「ディテールのレベルを一定に揃える」というやり方はちょっと目からウロコでありました。自分の技術なりにレベルを考えて工作してみようと思えました。

■佐賀県　香月康二さん（45）

艦船模型は入門したばかりで小学 6 年生の子供と一緒に作っています。まだまだディテールアップパーツまで考える暇はありませんが、徐々に使っていきたいです。

■群馬県　紀伊仁人さん（30）

最近よく見かけるようになってきた艦船模型の 3D プリントパーツはものすごい解像度ですね。『艦スペ』と同じ時期に発売された月刊『モデルアート』にも 1/700 戦艦「大和」の作例が載っていて、製作コンセプトの違いがとても興味深かったです。ディテールアップパーツは交換するだけで良いから楽だと思っていたのですが、言われてみればそこだけ浮いてしまう可能性もあるのですね。精密パーツも考えものだと思いました。

■東京都　中田智士さん（24）

マレーシアインターナショナルミニチュアホビーショーのレポートは海外の展示会、しかも艦船模型を対象にした展示会の情報はほとんど機会がないため、新鮮であり面白かった。会場の熱気も伝わる良い記事だった。

■千葉県　オオカワミチオさん

1/350「蒼龍」のスクラッチ作品には驚かされました。秋山氏の作品は良い意味で手作り感がない（？）ので、実際にキットが発売されているのかと錯覚してしまいました。1/350「蒼龍」のキットが出たら絶対に売れると思うんですけれどね。どこかキット化してくれないでしょうか？

■鹿児島県　ネイビーブルーさん（34）

艦船模型は解像度を高める「ディテールアップ」こそが至高とされていますが、最新モールドのキットを昔のキットのレベルに合わせる「ディテールダウン」にも言及して欲しかったです。解像度を揃える選択肢のひとつとして、またコレクションの統一を図る手段として。

横浜・道産子軍団と仲間たち
「プラモデルの展示会・冬の陣」

模型誌で多数作例を発表とする酒本徹と仲間たち＆ゲストの力作を集めた飛行機や艦船を中心に展示した見ごたえ一杯のプラモデル展示会です。 2025 年は正月からプラモデル展示会で楽しんで下さい。

■日時：
1 月 4 日（土）11：00 ～ 18：00
1 月 5 日（日）9：30 ～ 17：00

■場所：
横浜市民ギャラリーあざみ野 2 階展示室
（神奈川県横浜市青葉区あざみ野南 1-17-3）

■問合先：
酒本徹 メール sakamott@d05.itscom.net

展示会情報は X（エックス）で確認ください。
#2025 道産子冬の陣　で検索

— イベントレポート —

第 12 回
艦船模型合同展示会

10 月 5 日（土）、6 日（日）の両日、横須賀市民文化会館において第 12 回となる「艦船模型合同展示会」が開催された。この合同展は日本全国で活動する艦船模型の愛好家や模型クラブが持ち回りで 2 年に 1 度開催するもので、今回は横須賀を拠点に活動する「おおなみ会」が主催。同会メンバーが共同製作した強襲揚陸艦「ワスプ」は 1/72（全長 3.6m）という巨大サイズで来場者の度肝を抜いていた。当日は様々な時代の艦船模型を中心に約 500 作品が展示され、両日で 2000 名を越える来場者が訪れた。閉会式において次回は 2 年後の 2026 年、島根県松江市で開催されることが発表された。



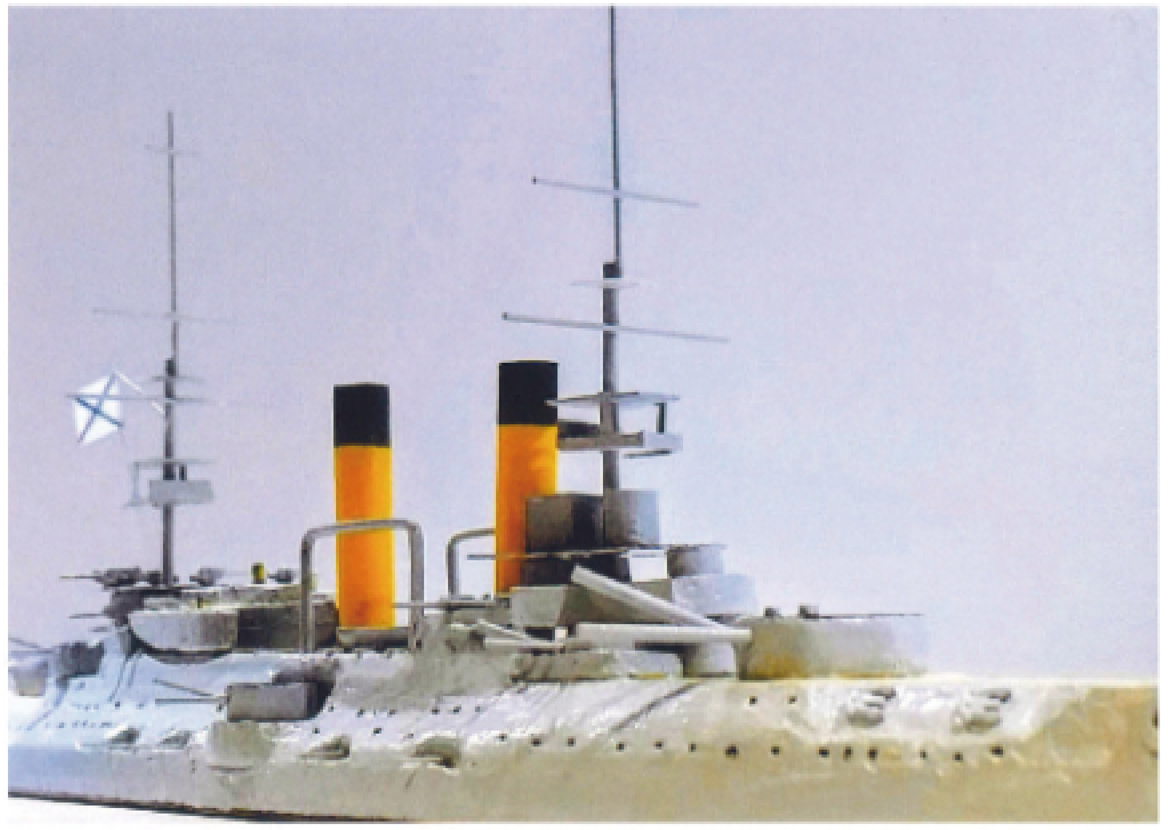


— 写真投稿ギャラリー —

■福岡県　古城戸太一さん（16）

キットメーカー：スクラッチ
スケール：1/700
艦名：ツェザレウィッチ
アピールポイント：自分で図面を引き、大部分を木材で作りました。初めてのソリッドモデルかつスクラッチだったために粗い感じになってしまいましたが、「艦船ソリッドモデル入門」を参考にさせていただきながらなんとか完成にこぎつけることができました。





— 愛読者プレゼント —

①ハセガワ 1/700 海上自衛隊護衛艦かが…………1 名様
②アオシマ 1/700 日本海軍水上機母艦秋津洲…………1 名様
③ピットロード 1/700 日本海軍給兵艦樫野…………1 名様
④アオシマ 1/700 日本海軍駆逐艦 秋月（更新版）…………1 名様
⑤アオシマ 1/700 日本海軍駆逐艦 陽炎（更新版）…………1 名様

プレゼントの応募はハガキで。
①郵便番号、②住所、③氏名、④年齢、⑤電話番号、⑥希望商品番号、⑦面白かった記事、⑧つまらなかった記事、⑨購入した理由、⑩特集の感想、⑪船体色として主に使用しているのはどの塗料か？を必ず明記の上、下記宛先まで送ってください。

〒 110-0016
東京都台東区台東 2-3-9 KH ビル 4F
有限会社モデルアート社
「艦スペ 94」読者プレゼント係

なお、応募多数の場合は抽選となります。当選者の発表は賞品の発送をもって代えさせていただきます。

応募の締め切りは 2025 年 1 月 31 日（当日消印有効）です。

※お預かりした個人情報は感想、ご意見等の誌面掲載の他、個人情報を含まない統計的な資料作成（社内資料）とプレゼントの発送以外には使用いたしません。ハガキに記載された特集の感想は誌面で紹介させていただく場合があります。本名での記載を望まない場合はペンネームを併記してください。

お便りお待ちしています

このコーナーは読者の皆さんが作るページです。誌面に対するご意見や要望、感想、イラスト、クラブサークルの紹介、会員募集等、模型展示会レポート等々、フネや艦船模型に関する事ならば何でも OK です（展示会のお知らせ等、期日のあるものは次号の発売日を考慮してください）。皆さんからのお便りを心からお待ちしています。

また、読者の皆さんの作った作品を発表出来る「投稿写真ギャラリー」のコーナーを設けましたので、自慢の作品を写真に撮ってどしどしご応募ください。

①：写真はキャビネ判以上、光沢仕上げを推奨。なお、カラー、モノクロは問いません。（デジタル撮影したものもプリントしてください）
②：キットのメーカー名やスケール、艦名、作品のアピールポイントを必ず記入してください。
③：住所、氏名、年齢、電話番号、職業を必ず明記してください。

なお、お送りいただいた写真は返却出来ません。また誌面の都合により全ての応募作品を掲載出来ない場合もあります。予めご了承ください。

以上、このコーナーへの宛先は、下記まで。

〒 110-0016
東京都台東区台東 2-3-9 KH ビル 4F モデルアート社
「艦船模型スペシャル」編集部
○○○○○○○係まで

Takashi Yamaguchi Ship Model Works Collection 1





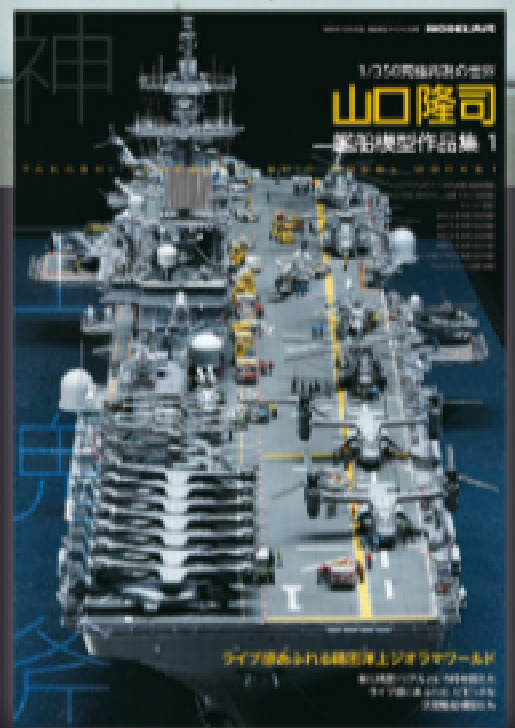
山口隆司 艦船模型作品集1

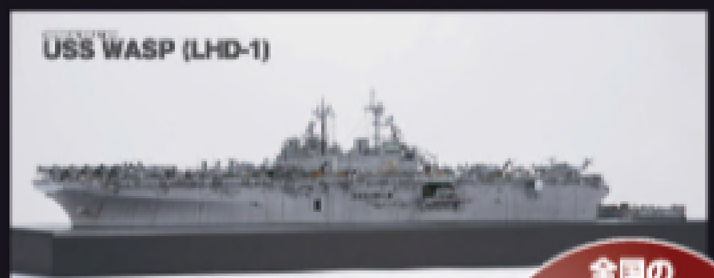
1/350究極再現の世界 神工鬼斧 しんこうきふ

ライブ感あふれる洋上ジオラマワールド



艦船模型スペシャル掲載の超絶作品でお馴染み、山口隆司氏製作の 1/350 艦船模型が 1 冊の作品集に！
過去の名作はもちろん、新作の USS ワスプ（LHD1）、USS キッド（DDG-100）、さらに未発表のクルーズシップ・アイーダ（このモデルのみ 1/400）を加え、精密に再現された 1/350 艦船模型の数々が誌面を飾ります。各作品とも洋上ジオラマ仕様です。艦上には数百のフィギュアが配され、その説得力のある設定で非常にドラマティックに仕上げられています。単に精密 / リアル模型という枠を超えた「ライブ感にあふれた、生き生きとした」作品になっている所が大きな見どころです。
この作品集では大判写真を多用し、作品の魅力を余すところなく引き出します。まるで目の前でこれらの素晴らしい作品群を見ているような感じになるでしょう。





ワイド折込み付き

左右75㎝オーバー両面印刷：2枚

公式チャンネルにて、出版に至るまでの動画を配信中！

全国の書店・模型店で 好評発売中

定価3,740円（税込） A4判 176ページ

CONTENTS

- USSワスプ（アメリカ海軍 強襲揚陸艦）
- USSキッド（アメリカ海軍 ミサイル駆逐艦）
- アイーダ（客船）
- 赤城（日本海軍 航空母艦）
- 加賀（日本海軍 航空母艦）
- 隼鷹（日本海軍 航空母艦）
- 矢矧（日本海軍 軽巡洋艦）
- HMS アークロイヤル91（イギリス海軍 航空母艦）
- テルピッツ（ドイツ海軍 戦艦）

*アイーダのみ1/400スケールです

詳細はこちら▶ モデルアート 検索 X @ModelArtInc www.facebook.com/modelartinc

---

スーパーイラストレーション シリーズ

スーパーイラストレーション 日本海軍戦艦 金剛

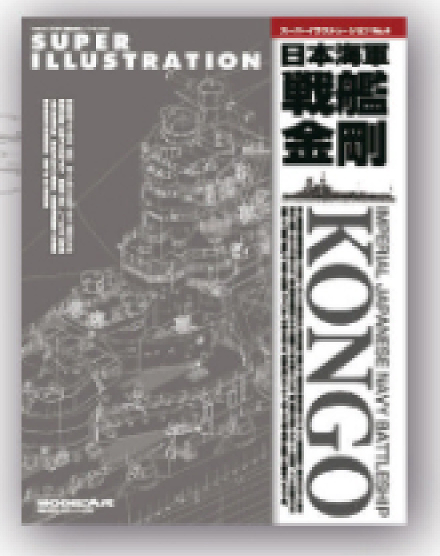
Super Illustration: IJN Battleship Kongo

艦船図面：岡本好司氏

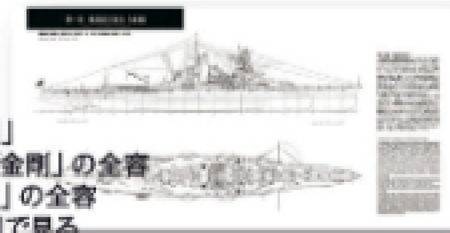
1/500の艦形図、断面図などの折込図面を収録。

図面集 側面、俯瞰、立体など様々な形式の図面を掲載！

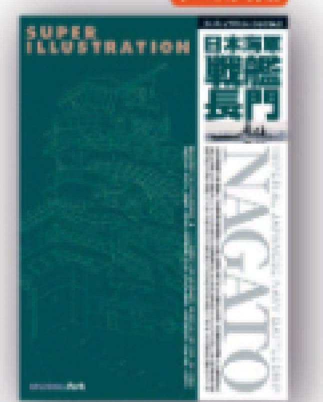
資料性はもちろん、読んで楽しめる！



戦艦金剛を細部図面で徹底解剖



好評発売中の同シリーズ



直販商品 日本海軍戦艦 長門 2024年 9月再版 税込2,860円



直販商品 新版 日本海軍戦艦 大和 2024年 5月再版 税込2,860円

- 日本語・英語併記
- 以前販売していた当タイトルとは仕様が異なります。折り込みが別紙での提供となります。 *内容に変更はございません。

CONTENTS

【目次】
第一章 艦型図で見る戦艦「金剛」
第二章 2 分割の立体図で見る「金剛」の全容
第三章 立体分解図で見る「金剛」の全容
第四章 艦型図面、詳細を分割図で見る
第五章 艦橋、煙突、レール甲板、関係部品図
第六章 砲熕兵装
第七章 航空兵装及び艦載艇
第八章 砲戦指揮装置、光学機器
第九章 各構造物の詳細説明図
第十章 最上甲板の部品配置

▶ 直販商品購入方法
全国模型店・当社通販サイトにて購入頂けます。
詳しくは、HPをご覧頂くか、お電話で問い合わせください。

模型店 Webショップで 好評発売中

定価3,190円（税込） A4判 152ページ

艦船モデラー必携の汎用パーツ！ モデルアート オリジナルエッチング

Manufactured by PONTOS MODEL.COM

1:700 帝国海軍艦艇用エッチングパーツ

MDF-163 汎用エッチングパーツ

汎用 窓枠セット②

高雄型重巡洋艦 鳥海用 サイズ確認用 ゲージ

間隔：0.8 / 0.9 / 1.0㎜

高さ：0.5 / 0.6 / 0.8 / 0.9 / 1.1 / 1.2 / 1.3 / 1.4㎜

- ●高雄型重巡洋艦 鳥海用 窓枠付き
- ●サイズ確認用 ゲージ付き



付録パーツ①

●高雄型重巡洋艦鳥海用窓枠

高雄型重巡洋艦「鳥海」の艦橋のための窓枠エッチングパーツも付録。お手持ちのキットに合致するのを確認の上、お使いください。所定の位置で折り曲げやすくするため、パーツ裏面に凹モールドを彫刻。

付録パーツ②

●サイズ確認用ゲージ30種

プラモデルの艦橋のサイズを簡単に計ることができる、サイズ確認用ゲージ 30 種を用意。第一弾にも対応。

製品での表記のお詫びと訂正

※エッチングパーツ本体の W0.8 ㎜の列でサイズが刻印されていない箇所があります。正しくは W0.8 ㎜ x H0.6 ㎜となります。
※台紙のサイズ表の各間隔サイズに高さ 0.6 ㎜の表記が抜けております。このサイズも含まれていますのでご活用ください。

間隔 width	高さ height
1.0	0.5
1.0	0.6
1.0	0.8
1.0	0.9
1.0	1.1
1.0	1.2
1.0	1.3
1.0	1.4
0.9	0.5
0.9	0.6
0.9	0.8
0.9	0.9
0.9	1.1
0.9	1.2
0.9	1.3
0.9	1.4
0.8	0.5
0.8	0.6
0.8	0.8
0.8	0.9
0.8	1.1
0.8	1.2
0.8	1.3
0.8	1.4

汎用性抜群の大人気商品！

MDF-144 1:700 帝国海軍艦艇用エッチングパーツ
汎用窓枠セット と合わせれば、
スタン・ウォーク用 手摺り付き ほとんどの 窓枠サイズを網羅できる!?

艦船模型スペシャルNo.91（税込2,090円）
汎用窓枠 エッチングパーツ 使用例掲載▶





『艦船模型スペシャル』や『月刊モデルアート』を出版するモデルアート社のエッチングパーツは、1/700艦船模型の艦橋部分を細密化する汎用パーツです。高さ1.0㎜と0.7㎜の窓枠が中心で、横の間隔は0.8㎜、0.9㎜、1.0㎜の3種あるので、作りたいキットに合わせて選ぶことが可能。1枚で十分な量が入っているので、失敗を恐れずに使えます。使用例はNo.91エッチングパーツ攻略大作戦にて紹介。

各定価1,870円（税込）（本体1,700円）

詳細はこちら▶ TEL：03-6240-1936 FAX：03-6240-1937 モデルアート 検索
note：note.com/modelart_info/ X：x.com/ModelArtInc
Facebook：www.facebook.com/modelartinc/

MODEL Art バックナンバー&直販商品のご案内

価格は全て税込 (10%) です

新刊コーナー

New
2024年10月29日発売
プラモデルテクニックガイド4 「初代」の塗装テクニック実践編

2,420円

New
2024年10月25日発売
月刊モデルアート2024年12月号
零式艦上戦闘機と堀越二郎の設計機

1,400円

New
2024年10月22日発売
飛行機模型スペシャルNo.47 進化するF-35ロッキード マーチン F-35ライトニングII

2,178円

バックナンバー

【 艦船模型スペシャル 】

No.93 ディテールアップの秘訣は解像度を揃えることにあり

全体のバランスが肝心です!別売装備品セットや3Dプリントパーツ等の登場によって、既存のキットパーツと置き換えるだけで手軽にディテールアップが行えるように。ただしディテールアップパーツが精密すぎる代償、キットそのままの部分とのギャップが生じてしまい「そこだけが浮いて見えてしまう」場合も。ディテールアップで大切なのは全体のバランスを統一することなのです。どこまで精密さを求めるかによって、自ずと必要な工作量が決まってきます。解像度と改造度は密接な関係にあるといえるでしょう。今回は「ディテールアップの解像度」について考えてみましょう

No.91 エッチングパーツ攻略大作戦
No.90 日本海軍 甲型駆逐艦のすべて (陽炎型編)
No.89 小さな船と大きな模型 1/350 艦船模型の扉を開いてみよう
No.88 いまさら聞けない装備品のはなし　日本海軍航空母艦
No.87 アメリカ海軍航空母艦の 100 年
No.86 魅力新発見!世界の現用艦模型へのいざない
No.85 華麗なる転身~艦種変更された改造~
No.84 栄光の連合艦隊　旗艦の系譜
No.83 日本海軍の装甲空母「大鳳」「信濃」
No.82 艦船の塗装にまつわる雑学と表現方法
No.81 1/700 ウォーターラインシリーズの歴史
No.80 女王陛下の戦艦
No.79 日本海軍最後の重巡洋艦 利根・筑摩
No.78 第三次ソロモン海戦
No.77 「赤城」「加賀」の真実
No.76 演出して魅せる 艦船模型ジオラマの世界
No.75 日本海軍 5500トン型 軽巡洋艦 「球磨」型「長良」型「川内」型
No.74 日本海軍 重巡洋艦「最上・鈴谷」型と「伊吹」
No.73 太平洋戦争開戦時の日本海軍戦艦
No.72 艦船模型の製作 & 塗装テクニック 残りわずか!
No.70 珊瑚海海戦
No.66 大鯨と日本の潜水母艦 / 伊58と米重巡インディアナポリス
No.65 第二次ソロモン海戦
No.62 決戦!レイテ沖海戦シリーズ4栗田艦隊2 残りわずか!

※ No.62 ~ ¥1,781 /No.72 ~ ¥1,880/No.87 ~ ¥2,090


No.93 艦船模型スペシャル

No.92 艦船模型スペシャル

No.91 艦船模型スペシャル

【 帝国海軍 艦船総ざらいシリーズ 】

帝国海軍艦艇 真・総ざらい	
④金剛型戦艦 編	¥2,860
③妙高型重巡洋艦 編	¥2,475
艦船モデラーの為の帝国海軍搭載機総ざらい②	¥2,310
帝国海軍 潜水艦・小型補助艦艇 総ざらい 残りわずか!	¥2,310
帝国海軍 戦艦 総ざらい	¥2,310


真・総ざらい④金剛型戦艦 編

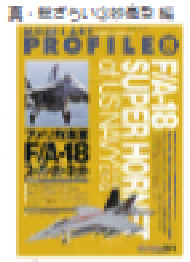
真・総ざらい③妙高 編

【 飛行機模型 総ざらいシリーズ 】

飛行機モデル総ざらい	
③「航空自衛隊の戦闘機編」	¥2,860
② 帝国陸軍戦闘機編 残りわずか!	¥2,475
①アメリカ空軍現用戦闘機・攻撃機編 残りわずか!	¥2,475

【 モデルアートプロフィール 】

プロフィール7「アメリカ海軍 F/A-18 スーパーホーネット」直販	¥2,619
プロフィール8「航空自衛隊 F-2 戦闘機」直販	¥2,619
プロフィール 14 陸軍九七司偵 海軍九八陸偵神風号 朝風号 残りわずか!	¥2,530


プロフィール8　F/A-2 18

【 まるわかりシリーズ 】

まるわかり! AFV モデルの基本工作と時短仕上げテクニック
まるわかり! レーシングカーのツヤ出し塗装&工作テクニック 残りわずか!
まるわかり! スケールモデルの簡単仕上げ塗装 & ウェザリングテク
まるわかり!艦船模型の工作&塗装テクニック 残りわずか!

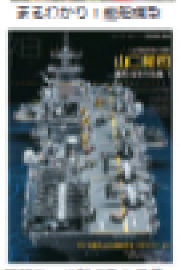
各 ¥1,980


まるわかり!艦船模型

【 模型作品集 】

山口隆司 艦船模型作品集1　¥3,740

1/350 究極再現の世界、ライブ感あふれる洋上ジオラマワールド!!艦スペでお馴染みの山口隆司氏による艦船模型作品集が登場。過去の名作に加え、USS ワスプ LHD-1、USS キッド DDG-100、未発表の 1/400 クルーズシップ・アイーダも収録。考証に基づき精密に再現された艦船模型が誌面を彩ります。洋上ジオラマには多くのフィギュアが配され、ドラマティックな設定がリアルさを超えた「ライブ感にあふれたビビッドな」な作品になっている所が見どころ。大判写真を多用し、製作過程や貴重な資料も併せて掲載。まるで目の前に作品があるような臨場感を味わって下さい!


山口隆司　艦船模型作品集1

【 製作術総ざらいシリーズ 】

ゼロから始める 1/24 カーモデルの製作術総ざらい 2	¥2,475
ゼロから始める 1/24 カーモデルの製作術総ざらい	¥2,475
ゼロから始める飛行機モデルの製作術総ざらい 1	¥2,475
ゼロから始める艦船模型の製作術総ざらい① 2020 年	¥2,475
ゼロから始める 1/35AFV モデルの製作術 総ざらい①	¥2,640
上級テクを極める! 1/700 艦船模型の製作術総ざらい3	¥2,310
上級テクを極める! 1/700 艦船模型の製作術総ざらい2	¥2,310
上級テクを極める! 1/700 艦船模型の製作術総ざらい1	¥2,310
上級テクを極める 1/24 カーモデルの製作術総ざらい	¥2,860


上級テク 1/24 カーモデル

【 攻略メソッドシリーズ 】

ディテールアップパーツ 攻略メソッド 2024	¥2,860
バイクモデル製作 攻略のメソッド 2024	¥2,860

バイクモデルの製作はこれでもう怖くない!バイクモデル製作の 基本から応用までを幅広く解説! 大型のベテランキットを徹底攻略難易度の高い工作も詳しく解説!

メタリック 攻略のメソッド 2024	¥2,640
筆塗り塗装 攻略のメソッド 2023-2024	¥2,640
F1 & Racers 製作 攻略のメソッド 2024	¥2,640
筆塗り塗装 攻略のメソッド	¥2,420
現用戦闘機製作 攻略の メソッド	¥2,640
模型製作 カンタン攻略のメソッド	¥2,420
メタリック塗装　攻略のメソッド	¥2,420

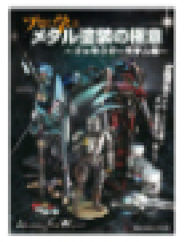
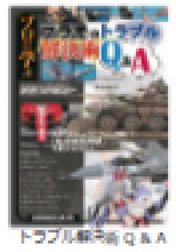

バイクモデル製作

【 プロに学ぶシリーズ 】

メタル塗装の極意 ~キャラクターモデル編~　¥2,860

金属色キレイに塗るのが難しくて、ちょっと苦手意識を持っている…、金属色の種類が豊富すぎて、それぞれの特徴が分からない…、こんなモデラーさんも、少なからずおられると思います。本書では、そんな皆さんのお悩みを丸ごと解決する一冊です!基礎テクニック、塗装サンプル、製作記事などを通して、楽しく美しく、プラモデルが更に映えるメタル塗装の極意を紹介します!

「プラモのトラブル解決術 Q & A」	¥2,750
塗料とマテリアルの活用法 キャラクターモデル攻略編	¥2,860
エアブラシの高次元テクニック	¥2,640
「本物そっくり」に見違える実践的ペイント術	¥2,475


メタル塗装の極意

トラブル解決術 Q & A

【 製作テクニック 】

エアモデル実践塗装 テクニックガイド 2	¥2,750
エアモデル実践塗装 テクニックガイド	¥2,750
飛行機模型#ソラ撮	¥2,860
深堀解説 SOF 式オートモデリング製作	¥2,640
渡辺真郎の艦船モデル・マスター DVD&MAGAZINE	¥3,520
基本からちょっとした応用まで網羅!プラモ製作の基本テク	¥2,200
エアブラシの性能を隅々まで使い尽くす奥義と裏技総ざらい	¥2,475
最新ツールとマテリアルを活かす飛行機モデルの製作術工作編	¥2,475
最も効率よく精密化できる艦船模型戦艦編	¥2,310
AFV 塗装再検証1WWIIドイツ編	¥2,530
スケールモデルの常識と非常識③ ウェザリング塗料編	¥2,231
スケールモデルの常識と非常識① ツール & 工作編	¥2,231
エアブラシや筆塗りで仕上げる飛行機模型塗装テクニック 残りわずか!	¥1,980

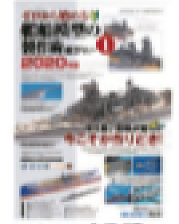

渡辺真郎の艦船モデル DVD

エアモデル実践塗装 2

【 データベースシリーズ 】

1/700 艦船模型データベース
2020 年版 ②
日本海軍 航空母艦・重巡洋艦・駆逐艦・潜水艦 編
2020 年版 ①
日本 海軍 戦艦・軽巡洋艦・水上機母艦・潜水母艦・敷設艦・海防艦・砲艦・小艦艇・特務艦艇 編
各 ¥2,475

アメリカ戦車データベース②　現用編 残りわずか!
ロシア戦車データベース① WW II編 残りわずか!
ドイツ戦車データベース④ 残りわずか!
パンサー戦車、軽戦車 (I号、II号、35(t) 戦車)、自走砲編
ドイツ戦車データベース③ 残りわずか!
III号戦車 / III突撃砲 Sd.Kfz.251&250/ ハーフトラック編
ドイツ戦車データベース②IV号戦車・自走砲 /38(t) 戦車 残りわずか!
日本戦車データベース 残りわずか!
各 ¥2,420


1/700 艦船模型 DB

【 プラモで集めるシリーズ 】

プラモで集める Powered by Honda	¥2,475
プラモで集めるスカイライン /GT-R (1) R32 ~ R35 編	¥2,860


プラモで集めるスカイライン

【 オートモデリングシリーズ 】

Vol.35 オートモデル製作のカギは塗装の攻略にあり!
Vol.36 レーシングマシンって難しい?
各 ¥2,475

【 飛行機模型スペシャル 】

No.46 暁の出撃!1/35航空母艦 赤城と97式艦上攻撃機
No.45 ドイツ空軍・最強戦闘機 フォッケウルフ Fw190 A/F/G
No.44 キット 生誕 50周年 1/72 SCALE F-15イーグル
No.43 ヨーロピアンジェットファイター欧州JET戦闘機の戦後史
No.42 早期警戒機 / 早期警戒管制機のすべて
No.41 タンクバスターズ 対戦車専用航空機の栄枯盛衰
No.40 女王陛下の空の護り イギリス空軍の戦闘機戦後史~ 1945-2023 ~
No.39 敵の防空施設を叩き潰せッ!ワイルドヴィーゼル
No.38 ザ・ステルス
No.37 似て非なるもの~ Mig-25 フォックスバット& Mig-31 フォックスハウンド
No.36 空母の上のトムキャット
No.35 ザ・ライバルF-4ファントムIIVS MiG-21フィッシュベッド
No.34 日本海軍夜間戦闘機 /C-130 ハーキュリーズ
No.33 アメリカ海兵隊の翼
No.32 ザ・スパイプレーン 戦略偵察機の系譜
No.31 F-4 ファントム II ロングノーズ & スペイファント
No.30 可変翼戦闘機
No.29 イギリス空軍・四発重爆撃機アブロ・ランカスター
No.28 偵察型ファントムのすべて
No.27 ロッキード F-104 スターファイター
No.25 帝国陸軍・帝都防空戦
No.24 第2次大戦の艦上攻撃機/雷撃機 残りわずか!

各¥2,178　*No.25,No.24 のみ¥1,980


飛行機模型スペシャル No.46

飛行機模型スペシャル No.45

【 JASDF PHOTO BOOK シリーズ 】

航空自衛隊	
F-4ファントム写真集&モデリングガイド「栄光の301」	¥2,970
RF-4E 写真集&モデリングガイド	¥2,970
F-4 ファントム写真集	¥2,970
アグレッサーアーカイブ 00　1981-1990年編	¥3,190

~飛行教導隊 T-2時代~すべてはここから始まった。80年代初頭、空中戦技術向上のため飛行教導隊が設立され、T-2練習機が部隊配備された。本書では、そのすべてを貴重な当事者の回想と写真、詳細な塗装図、コレクションなどで立体的に再現する。企画/監修/編集:秋山いさみ氏による、待望の第4弾。90-03年編、04-10年編、11-21年編のアーカイブスをお届けします。

アグレッサーアーカイブ 03　2011-2021年編	¥3,190
アグレッサーアーカイブ 02　2004-2010年編	¥2,970
アグレッサーアーカイブ 01　1990-2003年編	¥2,970


アグレッサーアーカイブス 00

アグレッサーアーカイブス 01

アグレッサーアーカイブス 02

【 資料・写真集 】

トムキャットスコードロン1　¥3,190

その飛行隊がどの様にしてトムキャットを装備するに至ったか?そしてその後は?現在、飛行機模型スペシャルに好評連載中の TOMCAT SQUADRON' S。今回そのうち VF-1 から VF-84 までが 1 冊に纏まりました。新しいイラストと写真も加え、F-14トムキャットが所属したアメリカ海軍飛行隊の歴史を精密な塗装図で振り返ります。もちろん各イラスト、写真には詳細な解説が付き、塗装とマーキングの由来や様々なエピソードを紹介。

スーパーイラストレーションNo.4 日本海軍戦艦金剛	¥3,190
スーパーイラストレーション新版 日本海軍戦艦大和 直販	¥2,860
スーパーイラストレーション 日本海軍戦艦長門 直販	¥2,860
エアクラフトフォトブック 4 グラマン EA-6B プラウラー	¥3,520
零戦写真集	¥3,190
アメリカ空軍機の塗装とマーキング 1945-現在パート 1	¥2,970
ブラックバーン・バッカニア写真集	¥3,190

DoubleUgly! books and publications発行のThe Essential Aircraft Reference For Modelers #01の日本語版訳版が登場します。原書では、空軍のS.2Bが中心の内容でしたが、日本語版特別記事として、FAAのS.1、S.2の写真、解説を大幅追加!バッカニアを製作する上で手放せない資料写真集です。

ショートノーズF-4ファントムII細部写真集	¥2,970
ワールドスケールモデラー 2 このジオラマは凄い	¥2,640
アメリカの航空母艦 資料写真集 1920s-1945	¥3,190
アメリカの航空母艦資料写真集 1945-現在	¥3,190
第２次大戦 エアクラフトリアルカラー	¥5,500
飛燕修復の記録　動力・装備編	¥2,343
飛燕修復の記録　機体編	¥2,343
スーパーカーモデリング 2000年代以降編	¥2,409
イラストで見る日本陸海軍機大図鑑 3 「零戦と黎明期の日本海軍機編」	¥2,547
海上自衛隊 1/700ミサイル護衛艦 総ざらい	¥2,475


零戦写真集

零戦と黎明期

1/700ミサイル護衛艦 総ざらい

【 AK 日本語翻訳版 】

AFV モデル 油彩塗装 ウェザリングテクニック	¥3,300
アニマル塗装テクニックガイド	¥2,090

【 月刊モデルアート 】

2024年11月号　カーモデルSOS こんな時どうする!?

2024年10月号　艦船模型3Dプリントパーツ艤装指南

2024年9月号	Hasegawa 1/72 A帯で行こう!
2024年8月号	天下第一艦 航空母艦 大鳳
2024年7月号	模型で手にする憧れの旧車
2024年6月号	接着は模型製作の要です!
2024年5月号	実物写真から作るスケールモデル
2024年4月号	春の新生活,模型環境再構築
2024年3月号	エアモデル最前線2024
2024年2月号	鉄底海峡物語
2024年1月号	F-15　EAGLE
2023年12月号	あなたの知らない瞬間接着剤の話
2023年11月号	あなたの知らない筆の深い話
2023年10月号	ハウツービルドオートモデル2023
2023年9月号	塗分けを極める
2023年8月号	メタリック塗装の調べ
2023年7月号	基本工作一本勝負
2023年6月号	翔鶴型航空母艦
2023年5月号	A-10サンダーボルトII
2023年4月号	塗料&塗装マテリアル最新事情
2023年3月号	F-35 ライトニングII
2023年2月号	歴代Zの系譜　麗しの貴婦人フェアレディZ

最新号まで¥1,400
2023年4月号まで¥1,293 / 2020年1月号¥1,320
2023年1月号以降及び欠番の号は、通販サイトでご確認下さい。


2024 年 11 月号 No.1144

2024 年 10 月号 No.1142

2023 年 9 月号 No.1140

【 タンクモデリングガイド (TMG) 】

TMG12 ヘッツァー駆逐戦車 プロフィール&モデリングガイド
TMG11 塗料別 AFV 塗装テクニック
TMG10 マーダー&ヤークトティーガーの塗装とウェザリング
TMG 9 III号突撃砲の 塗装とウェザリング
TMG 8 III号戦車の 塗装とウェザリング
TMG 7 M4 シャーマン 2 塗装とウェザリング
TMG 6 IV 号戦車の塗装とウェザリング 2 H-J 型
TMG 5 IV 号戦車の塗装とウェザリング 1 A-G 型ブルムベア
TMG 3 パンサー戦車の塗装とウェザリング 1 A/D 型 ベルゲパンサー
TMG 2 タイガー戦車の塗装とウェザリグ

TMG2 ~ 10 まで 各 ¥2,640 /TMG11 ~各 ¥2,860


TMG12 ヘッツァー駆逐戦車

【 プラモデルテクニックガイドシリーズ 】

プラモデルテクニックガイド3　工作実践編	¥2,310
プラモデルテクニックガイド 2　塗料と塗装の基本知識編	¥2,090
プラモデルテクニックガイド　工作基本編	¥2,090


プラモデルテクニックガイド3

【 直販関連商品のご案内 】

【HM-1107A】 UV 光速硬化 瞬間接着剤
直販 ¥ 1,870

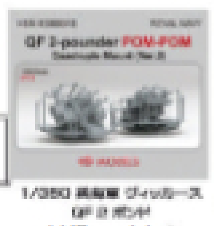
台湾からやってきた 万能 UV 接着剤!
半導体メーカーなどの領域で高い評価を得ている台湾のシアノアクリレート系接着剤トップメーカーがホビー専用の塗料を開発! 光のごとく効果する UV 使用の接着剤の硬化速度に体験者様からは驚きの声が上がっています!


UV 光速硬化 瞬間接着剤

【HM-1206A】
高性能スタンダード低臭&低白化 瞬間接着剤
直販 ¥990

《HSM-E350001S》
1/350 英海軍 ヴィッカース QF 2 ポンド ポンポン砲 四連装 Ver.2 (HS models)
直販¥3,520

1/350 英海軍 ヴィッカース QF 2 ポンド ポンポン砲 四連装 Ver.2
商品内容 : 6 個


1/350 英海軍 ヴィッカース QF 2 ポンド (HS models)

上記の両商品は、当社通販サイトにてご注文頂けます。詳しくは、HP をご覧ください。

* その他、直販商品に関する情報は公式 Web ショップをご確認下さい。

バックナンバーご購入方法

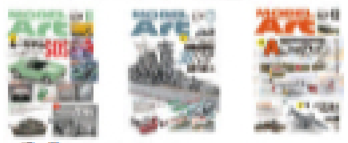
バックナンバーご希望の方は、全国の書店、模型店にて、ご注文下さい。また、通信販売も行っていますので、直販部までお申込み下さい。

代金引換サービス
送料 ¥660 +代引き手数料 ¥330
メール , 又はお電話にて直接お申込み下さい。在庫確認後、当日または翌営業日に発送し 1 ~ 2 日で到着します。

郵便振替
送料(ネコポス)1冊各¥260
郵便振替用紙をご利用し、通信欄に商品を明記して下さい。お振込確認まで 4 日前後かかります。確認後発送致します。
■加入者名　有限会社モデルアート社
■振込口座　00140-6-196313

現金書留
送料(ネコポス)1冊各¥260
商品名明記のうえ代金をお送り下さい。到着後発送致します。

MODEL Art Webショップでも ご注文いただけます!



QR コードはこちらから

公式 note 更新中です!
ページサンプルなど、ご覧になられたうえで、ご購入可能です。
https://note.com/modelart_info

合計価格 5,500円以上で 送料無料!!

年間購読のご案内

月刊モデルアートでは年間購読を募集しています。お近くに当社出版物常備店のない方ぜひお申込み下さい。送料当社負担にてお届けいたします。

モデルアートは航空機、カーモデル、AFV モデル、艦船モデルといった模型を扱う情報です。特集に加え、ニューキットレビューや各種連載、新情報と盛り沢山の内容を提供します。

1 年分(12冊) ¥16,800
半年分(6冊) ¥ 8,400

お問い合わせ
TEL : 03-6240-1936
FAX : 03-6240-1937
営業時間 平日 10:30 ~ 16:30

(有) モデルアート社　〒110-0016　東京都台東区 2-3-9KH ビル 4F　☎03-6240-1936　FAX 03-6240-1937　MODEL Art

艦船模型スペシャル 2024 WINTER NO.94
VESSEL MODEL SPECIAL
かんせんもけい

編　集：谷崎 英也
広　告：佐々木 学
　　　　木本恵美子
営　業：井田 真平
　　　　ジャスティン・キム

撮　影：石橋 謙太郎（スタジオエム）
表紙デザイン：アラブルカ

2024年11月10日印刷
2024年11月15日発行
発行人：井田 耕平
編集人：谷崎 英也
発行所：有限会社モデルアート社
印　刷：株式会社シナノ
定　価：本体価格 1,900円（税込 2,090円）
振　替：00140-6-196313

（有）モデルアート社
〒110-0016
東京都台東区台東 2-3-9　KHビル4F
TEL：03-6240-1936 ／ FAX：03-6240-1937

MODEL ART Co.ltd.
2-3-9 Taito, Taitoku,Tokyo,
110-0016 JAPAN

www.modelart.jp

本誌掲載の商品価格は、特別な記載があるもの以外税込み価格です。

「艦船模型スペシャル」編集部のXアカウントです

@kansen_mokei_sp

艦スペ編集部スタッフが最新号の情報や艦船模型にまつわることをつぶやきます。こっそり特集内容のリークもあるとかないとか⁉ ぜひフォローをお願いします。

【編集後記】

暑さがなによりも苦手な私は夏が嫌いです。花粉症で何年も苦しまされているので、春も嫌いになりました。布団からなかなか抜けだせなくなるので、冬も嫌いというか苦手です。秋生まれなので、秋が一番好きな季節です。今年は急に寒くなったり、半袖で過ごせるくらい暑くなったり、秋らしい穏やかな日が少なくて哀しいですね。秋の夜長を楽しみたいのですが…。さて、『艦船模型スペシャル』No.72（2019年夏号）より編集担当していた私ですが、今回の号をもって『艦スペ』を「卒業」することになりました。今まで大変お世話になりました。次号からは新編集長のもとお届けします。どうぞお楽しみに。

T編

広告のご案内

ポントスモデル	表2
静岡模型教材協同組合（アオシマ、タミヤ、ハセガワ）	表4
ホビーランド	130
レオナルドET	131
モデルアート社	表3、131、132、133、134、135

NEXT ISSUE ▶▶

『艦船模型スペシャル』No. 95 は
2025年2月15日発売予定です



艦船モデルの王道

世界最大のラインナップを誇る1/700ウォーターラインシリーズ

ウォーターラインとは船の喫水線のこと。ウォーターラインシリーズのモデルは、その名のように喫水線以下の艦底部分を省略、海に浮かぶ堂々とした姿がそのまま楽しめる洋上モデルです。スケールは1/700、スペースをとられずコレクションに最適。精密な細部表現で作りごたえも十分にお楽しみいただけます。(株)青島文化教材社、(株)タミヤ、(株)ハセガワの静岡3社による共同企画からなるウォーターラインシリーズのラインナップはすでに230種以上。この分野では他の追随を許さない世界最大のシリーズです。七つの海を舞台に数々のエピソードを残した海の女王達、日本の連合艦隊、そして世界の有名艦のコレクションをウォーターラインシリーズでお楽しみください。

A：アオシマ　T：タミヤ　H：ハセガワ

● 227 赤　城	(H)	3,080円	● 709 ヨークタウンII	(H)	2,090円	● 215 信　濃	(T)	3,520円
● 003 おおすみ	(T)	3,080円	● 219 飛　龍	(A)	3,740円	● 613 ミズーリ	(T)	3,520円
● 117 伊　勢	(H)	3,520円	● 113 大　和	(T)	3,080円	● 460 島　風	(T)	1,980円
● 123 長　門	(A)	3,520円	● 618 ビスマルク	(A)	3,080円	● 904 O　級	(T)	1,320円
● 333 妙　高	(H)	2,420円	● 804 インディアナポリス	(T)	2,640円	● 315 矢　矧	(T)	2,420円
● 337 高　雄	(A)	2,860円	● 027 こんごう	(H)	2,640円	● 008 おおなみ	(A)	1,760円
● 444 雪　風	(A)	1,650円	● 461 夕　雲	(H)	1,650円	● 519 小艦艇セット	(T)	990円
● 432 伊-370・伊-68	(H)	990円	● 451 伊-400	(A)	1,650円	● 435 伊-58 後期型	(T)	990円



123 日本海軍 戦艦 長門 3,520円(アオシマ)